二葉町遺跡発掘調査報告書

第14～21次調査

－新長田駅南第２地区震災復興第二種市街地再開発事業に伴う－

2008年３月

神戸市教育委員会

二葉町遺跡発掘調査報告書

第14～21次調査

－新長田駅南第２地区震災復興第二種市街地再開発事業に伴う－

2008年３月

神戸市教育委員会

調査地遠景航空写真（南から）

調査地遠景航空写真（西から）

巻頭カラー図版２

二葉町６丁目　SE317出土遺物

二葉町６丁目　磁器製定量錘

序

阪神・淡路大震災は神戸市長田区に甚大な被害をもたらしました。古いまちの風景は失われ、再開発事業、区画整理事業により新しいまちが生まれています。

大阪湾の豊かな恵みと肥沃な土地、温暖な気候、交通の要衝という条件に恵まれた長田には、古くから生活が営まれてきました。はるか昔からの生活は有形・無形の多くの文化財を現在に伝えています。しかし生活そのものの痕跡は埋蔵文化財として土の中に残されており、発掘調査を通してしか私たちの目に触れません。

埋蔵文化財は、文書に記されない地域の歴史を雄弁に物語る資料であり、市民にとって欠くことのできない財産です。地域の歴史を知ることは、地域を愛する心を育むことにつながるものと思います。やむを得ず失われる埋蔵文化財を、調査によりその内容を把握し、成果を広く公表し、多くの方々に活用していただき、後世に伝えることが、今に生きる私たちの務めだと考えます。

二葉町遺跡の発掘調査では、平安時代から鎌倉時代にかけての集落跡を検出し、海に近いこの地域で繰り広げられた当時の人々の多様な生活の跡が明らかになりました。

これらの調査成果が地域の歴史にとどまらず、平安時代から鎌倉時代にかけての具体的な地方像を知る上でとても重要な資料になることでしょう。今後様々な形で活用していただければ幸いです。

最後になりましたが、本調査が関係諸機関及び地域住民の皆様の多大なるご理解とご協力によって、長期間にわたり実施することができましたことに、厚くお礼を申し上げます。

平成20年３月

神戸市教育委員会

例　　言

1．本書は、神戸市長田区久保町５丁目・６丁目・二葉町６丁目において、平成12年度から平成19年度にかけて発掘調査を実施した、二葉町遺跡第14次～第21次の埋蔵文化財発掘調査の報告書である。

2．当調査は、新長田駅南第２地区震災復興第二種市街地再開発事業に伴うもので、神戸市教育委員会・㈶神戸市体育協会が神戸市都市計画総局（現在）の委託を受け実施した。調査の組織は本文に記した。

3．本書で使用した地図は、国土地理院発行の25,000分の１地形図「神戸首部」・「神戸南部」、神戸市発行の2,500分の１地形図「大橋・長田港」を使用した。

4．本書に用いた方位・座標は平面直角座標系第Ⅴ系で、標高は東京湾中等潮位（T.P.）で表示した。

5．現地調査に係る遺構の実測、写真撮影は、本文に記した各調査担当者が行い、本書の遺構の記述については調査担当者の原稿を基に東喜代秀が加筆した。遺構のトレースは東が行った。遺物の実測は、東と浅谷誠吾が行い、遺物のトレース及び遺物に関する記述は黒田恭正が行った。また、木質遺物の保存科学調査と記述は中村大介が行った。本書の編集は、東が担当した。

6．遺物写真は、神戸市埋蔵文化財センターにおいて独立行政法人国立文化財機構奈良文化財研究所牛嶋茂氏の指導の下、西大寺フォト杉本和樹氏が撮影した。

7．下記の作業については委託を行った。

航空写真測量	㈱ジオテクノ関西、㈱GEOソリューションズ
古環境の調査	パリノ・サーヴェイ㈱
木製品樹種同定	㈱パレオ・ラボ、パリノ・サーヴェイ㈱

8．現地での発掘調査の実施については、神戸市都市計画総局新長田南再開発事務所（現在）の協力を得た。

9．発掘調査で出土した遺物並びに図面・写真類は、神戸市教育委員会が神戸市埋蔵文化財センターで保管している。

本　文　目　次

第１章　はじめに
　第１節　調査にいたる経過と調査組織 …… 1
　第２節　遺跡の位置と歴史的環境 …… 4

第２章　調査の概要
　第１節　既往の調査概要 …… 7
　第２節　基本層序 …… 9

第３章　久保町５丁目の調査 …… 13

第４章　久保町６丁目の調査 …… 22

第５章　二葉町６丁目の調査 …… 63

第６章　二葉町遺跡古環境の調査 …… 98

第７章　二葉町遺跡出土木製品の樹種同定調査
　第１節　第15次調査 …… 107
　第２節　第16次～第20次調査 …… 122

第８章　まとめ …… 139

挿　図　目　次

図１　二葉町遺跡位置図……1
図２　二葉町遺跡と周辺の遺跡……5
図３　調査地位置図……7
図４　基本層序配置図……9
図５－１　基本土層断面図（1）……11
図５－２　基本土層断面図（2）……12
図６　久保町５丁目遺構平面図……13
図７　NR101出土遺物実測図（1）……14
図８　NR101出土遺物実測図（2）……14
図９　SB301平面・断面図……15
図10　SE301平面・断面図……16
図11　SE301出土遺物実測図（1）……17
図12　SE301出土遺物実測図（2）……18
図13　SE301出土遺物実測図（3）……19
図14　SE302平面・断面図……20
図15　SK301平面・断面図……20
図16　SK302平面・断面図……21
図17　SK303平面・断面図……21
図18　SP301・302出土遺物実測図……21
図19　ST301平面・断面図……21
図20　久保町６丁目遺構平面図……22
図21　SB311平面・断面図……23
図22　SB311出土遺物実測図……24
図23　SB312平面・断面図……24
図24　SB313平面・断面図……25
図25　SB313北溝出土遺物実測図……25
図26　SB314平面・断面図……26
図27　SB314出土遺物実測図……26
図28　SB315平面・断面図……27
図29　SB316平面・断面図……28
図30　SB317平面・断面図……29
図31　SB317出土遺物実測図……29
図32　SB318平面・断面図……30
図33　SB318出土遺物実測図……30
図34　SB319平面・断面図……31
図35　SB319出土遺物実測図……31
図36　SB320平面・断面図……32
図37　SB321平面・断面図……33
図38　SB321出土遺物実測図……33
図39　SB322平面・断面図……34
図40　SB323平面・断面図……35
図41　SB324平面・断面図……36
図42　SB325平面・断面図……37
図43　SB325出土遺物実測図……37
図44　SE201平面・断面図……38
図45　SE201出土遺物実測図……38
図46　SE304平面・断面図……38
図47　SE304出土遺物実測図……38
図48　SE305平面・断面図……39
図49　SE305出土遺物実測図……39
図50　SE306平面・断面図……40
図51　SE306出土遺物実測図（1）……40
図52　SE306出土遺物実測図（2）……40
図53　SE307平面・断面図……41
図54　SE308平面・断面図……42
図55　SE308出土遺物実測図……42
図56　SE309平面・断面図……43
図57　SE311平面・断面図……43
図58　SE312平面・断面図……43
図59　SE312出土遺物実測図……44
図60　SE313平面・断面図……44
図61　SE314出土遺物実測図……44
図62　SE314平面・断面図……45
図63　SD301出土遺物実測図……45
図64　SD302出土遺物実測図……45
図65　SD303出土遺物実測図……45
図66　SD304出土遺物実測図……45
図67　SD305出土遺物実測図……46
図68　SD307出土遺物実測図……46
図69　SD309出土遺物実測図……46
図70　SD310出土遺物実測図（1）……46
図71　SD310出土遺物実測図（2）……46
図72　SK304平面・断面図……47
図73　SK304出土遺物実測図……47
図74　SK305平面・断面図……47
図75　SK306平面・断面図……48
図76　SK307平面・断面図……48
図77　SK307出土遺物実測図……48
図78　SK308平面・断面図……49
図79　SK309平面・断面図……49
図80　SK310平面・断面図……49
図81　SK310出土遺物実測図……49
図82　SK311平面・断面図……50
図83　SK311出土遺物実測図……50
図84　SK312出土遺物実測図……50
図85　ST302平面・断面図……51

図86　ST302出土遺物実測図……52
図87　SP305出土遺物実測図……52
図88　SP306出土遺物実測図……52
図89　SP307出土遺物実測図……52
図90　SP308出土遺物実測図……52
図91　SP309出土遺物実測図……53
図92　SX301出土遺物実測図……53
図93　SX305出土遺物実測図……53
図94　SX305平面・断面図……54
図95　SX306平面・断面図……54
図96　SX307平面・断面図……54
図97　SX308平面・断面図……54
図98　SX309平面・断面図……55
図99　SX309出土遺物実測図……55
図100　SX310～SX312平面・断面図……56
図101　SX310～SX312完掘平面図……57
図102　SX310出土遺物実測図……57
図103　SX312出土遺物実測図（1）……58
図104　SX312出土遺物実測図（2）……59
図105　SX313平面・断面図……59
図106　SX314出土遺物実測図……59
図107　久保町６丁目地区包含層出土遺物実測図（1）……60
図108　久保町６丁目地区包含層出土遺物実測図（2）……61
図109　二葉町６丁目遺構平面図……62
図110　SB322平面・断面図……63
図111　SB322出土遺物実測図……64
図112　SB323出土遺物実測図……64
図113　SB324出土遺物実測図……64
図114　SB323平面・断面図……65
図115　SB324平面・断面図……66
図116　SB325平面・断面図……67
図117　SB326平面・断面図……68
図118　SB326出土遺物実測図……68
図119　SB327平面・断面図……69
図120　SB327出土遺物実測図……69
図121　SB328平面・断面図……70
図122　SB328出土遺物実測図……71
図123　SB329出土遺物実測図……71
図124　SB329平面・断面図……71
図125　SE315平面・断面図……72
図126　SE315出土遺物実測図（1）……73
図127　SE315出土遺物実測図（2）……74
図128　SE316平面・断面図……75
図129　SE316出土遺物実測図（1）……76
図130　SE316出土遺物実測図（2）……77
図131　SE316出土遺物実測図（3）……78
図132　SE317平面・断面図……79
図133　SE317出土遺物実測図（1）……80
図134　SE317出土遺物実測図（2）……82
図135　SE317出土遺物実測図（3）……83
図136　SE317出土遺物実測図（4）……84
図137　SE318平面・断面図……85
図138　SE318出土遺物実測図……85
図139　SE319平面・断面図……86
図140　SE320平面・断面図……87
図141　SE320出土遺物実測図（1）……88
図142　SE320出土遺物実測図（2）……88
図143　SK203平面・断面図……89
図144　SK303平面・断面図……89
図145　SK303出土遺物実測図……90
図146　SK304平面・断面図……90
図147　SK305平面・断面図……90
図148　SK306平面・断面図……91
図149　SK307平面・断面図……91
図150　SK308平面・断面図……92
図151　SK308出土遺物実測図……92
図152　SK309平面・断面図……92
図153　SK310平面・断面図……92
図154　SK311平面・断面図……92
図155　SK312平面・断面図……93
図156　SK313平面・断面図……93
図157　SK314平面・断面図……93
図158　SK315出土遺物実測図……93
図159　ST304平面・断面図……94
図160　ST304出土遺物実測図……94
図161　SP303出土遺物実測図……95
図162　SP304出土遺物実測図……95
図163　SP305出土遺物実測図……95
図164　SP306出土遺物実測図……95
図165　SP307出土遺物実測図……95
図166　二葉町６丁目地区包含層出土遺物実測図……96
図167　分析サンプルの堆積層柱状図と分析実施層準位置図…99
図168　A-1，B-1，C-2植物珪酸体群集組成……103
図169　A-2植物珪酸体群集の層位分布……103

表　目　次

表１　調査一覧表……8
表２　花粉分析結果……101
表３　植物珪酸体分析結果……102
表４　二葉町遺跡出土木製品樹種同定結果一覧（1）……112

表５　二葉町遺跡出土木製品樹種同定結果一覧（2）……113
表６　二葉町遺跡出土木製品樹種同定結果一覧（3）……114
表７　二葉町遺跡出土木製品樹種同定結果一覧（4）……115
表８　二葉町遺跡SE301井戸枠など構築材の樹種構成 ……116
表９　二葉町遺跡SE301井戸側内下層・最下層出土
　　曲物などの樹種構成……116
表10　樹種同定結果（1）……124
表11　樹種同定結果（2）……125
表12　樹種同定結果（3）……126
表13　第20－１次調査の遺構・器種別種類構成……129

挿図写真目次

挿図写真１　二葉町６丁目地区出土磁器製定量錘…… 97
挿図写真２　二葉町遺跡15次出土木製品樹種（1）……117
挿図写真３　二葉町遺跡15次出土木製品樹種（2）……118
挿図写真４　二葉町遺跡15次出土木製品樹種（3）……119
挿図写真５　二葉町遺跡15次出土木製品樹種（4）……120
挿図写真６　二葉町遺跡15次出土木製品樹種（5）……121
挿図写真７　木材（1）……133
挿図写真８　木材（2）……134
挿図写真９　木材（3）……135
挿図写真10　木材（4）……136
挿図写真11　木材（5）……137
挿図写真12　木材（6）……138

巻頭写真図版目次

巻頭カラー図版１　調査地遠景航空写真
巻頭カラー図版２　二葉町６丁目　SE317出土遺物・磁器製定
　　量錘

写真図版目次

図版１　調査地航空写真（俯瞰モザイク）
図版２　久保町６丁目地区　調査区航空写真（俯瞰モザイク）
図版３　二葉町６丁目地区　調査区航空写真（俯瞰モザイク）
図版４　久保町５丁目　NR101（南から）
　　久保町５丁目　NR101断面（南から）
　　久保町５丁目　調査区中央部全景（東から）
　　久保町５丁目　SB301（東から）
図版５　久保町５丁目　SE302（南から）
　　久保町５丁目　SE303（南から）
　　久保町５丁目　調査区南西部全景（北から）
　　久保町５丁目　ST301（西から）
図版６　久保町６丁目　SB311（西から）
　　久保町６丁目　SB313（南から）
図版７　久保町６丁目　SB317（北から）
　　久保町６丁目　SB318（北から）
　　久保町６丁目　調査区中央南全景（北から）
図版８　久保町６丁目　SB321（西から）
　　久保町６丁目　SB312（東から）
　　久保町６丁目　SB314（南から）
　　久保町６丁目　SB315・SE307（西から）
　　久保町６丁目　SB320・SB321（北から）
図版９　久保町６丁目　SE305・SE306（南から）
　　久保町６丁目　SE306（南から）
　　久保町６丁目　SE308（南から）
　　久保町６丁目　SE310（東から）
　　久保町６丁目　SE311（東から）
　　久保町６丁目　SE312（西から）
図版10　久保町６丁目　SE313（南から）
　　久保町６丁目　SK306（南から）
　　久保町６丁目　SK307（東から）
　　久保町６丁目　SK309（南から）
　　久保町６丁目　SK310（南から）
　　久保町６丁目　SK311（北から）
図版11　久保町６丁目　ST302付近全景（北から）
　　久保町６丁目　ST302（北から）
　　久保町６丁目　ST302遺物出土状況（東から）
図版12　久保町６丁目　SX305～SX307（南から）
　　久保町６丁目　SX309（東から）
　　久保町６丁目　SX310～SX312（東から）
　　久保町６丁目　SX313（西から）
図版13　二葉町６丁目　調査区北西全景（東から）
　　二葉町６丁目　SB323とSE315～SE318（南から）
　　二葉町６丁目　SB328東半（南から）
図版14　二葉町６丁目　SB328西端柱穴（南から）
　　二葉町６丁目　SB322（南から）
　　二葉町６丁目　SB329（南から）
　　二葉町６丁目　SE315（東から）
　　二葉町６丁目　SE316（東から）
図版15　二葉町６丁目　SE320（西から）
　　二葉町６丁目　SE317（東から）
　　二葉町６丁目　SE318（北から）
　　二葉町６丁目　SE319（南から）
　　二葉町６丁目　SK203（東から）
図版16　二葉町６丁目　SK306（東から）
　　二葉町６丁目　SK308（西から）
　　二葉町６丁目　ST302（北から）
図版17　出土遺物　２・４・５～７・10
図版18　出土遺物　11～13・31・32・35
図版19　出土遺物　38・41～43・46・47・49・50

図版20　出土遺物　51・57・61・62・64・69・70・73

図版21　出土遺物　75～80・83・84・SK307

図版22　出土遺物　85～92

図版23　出土遺物　ST302・95・96・101～103・105

図版24　出土遺物　129～132・134・136

図版25　出土遺物　143・151・152・180～183・185・187・
189・190・191・193

図版26　出土遺物　SE315・202・206・211・213

図版27　出土遺物　SE316・207～210・212・226・228・239

図版28　出土遺物　227・229～235・240～242

図版29　出土遺物　SE317・267・268・272・276

図版30　出土遺物　277・280・282・286～288・291～294

図版31　出土遺物　SE318・324・328～330・333・335・338

図版32　出土遺物　339・341～352・354～360

図版33　出土遺物　ST304・365・366・373～377

図版34　SE301出土木質遺物
（17）上端部分
同左中央付近

図版35　SE301出土曲物（26）
同左（27）
同上（28）
同左（29）

図版36　SE306出土横槌（60）
SX312出土木質遺物（右下：137）
SE315・SE317出土木質遺物
（左半：SE317、右半：SE315）

図版37　SE316出土木質遺物
同上出土木皿
SE317出土曲物（312）

図版38　SE317出土曲物（313）
同左（314）
同上横槌（322）
同左箸（左より315～317、319、318、320、321）

第１章　はじめに

第１節　調査に至る経過と調査組織

(1) 調査に至る経過

二葉町遺跡がある、長田区腕塚町・久保町・二葉町周辺は、古くからの商業区域であり、大正筋商店街、六間道商店街などの多くの商店街が碁盤の目状に存在し、古い木造家屋が密集する地区であった。

平成７年１月、阪神淡路大震災の発生により多くの建物が倒壊、焼失し、当地区も甚大な被害を蒙り、多数の住民が住む家を失い、仮設住宅での生活を余儀なくされた。

その後、当地区を対象に新長田駅南第２地区震災復興第二種市街地再開発事業として都市計画決定がなされるに至り、周知の埋蔵文化財包蔵地である二葉町遺跡が事業区域内に含まれるため、対象地について試掘調査を実施し、遺物包含層と遺構面が遺存していることを確認した。その結果を踏まえ、神戸市都市計画総局新長田南再開発事務所（現在）と協議を実施し、建物の除却が済んで調査が可能な部分について、全面発掘調査を順次実施することになった。調査は平成８年度より実施し、完了した範囲については再開発ビルの建設が着工され、平成19年度現在、久保町６丁目の一部を残して発掘調査が完了している。

図１　二葉町遺跡位置図

(2) 調査体制

発掘調査は神戸市文化財保護審議会の指導を得て、下記の組織で実施した。

神戸市文化財保護審議会委員（史跡・考古担当）

檀上　重光　前神戸女子短期大学教授（～平成19年７月14日）

工樂　善通　ユネスコアジア文化センター文化遺産保護協力事務所研修部長（～平成14年度）

大阪府立狭山池博物館館長（平成13年度～）

和田　晴吾　立命館大学文学部教授

教育委員会事務局	平成12年度	平成13年度	平成14年度
教育長	木村良一	木村良一	西川和機
社会教育部長	水田裕次	岩畔法夫	岩畔法夫
教育委員会参事（文化財課長事務取扱）	—	—	—
文化財課長	大勝俊一	桑原泰豊	桑原泰豊
社会教育部主幹	渡辺伸行	渡辺伸行	渡辺伸行
埋蔵文化財調査係長	丹治康明	丹治康明	丹治康明
文化財課主査	宮本郁雄・丸山潔・菅本宏明	宮本郁雄（～12月） 丸山潔・菅本宏明・千種浩	丸山潔・菅本宏明・千種浩
事務担当学芸員	山口英正	斎木　巌	内藤俊哉
遺物整理担当学芸員	谷　正俊	黒田恭正	関野　豊
保存科学担当学芸員	千種　浩・中村大介	中村大介	中村大介
調査担当学芸員	—	—	—

(財)神戸市体育協会	平成12年度	平成13年度	平成14年度
会長	笹山幸俊	笹山幸俊	矢田立郎
副会長	鞍本昌男	鞍本昌男	鞍本昌男
同	木村良一・山田隆・家治川豊	木村良一・山田隆・家治川豊	—
相談役	加茂川守	—	—
常務理事	静観圭一	梶井昭武	梶井昭武
参事	財田美信	—	—
総務課長	前田豊晴	前田豊晴	谷川博志
総務課主幹	奥田哲通	奥田哲通（～８月） 宮本郁雄（１月～）	宮本郁雄
事業係長	瀬田吉則	—	—
総務係長	—	松田　保	—
総務課主査	丸山　潔・菅本宏明	丸山　潔・菅本宏明	丸山潔・菅本宏明
事務担当学芸員	斎木　巌	川上厚志	池田　毅
調査担当学芸員	浅谷誠吾・阿部功	池田　毅・石島三和	谷　正俊・川上厚志

平成15年度	平成16年度	平成17年度	平成18年度	平成19年度
西川和機	小川雄三	小川雄三	小川雄三	小川雄三
高橋英比古	高橋英比古	高橋英比古	大谷幸正	黒住章久
桑原泰豊	桑原泰豊	桑原泰豊	柏木一孝	柏木一孝
—	—	—	—	
渡辺伸行・宮本郁雄	渡辺伸行・宮本郁雄	渡辺伸行・丸山潔	渡辺伸行・丸山潔	渡辺伸行・丸山潔
丹治康明	丹治康明	丹治康明	丹治康明	千種浩
丸山潔・菅本宏明・千種浩	丸山潔・菅本宏明・千種浩	菅本宏明・安田滋	安田滋・山本雅和	丹治康明・安田滋・山本雅和
内藤俊哉	東喜代秀	東喜代秀	前田佳久・阿部敬生	阿部敬生・中谷正
西岡誠司	谷正俊	—	—	黒田恭正
中村大介	中村大介	中村大介	中村大介	中村大介
—	—	—	浅谷誠吾	—

平成15年度	平成16年度	平成17年度	平成18年度	平成19年度
矢田立郎	矢田立郎	家治川豊	家治川豊	表孟宏
矢野栄一郎	矢野栄一郎	矢野栄一郎	水田裕次	水田裕次
—	—	—	—	—
—	—	—	—	—
野浪建作	野浪建作	野浪建作	碩弘四郎	碩弘四郎
—	—	—	—	—
谷川博志	横関勇	横関勇	横関勇	横関勇
—	—	—	—	—
—	—	—	—	—
—	—	—	—	—
菅本宏明	菅本宏明	菅本宏明	山本雅和	山本雅和
中谷正	—	—	—	—
黒田恭正・石島三和	黒田恭正	阿部敬生	東喜代秀	東喜代秀

第２節　遺跡の位置と歴史的環境

二葉町遺跡は、六甲山系から流れ出る妙法寺川と苅藻川によって形成された沖積地の自然堤防上に立地する遺跡である。調査地は、北西から南東へごく緩やかに傾斜する地形で、およそ250mに及ぶ調査地の北端から南端での比高差が約1.5mを測る。現在の海岸線から北へ約400～500mの場所に位置している。

歴史的環境　二葉町遺跡の歴史的環境を、周辺にある主要な遺跡とともに略述する。

縄文時代　苅藻川流域の長田神社境内遺跡や三番町遺跡、五番町遺跡で縄文時代後期から晩期の遺物が出土し、土坑などの遺構が認められる。

弥生時代　妙法寺川流域の戎町遺跡で、弥生時代前期の集落が確認されている。そこでは小区画の水田や木製品の貯蔵施設と思われる円形杭列遺構などが見られる。中期になると竪穴住居などの遺構や多量の土器、石器などの遺物が出土し、地域の拠点的集落を形成する。また戎町遺跡の集落の南には、墓域が認められ、方形周溝墓が数基確認されている。大開遺跡は旧湊川流域に位置するが、弥生時代前期の環濠集落が確認されている。後期になると長田神社境内遺跡、若松町遺跡、御蔵遺跡、松野遺跡など遺跡数が増加し、集落の形成が活発に行われるようになる。

古墳時代　古墳時代前期には、鷹取町遺跡、若松町遺跡、御蔵遺跡、三番町遺跡、長田本庄町遺跡などで集落が形成される。中期になると松野遺跡、神楽遺跡、上沢遺跡で集落が認められる。松野遺跡では、豪族の居館と思われる掘立柱建物群と柵列が検出され、神楽遺跡では韓式系土器や算盤玉形滑石製紡錘車が出土し、上沢遺跡では大壁造建物、韓式系土器、多量の滑石製品が検出されている。後期になると鷹取町遺跡、大橋町遺跡の他、近年の調査で、柱穴が一辺１m近い方形の掘形を呈する、総柱の掘立柱建物が確認された水笠遺跡があげられる。また古墳としては、丘陵上に得能山古墳、会下山二本松古墳、夢野丸山古墳の前期古墳が築造されている。中期では、苅藻川河口付近に存在したとされる念仏山古墳は全長約200mの大型前方後円墳であったと言われている。後期になると丘陵上に池田古墳群があげられるが、その実態は明らかでない。

奈良時代以降　奈良時代になると山陽道が築造され、地域での陸上交通が充実していく。奈良時代から平安時代にかけて大田町遺跡、神楽遺跡、御蔵遺跡、上沢遺跡、長田野田遺跡、室内遺跡などがあげられる。大田町遺跡は、山陽道沿いに位置していること、多数の緑釉・灰釉陶器の出土と掘立柱建物群の検出により、須磨駅家の可能性が高いと考えられている。御蔵遺跡も掘立柱建物群が検出され、この地域の有力な集落であると考えられている。上沢遺跡では、同時期の掘立柱建物とともに、井籠組の井戸枠をもつ井戸内から正倉院御物と同様の銅鋺が出土しており、都との関係が窺える。やや時代が遡るが、室内遺跡は白鳳時代の寺院跡と考えられている。平安時代末になると、平清盛により大輪田の泊が修築され、その前後から遺跡数は増加していく。平安時代末から鎌倉時代にかけての集落遺跡としては、二葉町遺跡、戎町遺跡、若松町遺跡、松野遺跡、長田野田遺跡、御蔵遺跡、長田神社境内遺跡、上沢遺跡、兵庫津遺跡などがあげられる。これらの集落は、掘立柱建物、井戸、耕作地により構成されている。

図２　二葉町遺跡と周辺の遺跡

S＝1：25,000

主要参考文献

1　二葉町遺跡　川上厚志編　『二葉町遺跡第３・５・８・９・12次調査発掘調査報告書』神戸市教育委員会　2001

2　大橋町遺跡　中谷正　『大橋町遺跡第１次－１～６次調査発掘調査報告書』神戸市教育委員会　2006
藤井太郎　『大橋町遺跡第２次発掘調査報告書』神戸市教育委員会　2007

3　松野遺跡　千種浩編　『松野遺跡発掘調査概報』神戸市教育委員会　1983
口野博史編　『松野遺跡発掘調査報告書　第３～７次調査』神戸市教育委員会　2001
関野豊編　『松野遺跡第11～23・25・26・29～31次　水笠遺跡第２・３・５～15・17～21次調査発掘調査報告書』神戸市教育委員会　2002

4　若松町遺跡　山田清朝・高木芳史　『若松町遺跡』神戸市教育委員会　2000
口野博史　「若松町遺跡第２次調査」『平成10年度神戸市埋蔵文化財年報』神戸市教育委員会　2001

5　長田野田遺跡　兼康保明・小林健二　「長田野田遺跡第1次調査」『平成7年度神戸市埋蔵文化財年報』神戸市教育委員会　1998

6　長田本庄町遺跡　岡田章一・久保弘幸　「長田本庄町遺跡第1次調査」『平成９年度神戸市埋蔵文化財年報』2000

7　鷹取町遺跡　大平茂編　『神戸市鷹取町遺跡』兵庫県教育委員会　1991

8　大田町遺跡　森内秀造・山上雅弘　『神戸市須磨区大田町遺跡発掘調査報告書』兵庫県教育委員会　1993
口野博史・川上厚志　「大田町遺跡第２次調査」『平成３年度神戸市埋蔵文化財年報』　1994
藤井太郎　「大田町遺跡第12次調査」『平成10年度神戸市埋蔵文化財年報』神戸市教育委員会　2001

9　戎町遺跡　山本雅和　『戎町遺跡第1次発掘調査概報』神戸市教育委員会　1989
藤井太郎編　『戎町遺跡第35・38・50・56次調査　松野遺跡第32・33・38次調査発掘調査報告書』神戸市教育委員会　2005

10　水笠遺跡　関野豊編　『松野遺跡第11～23・25・26・29～31次　水笠遺跡第２・３・５～15・17～21次調査発掘調査報告書』神戸市教育委員会　2002
「水笠遺跡第29次調査現地説明会資料」神戸市教育委員会　2007

11　神楽遺跡　菅本宏明　『神楽遺跡発掘調査報告書』神戸市教育委員会　1981

12　御蔵遺跡　安田滋編　『御蔵遺跡第４・６・14・32次調査報告書』神戸市教育委員会　2001
安田滋編　『御蔵遺跡第17・38次調査報告書』神戸市教育委員会　2001
谷　正俊編　『御蔵遺跡Ⅴ　第26・37・45・51次調査』神戸市教育委員会　2003

13　三番町遺跡　山仲進編　『神戸市長田区三番町遺跡第1次調査』妙見山麓遺跡調査会　2006
口野博史・水嶋正稔「三番町遺跡第２次調査」『昭和63年度神戸市埋蔵文化財年報』神戸市教育委員会　1994
黒田恭正　「三番町遺跡第３次調査」『昭和63年度神戸市埋蔵文化財年報』神戸市教育委員会　1994

14　五番町遺跡　松林宏典　「五番町遺跡第5次調査」『平成６年度神戸市埋蔵文化財年報』神戸市教育委員会　1997
石島三和　『五番町遺跡発掘調査報告書第12次調査』神戸市教育委員会　2007

15　長田神社境内遺跡　黒田恭正　『長田神社境内遺跡発掘調査概要』神戸市教育委員会　1990
藤井太郎・丸杉俊一郎　「長田神社境内遺跡第10次調査」『平成10年度神戸市埋蔵文化財年報』神戸市教育委員会　2001

16　室内遺跡　水口富夫・平田一幸・高瀬一嘉　「室内遺跡」『平成９年度年報』兵庫県埋蔵文化財調査事務所　1998

17　上沢遺跡　口野博史・関野豊　「上沢遺跡第33次調査」『平成11年度神戸市埋蔵文化財年報』神戸市教育委員会　2003
谷正俊編　『上沢遺跡Ⅲ』神戸市教育委員会　2003

18　大開遺跡　前田佳久　『大開遺跡発掘調査報告書』神戸市教育委員会　1993

19　兵庫津遺跡　岡田章一編　『兵庫津Ⅱ』兵庫県教育委員会　2002
内藤俊哉　「兵庫津遺跡第15次調査」『平成10年度神戸市埋蔵文化財年報』　2001

20　念仏山古墳　喜谷美宣　「市街地に消えた古墳－念仏山古墳－」『博物館研究紀要第６号』神戸市立博物館　1989
喜谷美宣　「古墳時代　前方後円墳の成立と発展」『新修神戸市史　歴史編Ⅰ』神戸市　1989

第２章　調査の概要

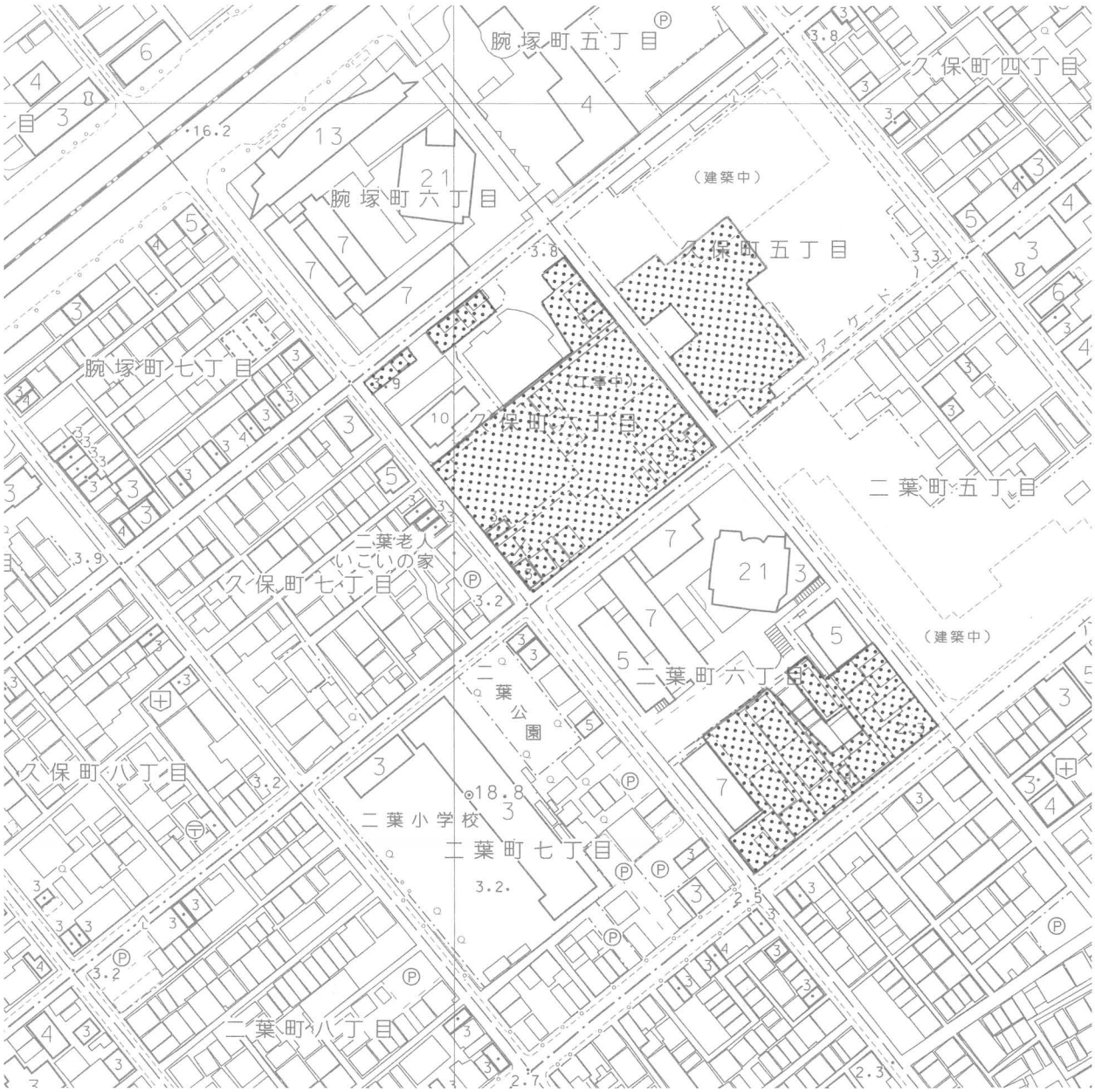


図３　調査地位置図　　S＝1：2,500

第１節　既往の調査概要

二葉町遺跡は、昭和63年度に二葉小学校校舎改築に伴う試掘調査を実施した際に発見された遺跡である。試掘調査の際には、中世の良好な遺物包含層が確認されている。

本格的な発掘調査は、昭和63年度に共同住宅建設に伴う第１次調査が最初で、この調査では、平安時代末から鎌倉時代初めにかけての掘立柱建物３棟と井戸１基が検出され、包含層から出土した白磁の四耳壺が出土している。

その後、個人住宅の建設に伴う調査が実施され、中世の柱穴、耕作痕、縄文時代晩期の土器を含む自然流路が検出されている。

平成８年度から、新長田駅南第２地区震災復興第二種市街地再開発事業に伴う大規模

表1　調査一覧表

次数	地区名	調査面積	調査主体	調査担当	調査期間	調査内容
14次	久保町５丁目	2,160㎡	㈶神戸市体育協会	阿部　功	010213 ～ 010321	土坑・溝
15－１次	久保町５丁目	530㎡	㈶神戸市体育協会	池田　毅	010429 ～ 010531	木棺墓・井戸･溝
15－２次	久保町５丁目	500㎡	㈶神戸市体育協会	石島三和	010726 ～ 010903	掘立柱建物・井戸
16－１次	久保町６丁目	600㎡	㈶神戸市体育協会	谷　正俊	020426 ～ 020628	掘立柱建物２棟・土坑･溝
16－２次	久保町６丁目	700㎡	㈶神戸市体育協会	川上厚志	020924 ～ 021105	溝・ピット
16－３次	久保町６丁目	1,400㎡	㈶神戸市体育協会	川上厚志	021211 ～ 030221	掘立柱建物８棟・井戸７基・土坑３基
17－１次	久保町６丁目	104㎡	㈶神戸市体育協会	黒田恭正	030520 ～ 030529	溝
17－２次	久保町６丁目	82㎡	㈶神戸市体育協会	黒田恭正	030602 ～ 030611	柱穴
17－３次	二葉町６丁目	325㎡	㈶神戸市体育協会	石島三和	030920 ～ 031017	掘立柱建物・井戸
17－４次	久保町６丁目	280㎡	㈶神戸市体育協会	石島三和	031027 ～ 031208	溝
17－５次	久保町６丁目	149㎡	㈶神戸市体育協会	黒田恭正	031216 ～ 040116	掘立柱建物・溝
17－６次	久保町６丁目	52㎡	㈶神戸市体育協会	黒田恭正	040126 ～ 040206	溝
17－７次	二葉町６丁目	68㎡	㈶神戸市体育協会	黒田恭正	040308 ～ 040316	土坑・溝
18－１次	二葉町６丁目	182㎡	㈶神戸市体育協会	黒田恭正	040409 ～ 040518	ピット
18－２次	二葉町６丁目	420㎡	㈶神戸市体育協会	黒田恭正	040518 ～ 040618	土坑
18－３次	二葉町６丁目	90㎡	㈶神戸市体育協会	黒田恭正	041105 ～ 041126	土坑・溝・ピット
18－４次	久保町６丁目	224㎡	㈶神戸市体育協会	黒田恭正	041129 ～ 041228	掘立柱建物・井戸・木棺墓
18－５次	久保町６丁目	320㎡	㈶神戸市体育協会	黒田恭正	050104 ～ 050210	掘立柱建物・土坑
19－１次	久保町６丁目	660㎡	㈶神戸市体育協会	阿部敬生	050509 ～ 050715	井戸・土坑・溝
19－２次	久保町６丁目	670㎡	㈶神戸市体育協会	阿部敬生	050715 ～ 050916	掘立柱建物・土坑
20－１次	二葉町６丁目	380㎡	㈶神戸市体育協会	浅谷誠吾	060515 ～ 060710	掘立柱建物２棟・井戸・土坑
20－２次	久保町６丁目	420㎡	㈶神戸市体育協会	東喜代秀	060523 ～ 060629	水溜・溝
20－３次	久保町６丁目	90㎡	㈶神戸市体育協会	東喜代秀	060703 ～ 060718	溝
20－４次	二葉町６丁目	190㎡	㈶神戸市体育協会	東喜代秀	060724 ～ 060821	溝・ピット
20－５次	二葉町６丁目	120㎡	㈶神戸市体育協会	東喜代秀	061017 ～ 061027	掘立柱建物２棟・木棺墓
20－６次	二葉町６丁目	120㎡	㈶神戸市体育協会	東喜代秀	061109 ～ 061120	溝
21－１次	二葉町６丁目	620㎡	㈶神戸市体育協会	東喜代秀	070531 ～ 070719	土坑・溝・ピット
21－２次	二葉町６丁目	550㎡	㈶神戸市体育協会	東喜代秀	071128 ～ 071225	溝

な発掘調査が開始され、縄文時代晩期の自然流路、弥生時代前期の溝・土坑、奈良時代の掘立柱建物6棟、井戸１基、土坑１基、平安時代から鎌倉時代の掘立柱建物34棟、井戸21基、木棺墓４基などが検出されている。特に11世紀末から12世紀前半に廃棄され、井戸枠として転用された「複材構造船」は当時の船舶の実態を知る上で貴重な資料となっている。これらの成果は、2001年に『二葉町遺跡第３・５・８・９・12次調査発掘調査報告書』として刊行されている。

今回の報告の対象となるのは、2001年の報告書刊行後の、同事業に伴う発掘調査の成果であり、対象範囲は図３に示したとおりで、調査面積は14,076㎡である。

第２節　基本層序

各調査区とも市街地形成時から開発が行われてきた地域であるため、建物基礎による撹乱が著しく、特に商店街に面した場所は、鉄筋コンクリート造の建物の基礎により殆ど遺構面が残存していない。また、現状地盤より遺構面までの深度が浅いため、遺物包含層及び遺構面が、近世以後の耕作地造成により削平を受けている場所もある。

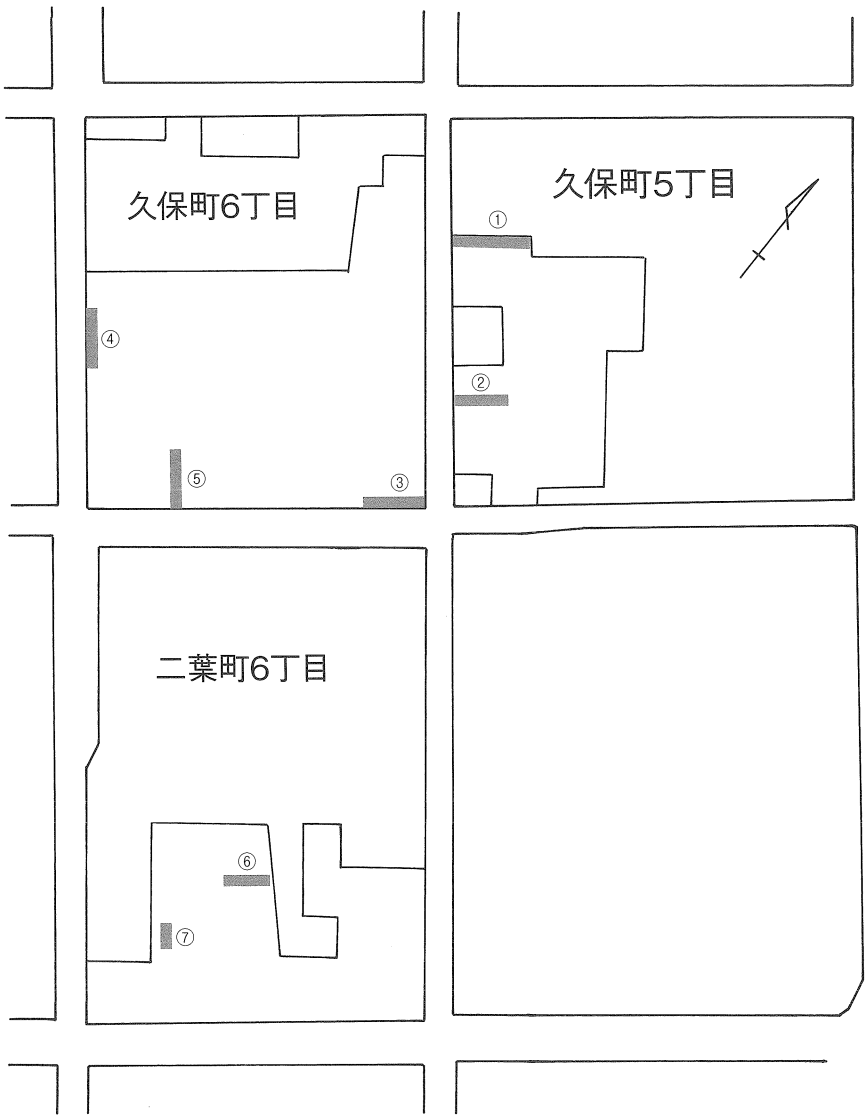


図４　基本層序配置図

久保町５丁目　現状地盤より約50cm程度下までは盛土であり、その下に近世以降の旧耕土層があり、さらに下層に中世の旧耕土層が存在する。中世の旧耕土を除去すると遺物包含層である暗褐色の砂質土が堆積している場所もあるが、殆どの場所では遺物包含層は存在せず、黄灰色砂質シルトまたは褐色系の砂質土がベースとなり、その上面が遺構面である。遺構面での標高はおよそ3.5mである。なお、褐色系の砂質土が遺構面となっている場所では、その層から縄文時代晩期の土器片が出土しており、同時期の洪水砂が堆積しているものと考えられる。

久保町６丁目　盛土、近世以降の旧耕土、中世の旧耕土、暗灰褐色砂質シルトの遺物包含層と堆積し、黄灰色砂質シルト～粘土または黒褐色礫混じり粘土上面が遺構面である。遺構面の標高は、およそ3.5mである。

二葉町６丁目　盛土、近世以降の旧耕土、中世の旧耕土、暗灰褐色砂質シルトの遺物包含層と堆積し、黄灰色砂質シルト～粘土上面が遺構面である。遺構面の標高は、およそ2.5 ～ 2.8mである。

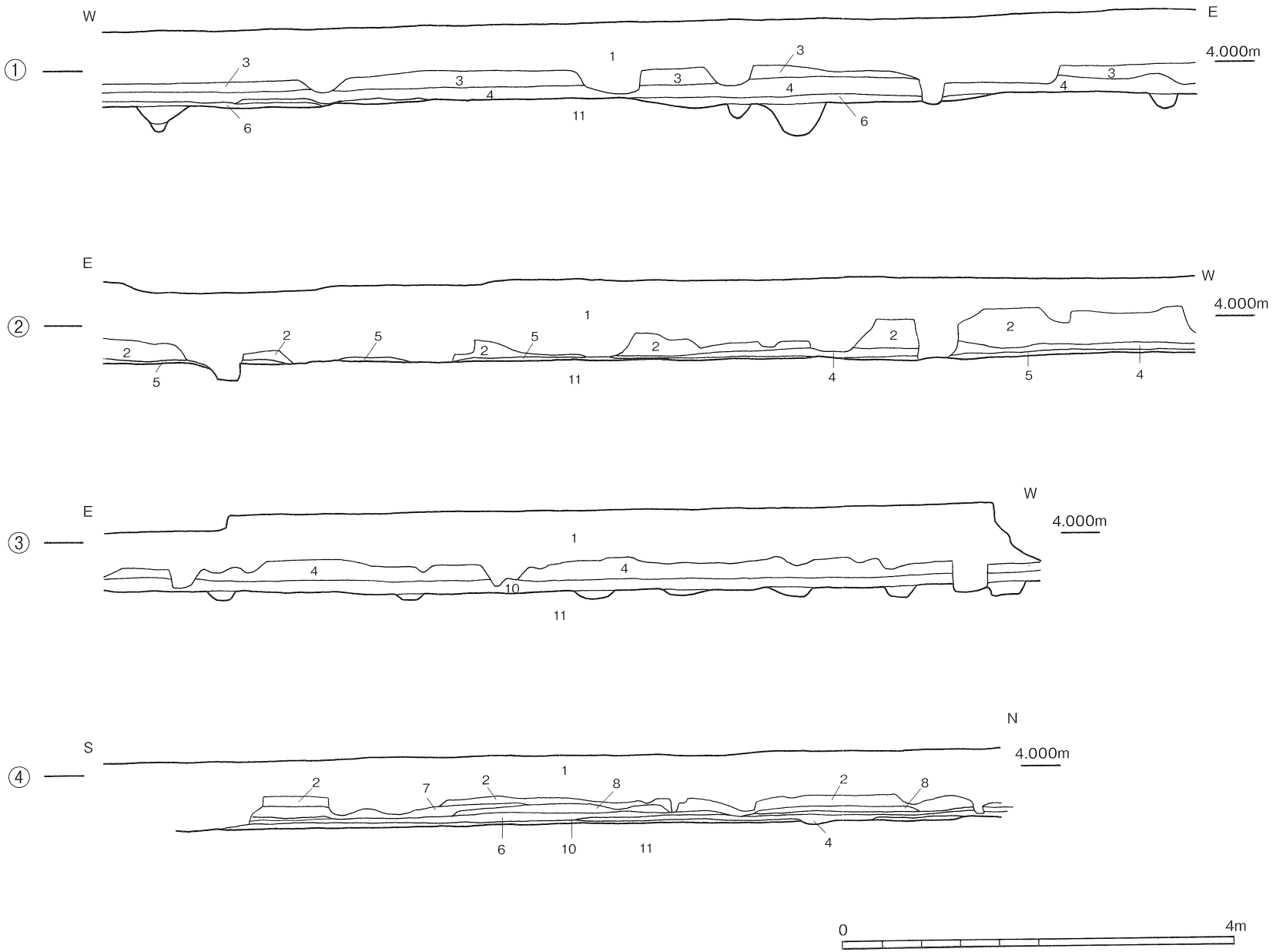
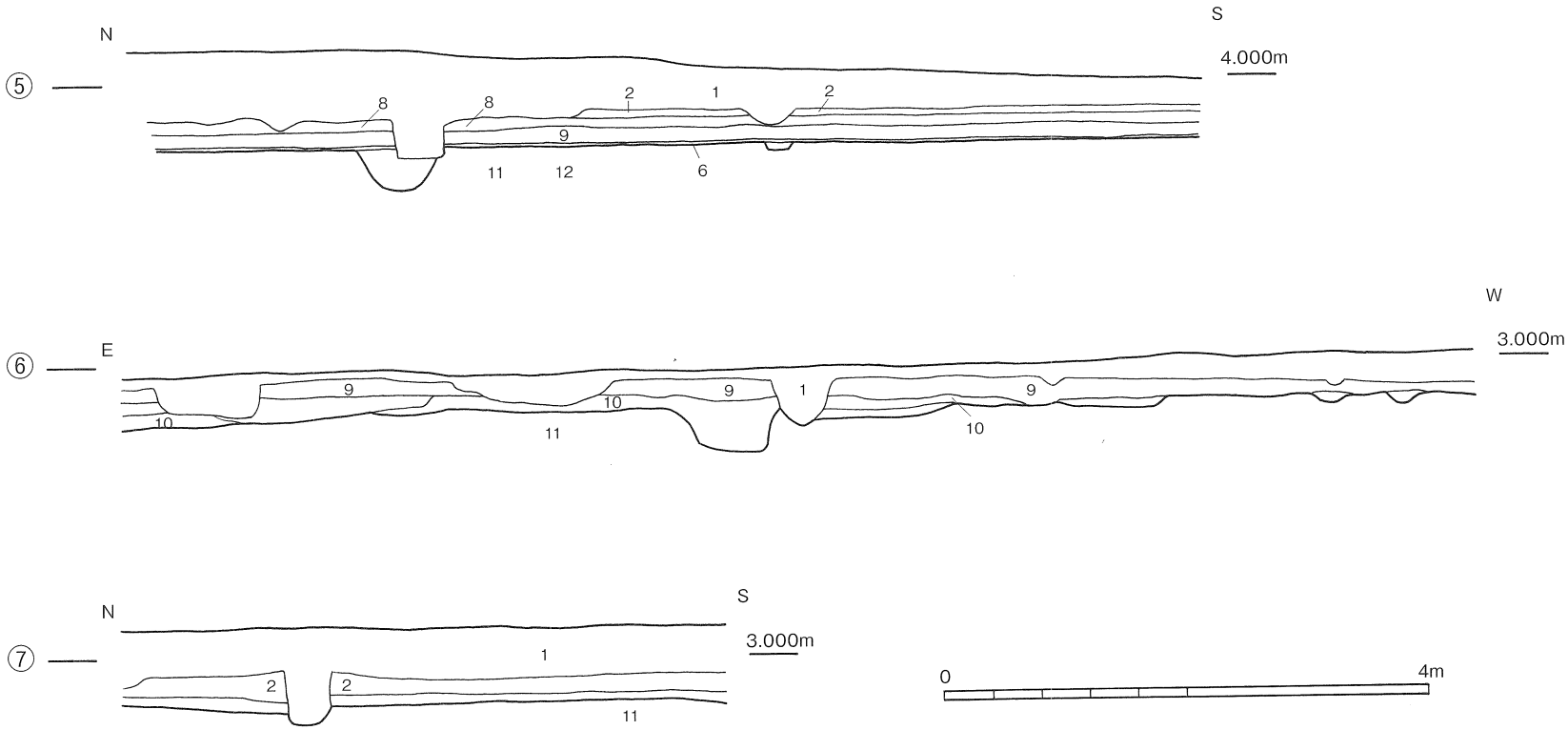


図5－1　基本土層断面図（1）



1　盛土及び撹乱
2　旧耕土
3　淡灰褐色極細砂
4　淡黄灰褐色極細砂（中世耕土）
5　淡黄灰色極細砂（中世耕土）
6　暗灰黄色粘土（中世耕土）
7　灰茶色細砂
8　黄灰色シルト混じり細砂
9　褐灰色細砂（中世耕土）
10　暗灰褐色砂質シルト（遺物包含層）
11　黄灰色砂質シルト～粘土
12　黒褐色粗砂混じり粘土

図5－2　基本土層断面図（2）

第３章　久保町５丁目の調査

久保町５丁目では、西半部にほとんどの遺構が集中して残存しており、掘立柱建物１棟、井戸３基、土坑３基、墓１基、自然流路１条、ピット、溝多数を検出した。なお、このうち掘立柱建物と井戸１基については、中世の耕作土上面で検出した。

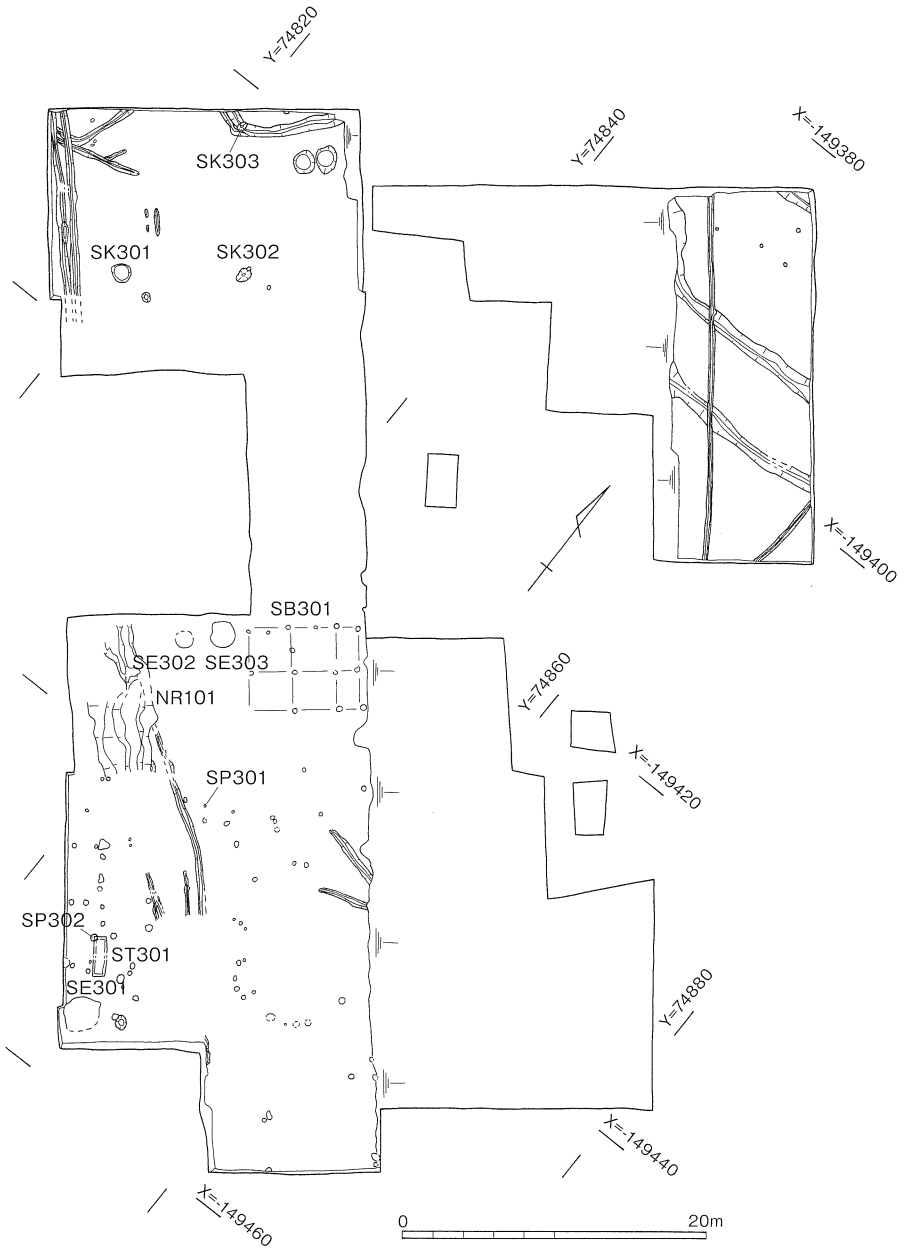


図６　久保町５丁目　遺構平面図

（1）縄文時代晩期

NR101　北西から南東方向に向かって流れる自然流路であり、幅約4.2m、深さは最深部で、0.65mを測る。埋土の最上層には、中世の土器を比較的多く含む砂層が薄く堆積し、下層には殆ど遺物の含まない砂層が何層も繰り返し堆積している。堆積層の状況からみて、ある程度水の流れが速いことが窺われる。川底付近から、縄文時代晩期の土器が数点まとまって出土しているので、おそらくこの流路はその時期のものであろう。最上層の堆積層については、自然流路が埋没した後、窪んだ部分に二次的に堆積したものであると考えられる。

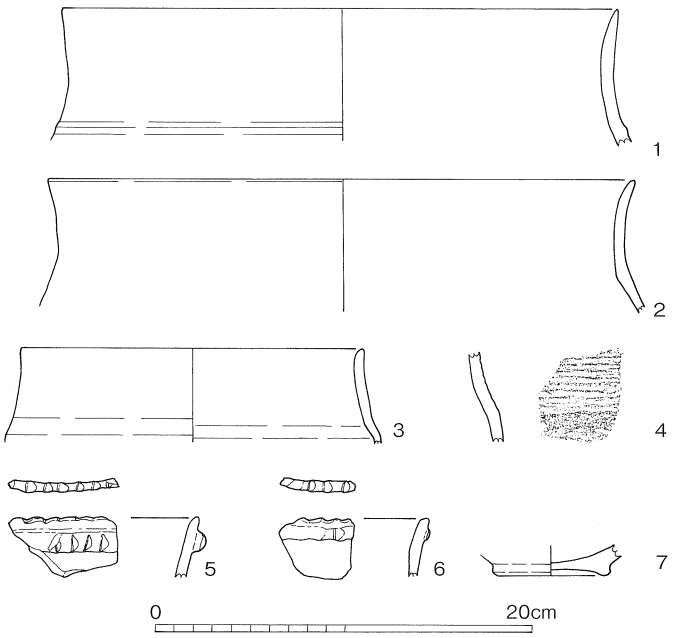


図７　NR101出土遺物実測図（1）

図７の１～７は縄文時代晩期の土器片である。１は口径29.3cm、２は口径31.0cmを測る。両者共内外面の調整は摩滅が激しく不明である。３は口径18.0cmで内外面をミガキで仕上げる。４の外面には条痕が残る。５・６は口縁部の破片で、外面には端部近くに凸帯を巡らし、端部上面にキザミ目を施す。７は底径5.7cmの底部である。この他外面にケズリを加えた底部下半部の破片などが出土している。滋賀里Ⅳ期のものが中心と考えられる。

図８の８・９は東播系の須恵器捏鉢で、８は口径29.8cm、９は口径31.9cmである。12世紀末～13世紀のものと考えられる[1]。

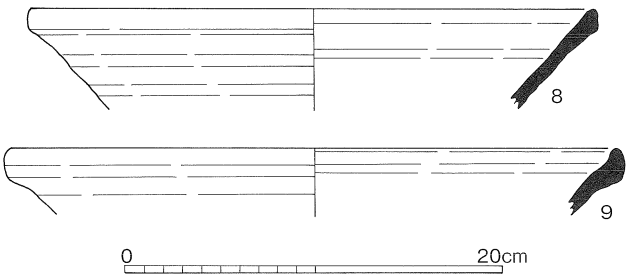


図８　NR101出土遺物実測図（2）

（2）掘立柱建物

SB301　中世の耕作土上面で検出した遺構で、東西２間（約5.6m）、南北２間（約5.5m）で東側に庇がつく総柱の掘立柱建物である。柱間は、東西方向のＰ６～Ｐ７～Ｐ８～Ｐ９が2.9m、2.7m、1.5m、南北方向のＰ４～Ｐ８～Ｐ12が3.05m、2.45mである。柱穴の掘形は直径約0.3～0.4mの円形であり、ほとんど全ての柱穴で直径約0.1m程度の柱痕を確認した。出土遺物は中世のものと考えられる土器の小破片が出土しているが、図示できるものはない。

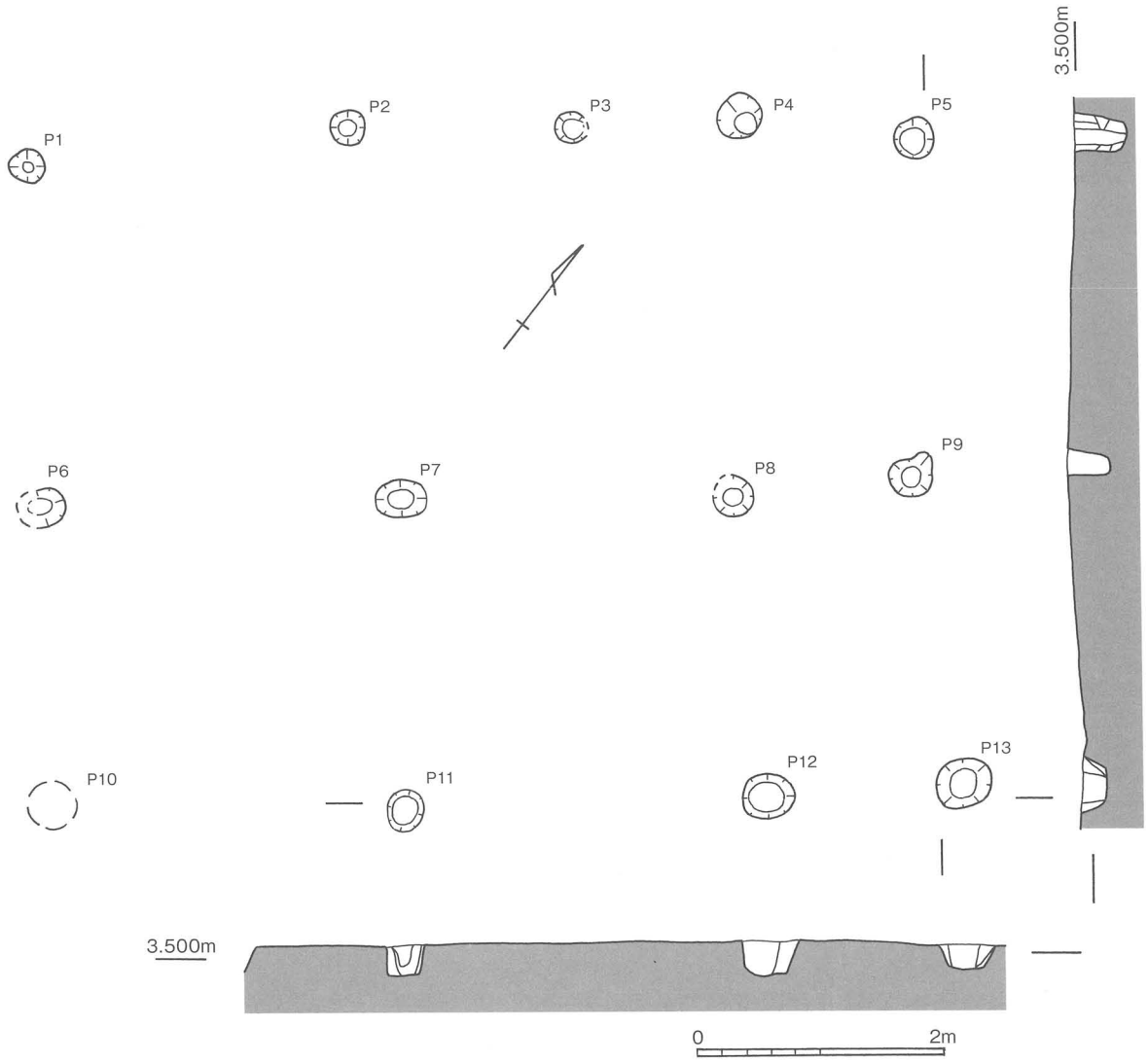


図９　SB301平面・断面図

(3) 井戸

SE301

一辺約2.5mの隅円方形状の掘形で、井戸側が縦板組隅柱横桟留構造に分類される井戸である。井戸底の水溜部分は曲物を3段組み上げており、検出面から水溜底までの深さは約4.4mである。井戸側部分の平面形は一辺約1.0mのほぼ正方形で、横桟は約0.7mの間隔で4段分遺存している。この井戸の特徴的な点として、四隅の隅柱の下に柱を固定するための扁平な根石を据えていること、井戸の中程より下は掘形と井戸側との隙間がほとんどないことが挙げられる。

図11の10～13は東播系須恵器、14は中国製白磁である。10の小皿は口径9.4cm、器高2.3cmで外面に墨書で記号を描く。11の小皿は口径8.6cm、器高2.5cm。12の埦は口径16.7cm、器高5.4cm。13の埦は口径16.2cm、器高5.1cmで外面に墨書があるが判読できない。14は白磁皿の底部で山本信夫分類の皿Ⅷ類である[2]。SE301出土遺物は12世紀中頃を中心とするものと考えられる。

15～28は井戸構築材である。井戸の構造は、素掘りの土坑底の四隅に礎石を置き、その上に隅柱と横桟により櫓構造を築いている。その外側に崩落防止の縦板で囲んでいる。また土坑底部の中央には曲物を3段重ねで据え、貯水部としている。

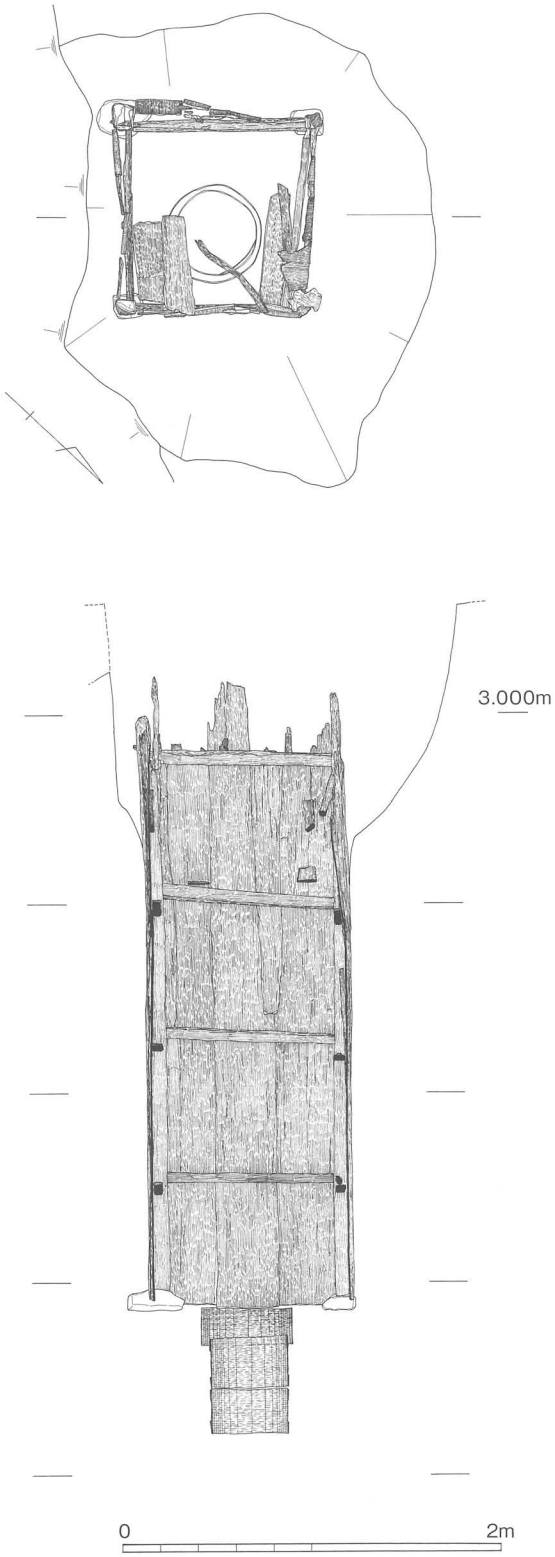


図10　SE301平面・断面図

15～18は隅柱である。15が南西、16が北西、17が南東、18が北東のそれぞれ角に使用されていた。15、17はヒノキ、16はアカマツ、そして18はツブラジイを用いていた。

いずれも耐朽性に優れており、井戸構築材としての選択には妥当性がある。15～17は横断面が約10㎝角の角材で、長さ3.07～3.2m以上を測る。全面に手斧痕が確認される。これらは隣り合う２面について横桟の太枘を納める枘穴が縦に4段分穿たれている。18は直径約8.5㎝の丸太を２辺のみ加工した材で、長さ2.4m以上を測る。これには枘穴は見られない。

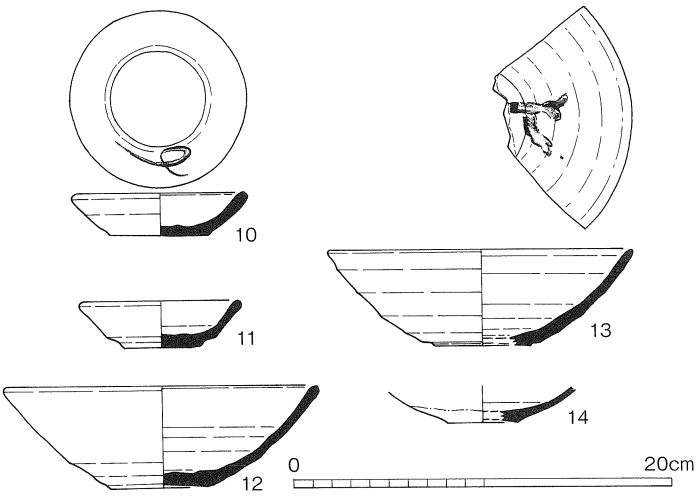


図11　SE301出土遺物実測図（1）

19～21は横桟である。４辺それぞれ４段分の計16本あるが、いずれも相似形を取るため、代表的に３点のみ図示した。いずれも全面手斧で加工された角材の両端に太枘を形成している。19は８㎝×4.5㎝の縦長長方形、20は５㎝×４㎝のほぼ正方形断面である。21は6.5㎝×4.5㎝のやや縦長の長方形断面を取る。またいわく当然の事であるが、いずれも有効内寸が85㎝内外になるよう加工されている。また21のみ隣り合う２面に枘穴が開けられている。別用途の部材を転用したものであろうか。

縦板材は４辺に密に立て並べられていた。その内22・23は南辺、24・25は東辺に使用されたものであり、幅24、５㎝に収斂され、規格性に富む。長さは上端を欠損するため不明であるが、最長３mに及ぶ。表面は材の芯材に近い面は全面、特に両側端を重点的に調整している。一方、辺材面では中央部のみの調整であり、両側は割りっ放しである。これは楔を用いた割り製材によって得られた、断面弧状の板材を用いたことに由来する特徴といえる。

26～28は井戸底に据えられていた曲物で、いずれもヒノキ材が使用されている。法量は26が直径56㎝、高さ19㎝、27は直径50㎝、高さ25㎝、28は直径46㎝、高さ23㎝を測る。綴じにはいずれも樺皮が使用されている。また27、28には副板、箍が用いられ、堅固に仕上げられている。28の箍は図上では中位にあるが、これは現状であり、本来は上端を締めていたものと推測される。

29、30は井戸内よりの出土品である。29は曲物で、直径9.8㎝、高さ7.6㎝を測る。底板を伴う容器として使用されており、側板はヒノキ製、底板は厚さ約７㎜のこれもヒノキ製である。綴じは樺皮による。底板を固定する目釘は３箇所確認できるとともに目釘孔が1箇所見え、４箇所以上で固定されていたようである。

30はスギ製の円形板残欠である。厚さ９㎜、復元径約14㎝を測る。端2箇所に直径約1.1㎝の円形穿孔があり、うち一箇所にはネズコで作られた木栓状の円筒形の材が嵌っているため、桶容器の蓋のようなものではないかと考えられる。

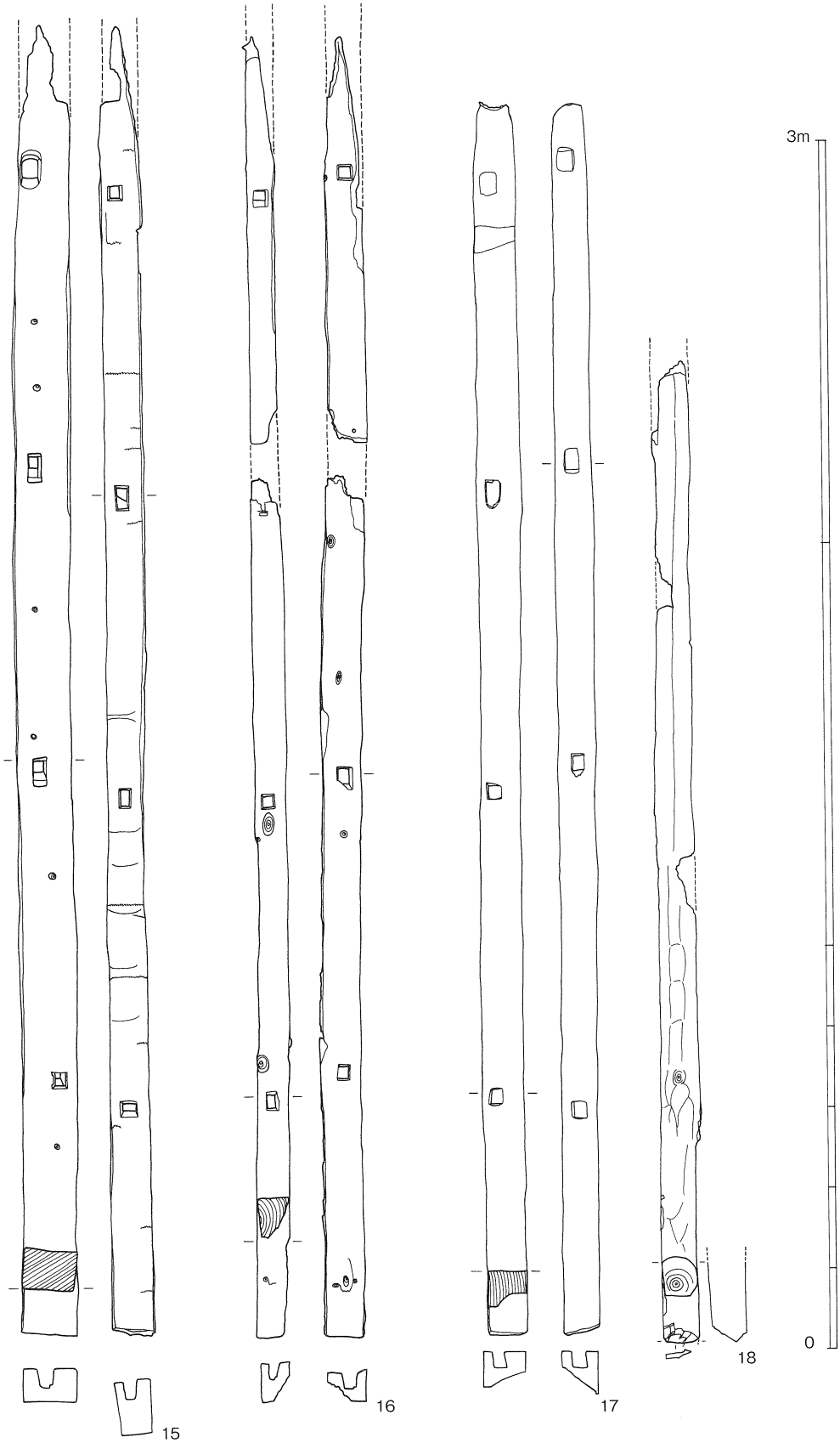


図12　SE301出土遺物実測図（2）

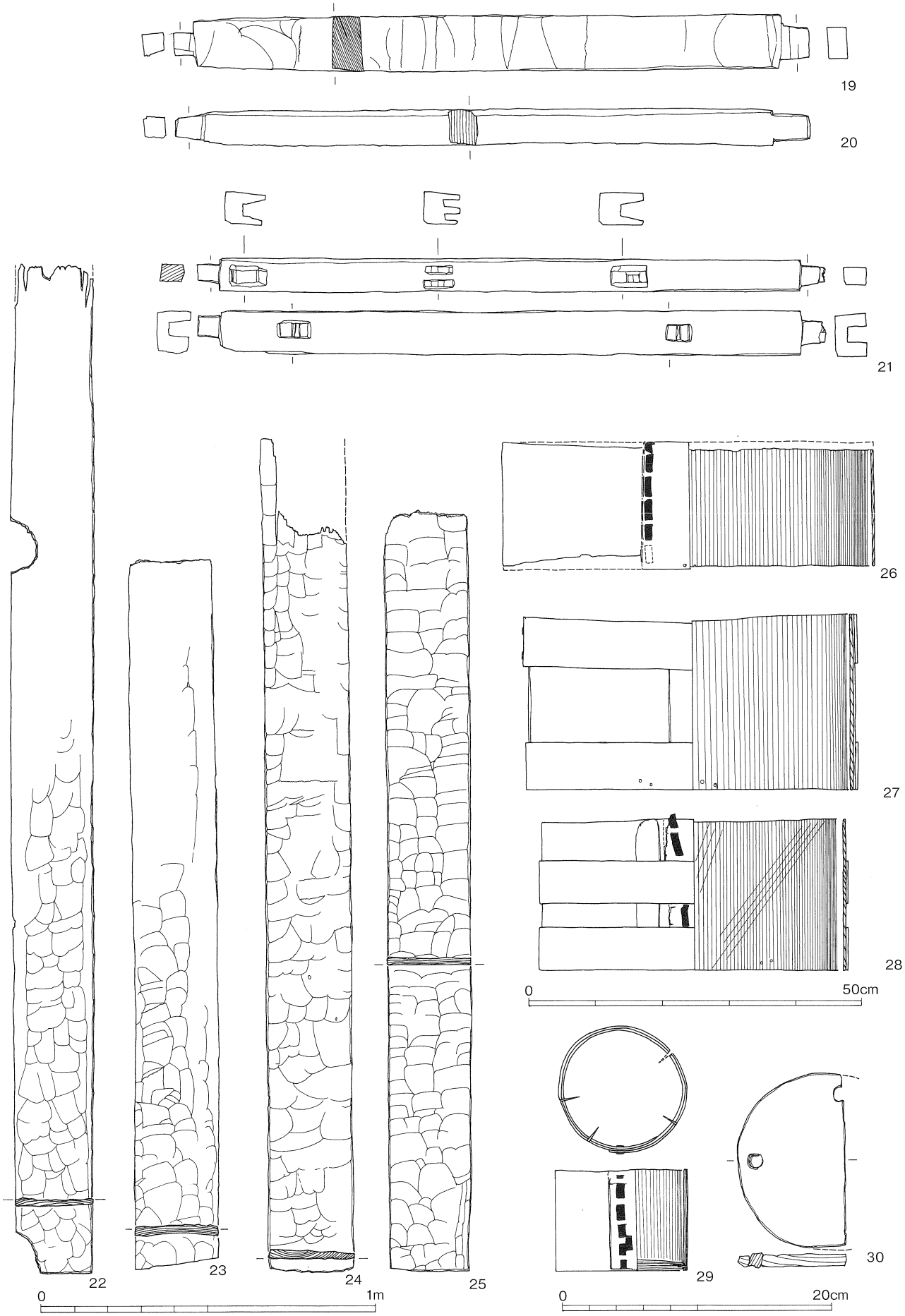


図13　SE301出土遺物実測図（3）

SE302　西半部が従前建物の基礎で破壊されているが、復元すると直径約1.6mの円形の掘形を呈する井戸である。内部にはごく少量の中世のものと考えられる土器の小破片と井戸枠と推定される木材片が出土している。

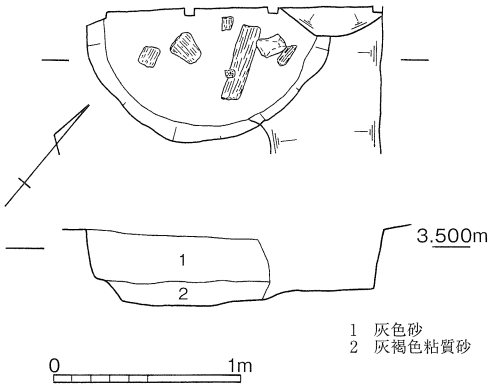


図14　SE302平面・断面図

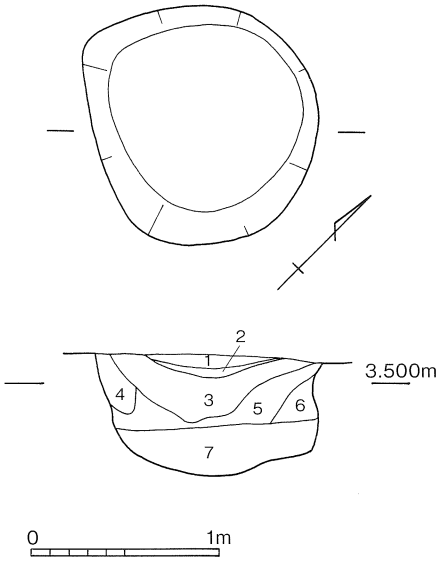
SE303　中世の耕作土上面で検出した井戸で、直径約1.7mの円形の掘形を呈する。検出面からの深さは、約1.0mを測る。内部より中世のものと考えられる土器の小破片が出土しているが、図示できるものはない。

（4）土坑

SK301　直径 1.2 m、深さ 0.65 mの円形の土坑である。掘形内から曲物、木枠等は出土していないが、比較的湧水が認められるので井戸の可能性も考えられる。

SK302　長径1.0m、短径0.7m、深さ0.35mの楕円形の土坑である。遺物は出土していない。

SK303　長径0.7m、短径0.45m、深さ0.15mの楕円形の土坑である。遺物は出土していない。



1　暗黄灰色粘質土
2　淡黒褐色粘質土
3　暗灰褐色砂質シルト
4　暗灰褐色シルト（暗黄灰色粘質土小塊含む）
5　暗灰褐色シルト（暗黄灰色粘質土小塊含む）
6　暗褐色粘質土（暗黄灰色粘質土小塊含む）
7　暗褐色粘質土（暗黄灰色粘質土小塊含む、6層よりやや暗い）

図15　SK301平面・断面図

（5）木棺墓

ST301　長さ約2.6m、幅約0.85mの規模の掘形が長方形の木棺墓で、中央部は撹乱により破壊されている。木棺の木質は腐食により遺存していないが、土層の違いにより木棺の痕跡を確認した。木棺の規模は、長さ2.3m、幅0.6m、深さは検出面より0.1mであり、後世の耕作により遺構面が著しく削平を受けていると考えられる。出土遺物は棺内、掘形ともに少量の小破片で図示できるものはない。

（6）ピット

SP301　直径0.15m、深さ0.15mの小規模な円形のピットである。

SP302　　直径0.8m、深さ0.8mの円形のピットである。

図18の31はSP301出土の土師器小皿で、口径10.0cm、器高1.5cmである。12～13世紀のものと思われる[3]。同32はSP302出土の東播系須恵器埦で口径17.6cm、器高4.7cmである。12世紀末～13世紀のものと考えられる。

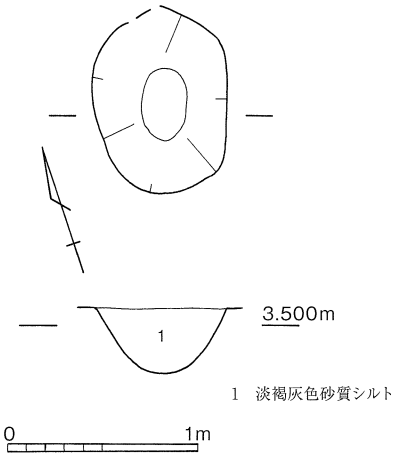


図16　SK302平面・断面図

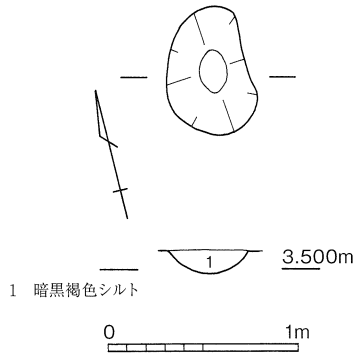


図17　SK303平面・断面図

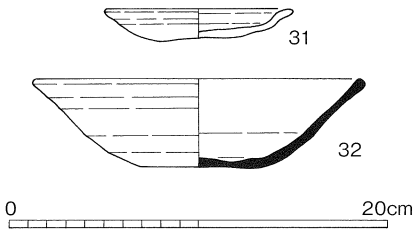


図18　SP301・302出土遺物実測図

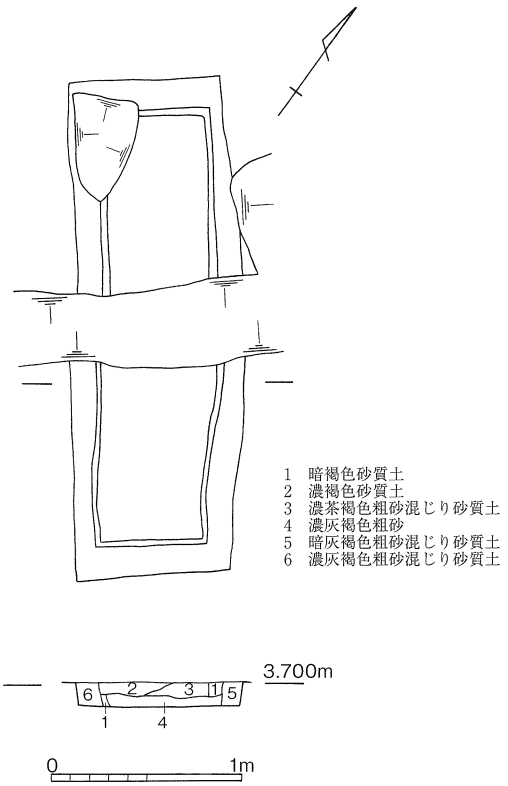


図19　ST301平面・断面図

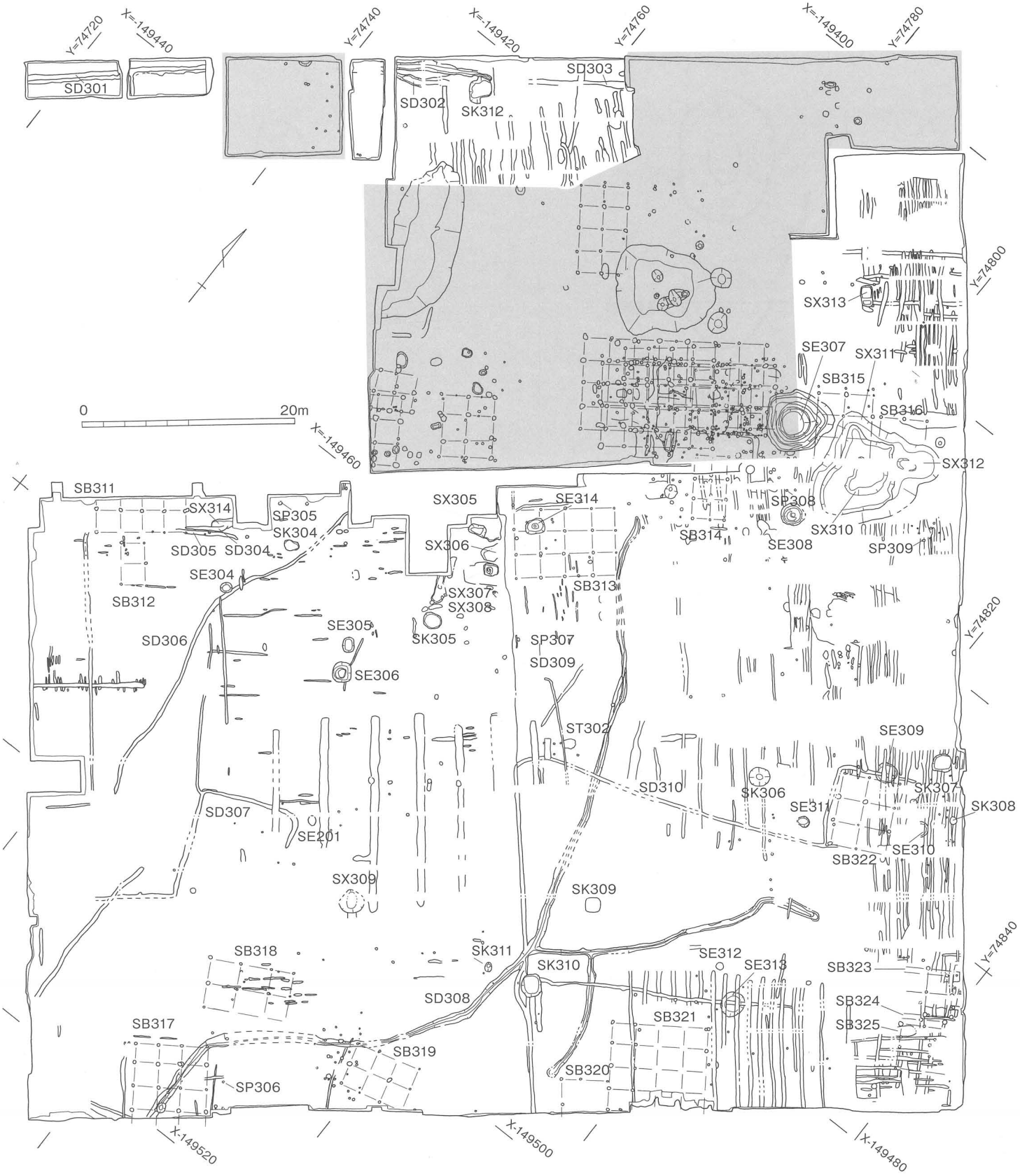


図20　久保町６丁目　遺構平面図

久保町６丁目では、掘立柱建物15棟、井戸12基、土坑９基、墓１基、不明遺構10基、ピット、溝、鋤溝多数を検出した。

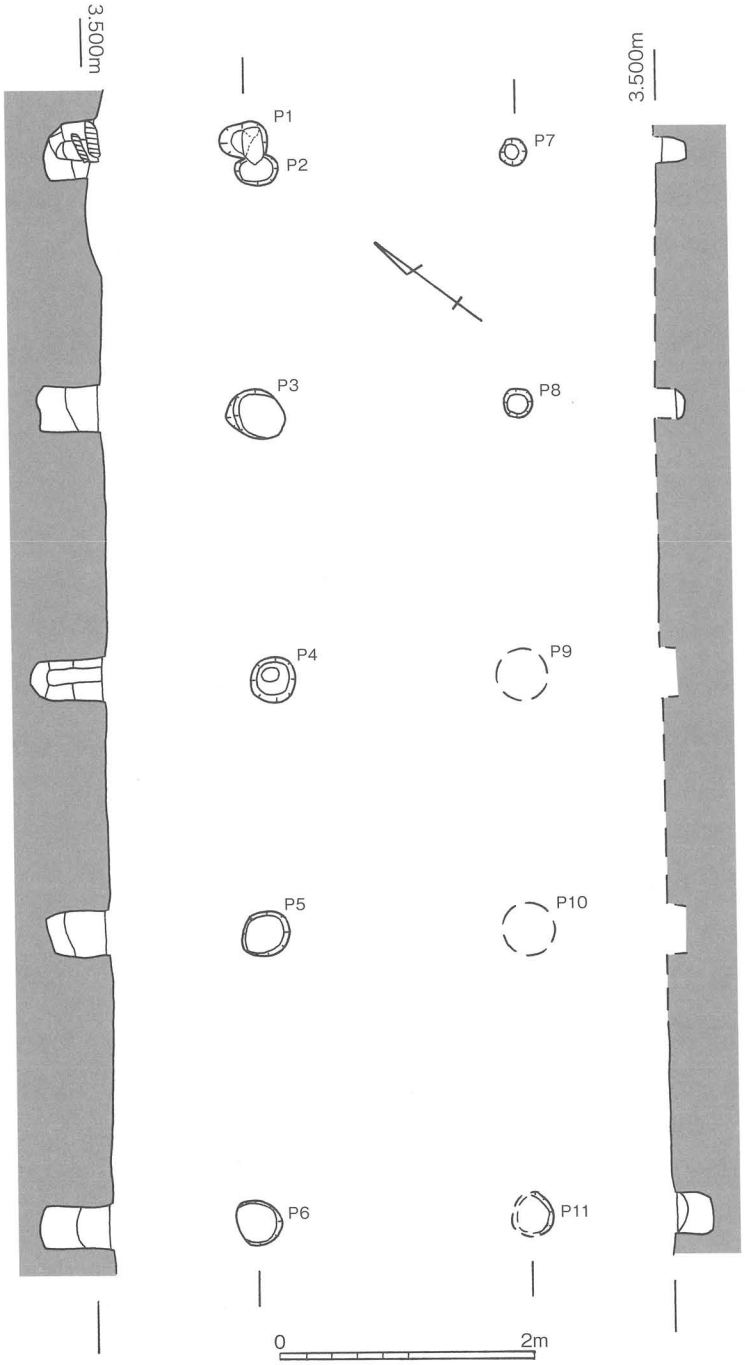


図21　SB311平面・断面図

（1）掘立柱建物

SB311　　東西４間（8.4m）、南北１間（2.1m）以上の掘立柱建物である。北側の調査区外に延びるものと考えられる。柱間は東西方向のＰ１～Ｐ３～Ｐ４～Ｐ５～Ｐ６が2.1m、2.1m、2.0m、2.25m、南北方向のＰ６～Ｐ11が2.1mである。柱穴の掘形は直径0.2～0.4m程度の円形であり、柱痕が確認できるものもある。

図22はSB311の柱穴内から出土したものである。33～35はＰ１、36・37はＰ13から検出された。33は土師器小皿で底径5.6cmである。34～37は東播系須恵器椀である。34は底径5.4cm、35は口径15.6cm、器高4.8cmである。34・35は12世紀中頃のものと考えられる。36は口径15.8cm、37は口径14.6cmである。両者の口縁部角度が前者に比べ深く時期を確定することができないが、小片でもあり34・35とほぼ同時期と考えておく。

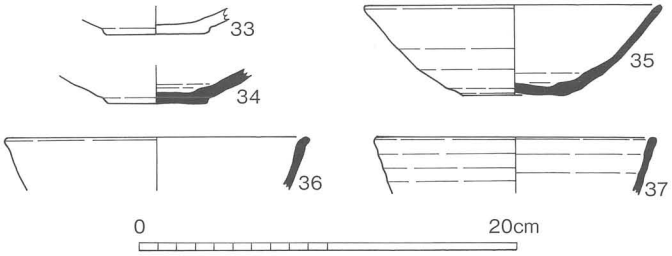


図22　SB311出土遺物実測図

SB312

SB311の南に隣接した場所で検出した東西１間（2.35ｍ）、南北２間（4.0ｍ）の掘立柱建物である。柱間は東西方向のＰ３～Ｐ６が2.35ｍ、南北方向のＰ４～Ｐ５～Ｐ６が1.9ｍ、2.1ｍである。柱穴の掘形は直径0.2～0.3ｍ程度の円形である。SB311に隣接しているためSB311の附属屋と考えられる。

柱穴Ｐ６から土師器の小破片が出土しているが、細片のため時期は不明である。

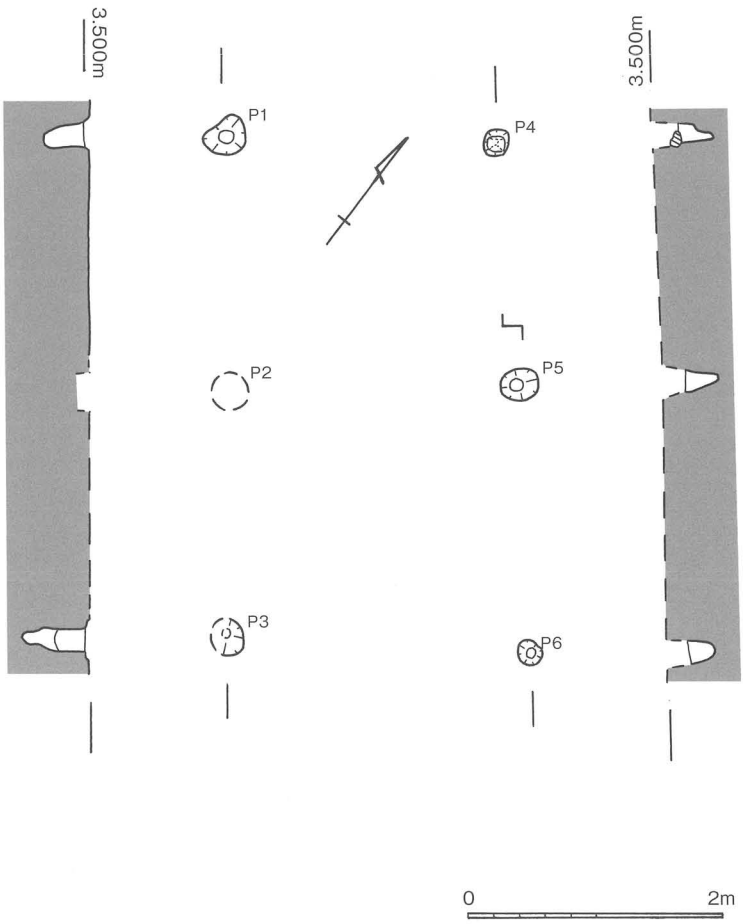


図23　SB312平面・断面図

SB313

東西４間（9.4m）、南北３間（6.2m）の総柱の掘立柱建物である。柱穴の１基はSE314によって破壊されている。柱間は東西方向のＰ11～Ｐ12～Ｐ13～Ｐ14～Ｐ15が2.1m、2.75m、2.2m、2.35m、南北方向のＰ２～Ｐ７～Ｐ12～Ｐ17が1.95m、2.1m、2.15ｍである。柱穴の掘形は直径0.2～0.3mの円形である。建物の北側に幅0.2～0.3mの東

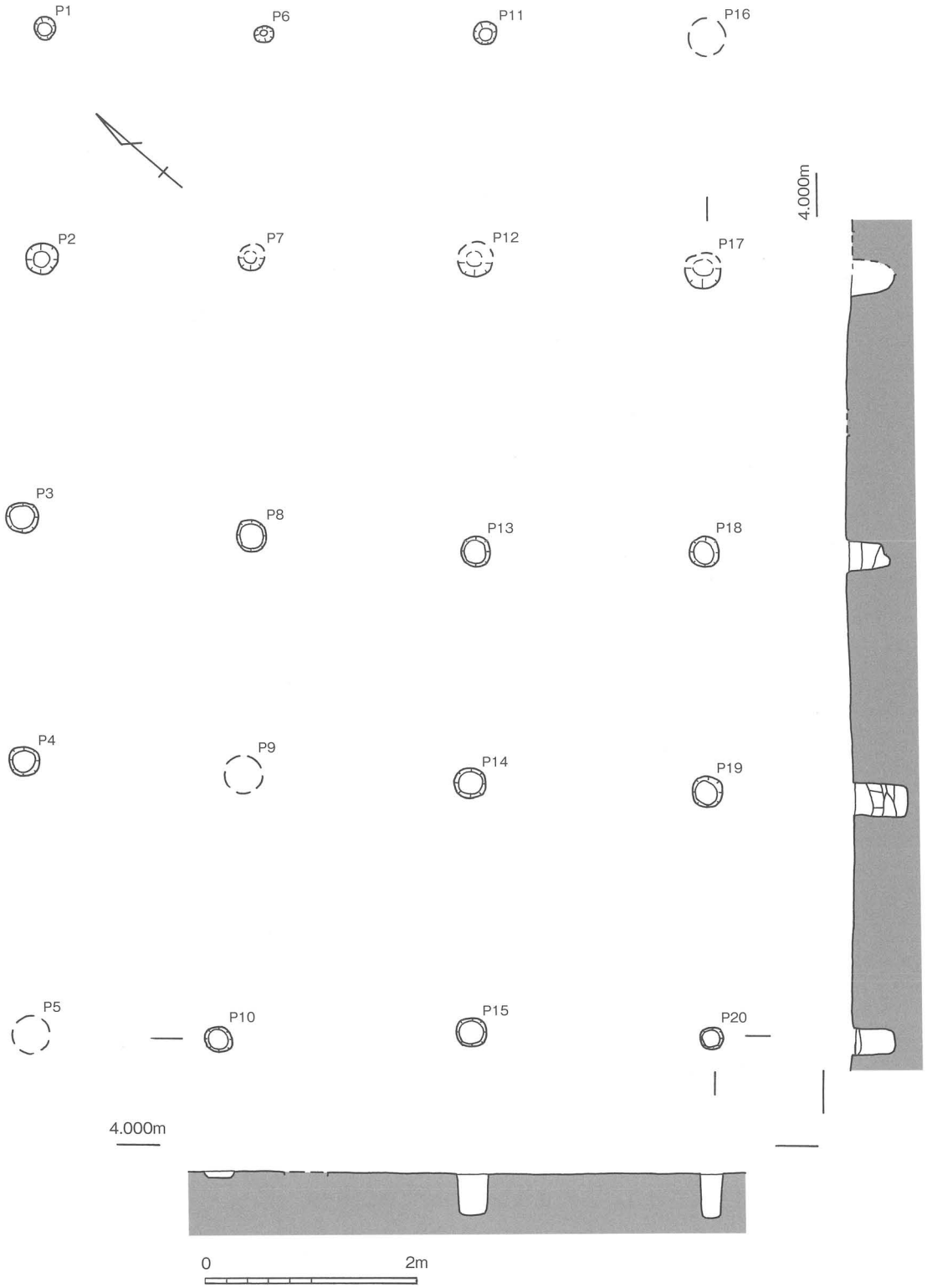


図24　SB313平面・断面図

西方向の雨落ち溝が伴う。

図25の38はSB313の北側溝から出土した土師器小皿で、口径8.6cm、器高2.1cmを測る。底部外面に糸切り痕を残す。12世紀中頃のものと思われる。

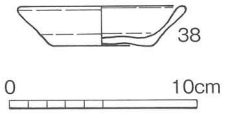


図25　SB313北溝出土遺物実測図

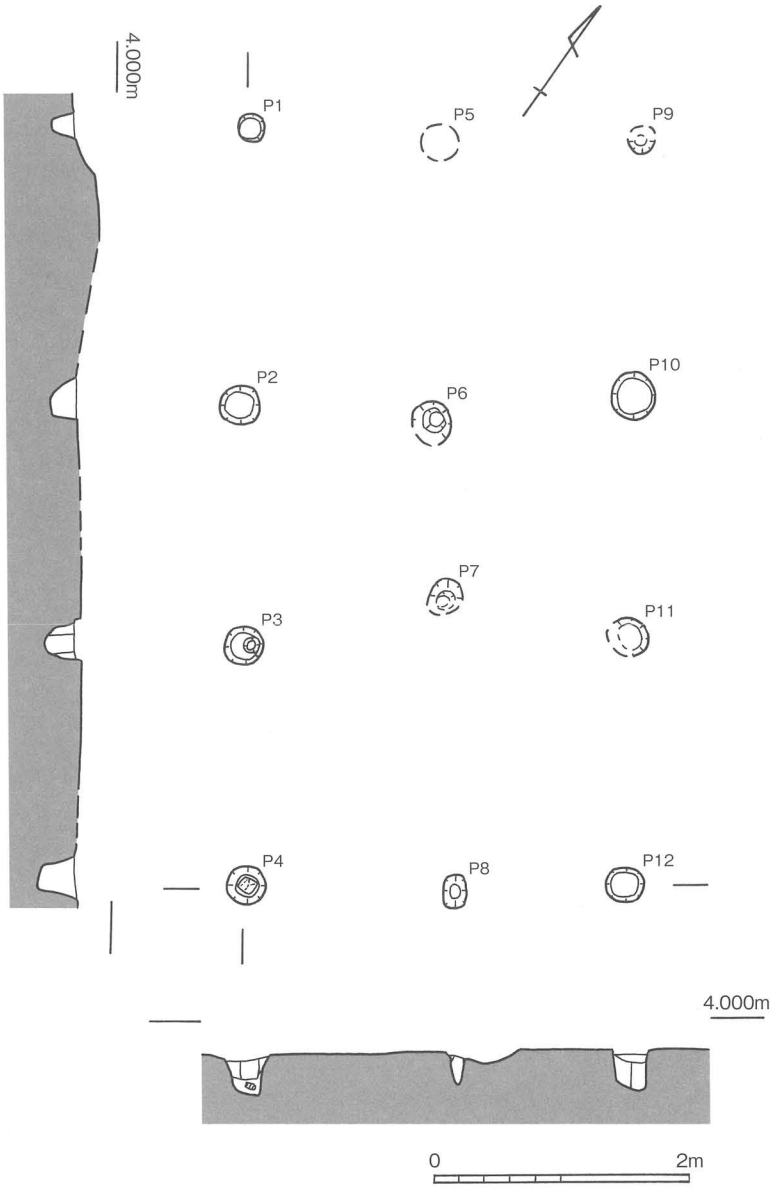


図26　SB314平面・断面図

SB314

平成12年度に実施した第12次調査の南側に隣接する場所で、その際掘立柱建物６棟と多数の柱穴が検出されており、この建物はその時に検出された柱穴と整合した結果、東西２間（3.0m）、南北３間（6.0m）の総柱の掘立柱建物と判明した。柱間は東西方向のＰ４～Ｐ８～Ｐ12が1.65m、1.35m、南北方向のＰ１～Ｐ２～Ｐ３～Ｐ４が2.2m、1.9m、1.9mである。柱穴の掘形は直径0.2～0.3mの円形で、根石を持つものや埋土に須恵器の椀を含むものがある。

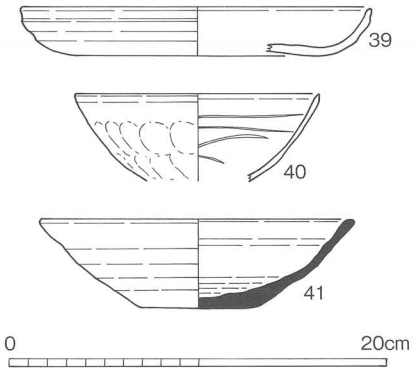


図27　SB314出土遺物実測図

図27の39～41はSB314の柱穴内から出土したものである。39は口径18.7㎝、器高1.6

cmの土師器皿で12世紀後半から13世紀のもの。40は瓦器埦で口径13.0cm。小片のため口径など不確実であるが13世紀代と思われる[4]。41は東播系須恵器埦で口径16.4cm、器高4.7cm、12世紀後半と考えられる。

SB315

大半がSE307とSX310～312により消滅しているが東西２間(5.2m)、南北３間(6.4m)以上の建物に復元できる。柱間は東西方向のＰ１～Ｐ５～Ｐ９が2.6m、2.6m、南北方向のＰ９～Ｐ10が2.05mである。柱穴の掘形は直径0.2～0.4mの円形である。遺物は出土していないため、時期は不明である。

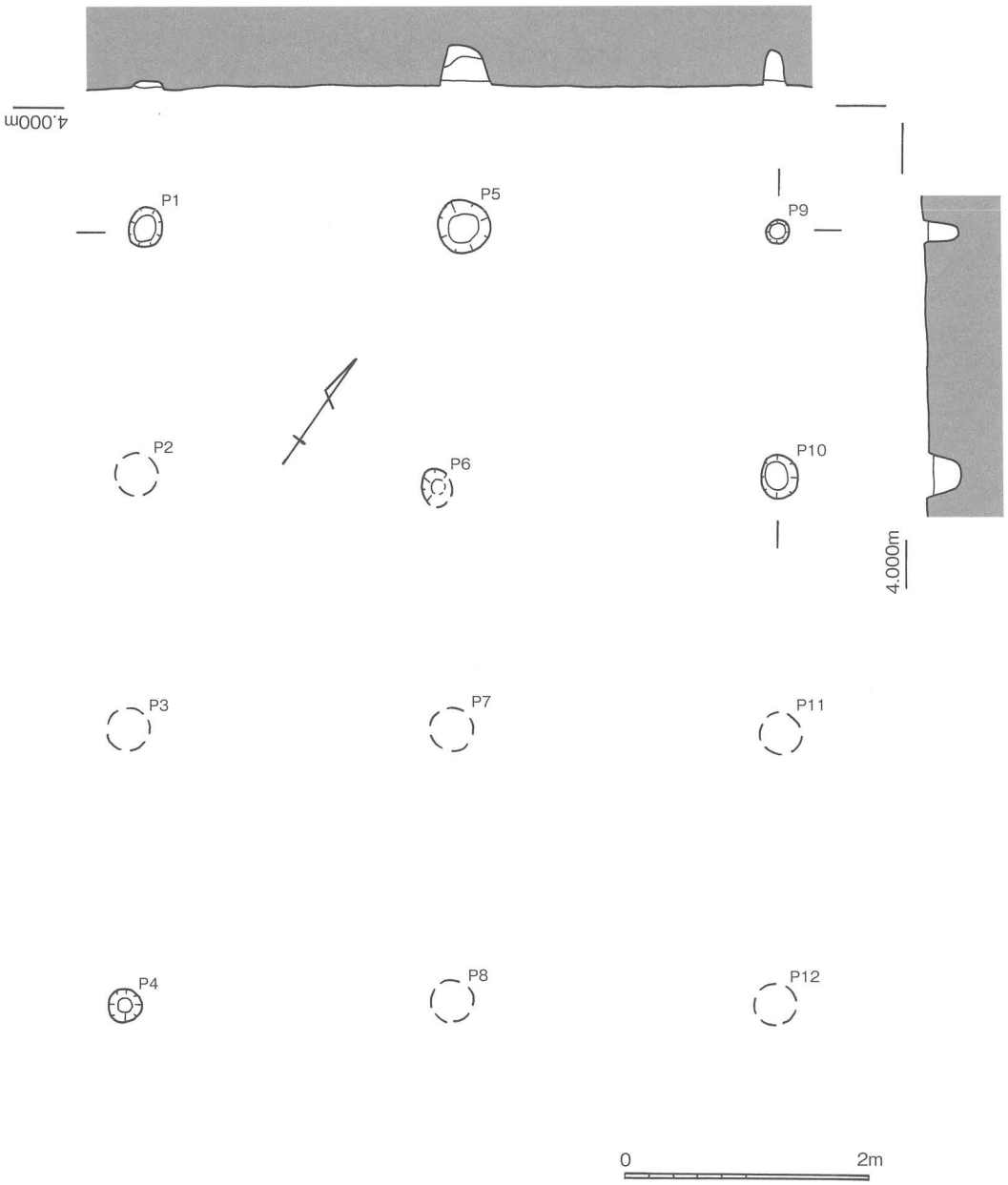


図28　SB315平面・断面図

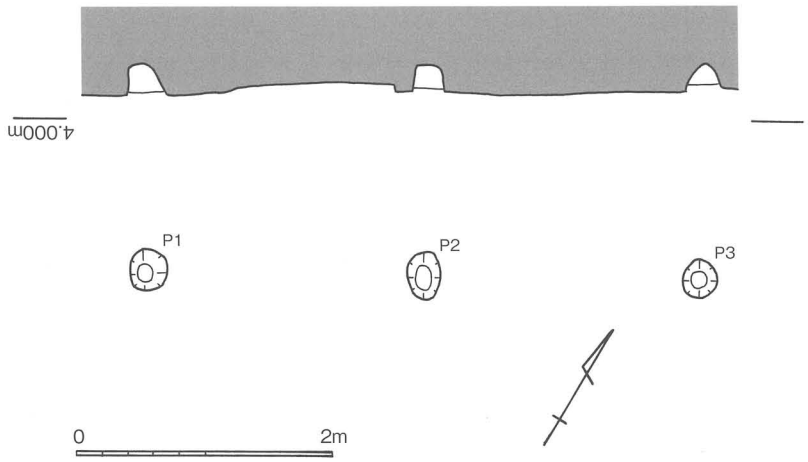


図29　SB316平面・断面図

SB316　大半がSX310～312により消滅しているが、北辺の２間分を検出した。柱間はＰ１～Ｐ２～Ｐ３が2.15m、2.15mである。柱穴の掘形は直径0.3mである。遺物は出土していないので時期は不明である。

SB317　東西３間（6.7m）以上、南北３間（6.2m）以上の総柱の建物で、北及び西側に幅約0.1～0.4m、深さ約0.05～0.15mの雨落ち溝が伴う。柱間は、東西方向のＰ１～Ｐ２～Ｐ３～Ｐ４が2.1m、2.2m、2.4m、南北方向のP1～Ｐ５～Ｐ９～P13が1.8m、2.1m、2.3mである。柱穴は、掘形が直径0.25～0.4mで、ほぼ全てが深さ0.4～0.5mあり、0.7mに及ぶものもある。柱穴内の柱痕部から須恵器埦、土師器皿が出土している。

図31の42～45はSB317の柱穴から出土したものである。42・43はＰ８から、44はＰ３、45はＰ７から検出された。42は土師器小皿で口径9.8cm、器高1.8cmである。底部外面に糸切り痕がある。43は東播系須恵器埦で口径15.4cm、器高5.8cmで体部外面中央に沈線が一条巡る。44・45も東播系須恵器埦で前者は口径13.4cm、後者は底径5.7cmである。42～45は11世紀末頃のものと考えられる。

SB318　東西３間（7.95m）、南北２間（4.6m）の総柱の建物で、柱間は東西方向のＰ１～Ｐ２～Ｐ３～Ｐ４が2.1m、2.9m、2.9m、南北方向のＰ４～Ｐ８～Ｐ９が2.4m、2.2mである。柱穴は掘形が直径0.2～0.4mの円形である。

図33の46・47はSB318の柱穴から出土した東播系須恵器埦で、46はＰ６、47はＰ４出土である。46は口径15.0cm、器高5.6cm、47は口径16.4cm、器高5.6cmである。46にやや古い形態が残るが、両者とも12世紀初頭頃のものと考えられる。

SB319　東西３間（6.1m）、南北２間（4.1m）の総柱の建物である。柱間は東西方向のＰ１～Ｐ２が2.0m、P10～P11が2.1m、Ｐ７～Ｐ８が2.1m、南北方向のＰ１～Ｐ５～Ｐ９が2.1m、2.0mである。柱穴の掘形は直径0.2～0.4mの円形で、深さは殆どが0.4～0.6mを測り、柱痕が確認できるものもある。

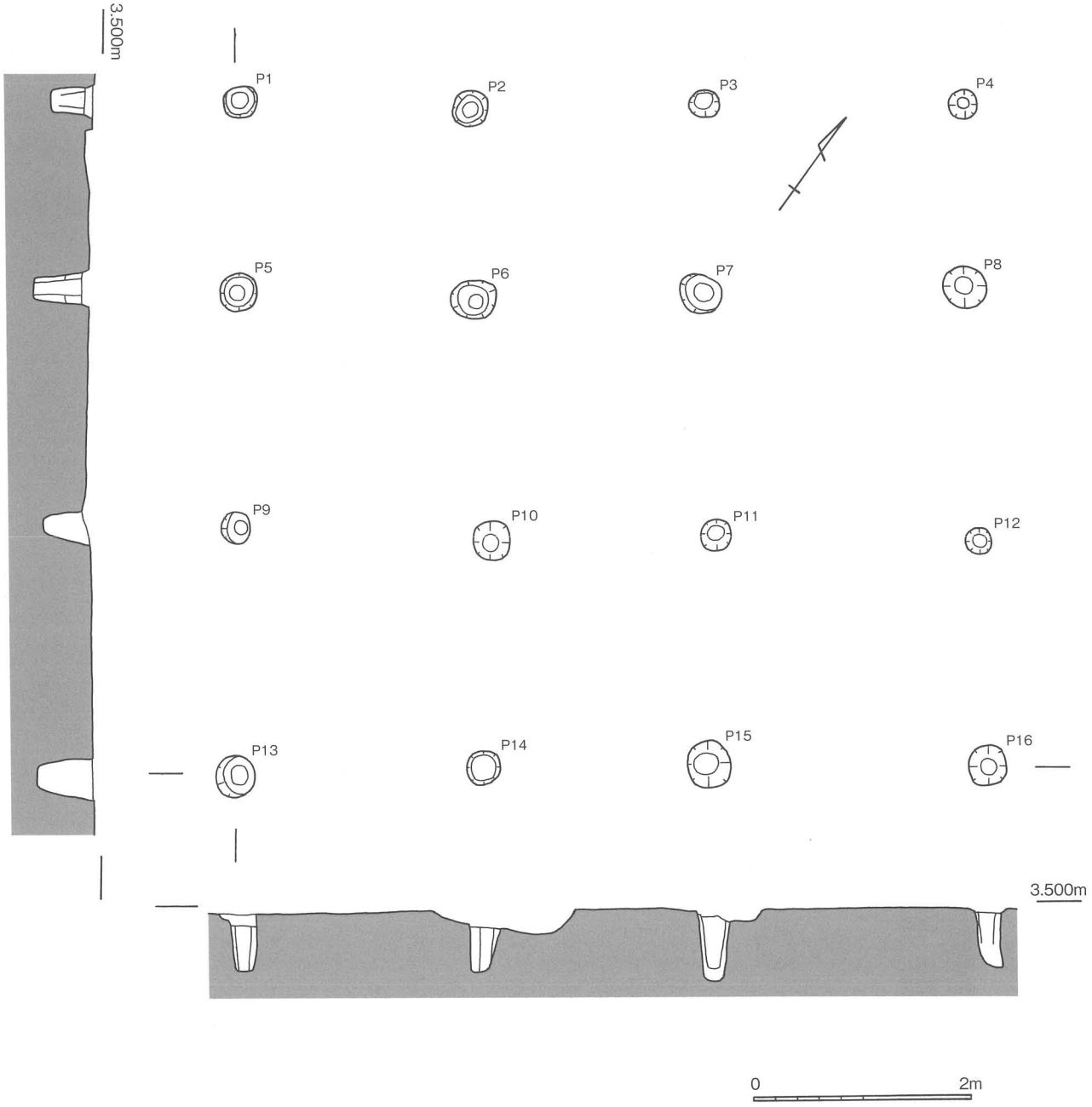


図30　SB317平面・断面図

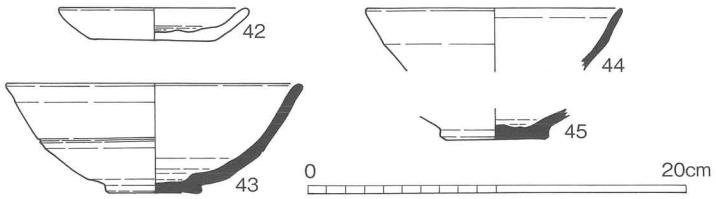


図31　SB317出土遺物実測図

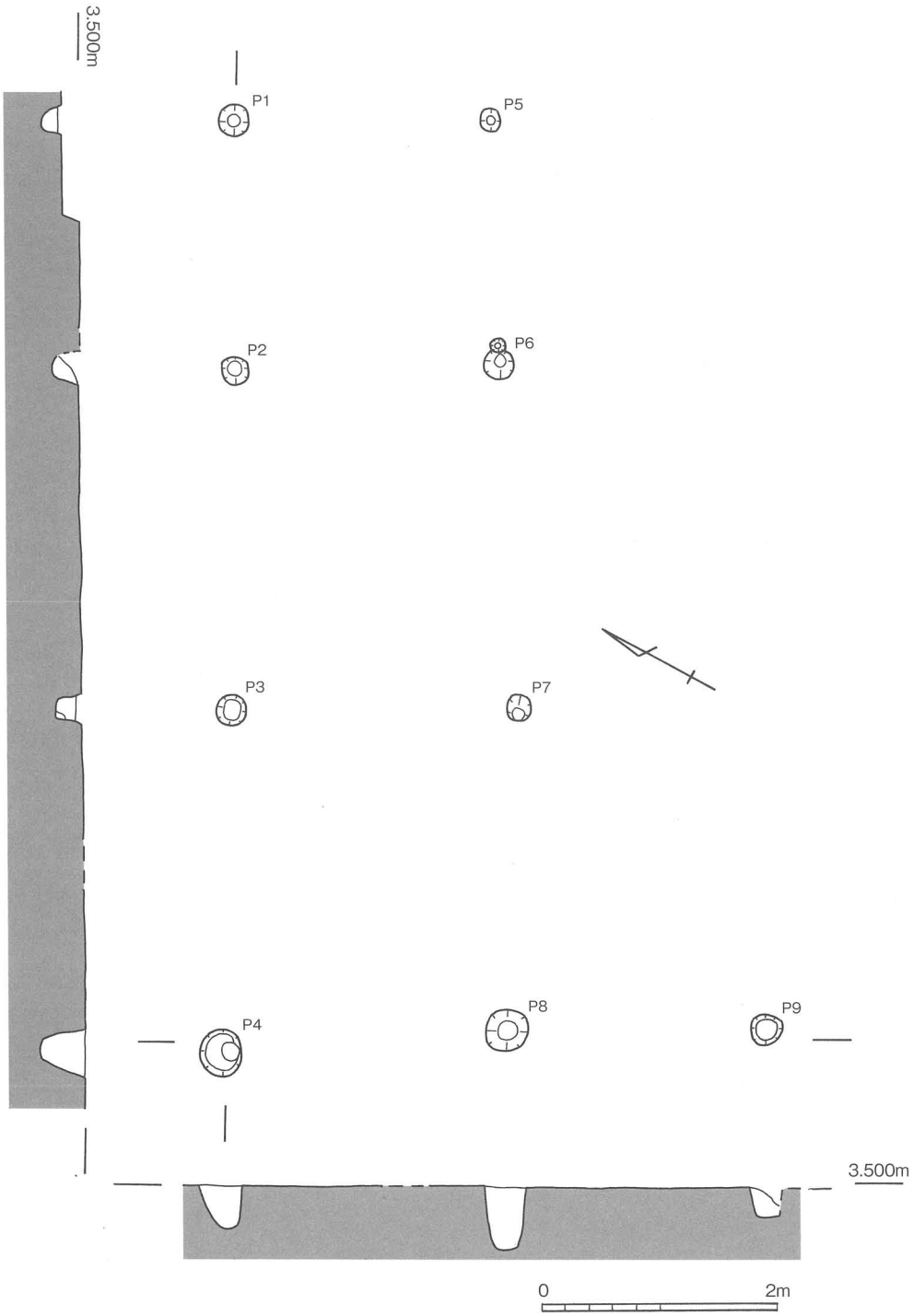


図32　SB318平面・断面図

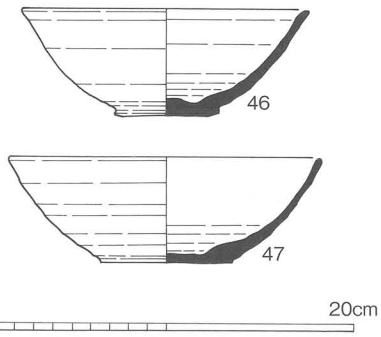


図33　SB318出土遺物実測図

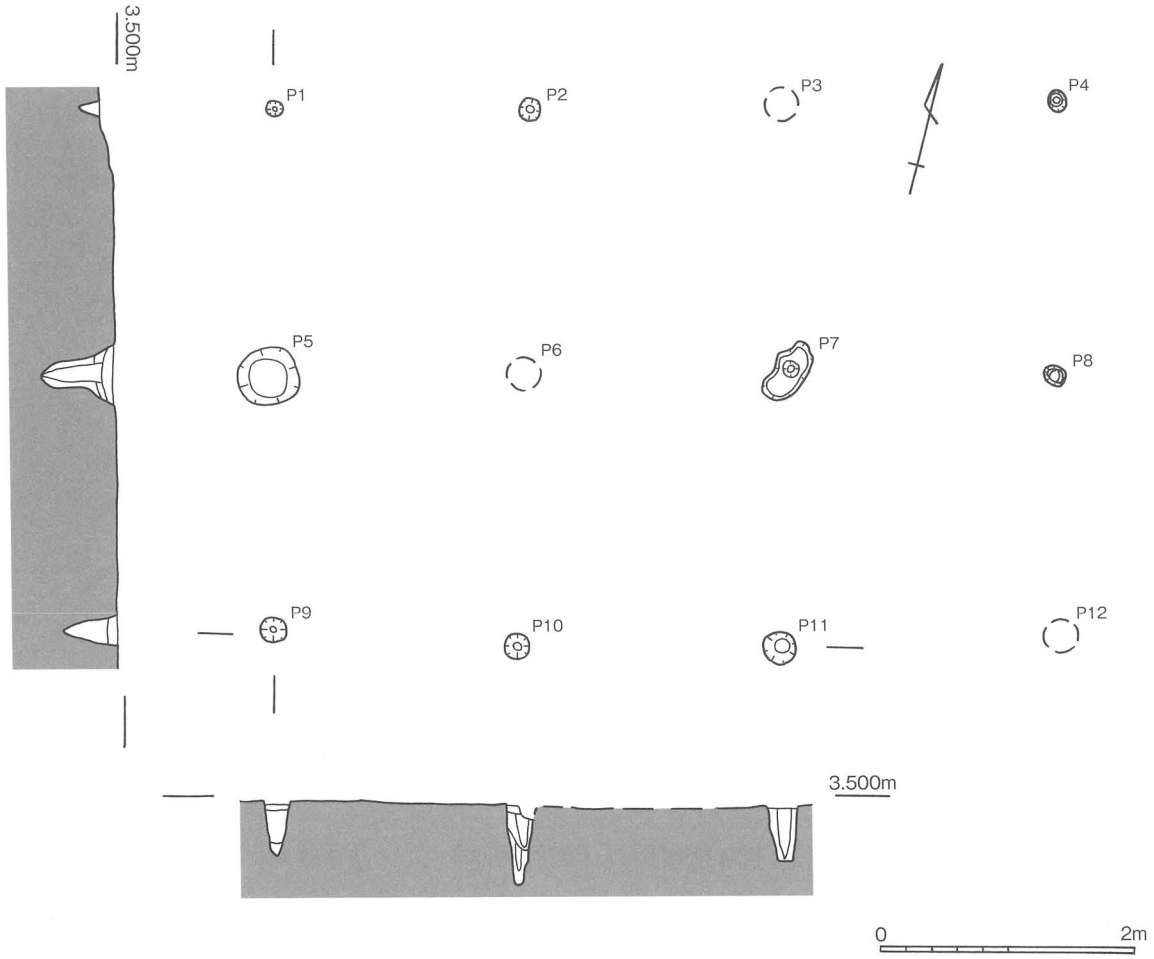


図34　SB319平面・断面図

図35の48はSB319の柱穴Ｐ４から出土した土師器小皿である。口径9.0㎝、器高約1.5㎝を測る。時期については確定できない。

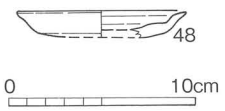


図35　SB319出土遺物実測図

SB320

南東西２間（4.35m）以上、南北１間（2.4m）以上の建物である。南の調査区外へ延びるものと思われる。東は従前建物の基礎で破壊されており規模は不明である。柱間は東西方向のＰ１～Ｐ２～Ｐ３が、1.8m、2.55m、南北方向のＰ１～Ｐ４が2.4mである。柱穴の掘形は0.20～0.25mである。図示できるような遺物は出土していないので時期は不明である。

SB321

従前建物の基礎によりかなり破壊されているが、東西４間（8.9m）以上、南北４間（8.3m）以上の総柱の掘立柱建物に復元できる。柱間は東西方向のＰ17～Ｐ22が2.0m、南北方向のＰ22～Ｐ23～Ｐ24～Ｐ25～Ｐ26が、2.0m、2.2m、2.1m、2.0mである。柱穴の掘形は直径0.2～0.3mの円形で、内部に根石を据えてあるものや柱痕が確認できるものもある。

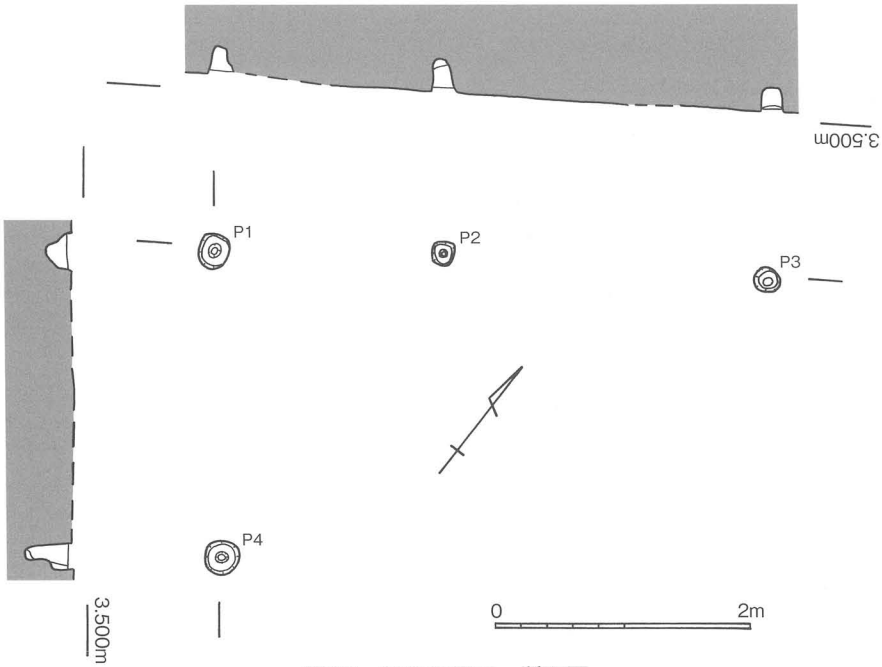


図36　SB320平面・断面図

図38の49はSB321の柱穴Ｐ19から出土した東播系須恵器埦で、口径15.6㎝、器高5.7㎝、12世紀初め頃のものと考えられる。

SB322　東西２間（5.3m）、南北３間（6.8m）の総柱の建物で、北及び西側に幅約0.3m、深さ約0.05～0.15mの雨落ち溝が伴う。柱間は東西方向のＰ１～Ｐ５～Ｐ９が2.4m、2.9m、南北方向のＰ１～Ｐ２～Ｐ３～Ｐ４が2.3m、2.2m、2.3mである。柱穴の掘形は直径0.2～0.5mで、柱痕が確認できるものもある。図示できるような遺物は出土していないため、時期は不明である。

SB323　調査区の南東隅で３棟の建物が集中していた。このあたりは、従前建物基礎及び地下室の撹乱が著しく、東と南は調査区外であるため正確な建物規模は不明である。SB323は東西１間（2.5m）以上、南北２間（4.4m）以上の建物で、柱間は東西方向のＰ３～Ｐ７が2.5m、南北方向のＰ１～Ｐ２～Ｐ３が、2.2m、2.2mである。柱穴の掘形は直径0.3～0.45mである。図示できるような遺物は出土していないので、時期は不明である。

SB324　SB323と重なるように検出した、東西１間（2.3m）以上、南北２間（4.3m）以上の建物である。東西方向の柱間はＰ２～Ｐ５で2.3mであるが、南北方向の柱間はＰ４が撹乱で消滅しているため不明である。柱穴の掘形は直径0.3～0.5mで、根石を据えているものもある。図示できるような遺物は出土していないので、時期は不明である。

SB325　SB324の南で検出した東西１間（2.1m）以上、南北２間（4.2m）以上の建物である。柱間は、東西がＰ１～Ｐ４で2.1m、南北がＰ１～Ｐ２～Ｐ３で2.2m、2.0mである。柱穴の掘形は0.2～0.3mである。

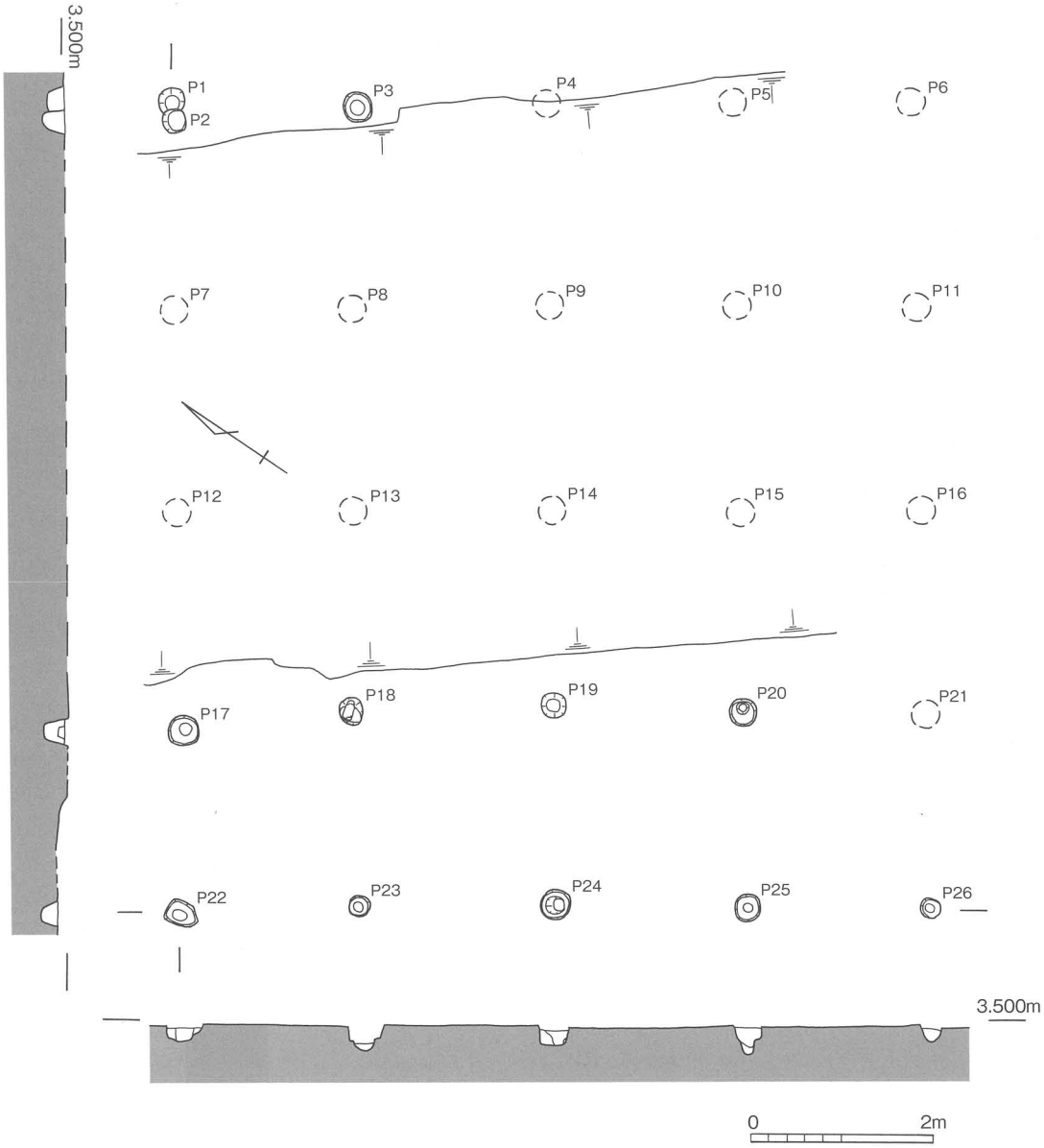


図37　SB321平面・断面図

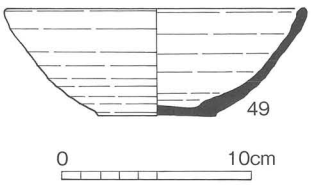


図38　SB321出土遺物実測図

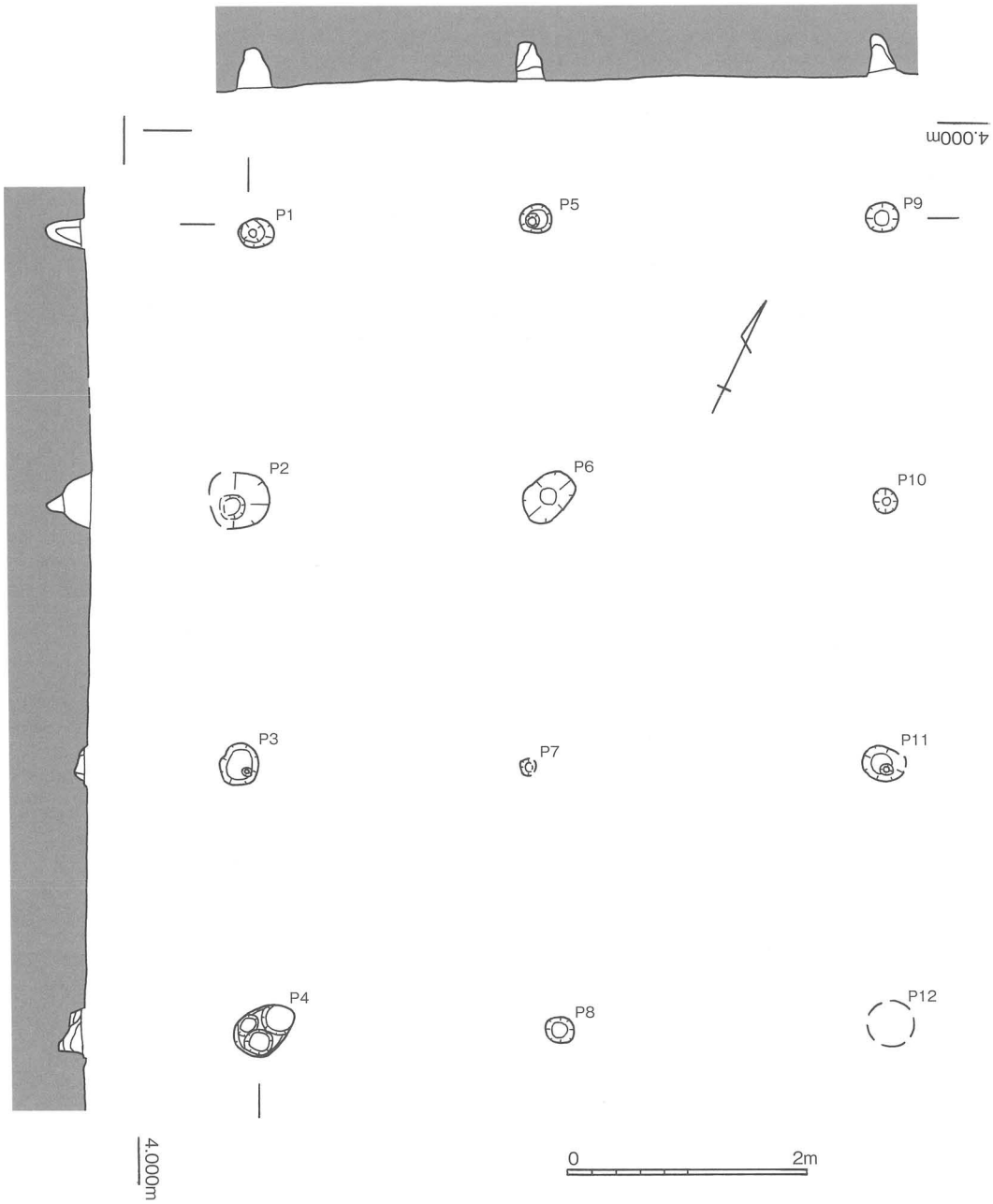


図39　SB322平面・断面図

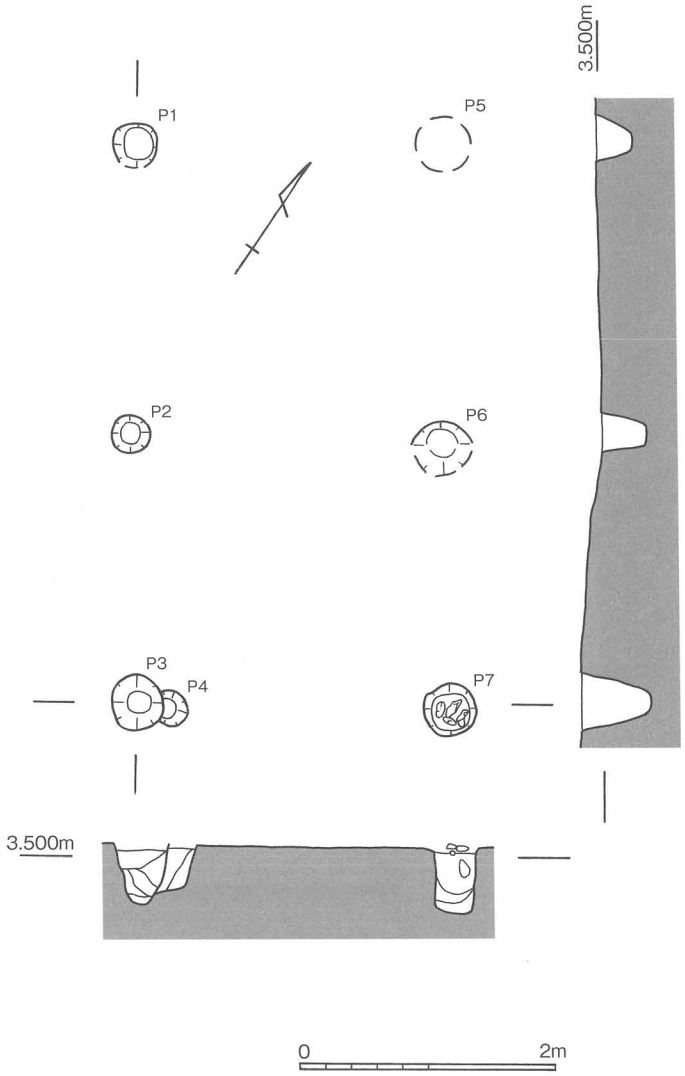


図40　SB323平面・断面図

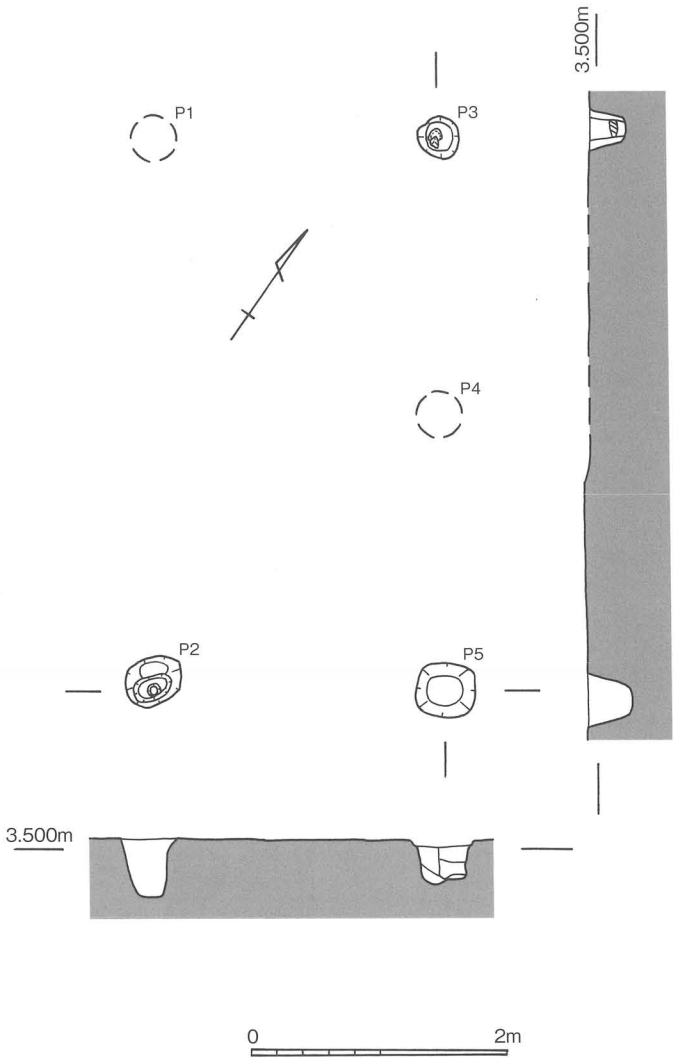


図41　SB324平面・断面図

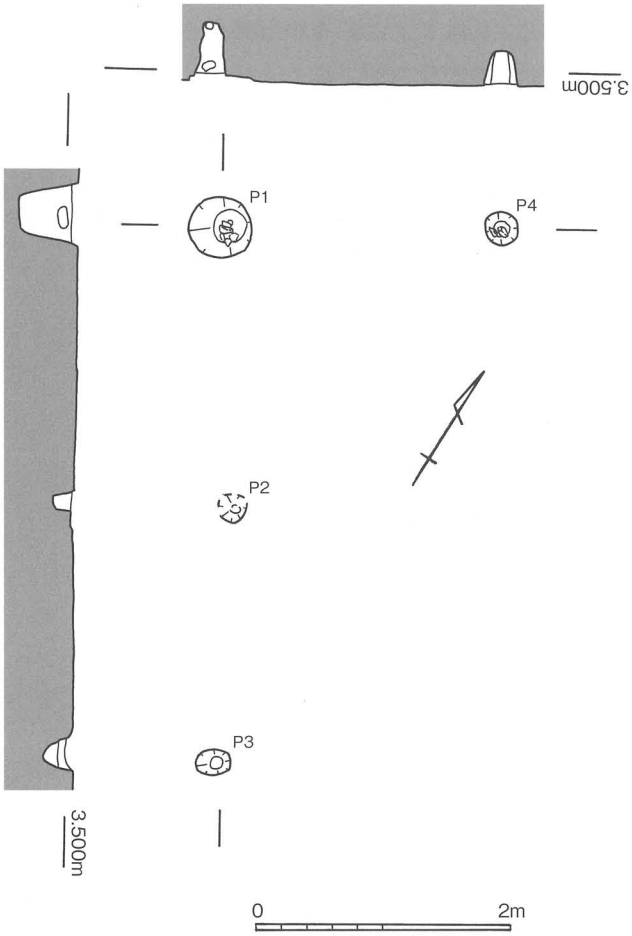


図42　SB325平面・断面図

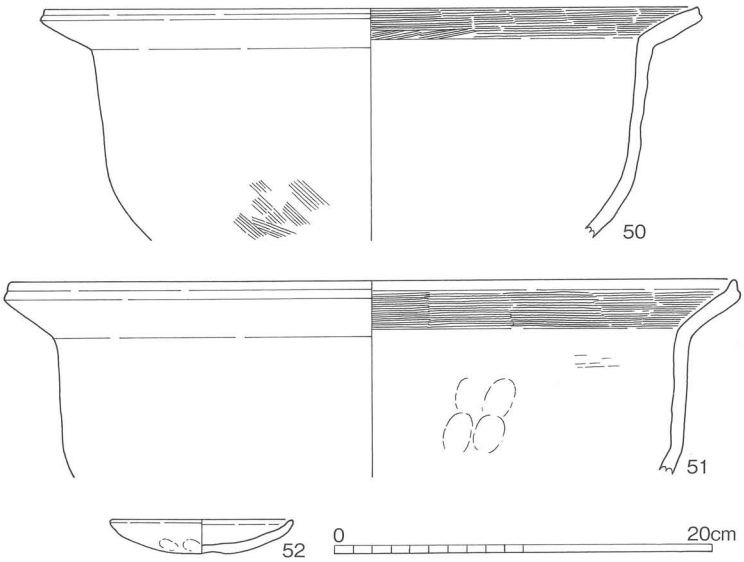


図43　SB325出土遺物実測図

図43はSB325の柱穴Ｐ１及びＰ４から出土した土師器である。50・51は鍋で50の外面には煤が付着する。50はＰ１とＰ４から検出された破片が接合した。口径34.4cmを測る。51は口径39.0cmで口縁端部を若干摘み上げる。52は小皿で口径9.7cm、器高1.8cmである。３者の時期は13世紀前半頃と思われる。

(2) 井戸

SE201

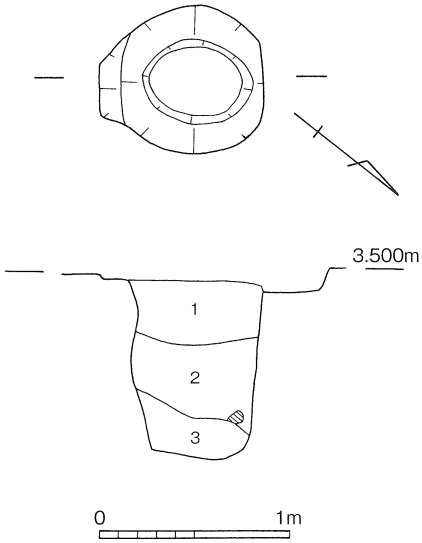
長径0.86m、短径0.78m、深さ0.99mのほぼ円形の掘形をもつ素掘りの井戸である。底に曲物を検出したが、遺存状態が悪く、取り上げることが出来なかった。

図45の53はSE201出土の黒色土器椀で内面のみに炭素を付着させるＡ類である。高台径7.0cm、10世紀代のものと思われる[5]。

SE304

直径約1.0mを測る円形の素掘りの井戸で、深さは0.95mである。

図47の54～56はSE304出土の遺物である。54は土師器小皿で口径8.8cm、器高1.5cm、55は口径13.8cmの瓦器椀である。56は東播系須恵器椀で口径17.4cmを測る。いずれも小片のため時期の確定は困難だが13世紀代と思われる。



1 暗灰色細砂混じりシルト(灰茶色細砂、淡灰色シルト含む)
2 淡灰茶色シルト質細砂～細砂(暗灰色シルト含む)
3 黒灰色シルト(灰色～灰黄色シルト～細砂含む)

図44 SE201平面・断面図

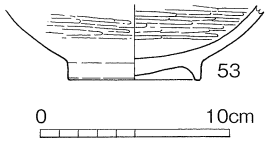
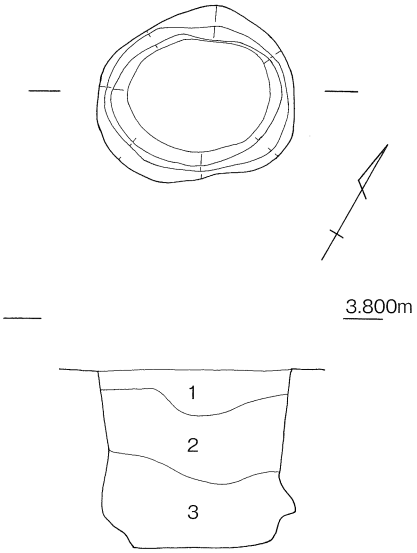


図45 SE201出土遺物実測図



1 灰黄色～灰茶色小礫混じりシルト質細砂
2 淡黄灰色細砂（灰茶色シルト質細砂を含む）
3 黒灰色シルト

図46 SE304平面・断面図

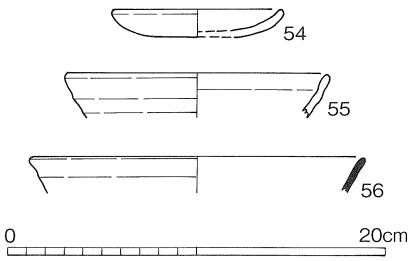


図47 SE304出土遺物実測図

SE305

長径1.4m、短径1.1mを測る楕円形の素掘りの井戸で、深さは0.7mである。底が湧水層である砂層に達しておらず、水溜の可能性がある。

図49の57はSE305出土の土師器皿で、口径11.7cm、器高3.1cmである。内外面をナデで仕上げる。13世紀以降のものと思われるが、確定できない。

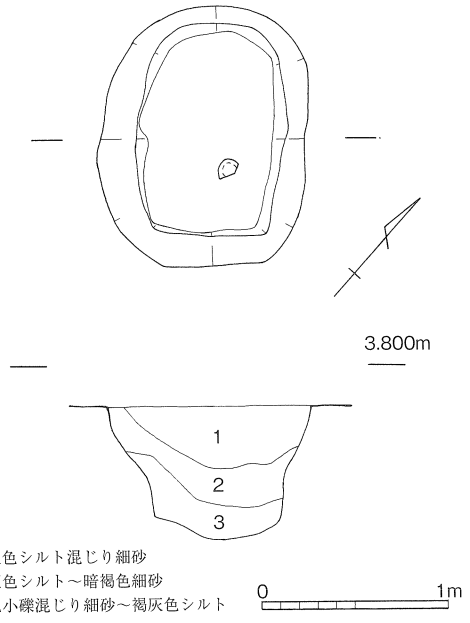


図48 SE305平面・断面図

SE306

SE305の南側で検出した井戸で、一辺約1.8mの隅円方形の掘形で、深さは1.4mである。

内部は2段掘りになっている。井戸枠や曲物等は出土していないため素掘りの井戸と考えられるが、内部が2段掘りになっていることから、本来曲物が設置されていたのが、抜き取られた可能性もある。埋土の状況から、比較的短期間に人為的に埋められていると考えられる。遺物としては、須恵器椀や土師器皿の小片とともに、底付近で木製の横槌が1点出土している。

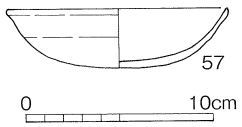


図49 SE305出土遺物実測図

図51の58・59はSE306出土遺物でいずれも東播系須恵器椀である。58は口径15.7cm、59は口径15.9cmである。小片のため時期を確定することが困難であるが、12世紀代のものと思われる。

図52の60は横槌であり、SE306の中より出土している。身と柄が一体整形であり、材にはイスノキを使用している。イスノキは光沢美があり、さまざまな器具に使用されることが多く、特に櫛として使用された例が目立つ。

法量は全長32cm、身は円筒形で、長さ19cm、直径9cmを測る。柄は長さ13cmで、円筒形を呈し柄尻付近でわずかに開く。身との接合部の直径は3.2cm、柄尻で4.6cmを測る。切削工具での調整痕が明瞭に残り、製作時からあまり使用せずに埋蔵されたようである。

SE307

第12次調査で遺構の西半部を調査し、2001年刊行の報告書に、不明大型土坑（SX303）として報告したものと同一遺構であるが、今回完掘した結果、近世の燻し瓦と共に桶が4段積み重なって出土した。検出面での掘形直径は、約6mである。検出面から約1.8m下に至るまでは、粘土層ごとに幅0.2m前後のテラスを設けて、階段状に掘り込んでいる。検出面より下1.8mから5mの間に4段分の桶が井戸側として設置されているが、最上段の桶は腐食が激しく、下端部が残存しているのみであった。このことから、さらに上部にも桶があった可能性が考えられる。

最下段の桶の下には一木を刳り貫いた円筒状の部材が存在しているが、崩壊の危険があったため、取り上げることは出来なかった。図示できるような遺物は出土していない。

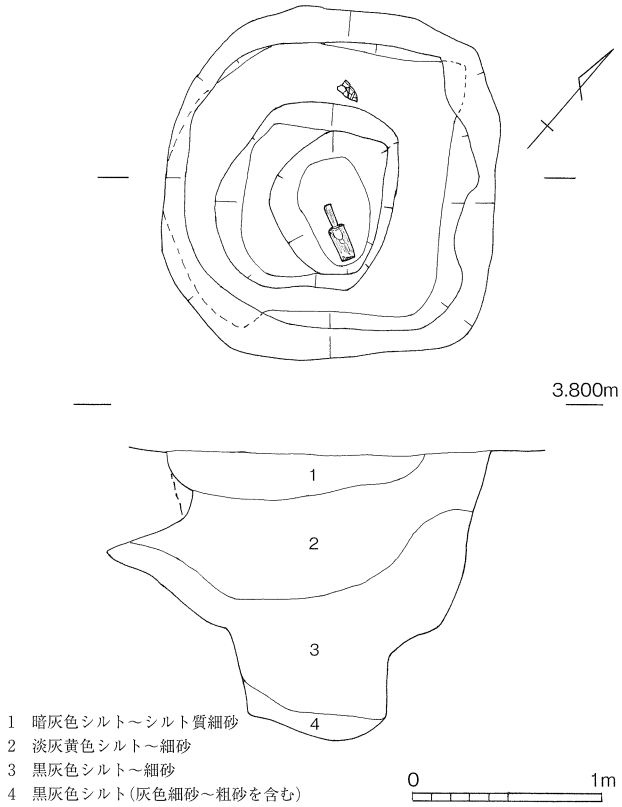


図50　SE306平面・断面図

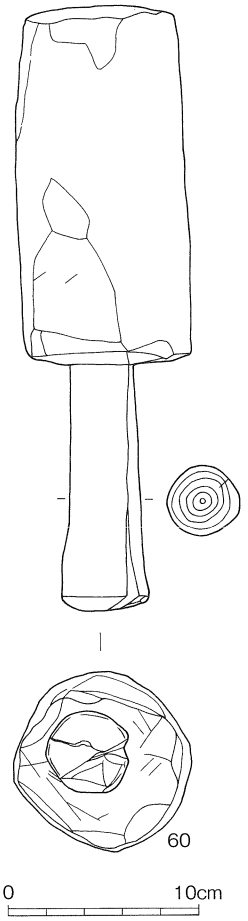


図52　SE306出土遺物実測図（2）

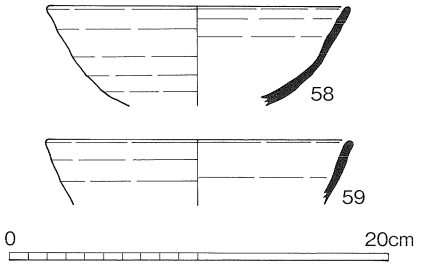


図51　SE306出土遺物実測図（1）

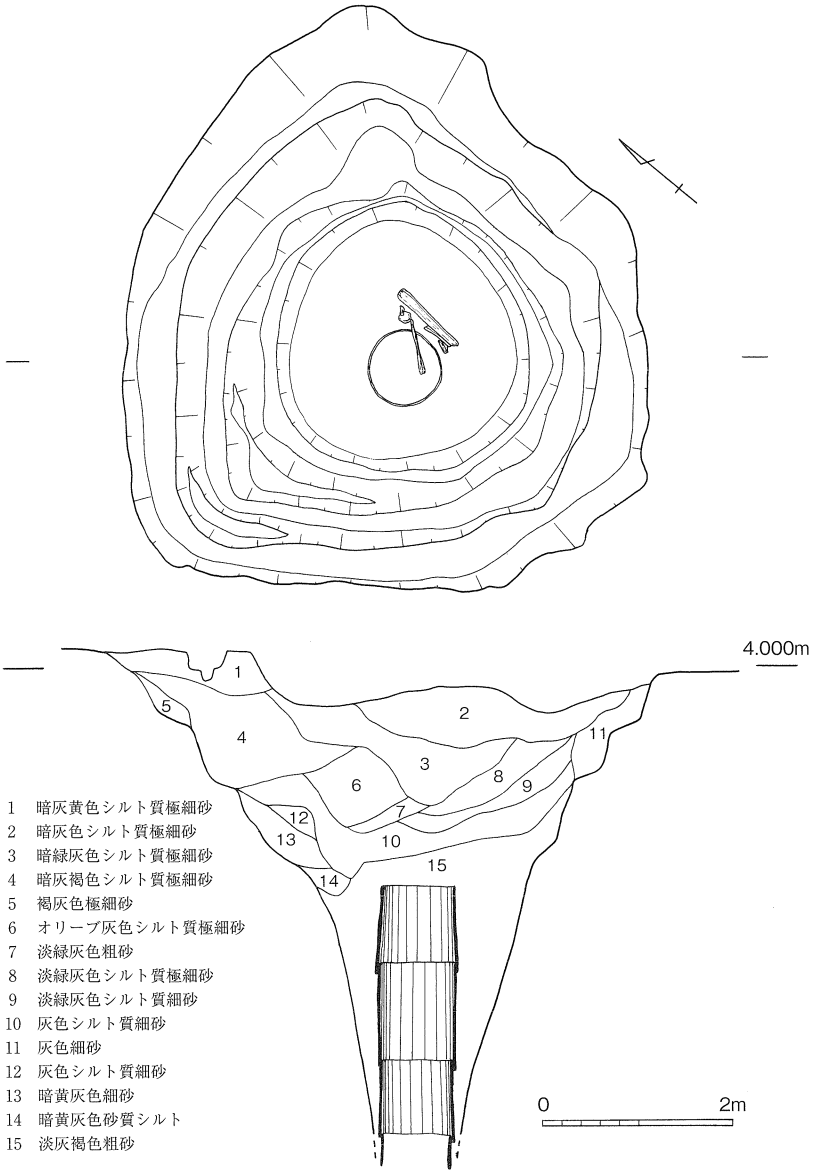


図53　SE307平面・断面図

SE308

検出面では直径2.2mの円形の掘形である。検出面から0.7m下がったところで、一辺が1.5mの方形の掘形になり、ほぼ垂直に掘り込まれていることから、井戸側として板などの構造物があったものと思われるが、抜き取りのため何も出土していない。検出面から2.1m下がったところで、直径0.4m、深さ0.4mの垂直の掘り込みがあり、湧水部として曲物が存在していたはずであるが、これも抜き取られている。

図55の61・62はSE308出土の東播系須恵器椀と小型の捏鉢である。61は口径17.4cm、62は口径20.4cm、器高6.2cmである。12世紀初め頃のものと考えられる。

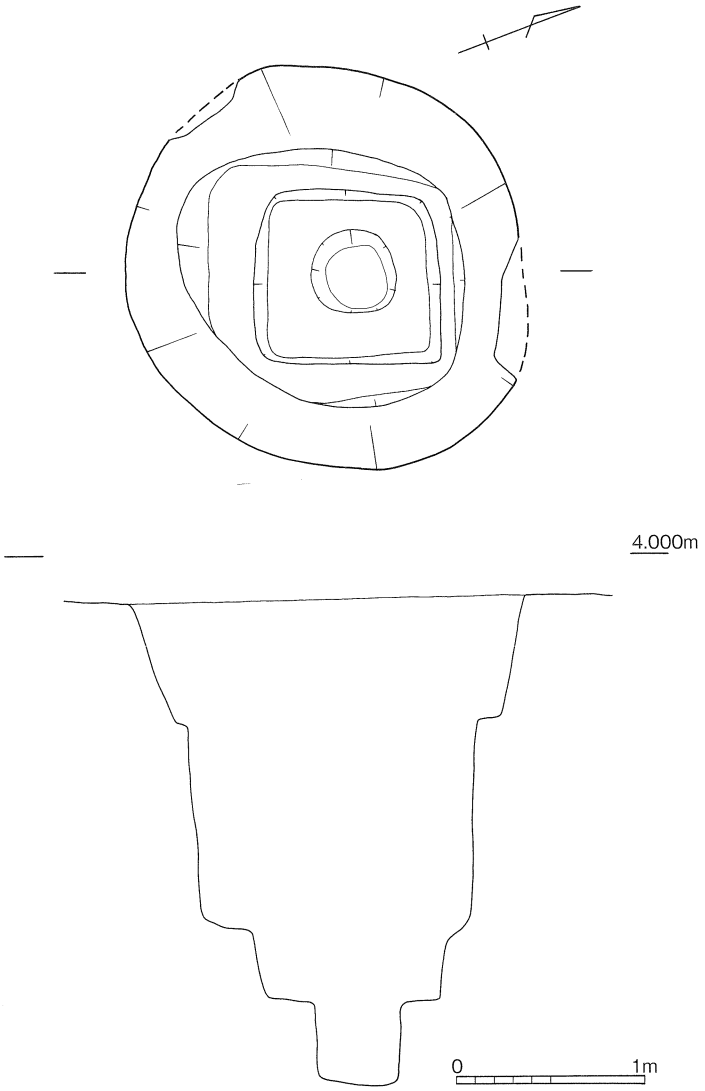


図54　SE308平面・断面図

SE309

直径２mの円形の掘形である。掘り込みは緩やかで、深さ１mの粘土層内で底になり、湧水層まで達していない。しかし、上層の砂層からの水により、調査中においても常に水が湛えられていたことから、溜め井として使用されていたものと考えられる。図示できるような遺物は出土していない。

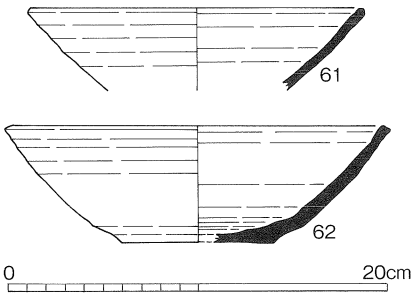


図55　SE308出土遺物実測図

SE310

西半分が従前建物の基礎により破壊されているが、直径1.2mの円形の掘形に復元できる。掘り込みは緩やかで、深さ１mの粘土層内で底になり、湧水層まで達していない。しかし、上層の砂層からの水により、調査中においても常に水が湛えられていたことから、溜め井として使用されていたものと考えられる。図示できるような遺物は出土していない。

SE311　直径0.9mの円形の掘形である。掘り込みは垂直であるが、深さ１mの粘土層内で底になり、湧水層まで達していない。しかし、上層の砂層からの水により、調査中においても常に水が湛えられていたことから、溜め井として使用されていたものと考えられる。遺物は出土していない。

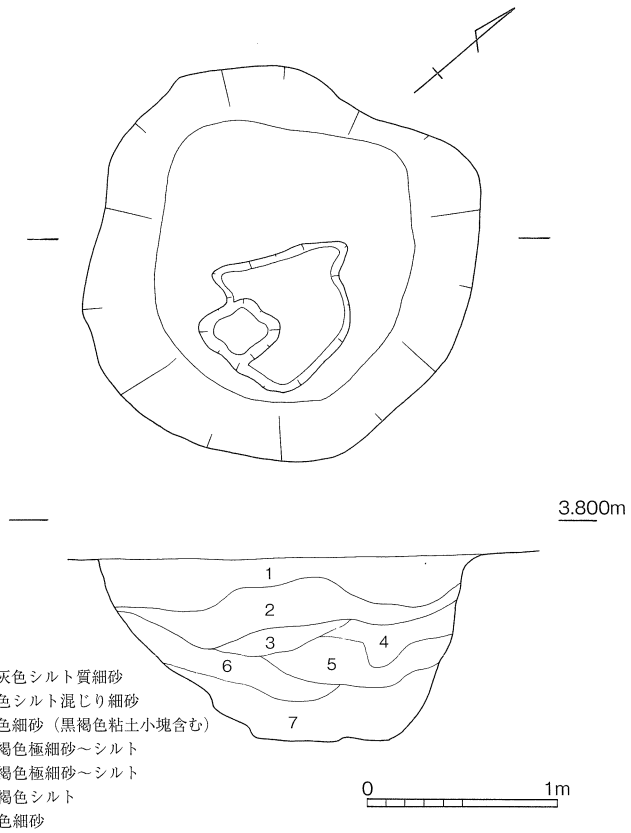


図56　SE309平面・断面図

SE312　直径0.7mの円形の掘形であり、今回検出した井戸の中では最も規模の小さなものである。掘り込みは垂直で、深さ0.7mの粘土層内で底になり、湧水層まで達していない。しかし、上層の砂層からの水により、調査中においても常に水が湛えられていたことから、溜め井として使用されていたものと考えられる。

図59の63はSE312出土の東播系須恵器椀で口径15.2cm、器高4.8cmである。12世紀前半代のものと考えられる。

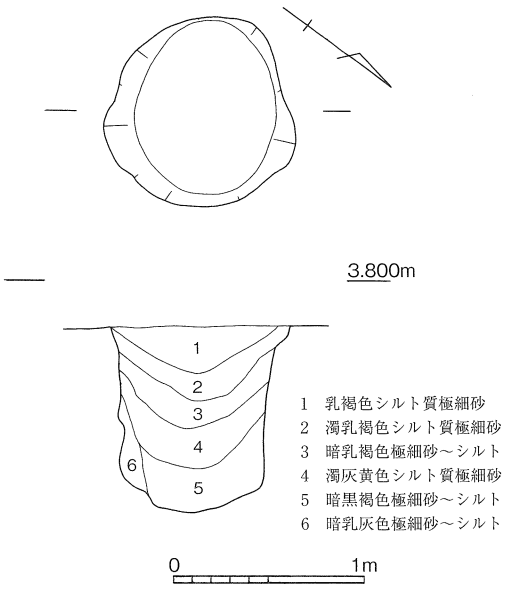


図57　SE311平面・断面図

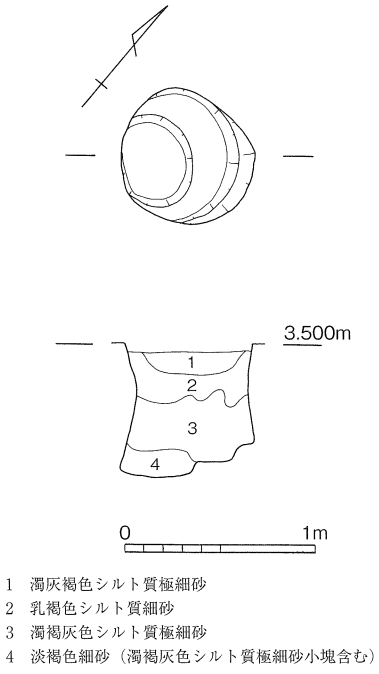


図58　SE312平面・断面図

SE313　　直径2.2mの円形の掘形である。掘り込みは緩やかで、深さ１mの粘土層内で底になり、湧水層まで達していない。しかし、上層の砂層からの水により、調査中においても常に水が湛えられていたことから、溜め井として使用されていたものと考えられる。

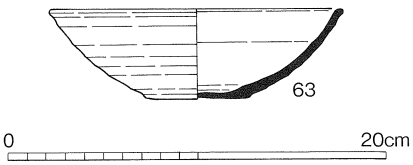


図59　SE312出土遺物実測図

SE314　　長径1.8m、短径1.4mの楕円形の掘形であり、深さ約0.9mで底部になるが、そこに直径約0.3m深さ約0.7mの水溜を設けている。

図61の64はSE314出土の瓦器椀で、口径10.2cm、器高5.4cmである。和泉型の瓦器椀で、外面のヘラミガキはやや雑だが高台径はまだ大きいことから、12世紀中頃のものと考えられる。

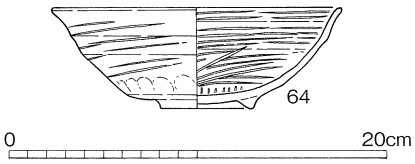


図61　SE314出土遺物実測図

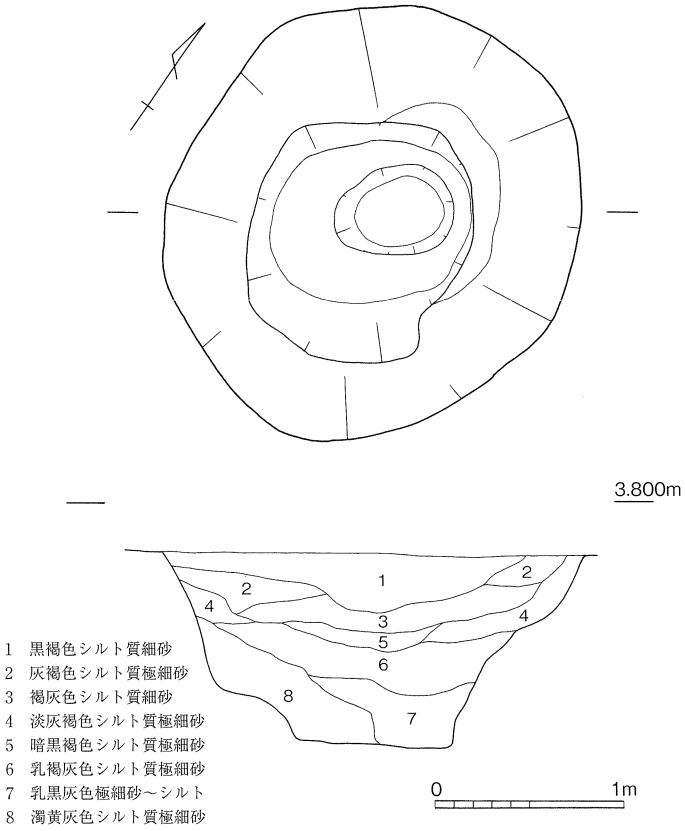


図60　SE313平面・断面図

(3) 溝

SD301　　調査区の北西隅で検出した、幅約0.6mの東西方向の溝で、北側の0.4mが一段深くなっており、そこでの深さは約0.15mである。溝底はほぼ水平である。溝の両側から、東西方向の鋤溝を検出したことから、この溝は田圃の区画溝の可能性が高いと考えられる。

図63の65・66はSD301出土の東播系須恵器椀で、65は口径14.2cm、66は底径5.3cmである。12世紀前半頃と思われるが、小片のため確定は困難である。

SD302　　幅0.5～1.0m、深さ約0.07mの溝である。

図64の67・68はSD302出土の東播系須恵器である。67は椀で底径5.8cm、68は捏鉢で口径27.2cmである。12世紀初頭頃と考えられる。

SD303

幅0.5～1.0m、深さ約0.2mの溝で、SD302とほぼ同じ向きに並んでいる。SD302、SD303についても、田圃の区画溝と考えられる。

図65の69はSD303出土の弥生時代前期の壷形土器の体部片である。胴部中央に段を設け、その下にヘラによる沈線を２条巡らす。胴部の最大径は25.3cmを測る。70は上げ底の底部片である。時期を確定することは困難であるが、縄文時代晩期の可能性もある。底径5.4cmである。

SD304

幅約0.4m、深さ約0.1mの東西方向の溝である。

図66の71はSD304から出土した東播系須恵器椀の底部片で、底径6.4cmである。12世紀代と思われる。

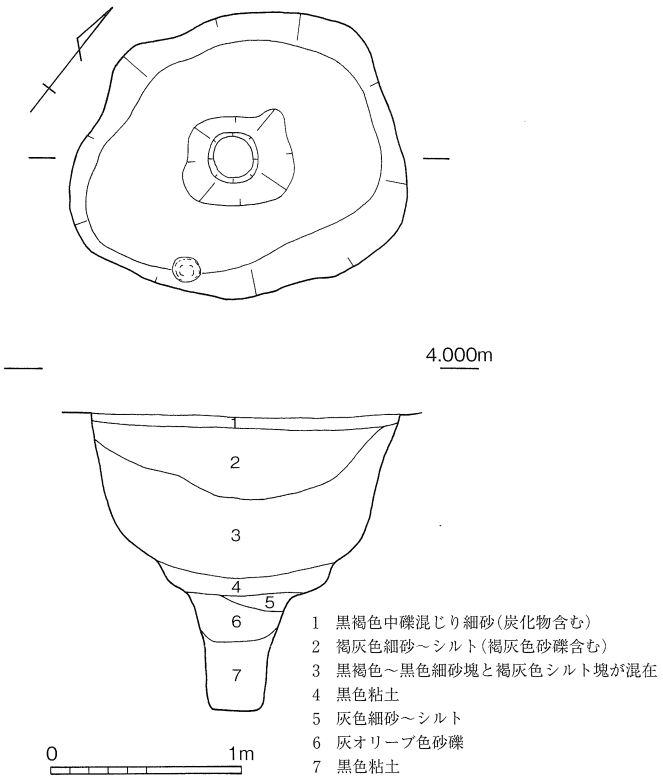


図62　SE314平面・断面図

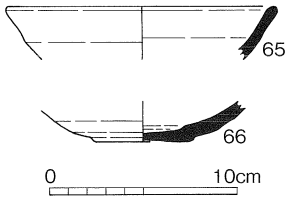


図63　SD301出土遺物実測図

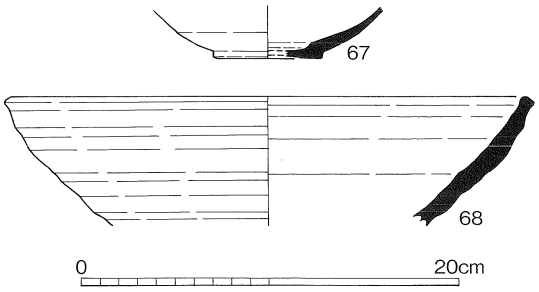


図64　SD302出土遺物実測図

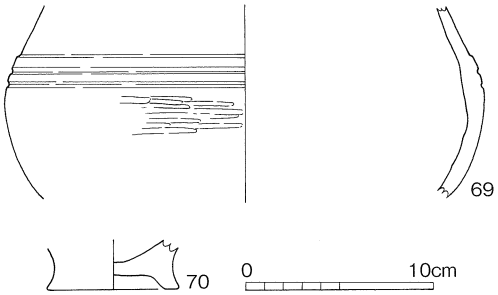


図65　SD303出土遺物実測図

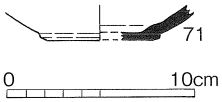


図66　SD304出土遺物実測図

SD305

SD304に接して東西方向に延びる、幅約0.4m、深さ約0.1mの溝である。

図67の72は東播系須恵器埦の口縁部で、SD305から出土した。口径18.5cmを測る。小片のため時期不明である。

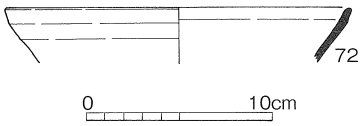


図67　SD305出土遺物実測図

SD306

調査区を北から南へやや蛇行しながら流れる、幅約0.3～0.4m、深さ0.1mの溝である。2001年刊行の報告書では、弥生時代前期の溝として報告されているSD101と同一遺構と考えられるが、今回の調査では土師器の小片が少量出土しただけであり、中世の遺構の可能性も考えられる。

SD307

幅約0.3～0.4m、深さ約0.1mの溝で、東西方向に延びるが東端と西端はほぼ直角に南へ曲がっている。田圃もしくは屋敷地の区画溝と考えられるが、対応する鋤溝や柱穴が確認できていないので、用途は不明である。

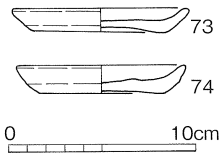


図68　SD307出土遺物実測図

図68の73・74はSD307から出土した土師器小皿である。73は口径9.2cm、器高1.3cmで底部外面に糸切り痕を残す。74は口径8.8cm、器高1.5cmで摩滅のため調整等は不明である。12世紀代と思われるが確定は困難である。

SD308

幅0.4～0.9m、深さ0.2～0.3mで、蛇行しながら北から南へ流れている。

SD309

撹乱が著しく、東側の肩のみ検出した。この地域の条理の方向に従っているものと思われる。深さ約0.2mである。

図69の75～78はSD309出土の東播系須恵器埦である。75は口径16.2cm、76は口径14.4cm、77は底径7.8cm、78は底径7.0cmを測る。いずれも12世紀前半頃と思われる。

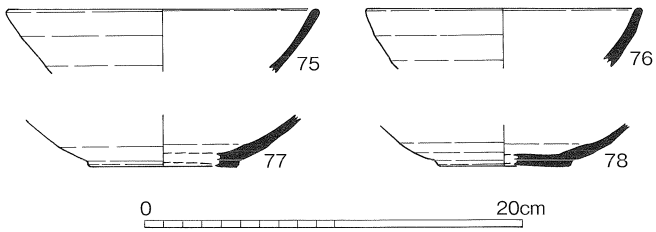


図69　SD309出土遺物実測図

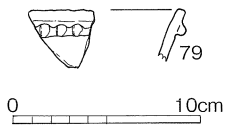


図70　SD310出土遺物実測図（1）

SD310

幅0.3～0.4m、深さ0.1～0.2mの東西方向の溝で、西端はSD309と切り合っている。

図70の79はSD310出土の縄文時代晩期の深鉢口縁部片である。外面の口縁端部直下に凸帯を巡らす。

図71の80はSD310から出土した東播系の須恵器埦で口径10.8cm、器高3.9cmである。11世紀後半のものと考えられる。

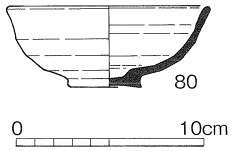


図71　SD310出土遺物実測図（2）

(4) 土坑

SK304

長径1.4m、短径1.0mの歪な楕円形の土坑で、深さは0.25mである。底面付近で炭を少量検出した。

図73の81・82はSK304から出土した遺物で、81は口径10.5cm、器高1.9cmの土師器小皿である。底部外面に糸切り痕を残す。82は東播系須恵器椀の底部片で、底径6.3cmである。12世紀前半と考えられる。

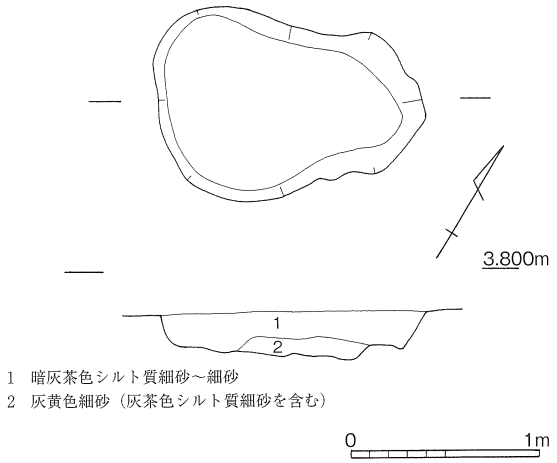


図72 SK304平面・断面図

SK305

長径1.7m、短径1.5m、深さ0.15mの楕円形の土坑である。遺物は出土していない。

SK306

直径約2.0m、深さ0.7mの土坑である。図示できるような遺物は出土していない。

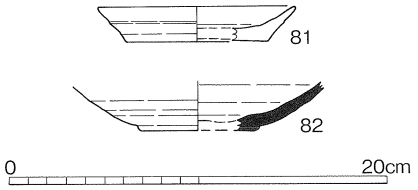


図73 SK304出土遺物実測図

SK307

SB322の東に隣接して検出した。撹乱により南半分が破壊されているが、直径0.65mの円形に復元できる。検出面からの深さは0.15mである。中からは須恵器の椀と土師器の小皿が並べた状態で出土している。地鎮祭祀を行った可能性が考えられる。

図77の83～88はSK307出土の遺物である。83・84は「ての字」口縁の土師器小皿で、83は口径9.7cm、器高1.8cm、84は口径9.4cm、器高1.5cmである。85は底部外面に糸切り痕のある土師器小皿で、口径9.0cm、器高1.4cmである。86は口径11.0cm、器高1.7cmの土師器小皿である。87は土師器の坏で、口径14.0cm、器高4.3cmを測る。底部外面に糸切り痕がある。88は東播系須恵器椀で、口径15.8cm、器高6.1cmである。11世紀末頃のものと考えられる。

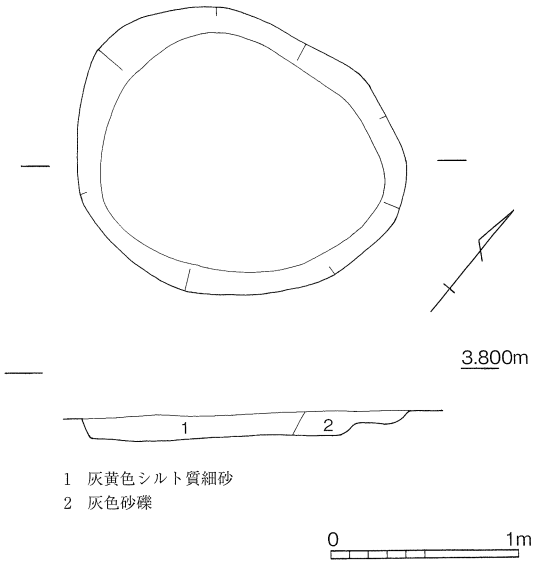


図74 SK305平面・断面図

SK308

長径0.7m、短径0.65mの楕円形の土坑で、深さは0.15mである。遺物は出土していない。

SK309　直径1.5m、深さ0.7mの円形の土坑で、断面は逆台形で、部分的に袋状にオーバーハングする。遺物は出土していない。

SK310　直径1.5m、深さ0.8mの円形の土坑で、部分的に袋状にオーバーハングする。数条の溝の水を受け、あふれた水を別の溝へ流す、小さな調整池のような機能が考えられる。

図81の89はSK310出土の須恵器小壷である。高台径4.7cm、現高5.3cmである。平安時代前期のものと思われるが、小片のため確定できない。

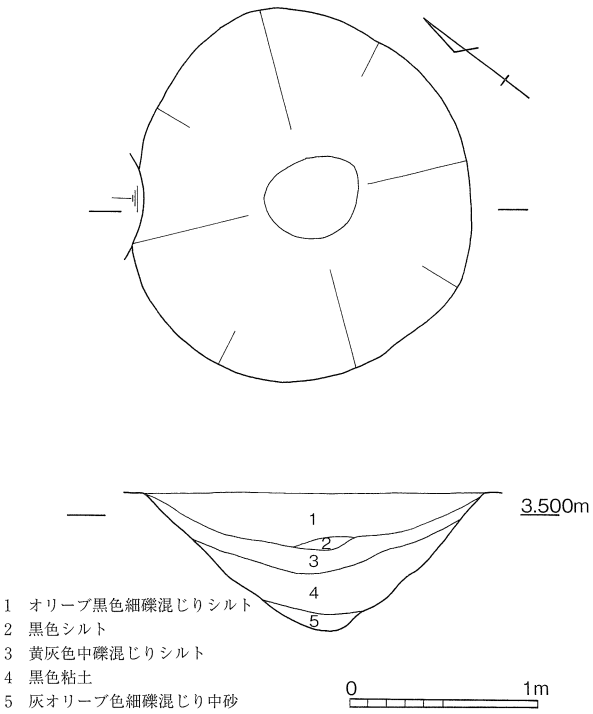


図75　SK306平面・断面図

SK311　長径0.8m、短径0.65m、深さ0.6mの楕円形の土坑である。底部から結晶片岩を含む扁平な石と共に須恵器椀、瓦器椀が出土している。土坑の用途は不明である。

図83の90～92はSK311から出土した遺物である。90・91は瓦器椀で90は口径15.2cm、器高5.7cmで内面の調整は摩滅のため不明だが、外面上半にヘラミガキが残る。91は口径15.3cm、器高5.4cmで内面に丁寧なヘラミガキを施す。92は東播系須恵器椀で、口径15.6cm、器高5.1cmである。12世紀前半のものと考えられる。

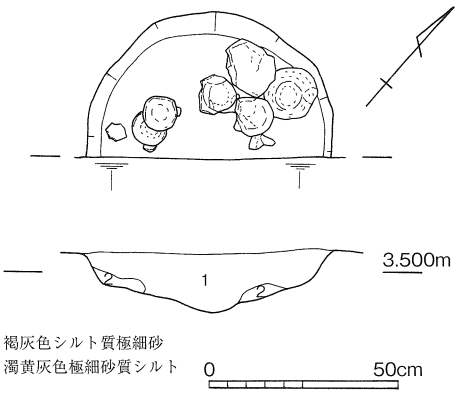


図76　SK307平面・断面図

SK312　直径約2.7mのやや楕円形の土坑で、深さは約0.3mである。耕作地に伴うものであろうと思われるが、用途は不明である。

図84の93・94はSK312から出土した遺物である。93は土師器小皿で口径12.3cmである。94は東播系須恵器椀の口縁部片で、口径14.7cmである。12世紀代と思われるが確定できない。

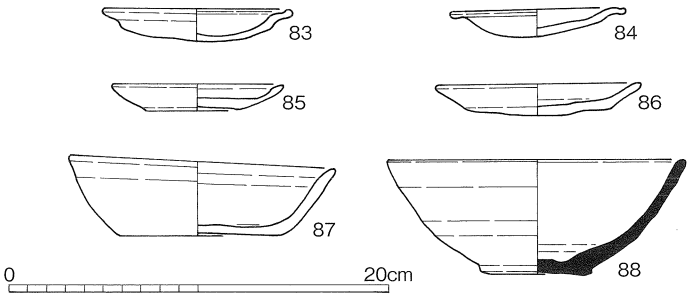
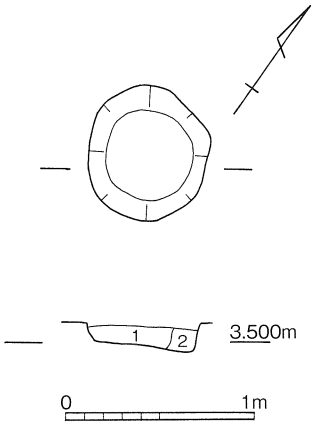
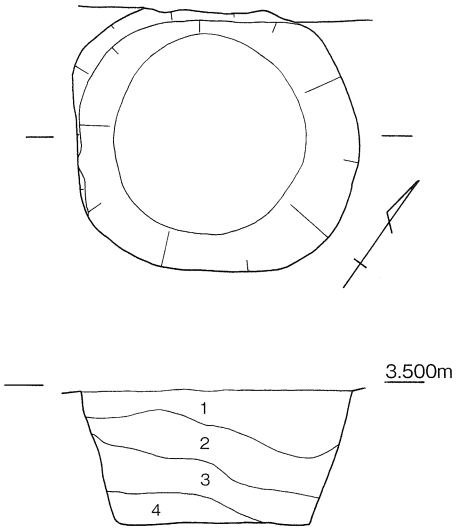


図77　SK307出土遺物実測図



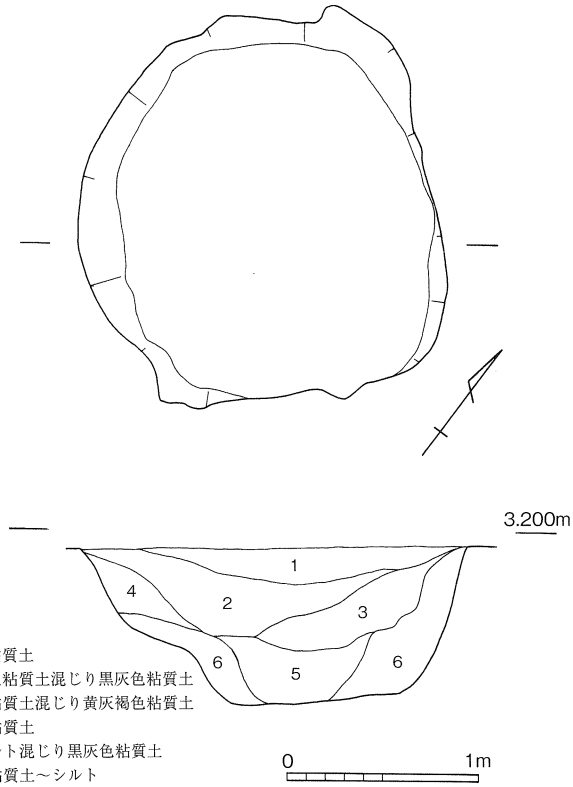
1　暗褐灰色シルト質極細砂
2　淡灰褐色シルト質細砂

図78　SK308平面・断面図



1　黒灰色礫混じり粘質土
2　黒灰色粘質土混じり暗褐色中砂
3　暗褐色中砂混じり黒灰色粘質土
4　暗褐色中砂

図79　SK309平面・断面図



1　黒灰色粘質土
2　黄灰褐色粘質土混じり黒灰色粘質土
3　黒灰色粘質土混じり黄灰褐色粘質土
4　黒灰色粘質土
5　灰色シルト混じり黒灰色粘質土
6　黄灰色粘質土～シルト

図80　SK310平面・断面図

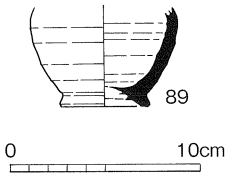


図81　SK310出土遺物実測図

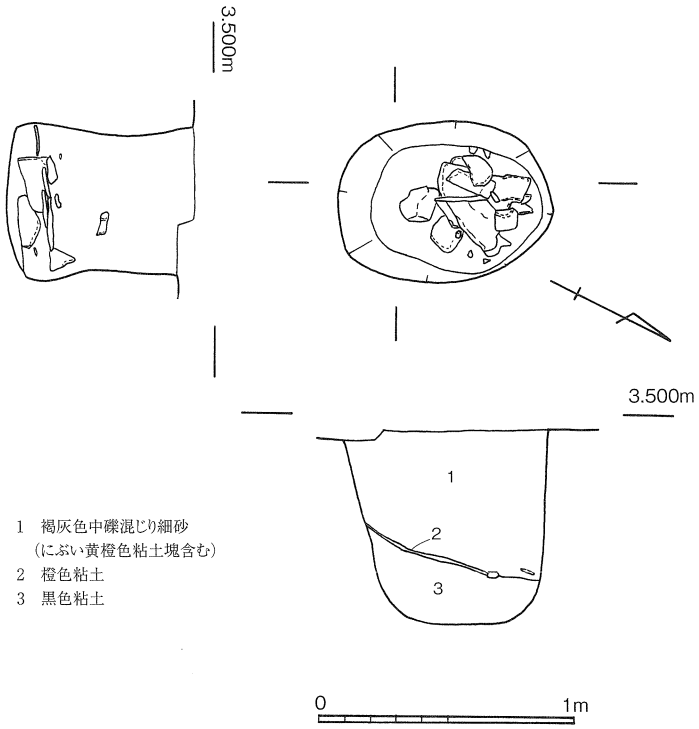


図82　SK311平面・断面図

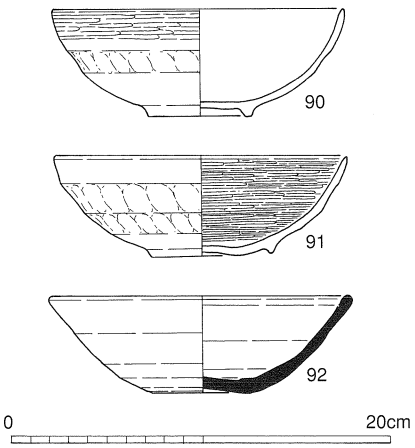


図83　SK311出土遺物実測図

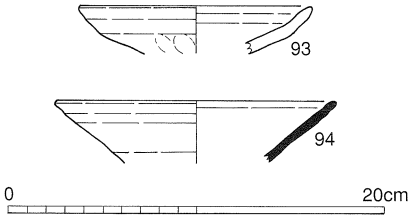


図84　SK312出土遺物実測図

(5) 木棺墓

ST302

南北方向に主軸を置く木棺墓で、南北長1.9m、東西幅0.6mの長方形土壙内に南北長1.8m、東西幅約0.44mの木棺を安置している。棺材の厚さが約0.03mであることが、土色変化部から推定される。棺底には薄い粘土層が広がっており、それを除去したところ、棺の桟の痕跡を検出した。

棺内北西隅に土師器小皿２枚と、その上に赤漆塗りの皿、黒漆塗りの皿各１枚があり、それらの西に２個体の白磁碗の破片が３片と、長さ0.2mの鉄刀が先を南に、刃部を西に向けた状態で検出した。

図86の95～100はＳＴ302出土の遺物である。95･96は土師器小皿で、95は口径8.6cm、器高1.6cm、96は口径8.6cm、器高1.6cmである。97～99は中国製白磁碗で、97は山本分類Ⅳ１ａ類、99はⅧ類と思われるが小片のため不明である。98は口径16.0cm、99は口径22.0cmである。99は97と同一固体の可能性がある体部片であるが接合はしない。100は全長20.4cm、茎長5.2cm、刃最大幅2.5cmの鉄小刀である。茎端部と切先部が欠損するがほぼ完形を保つ。茎から関部にかけ木質部が残る。12世紀末～13世紀にかけての時期が考えられる。

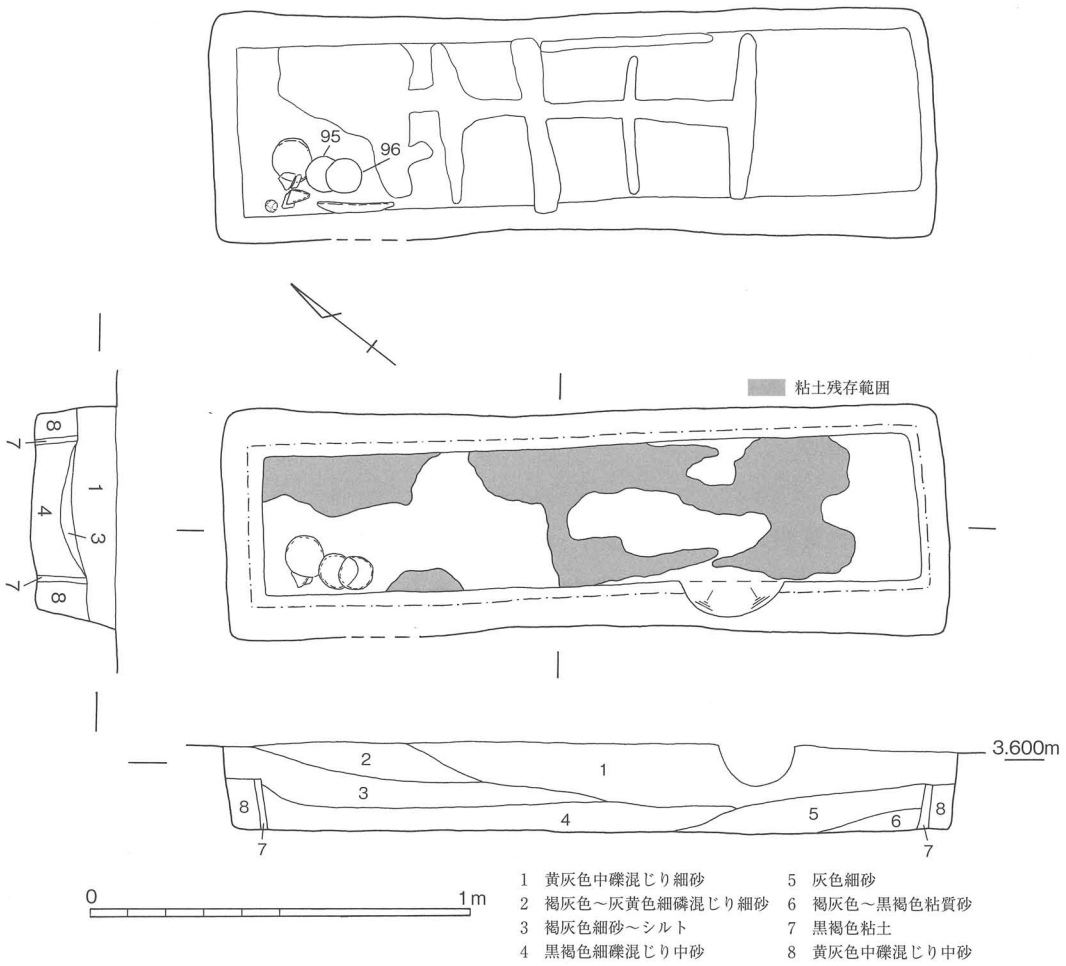


図85　ST302平面・断面図

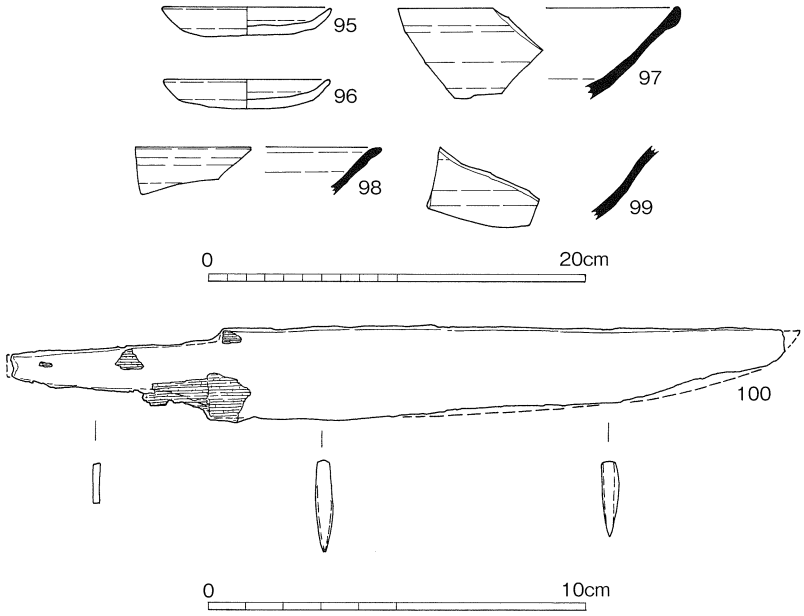


図86　ST302出土遺物実測図

(6) ピット

SP305

SK304の北西側にある直径0.35m、深さ0.35mの円形のピットである。

図87の101はSP305から出土した土師器小皿で、口径9.2cm、器高1.5cmである。12世紀代と考えられる。

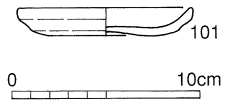


図87　SP305出土遺物実測図

SP306

SB317の付近にある直径0.3m、深さ0.42mの円形のピットである。

図88の102はSP306から出土した土師器小皿で、口径8.7cm、器高1.4cmを測る。摩滅のため調整等不明だが13世紀代と思われる。

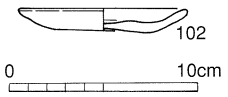


図88　SP306出土遺物実測図

SP307

SD309の東側にある直径0.3m、深さ0.3mの円形のピットである。

図89の103はSP307出土の土師器小皿である。底部外面はナデで仕上げる。口縁部が大きく歪むが口径は約10cm、器高1.7cmである。13世紀代と思われる。

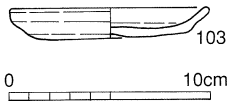


図89　SP307出土遺物実測図

SP308

SE308の北西側にある直径0.25m、深さ0.25mの円形のピットである。

図90の104はSP308出土の東播系須恵器捏鉢である。口径26.2cmで、口縁端部外面を外方に摘み出す。12世紀初め頃のものと考えられる。

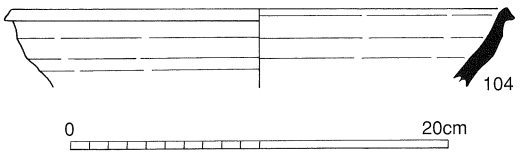


図90　SP308出土遺物実測図

SP309　　SX310の東側にある直径0.2m、深さ0.35mの円形のピットである。

図91の105はSP309出土の同安窯系青磁碗、山本分類のＩ４ａである。口径17.0cmである。12世紀中頃～後半頃と考えられる。

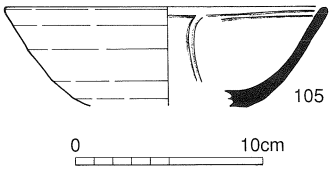


図91　SP309出土遺物実測図

(7) 不明遺構

SX301　　2001年刊行の報告書において、SX301とした不明遺構の北端部を検出した。

図92の106～112はSX301出土の東播系須恵器埦である。106は口径16.8cm、107は口径15.8cmである。108は底径6.0cm、109は4.6cm、110は6.0cm、111は5.0cm、112は6.0cmで、底部と体部の境界がやや曖昧になっているものが多い。12世紀後半以降のものと考えられる。

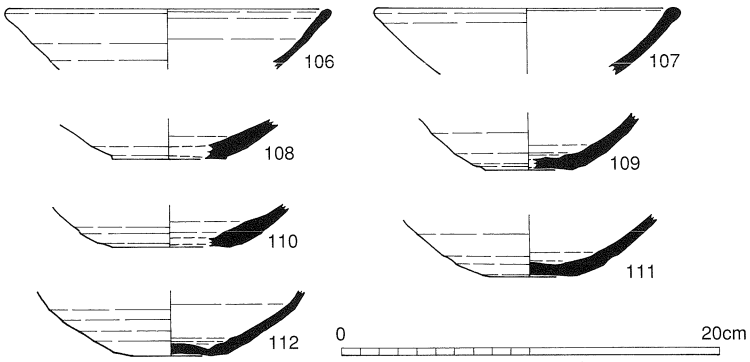


図92　SX301出土遺物実測図

SX305　　長径1.7m、短径1.0mの楕円形の遺構で、深さは0.9mである。水溜の可能性が考えられる。

図93の113～115はSX305出土の東播系須恵器埦である。113は口径16.0cm、114は底径5.8cm、115は底径5.0cmを測る。12世紀前半頃と思われる。

SX306　　短径1.4m、長径1.6m以上、深さ約0.1mの楕円形の窪みで、用途は不明である。

SX307　　長辺1.3m、短辺1.1mの隅円方形の遺構で、深さは1.33mである。水溜の可能性が考えられる。

SX308　　長径0.72m、短径0.46m、深さ0.09mの遺構である、土師器の破片が出土しているが、器種、時期共に不明である。

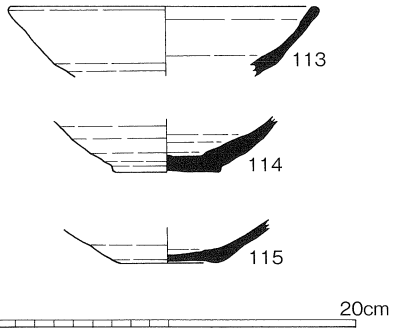


図93　SX305出土遺物実測図

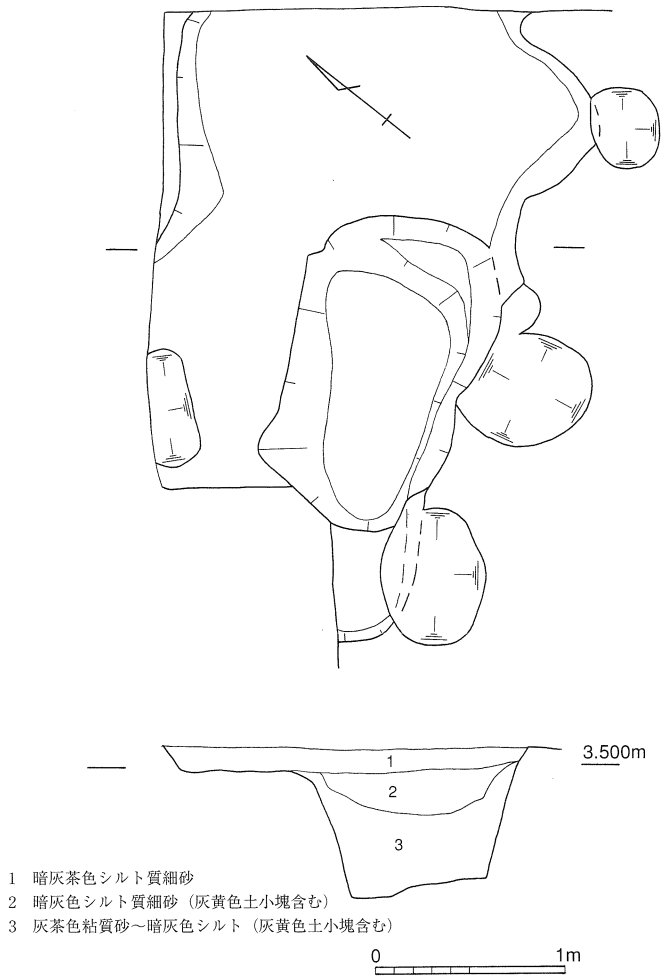


図94　SX305平面・断面図

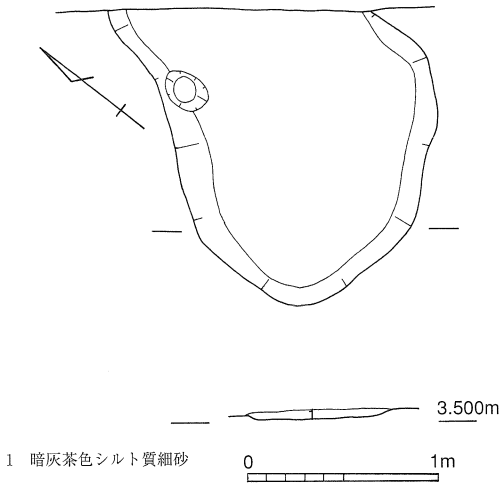


図95　SX306平面・断面図

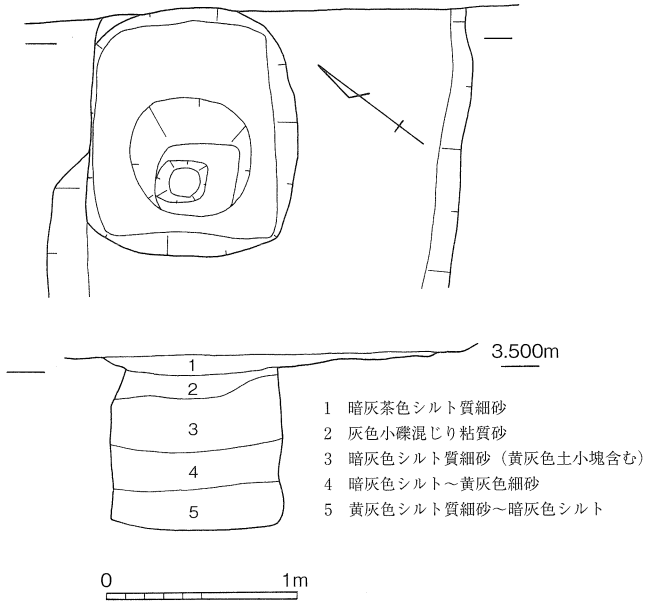


図96　SX307平面・断面図

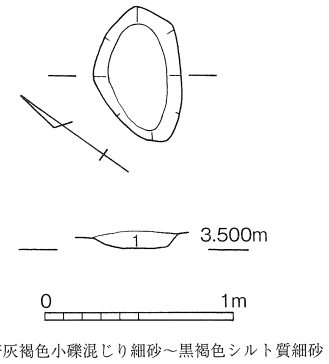


図97　SX308平面・断面図

SX309

直径約2.0m、深さ約1.0mの円形の遺構である。付近に建物跡がないため、耕作地に関係する水溜と考えられる。

図99の116 ～ 118はSX309からの出土遺物である。116は口径17.0cmの東播系須恵器埦である。117は中国製白磁碗で山本分類のⅡ1類である。口径17.2cmを測る。118は土師器甕で口径30.8cm、胴部最大径32.0cmである。体部内面は摩滅のため調整不明だが、外面はタテ方向にヘラケズリを加える。12世紀代と考えられる。

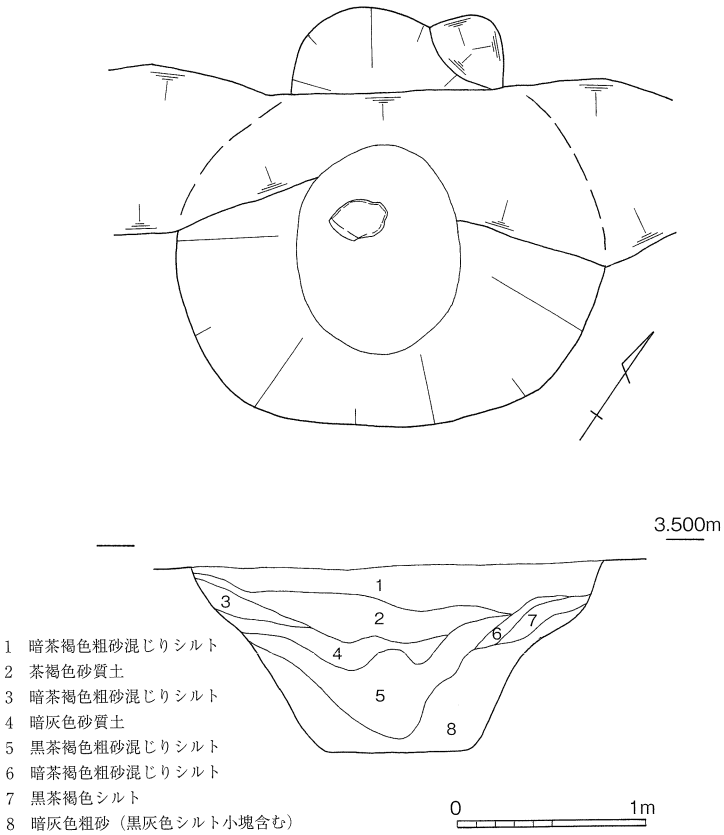


図98　SX309平面・断面図

SX310
～SX312

SX310は、直径約8.0m、深さ1.5mの円形の遺構で、埋土はレンズ状の堆積である。

SX310に切られて、北側に２箇所ある三角形状の遺構がSX311で、同じくSX310に切られている、東側の舌状の遺構がSX312である。

それぞれの初期堆積は、黄褐色系の細砂であり、遺構面での検出時には、輪郭が明瞭に確認された。埋土の堆積状況から、洪水などで埋もれた水溜を、掘り返して修復しながら使用していたものと考えられる。

図102の119 ～ 128はSX310から出土した

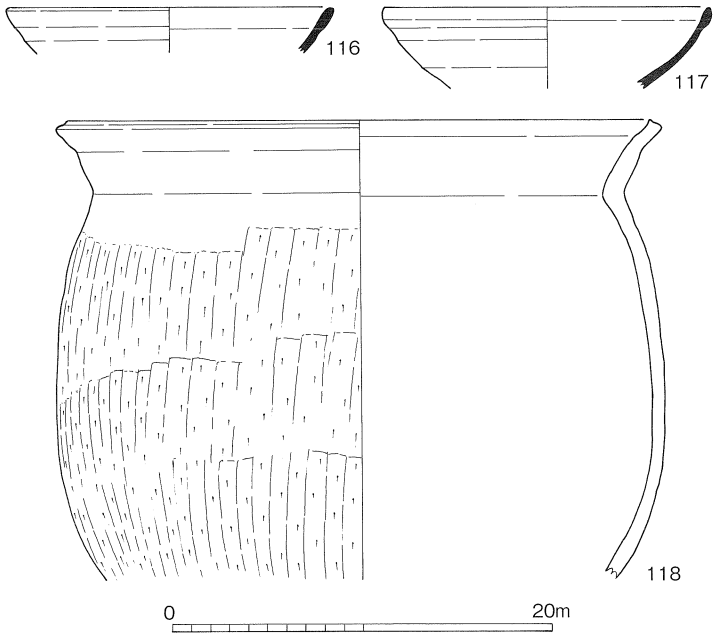
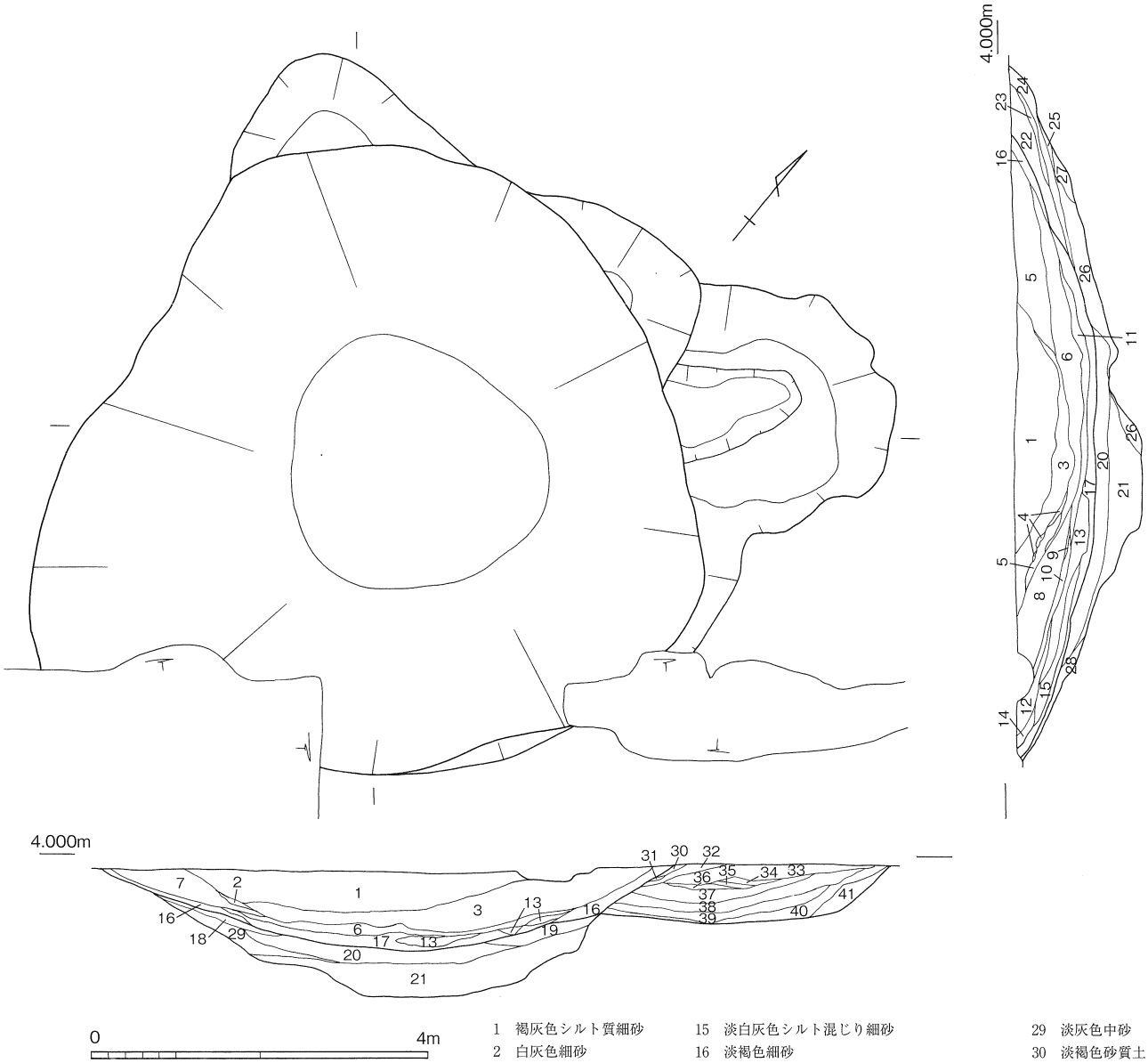


図99　SX309出土遺物実測図

遺物である。119は土師器小皿で口径12.6cm、器高は約2.1cm。120は土師器鍋で口径22.2cmである。121は瓦器埦で高台部を欠く。口径15.0cm、現器高4.3cmである。内面は摩滅により暗文を確認することができない。122も瓦器埦で口径13.0cm、器高4.4cmである。内面の暗文は雑で、外面にはない。123は緑釉陶器埦の底部片で、底径8.1cmである。124・125は中国製白磁碗で、山本分類のⅣ１a類である。124は口径16.8cm、125は口径17.1cmである。126は同類の碗底部と思われるもので、高台径5.6cmである。127・128は



1 褐灰色シルト質細砂
2 白灰色細砂
3 灰色シルト質細砂
4 暗灰色極細砂～シルト
5 明灰色シルト質細砂
6 暗灰褐色シルト質極細砂
7 黒褐色極細砂～シルト
8 青灰色シルト質細砂
9 暗灰色極細砂～シルト
10 淡青灰色シルト質細砂
11 黒灰色極細砂～シルト
12 淡褐灰色細砂
13 明灰色シルト混じり細砂
14 淡灰白色細砂
15 淡白灰色シルト混じり細砂
16 淡褐色細砂
17 暗黒褐色極細砂～シルト
18 褐色中砂
19 明青灰色細砂
20 黒褐色シルト
21 乳青灰色シルト混じり細砂～中砂
22 淡灰褐色シルト混じり極細砂
23 灰白色極細砂
24 乳灰色極細砂～シルト
25 暗灰褐色中砂～細砂
26 暗黒灰色シルト質極細砂、灰白色細砂の互層
27 灰褐色中砂
28 褐色中砂
29 淡灰色中砂
30 淡褐色砂質土
31 淡黒灰色シルト質極細砂
32 明橙灰色シルト質細砂
33 淡橙灰色シルト質細砂
34 明白灰色細砂
35 乳青灰色シルト質細砂
36 乳灰橙色シルト質細砂
37 濁橙灰色シルト質極細砂
38 灰褐色シルト混じり細砂
39 暗褐灰色シルト質細砂
40 明橙灰色細砂～中砂
41 褐色中砂

図100　SX310～SX312平面・断面図

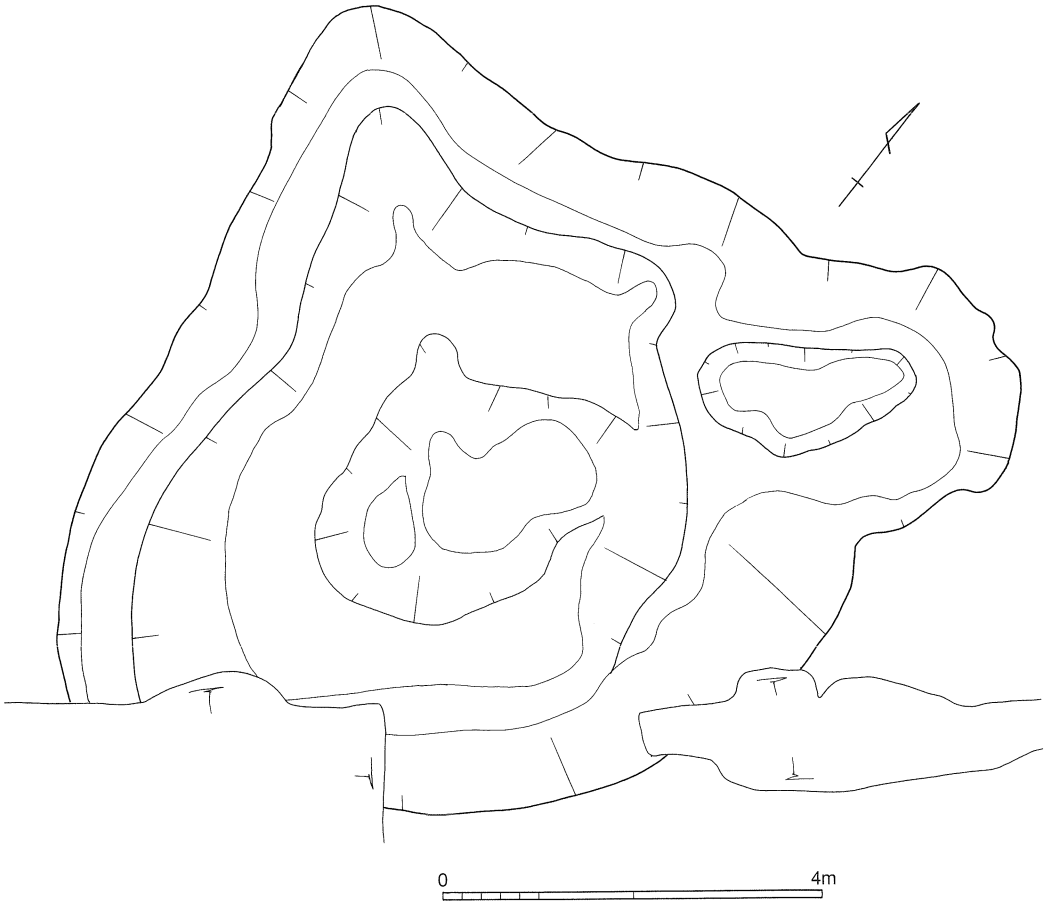


図101　SX310～SX312完掘平面図

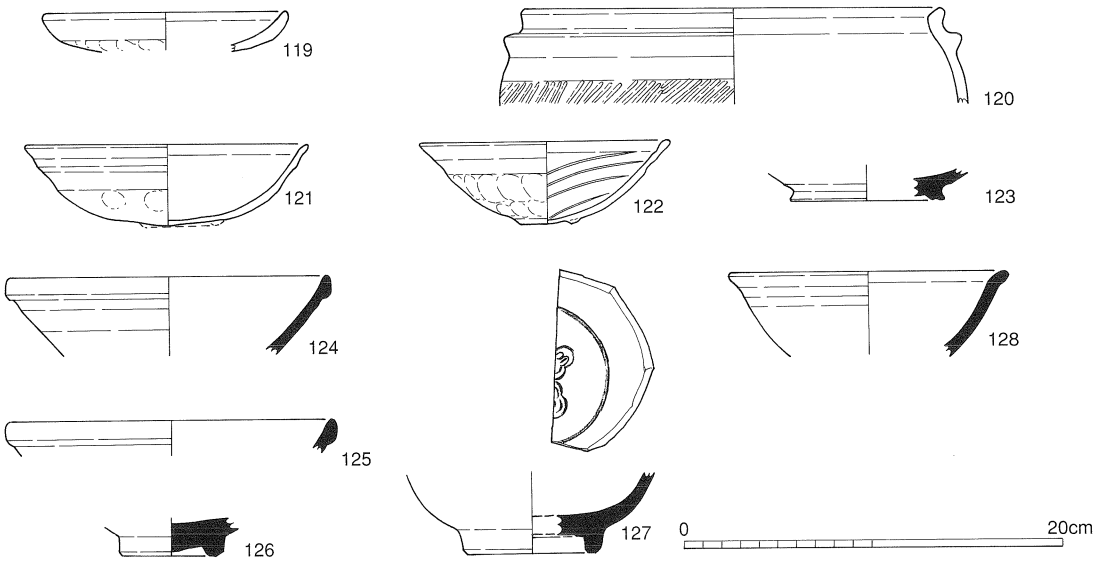


図102　SX310出土遺物実測図

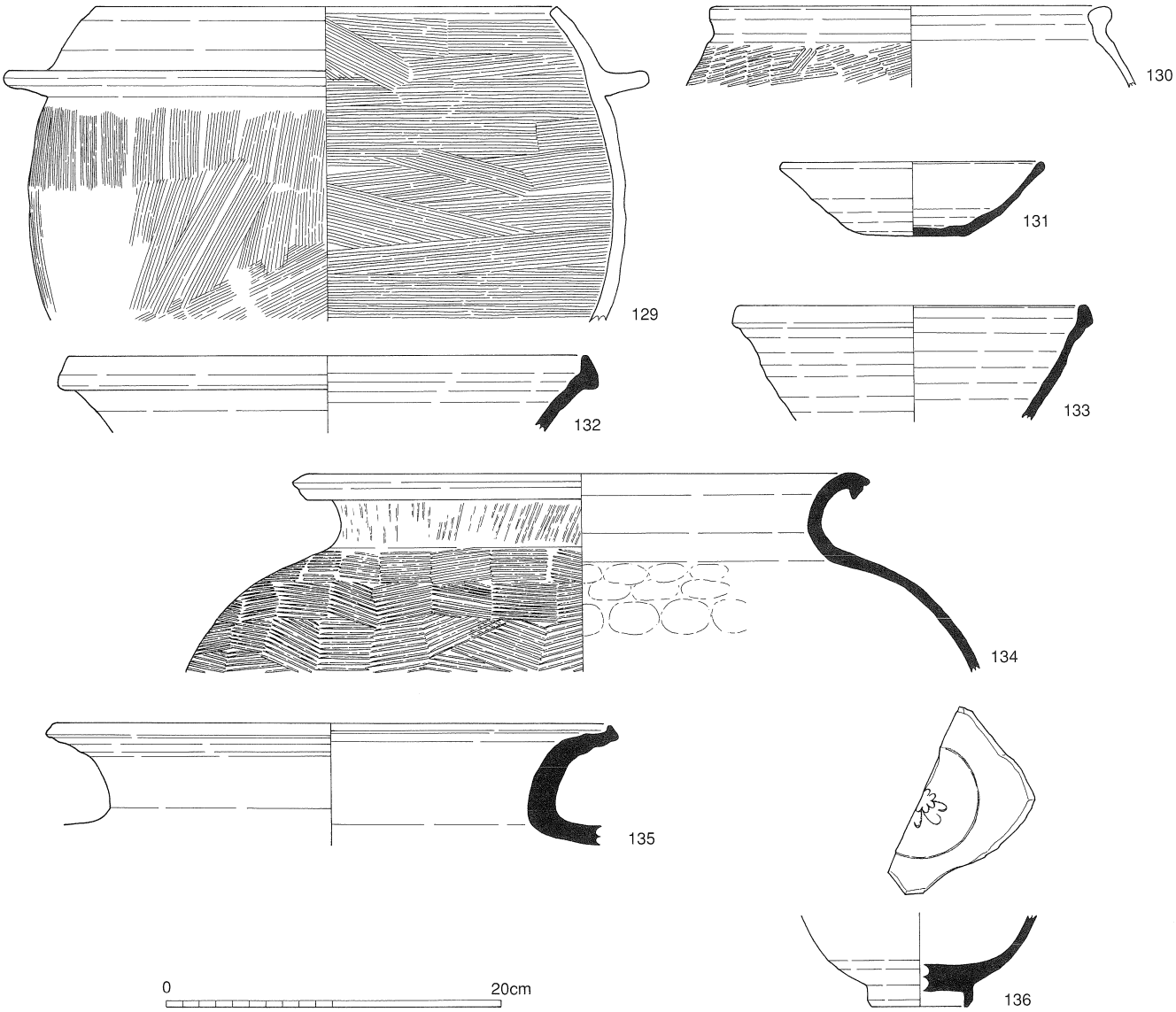


図103　SX312出土遺物実測図（1）

中国製青磁碗で127は高台径6.6cmを測り、見込みに花弁の印刻がある。128は口径14.4cmを測る。SX310の時期は12世紀～15世紀に及んでいる。

図103の129～136はSX312から出土した遺物である。129は土師器羽釜で、口径27.6cm、体部の内外面をハケで仕上げる。130は土師器鍋で口径23.0cm、体部外面に右上がりのタタキを施す。131は東播系須恵器埦で口径15.5cm、器高4.5cmである。132・133は東播系須恵器捏鉢で132は口径31.0cm、133は口径20.6cmである。134は東播系須恵器甕で口径34.4cmを測る。口縁端部は上下に肥厚する。体部外面に平行タタキ、頸部外面はタタキをナデで消している。体部内面はユビオサエ痕を残す。135も東播系須恵器甕と思われる。口径34.2cmで、口縁端部を上方に摘み上げて終わる。136は中国製青磁碗で見込みに花弁の印刻がある。高台径5.7cmである。これらの遺物は13世紀～14世紀代と思われる。

また、SX310から６点とSX312から１点の木質遺物が出土している。SX310からの出土品は角材、板材などの加工材であるが、用途は判然としない。SX312出土の137は、丸材の一端を加工し、円筒に円盤を被せたような形状を削りだしている。一端を欠損するため全長は不明であるが、残存長16.5cm、直径２cmを測る。欠損側の反対の端部付近

について、端から約４～５㎜残して幅約１㎝削りこみ、端部を１㎜前後突出させている。用途としては何らかの工具または器物の柄としての使用が考えられるが、詳細は不明である。

SX313　北西方向に主軸を置く、長辺2.0m、短辺1.0m、深さ1.0mの隅丸長方形の遺構である。南側短辺部には東へ延びる溝が取り付いている。遺構内部の、南側から北側に向かって、階段状のテラスがある。遺物は出土していないので、時期は不明で、用途についても不明である。

SX314　SD304の北に隣接した、幅0.7m、長さ2.0m以上、深さ約0.1mの遺構で、南側がSD304に切られている。用途は不明である。

図106の138～140はSX314から出土した遺物である。138は「ての字」口縁の土師器小皿で、口径9.4㎝、器高1.4㎝である。139は土師器埦で口径18.0㎝である。140は東播系須恵器埦で口径19.2㎝である。11世紀後半～末頃と思われる。

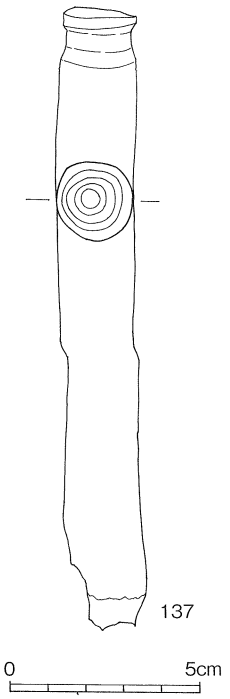
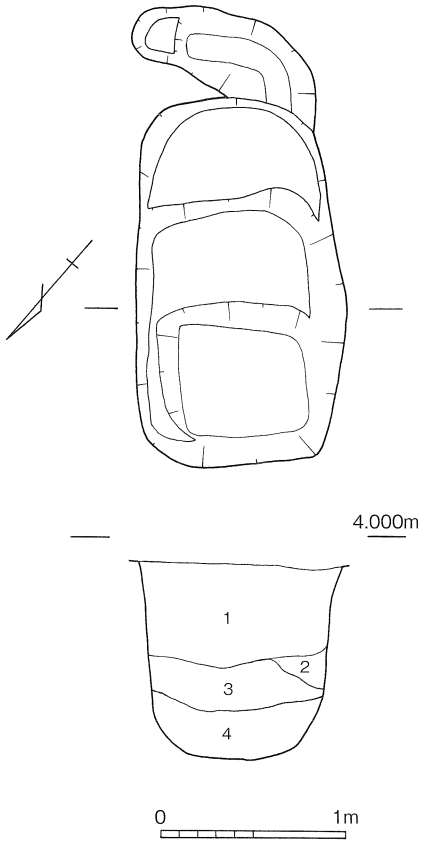


図104　SX312出土遺物実測図（2）



1　乳褐色小礫混じりシルト質細砂（乳白灰色シルト質細砂小塊含む）
2　乳白灰色シルト質細砂
3　乳褐灰色シルト質細砂
4　暗黒灰色極細砂～シルト

図105　SX313平面・断面図

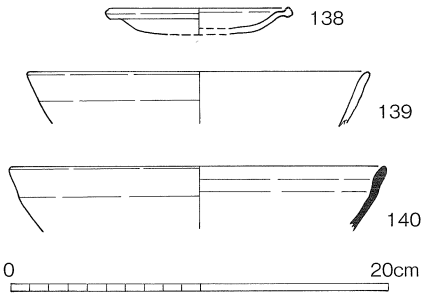


図106　SX314出土遺物実測図

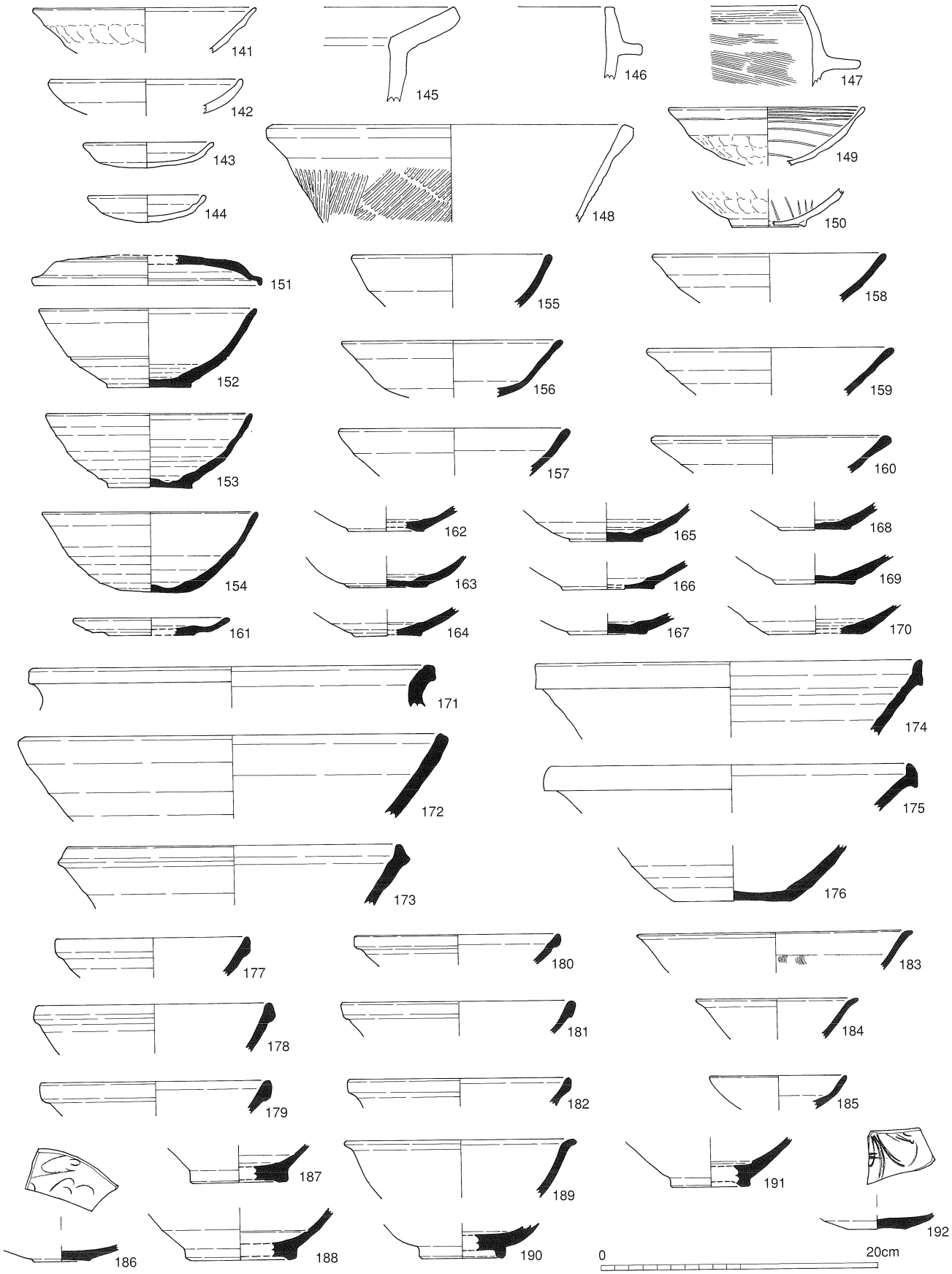


図107　久保町６丁目地区包含層出土遺物実測図（1）

(8) 包含層出土遺物

図107の141 ～ 192及び図108の193 ～ 195は久保町６丁目地区の包含層出土遺物である。図107の141 ～ 148は土師器、149・150は瓦器、151 ～ 176は須恵器、177 ～ 188 は中国製白磁で189～192は中国製青磁である。11世紀～12世紀代のものを中心とするが、152は９世紀代、174・175などは13 ～ 14世紀代と思われる。

図108の193 ～ 195は平安時代の瓦類で、193は東播系の軒平瓦である。11 ～ 12世紀と考えられる。194・195はそれぞれ丸瓦、平瓦の破片である。

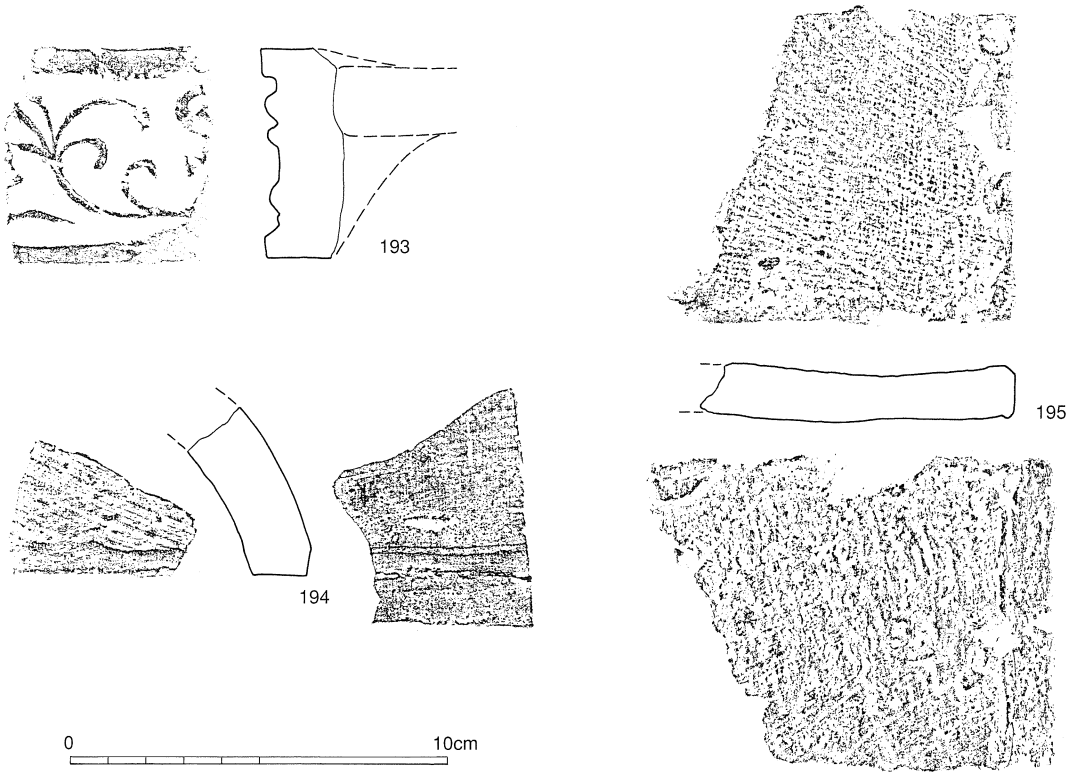


図108　久保町６丁目地区包含層出土遺物実測図（2）

（注１）丹治康明「東播系須恵器について」『中近世土器の基礎研究』 日本中世土器研究会　1985年10月
森田稔「東播系中世須恵器生産の成立と展開」『神戸市立博物館紀要』第３号　神戸市立博物館　1986年３月31日
池田征弘編『神出窯跡群－神出浄水場拡張工事に伴う埋蔵文化財調査報告書－』兵庫県文化財調査報告第171冊　兵庫県教育委員会　1998年３月31日

（注２）山本信夫「中世前期の貿易陶磁器」『概説中世の土器・陶磁器』 中世土器研究会　1995年12月９日

（注３）伊野近富「土師器皿」『概説中世の土器・陶磁器』 中世土器研究会　前掲書
小森俊寛・上村憲章「京都の都市遺跡から出土する土器の編年的研究」『研究紀要』第３号　財団法人京都市埋蔵文化財研究所　1996年11月29日

（注４）尾上実・森島康雄・近江俊秀「瓦器椀」『概説中世の土器・陶磁器』 中世土器研究会　前掲書

（注５）森隆「黒色土器」『概説中世の土器・陶磁器』 中世土器研究会　前掲書

図109　二葉町６丁目　遺構平面図

第５章　二葉町６丁目の調査

二葉町６丁目では、掘立柱建物８棟、井戸６基、土坑14基、墓１基、ピット、溝、鋤溝多数を検出した。また、調査区南端より約20m北の地点より南は、約0.4mの段を成して下がっており、殆ど遺構が存在せず、近世以降の耕地化により遺構面が削平を受けたものと思われる。

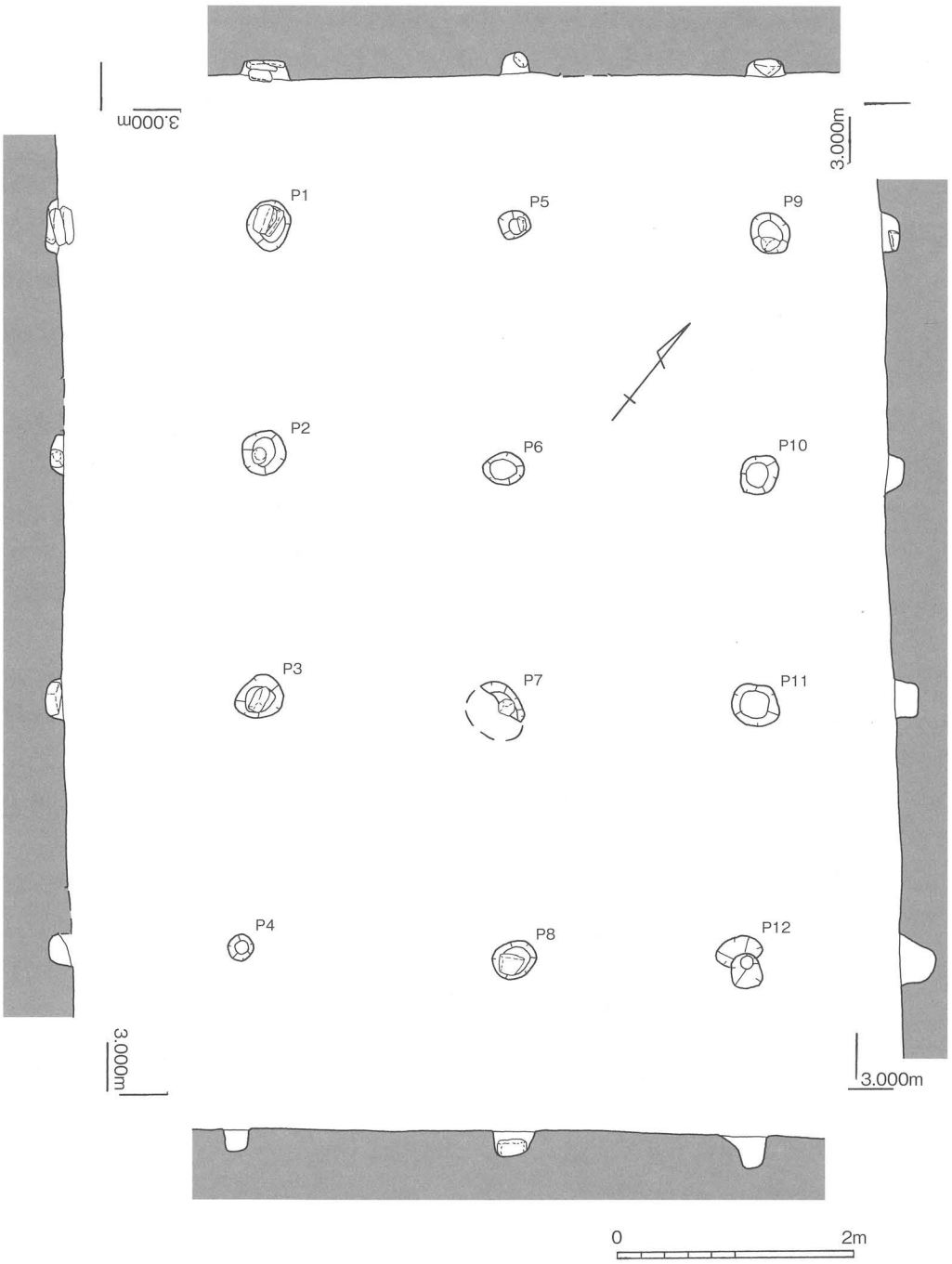


図110　SB322平面・断面図

(1) 掘立柱建物

SB322

東西２間（4.25m）、南北３間（6.1m）の総柱の建物である。柱間は、東西のＰ１～Ｐ５～Ｐ９が、2.1m、2.15m、南北のＰ１～Ｐ２～Ｐ３～Ｐ４が2.0m、2.0m、2.1mである。柱穴の掘形は直径0.2～0.4mの円形で、根石を据えているものが多い。柱痕は確認できなかった。

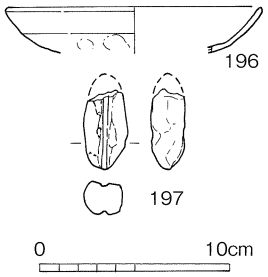


図111　SB322出土遺物実測図

図111はSB322からの出土遺物である。196は土師器小皿で口径13.4cmである。197は有溝土錘で現長4.3cmを測る。表裏両面に溝を設ける。12世紀末以降のものと思われるが、小片のため断定できない。

SB323

撹乱や井戸によって柱穴のいくつかは破壊されているが、東西３間（6.1m）、南北４間（7.6m）の総柱の建物に復元できる。柱間は、東西のＰ１～Ｐ６～Ｐ11～Ｐ16が、2.0m、2.0m、2.1mで、南北のＰ１～Ｐ２～Ｐ３～Ｐ４～Ｐ５が、1.8m、2.1m、1.9m、1.8mである。柱穴の掘形は直径0.2～0.4mの円形である。柱痕は確認できなかった。

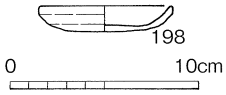


図112　SB323出土遺物実測図

図112の198はSB323出土の土師器小皿である。口径7.0cm、器高1.4cmである。12世紀後半頃と考えられる。

SB323より西については柱穴が密集しており、以下に述べる掘立柱建物４棟の他、建物としてまとまらない柱穴を多数確認した。

SB324

西側が従前建物の基礎により破壊されているが、東西２間（4.2m）以上、南北５間（10.9m）の総柱の建物である。柱間は、東西のＰ１～Ｐ７～Ｐ13が、2.1m、2.1m、南北のＰ13～Ｐ14～Ｐ15～Ｐ16～Ｐ17～Ｐ18が2.4m、2.0m、2.3m、2.0m、2.2mを測る。柱穴の掘形は直径0.2～0.6mの円形で、根石を据えているものもある。柱痕は確認できなかった。

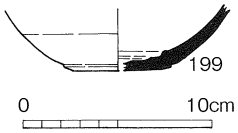


図113　SB324出土遺物実測図

図113の199はSB324出土の東播系須恵器椀底部である。底径5.7cmを測る。11世紀末～12世紀のものと思われる。

SB325

西側及び南側が従前建物の基礎により破壊されているが、東西１間（2.0m）以上、南北５間（9.7m）以上の総柱の建物である。柱間は、東西のＰ１～Ｐ７が2.0m、南北のＰ７～Ｐ８～Ｐ９～Ｐ10～Ｐ11～Ｐ12が、1.7m、2.1m、1.8m、2.0m、2.1mである。柱穴の掘形は直径0.2～0.4mの円形で、根石を据えているものもある。柱痕は確認できなかった。

SB326

東西1間（2.4m）、南北２間（3.5m）の建物で、柱間は、東西のＰ１～Ｐ４が2.4m、Ｐ３～Ｐ６が2.1mであり、南北のＰ４～Ｐ５～Ｐ６は1.8m、1.7mを測り、平面形とし

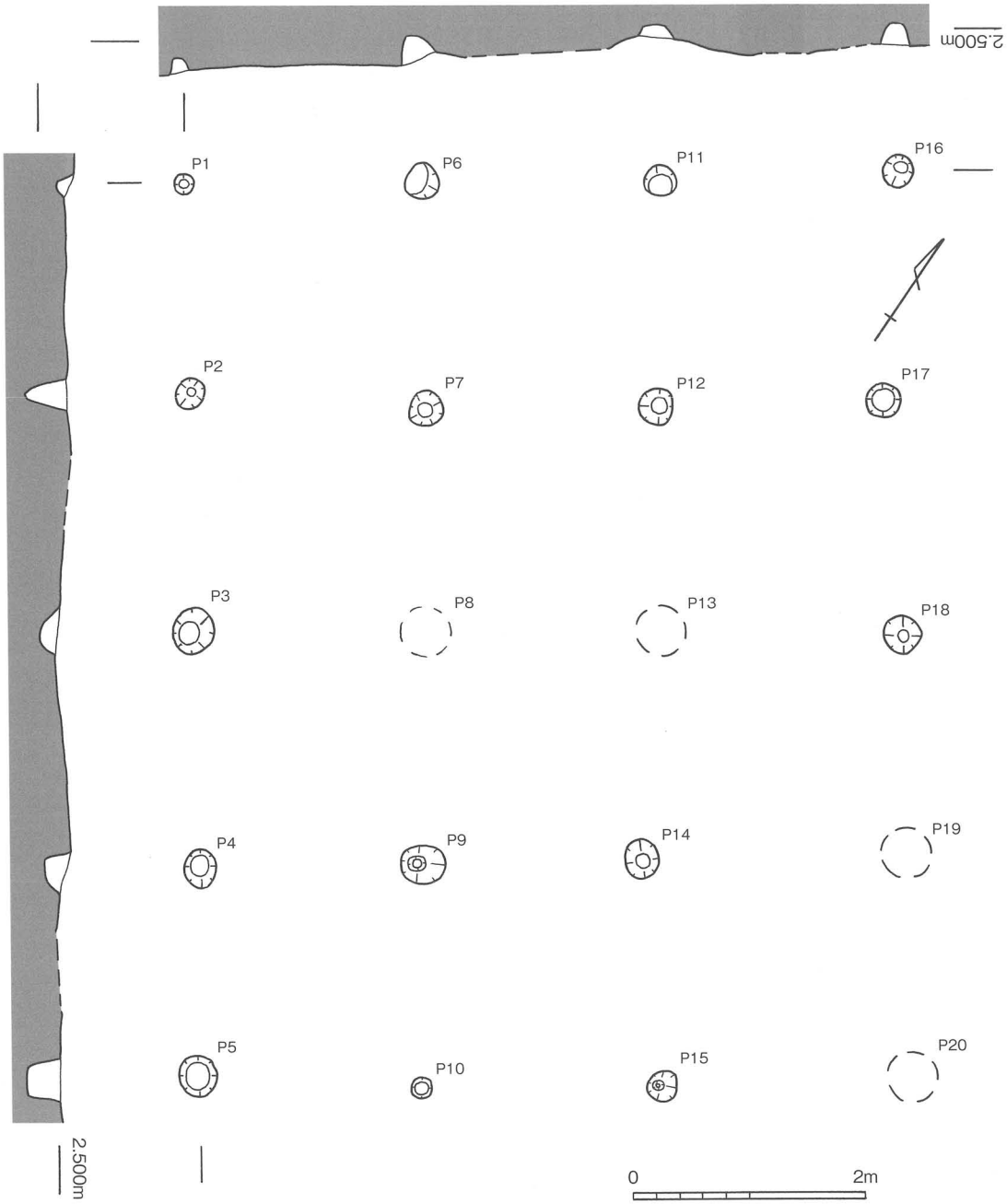


図114　SB323平面・断面図

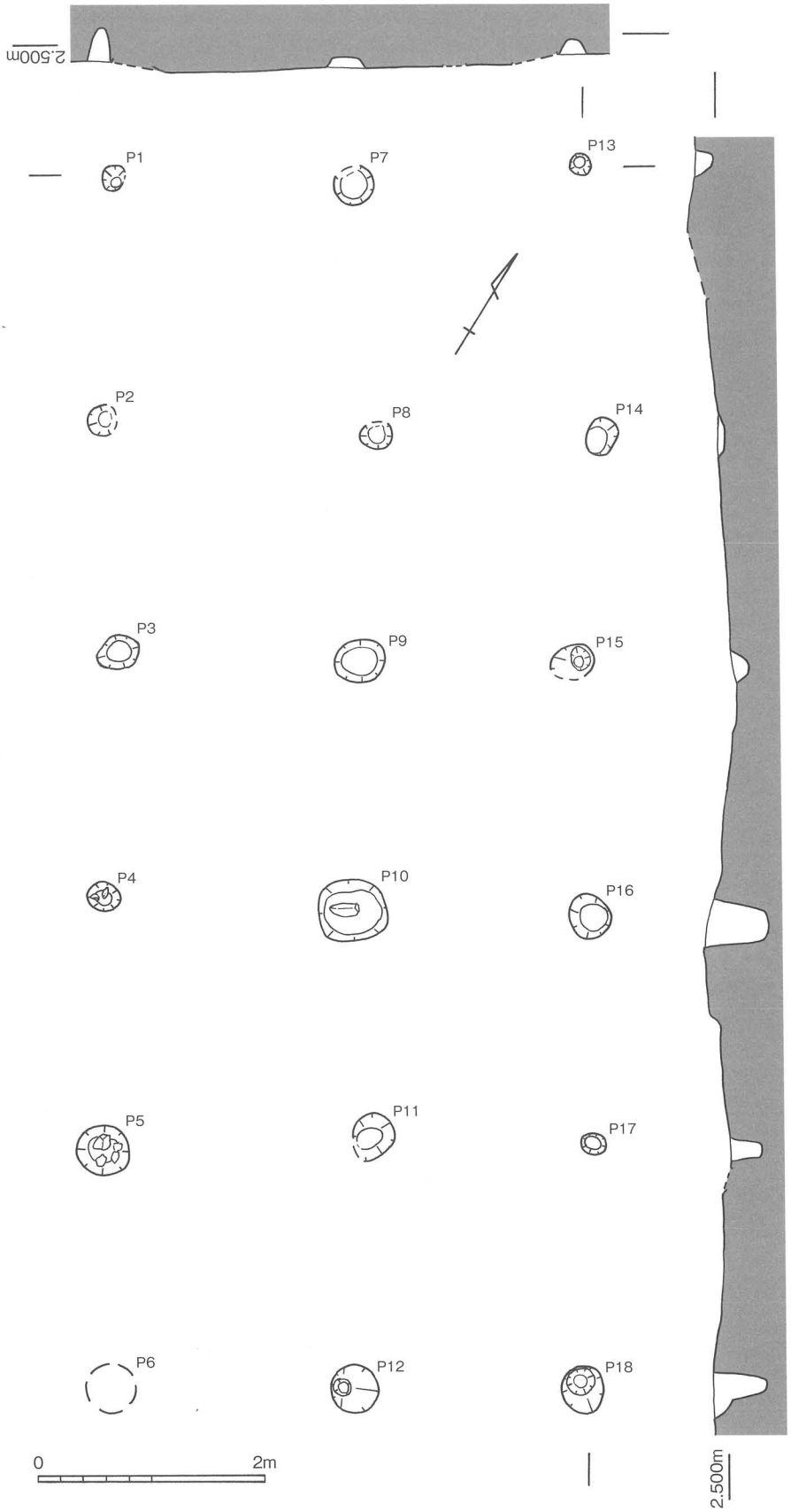


図115　SB324平面・断面図

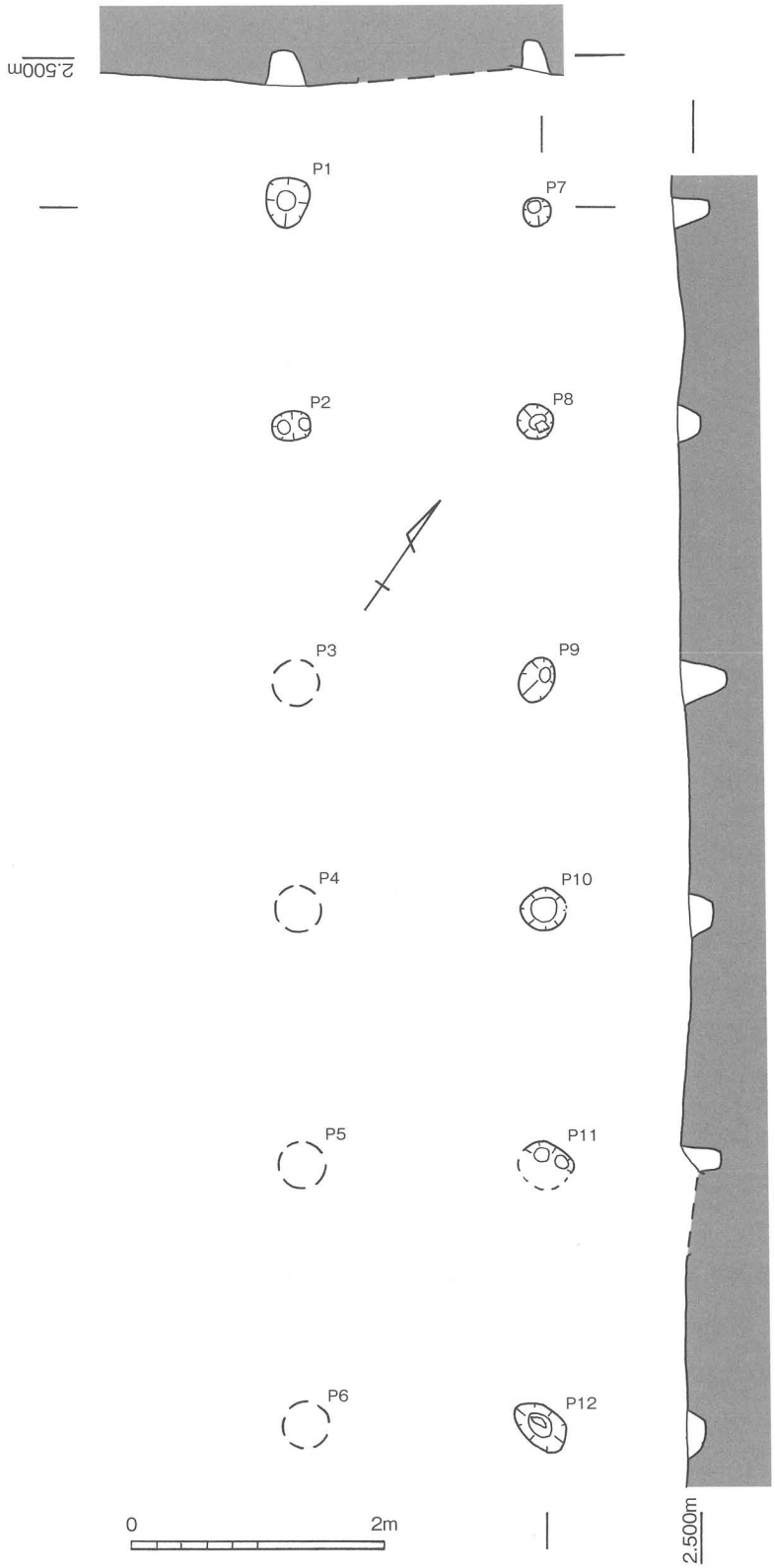


図116　SB325平面・断面図

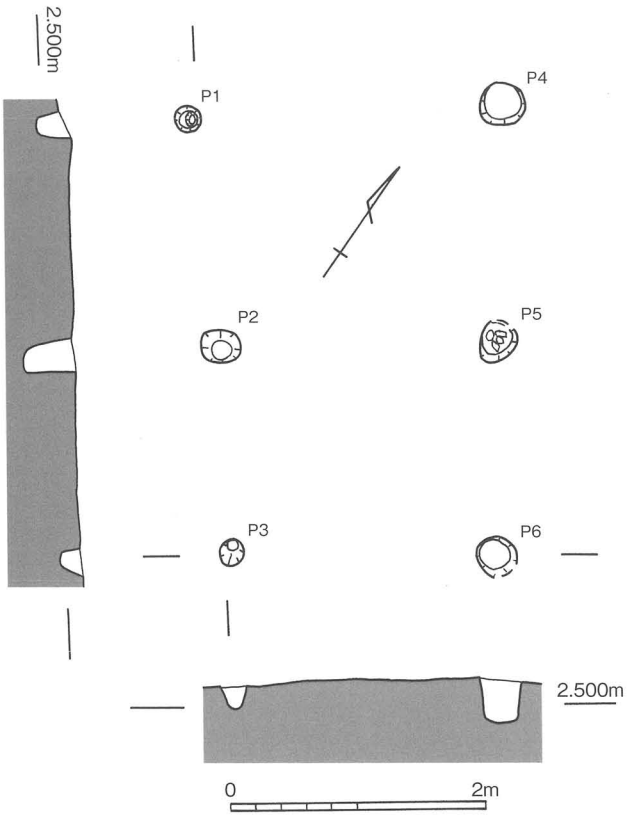


図117　SB326平面・断面図

てはわずかに台形を呈する。柱穴の掘形は直径0.2～0.4mの円形で、根石を据えてあるものも見受けられる。柱痕は確認できなかった。

図118の200はSB326出土の土師器小皿である。口径9.7cm、器高1.8cm以上で、「ての字」口縁の形態を残すものである。11世紀末～12世紀のものと考えられる。

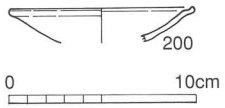


図118　SB326出土遺物実測図

SB327

東西１間（2.2m）、南北２間（3.2m）の建物である。柱間は、東西がＰ１～Ｐ４で2.2m、南北がＰ４～Ｐ５～Ｐ６で、1.7m、1.5mを測る。柱穴は直径0.2～0.4mの円形で、柱痕は確認できなかった。

図120の201は土師器大皿で、口径15.4cm、器高3.3cmである。体部外面に指頭圧痕を残す。13世紀代と思われるが明確ではない。202はSB327出土の中国製白磁皿で、口径10.0cm、器高2.2cmである。見込みに草花の印刻がある。山本分類のⅧ２ｂ類で13世紀前後のものと思われる。

SB328

調査区南東部で、隣接した２棟の建物を検出した。SB328は東西５間（10.8m）、南北３間（4.9m）の総柱の建物である。柱間は、東西のＰ１～Ｐ２～Ｐ３～Ｐ４～Ｐ５～Ｐ６が、2.2m、2.2m、1.9m、2.2m、2.3mで、南北はＰ６～Ｐ12～Ｐ18～Ｐ24が、1.2m、1.9m、1.8mを測るが、Ｐ２～Ｐ８～Ｐ14～Ｐ20では、1.2m、2.6m、1.2mを測り、中央の

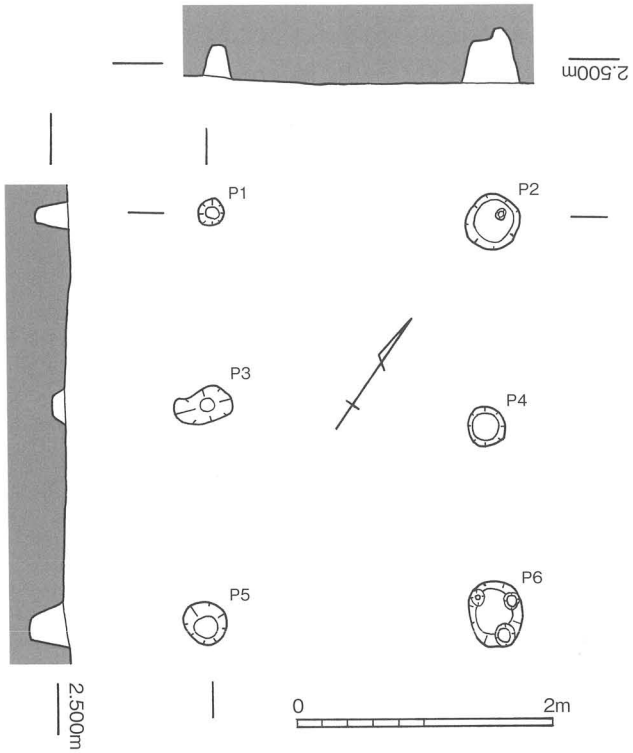


図119　SB327平面・断面図

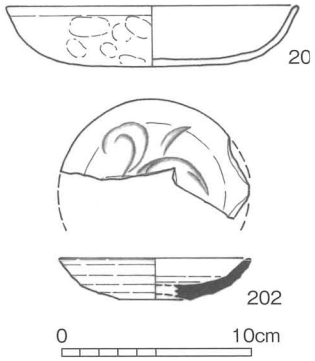


図120　SB327出土遺物実測図

柱間が、両側に比べてかなり広くなっている。柱穴の掘形は直径0.3～0.5mであるが、柱痕は確認できなかった。

図122はSB328から出土した遺物である。203は土師器埦で口径12.8cm、器高3.8cmである。内面一部にハケ目が残る。204は黒色土器Ａである。口径15.0cmで内面を丁寧にヘラミガキする。10世紀代のものと考えられる。

SB329

東西２間（4.5m）、南北２間（3.3m）の総柱の建物である。柱間は、東西のＰ１～Ｐ２～Ｐ３が、2.1m、2.4m、南北のＰ１～Ｐ４～Ｐ７が1.6m、1.7mである。柱穴の掘形は直径0.3～0.5mで、柱痕が確認できるものもある。SB329はSB328の附属屋と考えられる。

図123の205はSB329出土の棒状有孔土錘である。完形で全長6.6cm、最大径1.2cmを測る。両端部に直径４㎜の穿孔がある。時期は不明である。

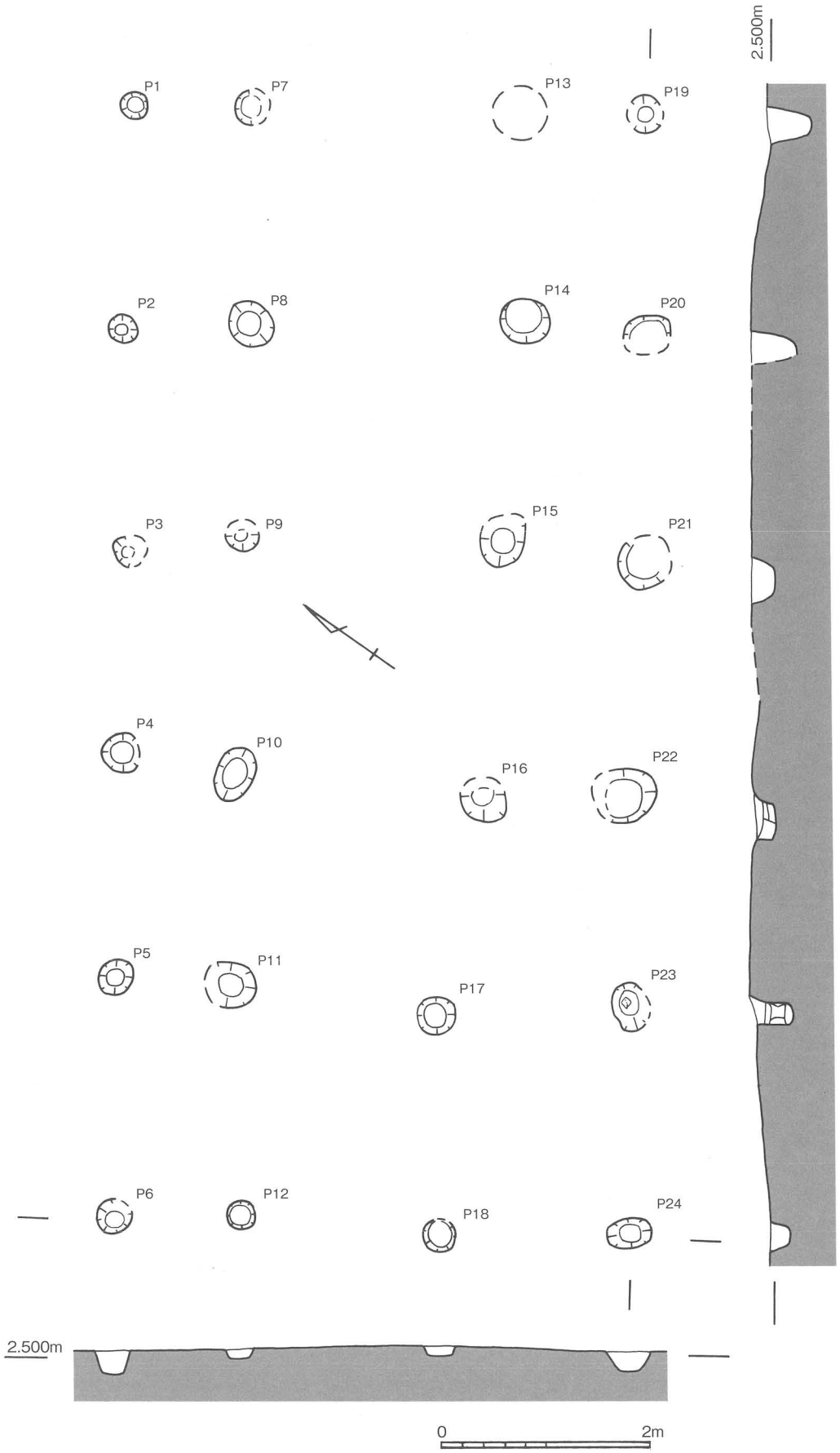


図121　SB328平面・断面図

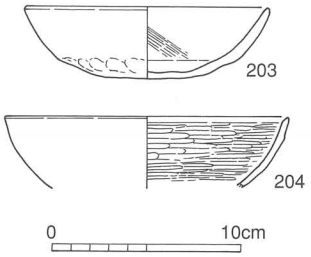


図122　SB328出土遺物実測図

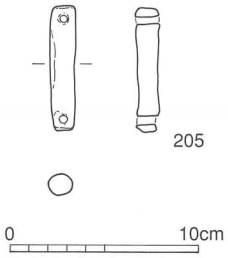


図123　SB329出土遺物実測図

図124　SB329平面・断面図

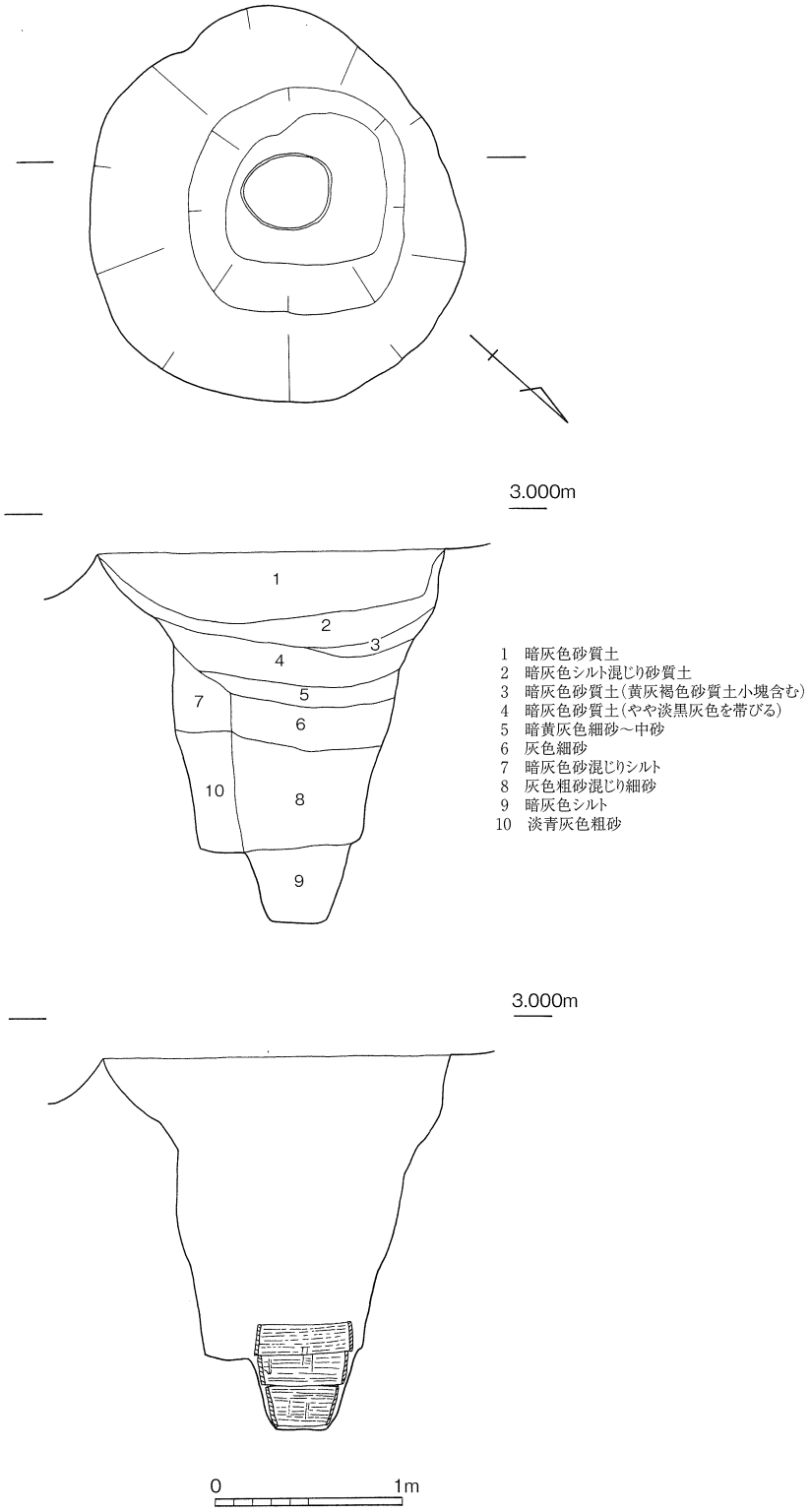


図125　SE315平面・断面図

(2) 井戸

SE315　　東西約2.1m、南北約2.0mを測る円形の掘形の井戸で、深さは約1.95mを測る。

井戸の構築部材は廃棄時に全て抜き取られ、底部に径約0.4～0.5mの曲物を3段据え付けている。曲物の高さは3段で約0.55mである。

廃棄時に構築部材をすべて抜き取り、それ以前の堆積土層もあまり確認できない。た

だし、井戸底部の曲物内部から須恵器埦が出土している。井戸廃棄後の埋土からも同じく須恵器埦が出土している。

図126はSE315から出土した遺物である。206～209は井戸埋土上層から、210・211は同下層から、そして212・213は底部曲物内からのものである。206・207は土師器小皿で前者は口径9.2cm、器高13cm。後者は口径8.8cm、器高1.5cmである。両者共底部外面に糸切り痕を残す。208・209は東播系須恵器埦で208は口径16.8cm、209は底径4.8cmである。210は土師器小皿で口径10.0cm、器高1.9cm。211は東播系須恵器埦で口径15.0cm、器高5.2cmである。212・213も東播系須恵器埦で前者は口径15.2cm、後者は口径16.2cm、器高6.4センチである。井戸底部の曲物内出土の須恵器は11世紀代であるが、埋土上層～下層出土の遺物は12世紀初頭～前半と考えられる。これらのことから11世紀代に機能し、12世紀前半に廃絶した井戸だと考えられる。

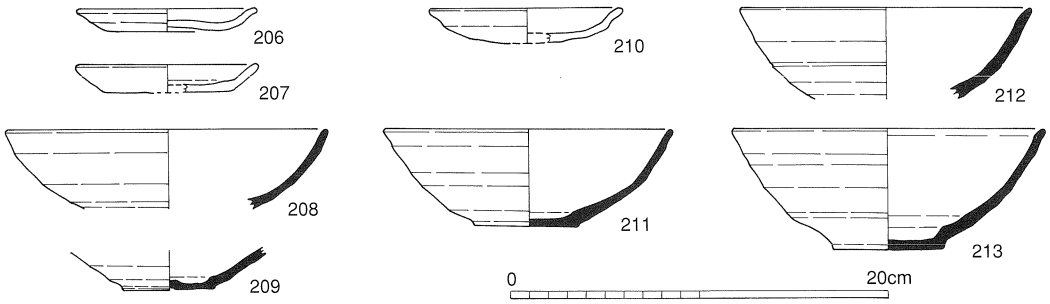


図126　SE315出土遺物実測図（1）

図127は、SE315を構成する井戸材と、井戸内部より出土した遺物である。なお井戸材の内、底部に据えられていた曲物が３点あったが、２点については取り上げ時に粉砕しており、写真・図に反映できていない。

SE315の構造は出土状況からは推測が困難であるが、出土木材の構成から、縦板組みの井戸であったことが想像される。多数の板材が出土しており、その内９点について図示している。これらは大きく３型式に分類できる。第１は比較的幅が狭く（12～14cm）平坦に調整されたもの（214、215、220）。第２は幅が20～23cm幅の割り板で、平板調整するものの、芯材面の中央部および辺材面の両側部に湾曲面を残すもの（216～218、219、221）。第３は幅44cm、厚さ約5cmと重厚で、大きく湾曲するクスノキ製のもの（222）である。前二者については縦板組み井戸の専用材と考えられるが、第3の部類は刳り貫き井戸の井筒として製造されたものの転用とも考えられるが、定かではない。また、クスノキは船材としての使用例があり、船材の転用の可能性もある。

223、225はヒノキ製の曲物である。直径については定かではない。223は高さ12.6cmで樺皮綴じ、内面に罫書き線が施されている。

224は縦板組みの桶板の１枚である。幅５cm、高さ15.4cmのヒノキ製である。

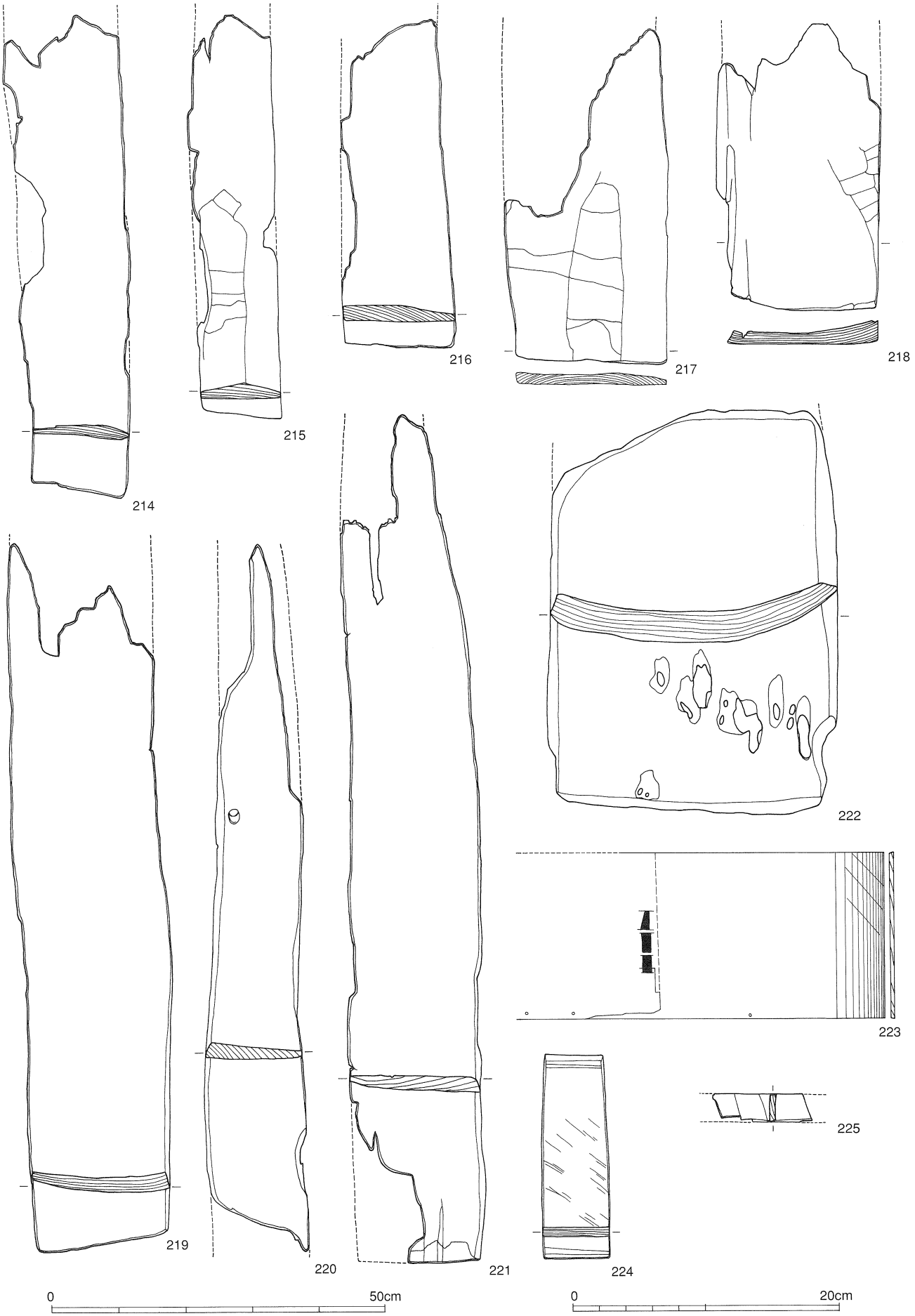


図127　SE315出土遺物実測図（2）

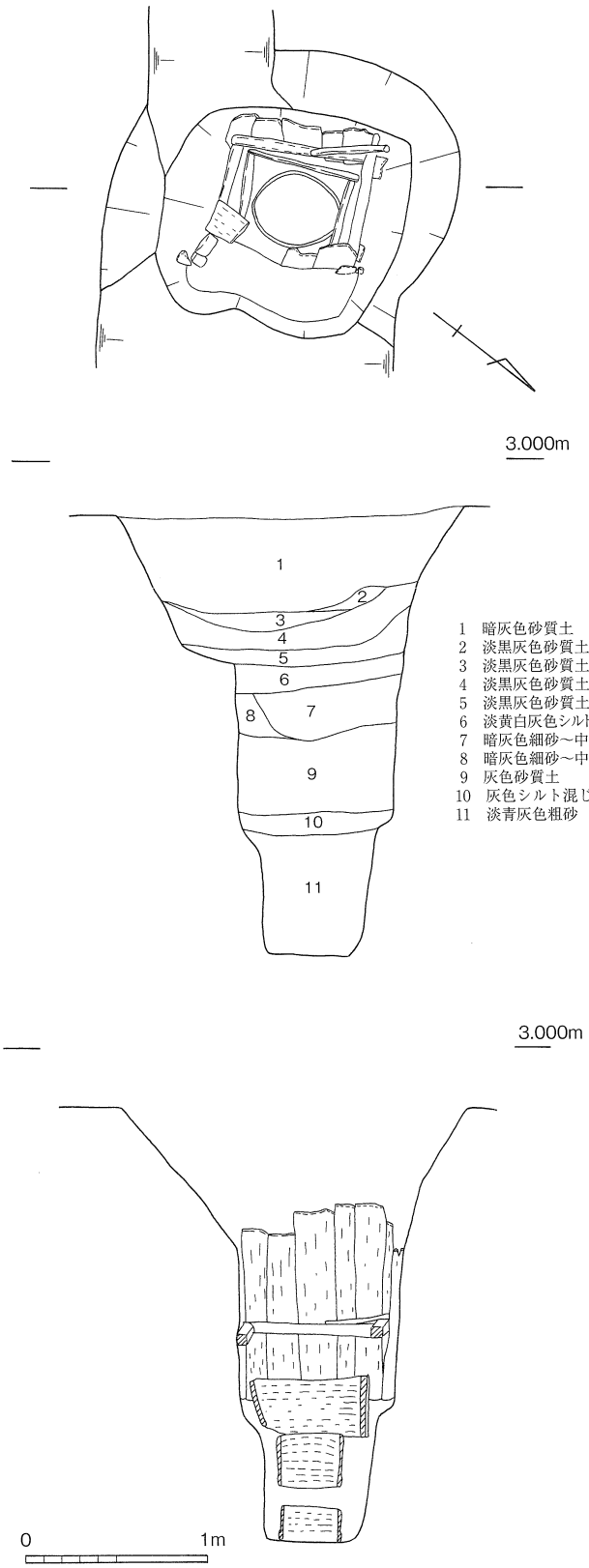


図128　SE316平面・断面図

SE316　　SE315の東で確認した、東西約2.0m、南北約1.8mの方形の掘形を持ち、深さ約2.4mを測る木組み井戸である。木組みは東西約0.7m×南北0.8mで、縦板と横桟、根石に据えた隅柱により、井戸上面から深さ約1.8mまで構築している。その下面で、縦幅（長さ）東西0.55m、南北0.6mで横幅（深さ）約0.3mの方形の横板による、蒸篭組みの木枠を埋め込んでいる。木枠の内面底部に中礫を敷き詰め、中央に２段の曲物を埋め込み、集水施設としている。曲物の径は約0.5mで、敷き石上面から曲物底部までは、深さ約0.6mを測る。

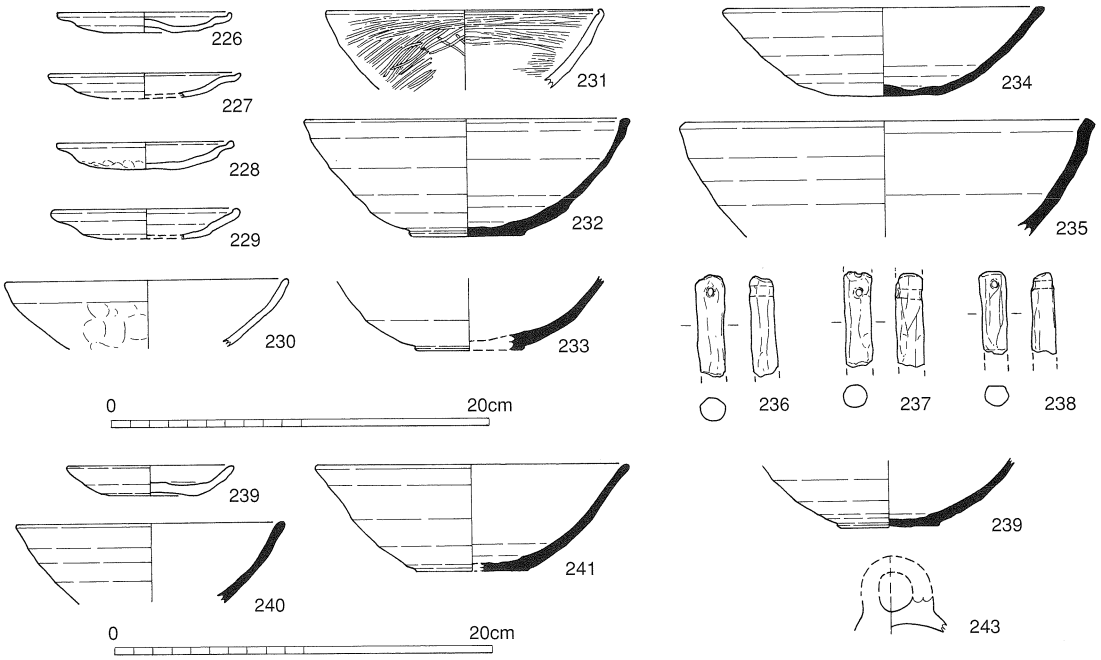


図129　SE316出土遺物実測図（1）

図129の226～243はSE316から出土した遺物で、226～238は上層から、239～241は下層及び曲物内から、242・243は井戸掘形内から出土した。226～229は「ての字」口縁の土師器小皿で226は口径9.0cm、器高1.1cm、227は口径10.0cm、228は口径9.2cm、器高1.4cm、229は口径9.8cm、器高1.6cmである。230は土師器埦で口径14.8cmを測る。231は口縁端部内面に一条の沈線を巡らす楠葉型の瓦器埦で口径14.6cmである。232～235は東播系須恵器で、232は口径17.0cm、器高6.1cm、233は底部の破片で底径5.5cmである。234は口径16.5cm、器高4.8cm、235は捏鉢で口径21.2cmを測る。236～238は棒状有孔土錘でいずれも完形ではない。236は現長5.5cm、最大径1.5cm、237は現長5.1cm、最大径1.4cm、238は現長4.5cm、最大径1.4cmである。239は土師器小皿で底部外面に糸切り痕がある。口径8.6cm、器高1.6cmである。240は東播系須恵器埦で口径14.0cmである。241も東播系須恵器埦で口径16.2cm、器高5.7cmである。242は同じく東播系須恵器埦の底部破片で底径5.0cmを測る。243は土師器の飯蛸壷である。井戸上層には11世紀～12世紀後半の遺物を含むが、下層は12世紀前半までのものである。

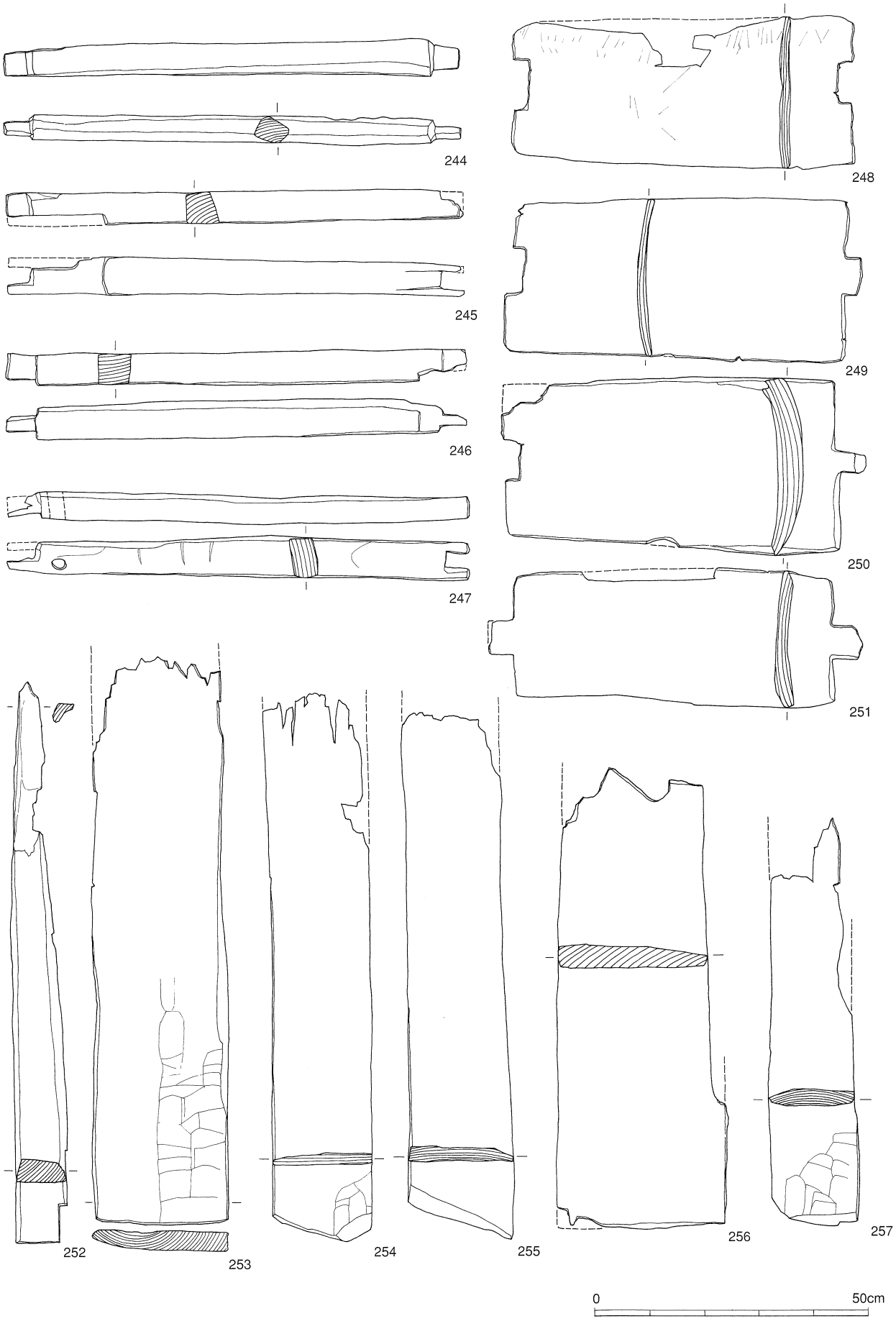


図130　SE316出土遺物実測図（2）

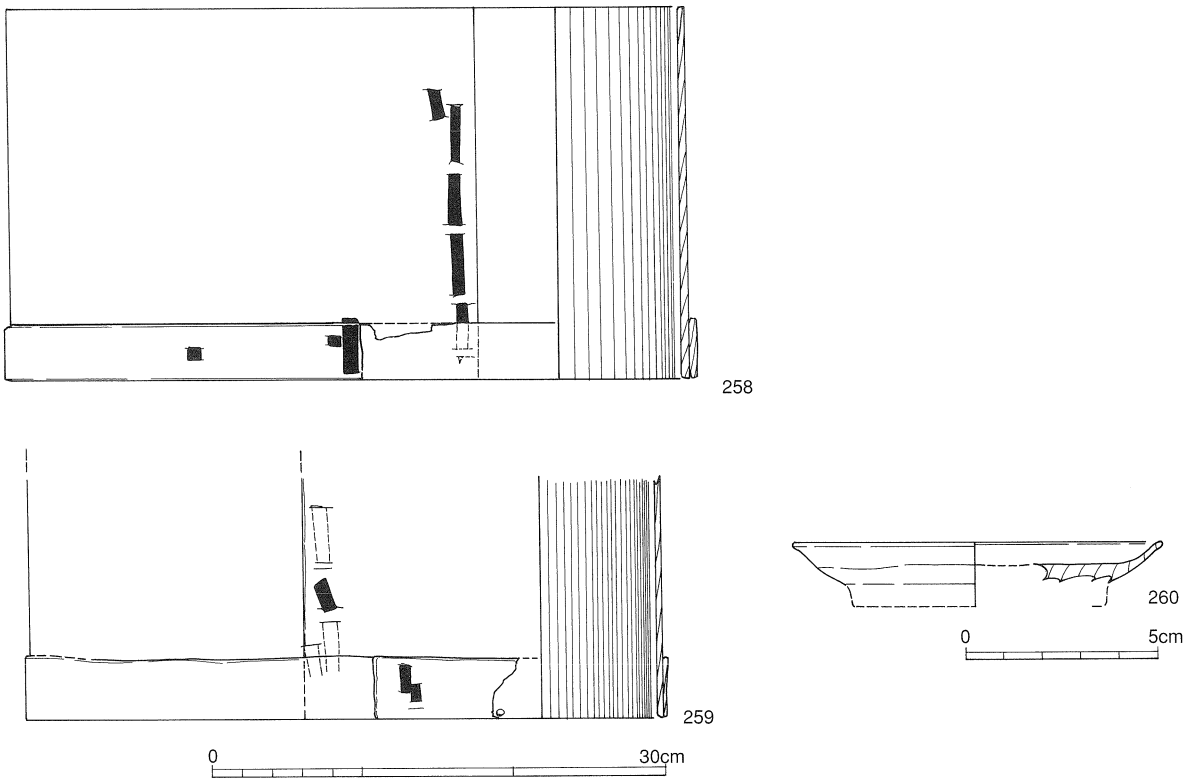


図131　SE316出土遺物実測図（3）

図130・131はSE316出土の木製品である。井戸は内側底から、２段の曲物、４枚の横板蒸篭組み、隅柱＋横桟＋縦板組みの、３構造で構成されている。

252はヒノキ製の隅柱で、１本のみ出土している。9.5cm×４cmの全面調整された角材を使用しており、長さは上端を欠損しつつ103cmを測る。枘穴は開けられていない。

244～247は横桟である。端部形状に２通りあり、長方形断面の太枘を形成するもの（244、246）と、側面観が「コ」状を呈するもの（245、247）がある。これらは互いに組みあい、「ロ」字を構成していた。有効内寸は75cm内外を測る。図示したものについてはすべてヒノキ製であるが、それ以外にスギ材を使用したものもある。これらに補助されて縦板が立て並べられていた（253～257）。いずれも割り板を平板加工したものであるが、法量は幅18cm～31cmとまちまちで、画一性に乏しい。材にはモミ属が使用されている。

横板の蒸篭組みされた枠は４材構成である。有効内寸は56～58cmで、高さ28～32cm、厚さは２cm程度の薄いものと約５cmの厚いものがある。これらは端の組み合わせ部の形状に３型式が存在する。第1は両端を切り欠き、「凹」状を呈するもの（248）。第2は片側が「凹」、反対が「凸」となるもの（249、250）。第３は両端に「凸」部を形成するもの（251）である。

井戸底部中央にはヒノキ製の曲物が縦並びに据えられていた（258、259）。下部が259で上部が258であるが、両者の間には数cmの間隔が空き、259の腐食によるものか元来の空きと考えられる。258は直径46cm、高さ28cmを測る。本体は樺皮により綴じられる。また下辺には幅3.8cmの箍がめぐり、強度を与えられている。

259も258と同様の形状を呈するが、こちらは直径42cmとやや小ぶりで、高さは上端を欠損するため未詳である。

260は井戸内より出土した木皿片で、ケヤキを材に用いる。復元できる法量は直径9.8cmで、高台は欠損しており、身の高さのみ1.1cm以上と計測される。内面に赤漆、外面を黒漆塗りで飾る。

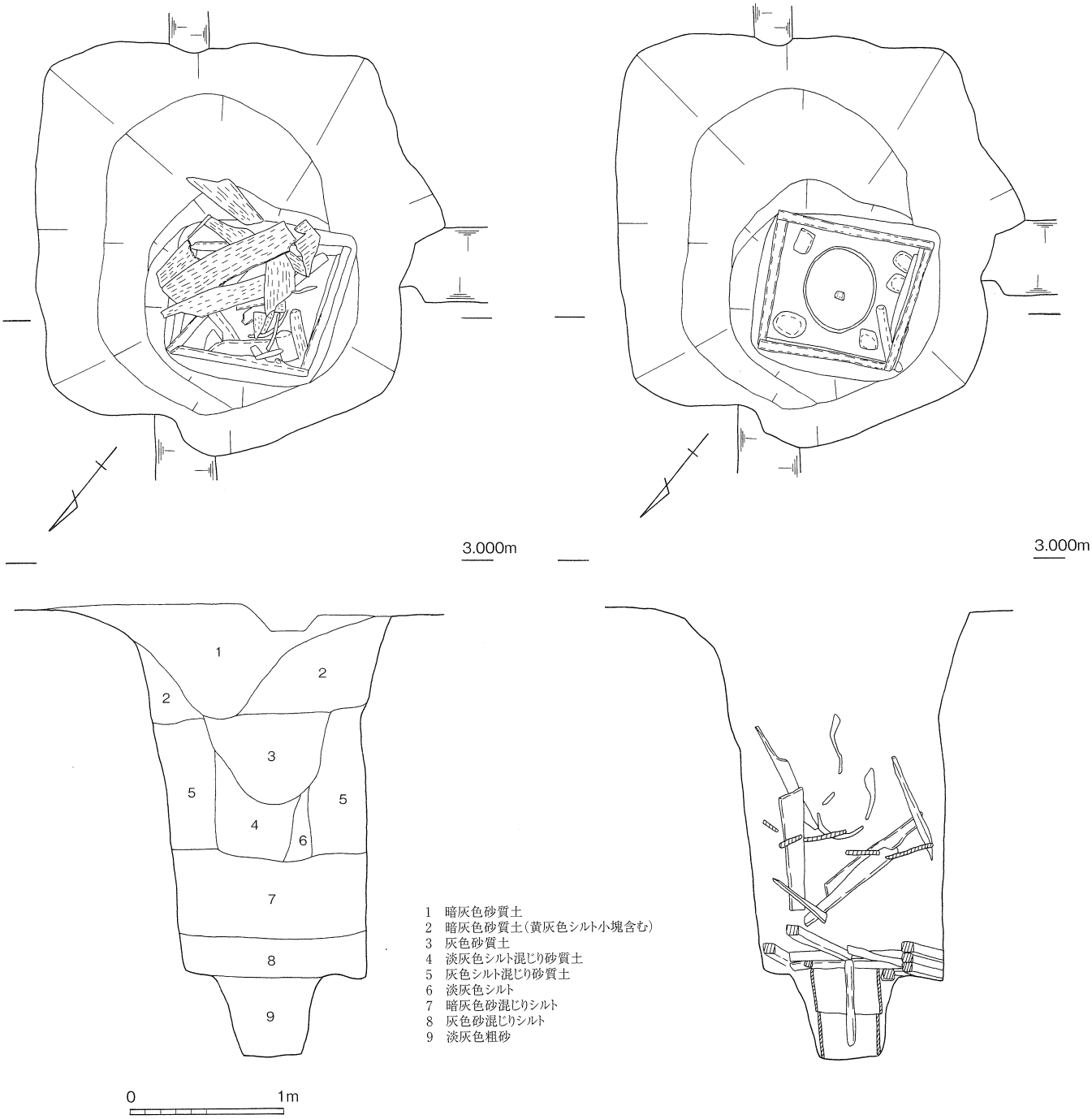


図132　SE317平面・断面図

SE317　　SE316の東で検出した、東西約2.7m、南北約2.8mの掘形を持ち、深さ約2.8mを測る方形の木組み井戸である。

井戸枠材は底部付近を除き倒壊しており、一部は抜き取られている可能性も考えられ

る。倒壊している材は縦板とわかる材が多い。また井戸底部から隅柱を据えるための根石も確認されている。これらのことから、井戸上部は縦板、隅柱等による木枠組みが構築されていたと考えられる。

井戸下部は良好に残存している。縦長の角材により、東西約1.0m、南北約0.9mで深さ約0.2mの方形に枠組みされている。この角材は、３段まで重ねられた状況が、確認できる。この角材による方形木枠内の底部には、四隅に隅柱を据える根石と、中央に曲物が２段に据え付けられている。曲物は径約0.44mで、２段で高さ約0.6mを測る。

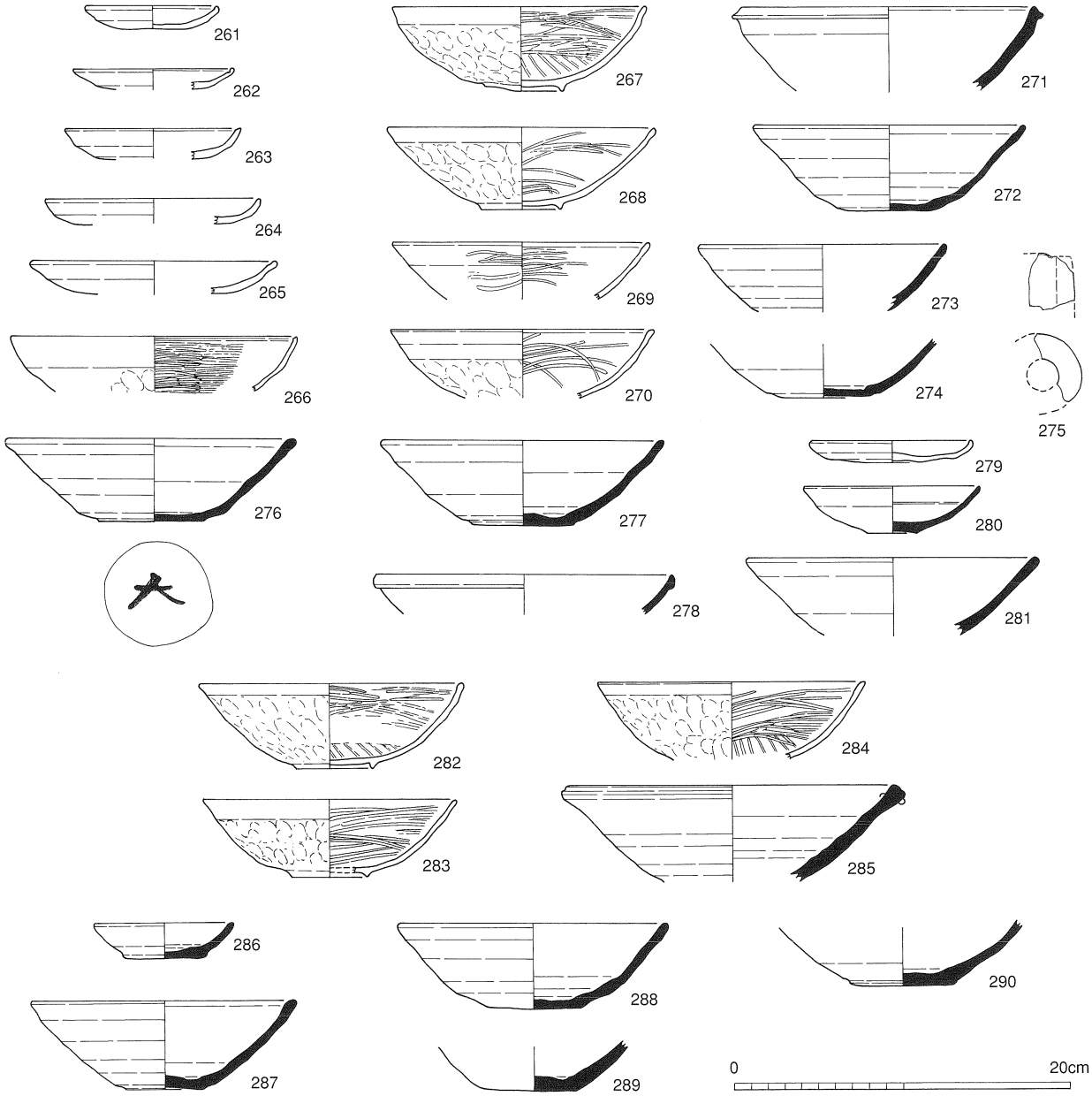


図133　SE317出土遺物実測図（1）

図133の261 ～ 290はSE317出土遺物である。261 ～ 275は上層、276 ～ 278は中層、279 ～ 281は木枠内、282 ～ 285は底部の曲物内のもので、286 ～ 290は井戸掘形から出土したものである。

261 ～ 265は土師器小皿で261は口径7.8cm、器高1.4cm、262は口径9.6cm、器高1.2cm、263は口径10.4cm、器高1.3cm、264は口径12.8cm、器高1.5cm、265は口径14.4cm、器高2.0cmである。266は土師器埦で口径17.0cmである。内面を丁寧にヘラミガキし、口縁端部に一条の沈線を巡らす。267 ～ 270は瓦器埦である。267は口径15.0cm、器高5.1cm、268は口径15.8cm、器高5.0cmである。269は口径15.2cm、270は口径15.4cmでいずれも和泉型である。271 ～ 274は東播系須恵器である。271は小型の捏鉢で口縁端部を外方に摘み出す。口径17.4cmである。272 ～ 274は埦で272は口径16.0cm、器高5.2cm、273は口径14.6cm、274は底径5.5cmである。275は管状土錘の破片である。

276・277は東播系須恵器埦で276は口径17.2cm、器高4.9cmで底部外面に「大」の字の墨書がある。277は口径17.0cm、器高4.9cmである。両者共12世紀中頃と考えられる。278は中国製白磁碗で山本分類のⅡ１類である。279は土師器小皿で口径9.6cm、器高1.3cmである。280は中国製白磁小皿で山本分類のⅧ１ｂ類である。281は東播系須恵器埦で口径17.2cmを測る。

282 ～ 284は瓦器埦で282は口径15.6cm、器高5.1cm、283は口径15.2cm、器高4.7cm、284は口径15.6cmである。いずれも12世紀中頃のものと考えられる。285は東播系須恵器捏鉢で口径19.0cmである。

286 ～ 290は東播系須恵器である。286は小皿で口径8.4cm、器高2.2cm、287は口径15.5cm、器高5.3cm、288は口径15.8cm、器高5.1cmである。289・290は底部の破片で前者は底径5.0cm、後者は底径6.4cmを測る。井戸内部から出土した遺物と時期的には大きな差異はないものと思われる。

図134の291 ～ 294はSE317から出土した平瓦類である。292・293は木枠内から、291・294は井戸掘形から出土した。291は凹面に布痕、凸面にタタキ痕を残す。292は凹面に粗い布痕、凸面は指ナデ痕を残す。293も凹面に粗い布痕を残す。凸面はナデと思われるが残存状態が悪く不明である。294も凹面に粗い布痕を残し、凸面はナデ痕が認められる。伴出遺物から見て12世紀代のものと思われる。

図135・136はSE317出土木製品である。井戸は、縦板（295 ～ 302）を横桟で補強する構造であり、底部に2段の曲物を据えていた。しかし縦板および横桟は崩壊し、セット関係が定かでない。横桟については両端部が「凸」状を呈するもの（303、304）が４点、「凹」状を呈するもの（305、306）が４点数えられるため、これら２種による組み合わせが２セット想定できる。また長さ57cm前後で、断面が4.5 ～ 5 cm角の角材が６点出土している（307 ～ 310）。これらも枠を構成した部材であろうが、その使用部位については明らかでない。

端部「凸」状・「凹」状の材はモミ属を使用しており、全面を加工する角材である。有効内寸は79 ～ 80cmに仕上げられ、断面形は一辺が5.5 ～ 6 cm程度の正方形を呈する。

底部曲物は３段（312 ～ 314）で、上から313・312・314の順に据えられていた。

312はヒノキ製で直径44cm、高さ12.4cmを測る。綴じは樺皮で、１列内３段綴じである。

313はヒノキ製で直径48cm、高さ29.4cmを測り、１列外７段の樺皮綴じである。底部付近に樺皮が２箇所１・２列確認できるため、箍などの付帯物が存在した可能性もある。

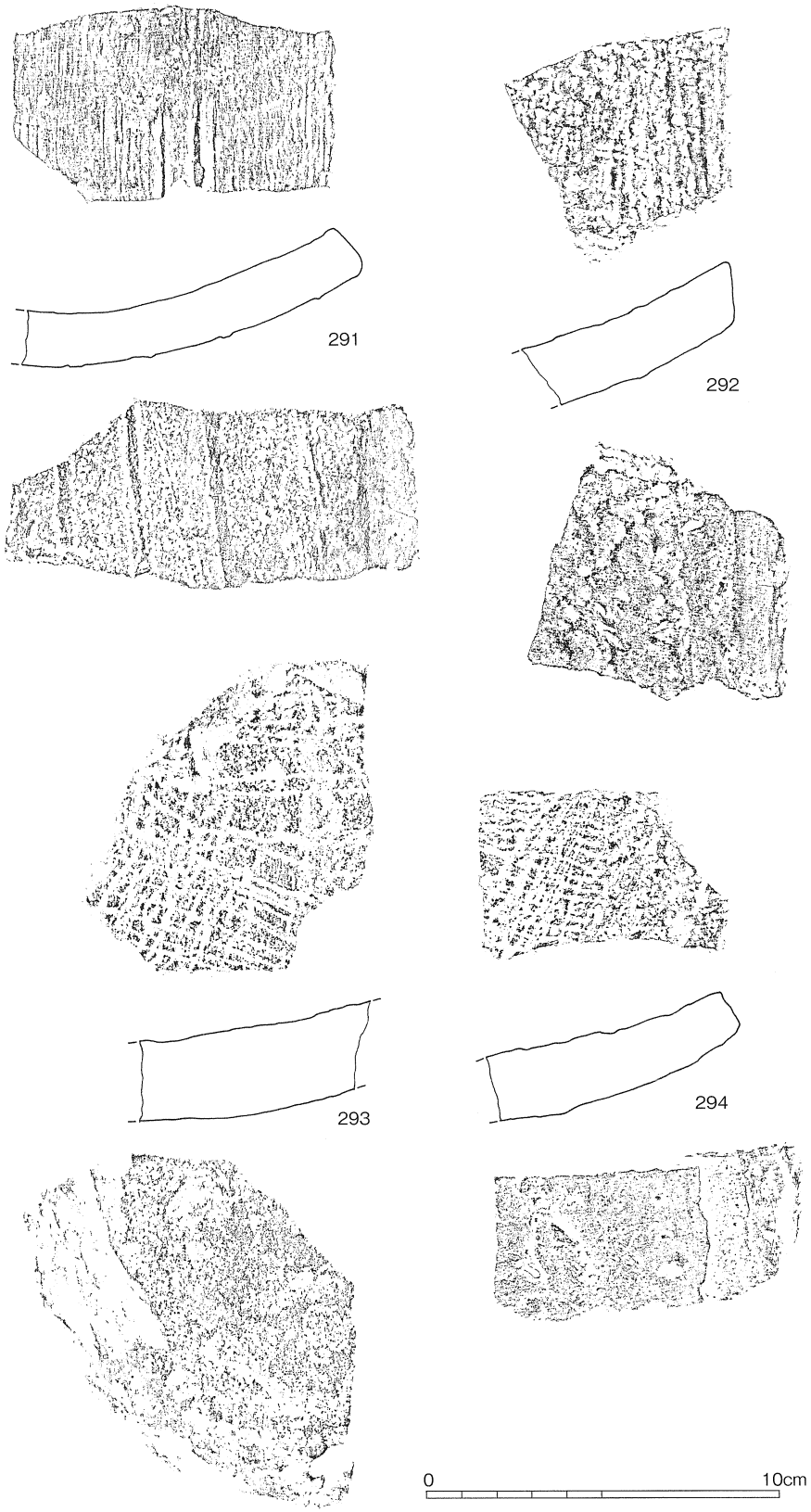


図134　SE317出土遺物実測図（2）

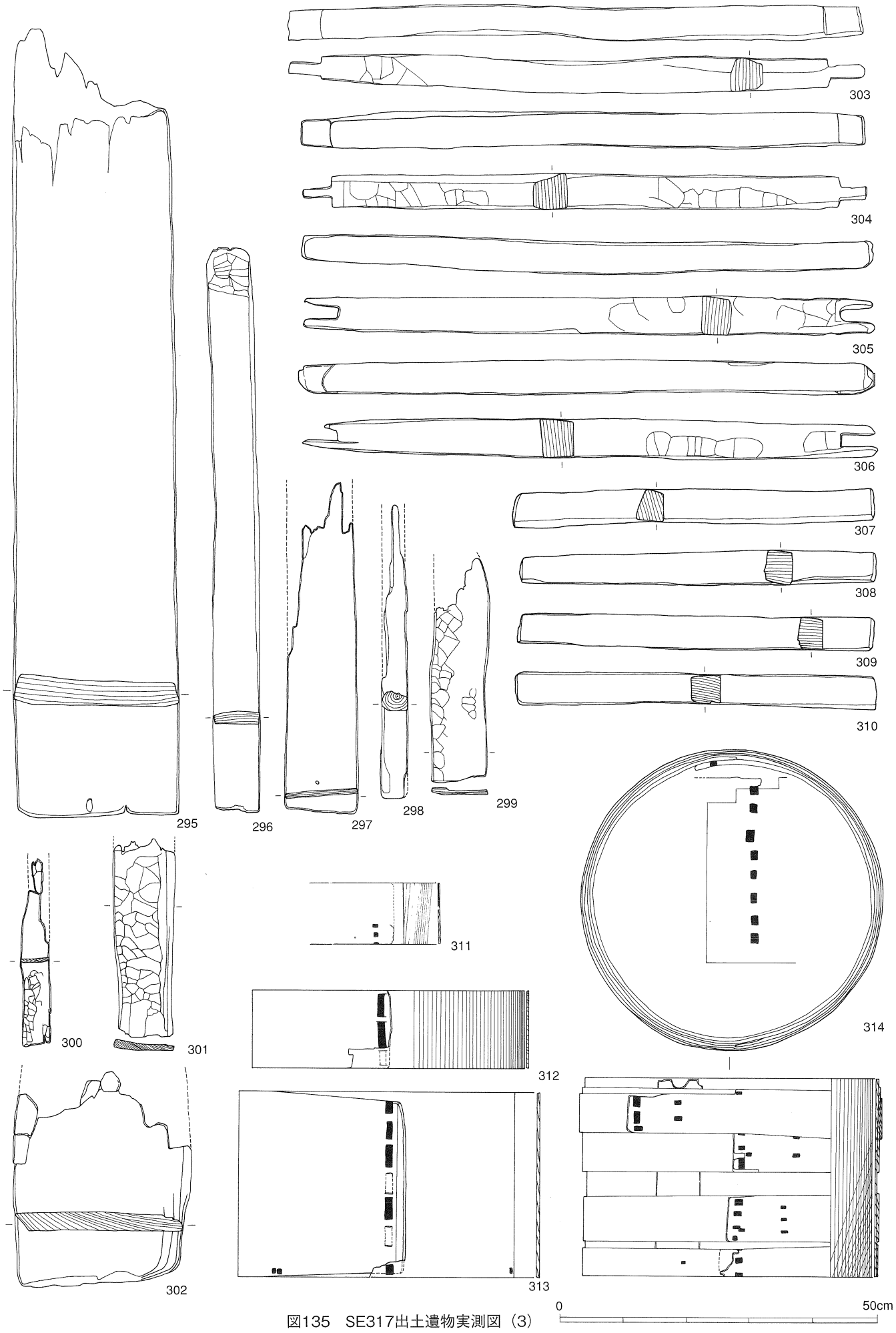


図135　SE317出土遺物実測図（3）

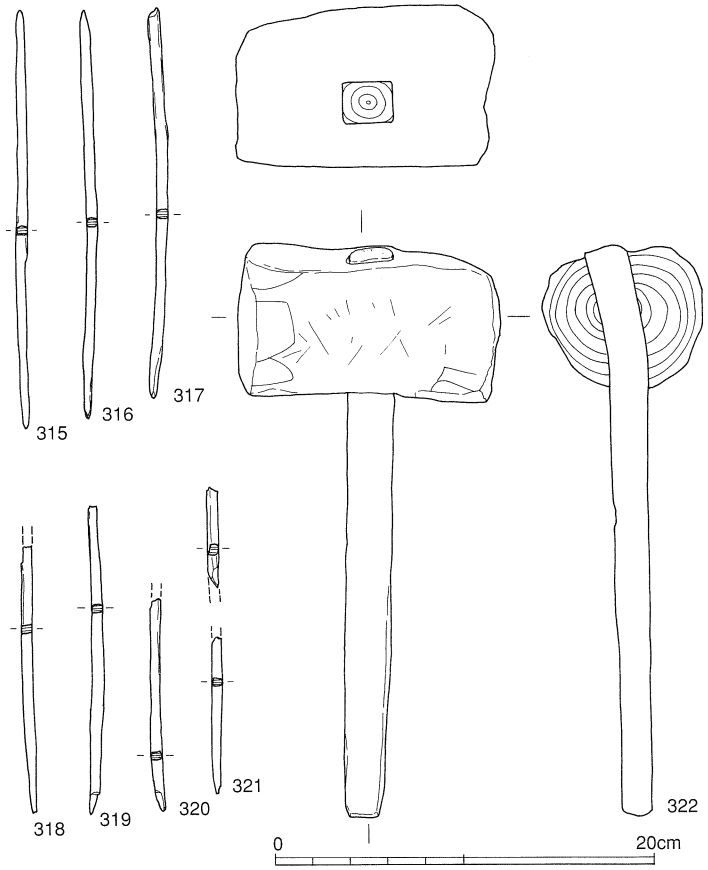


図136　SE317出土遺物実測図（4）

314は直径54cm、高さ31.6cmを測るヒノキ製の曲物である。上記２点に比して非常に丁寧な作りで、本体は１列外10段綴じと推定され、幅７cmの副板、幅13.5cmの内側箍、さらにその外側に、上から幅６cm、７cm、4.5cmの箍で補強されている。箍はそれぞれ２箇所で綴じられ、更なる強化が施された重厚なものである。

井戸の構造材以外にも、木質遺物が出土している。311は曲物片で、樺皮による綴じが残るが、法量については小片のため不明である。

315～321は箸である。いずれも面取り加工がなされ、完形品の315、316がそれぞれ全長22cm、21.5cmを測る。また断面は太さ４～６mmを測る不定な多角形を呈する。材はスギ・ヒノキ・ツガがある。322は横槌であるが、60と違い、頭部と柄が別材の２材構造をとる。頭部はアカガシ亜属製で、直径８～8.5cm、長さ14cmの円筒形である。全面加工されており、中央付近には横断貫通する長方形（2.6cm×２cm）の柄孔を穿つ。端面は摩滅しており、使用の痕跡と推測できる。柄はクリ材で、頭部に挿入される部分は柄孔に順ずるが、把握部は2.2cm×1.9cm程度の隅円方形に磨耗しているようである。

SE318

東西1.6m以上×南北2.1mの規模で、平面が楕円形を呈する掘形の素掘りの井戸である。深さは1.33mを測る。SE317によって西側の一部が破壊されている。埋土は、暗褐色砂質土と炭混じり淡黒灰色砂質土が互層になっている。

図138の323～338はSE318から出土した遺物で、323～334が上層、335～338が下層出土である。323～329は土師器小皿で、323は口径8.8cm、器高1.1cm、324は口径9.7cm、

器高1.3cm、325は口径9.5cm、器高1.5cm、326は11.0cm、器高1.5cmである。以上４点の土師器小皿は「ての字」口縁のものである。327は口径9.6cm、器高1.6cm、328は口径9.0cm、器高1.8cm、329は口径9.2cm、器高1.9cmである。329は底部外面に糸切り痕を残す。330は口径14.5cm、器高3.3cmの土師器皿である。摩滅のため調整等は不明である。331～333は東播系須恵器である。331は口径14.6cm、332は口径15.0cmの埦である。333は短頸壷で口径10.2cm、器高18.6cm、胴部最大径は20.8cmである。底部外面に糸切り痕がある。334は管状土錘で、全長4.7cm、最大径は1.2cmである。335・336は「ての字」口縁の土師器小皿で335は口径9.2cm、器高1.5cm、336は口径8.3cm、器高1.4cmである。337・338は東播系須恵器埦で337は口径15.0cm、338は口径15.4cm、器高5.8cmである。11世紀末～12世紀初頭頃のものと考えられる。

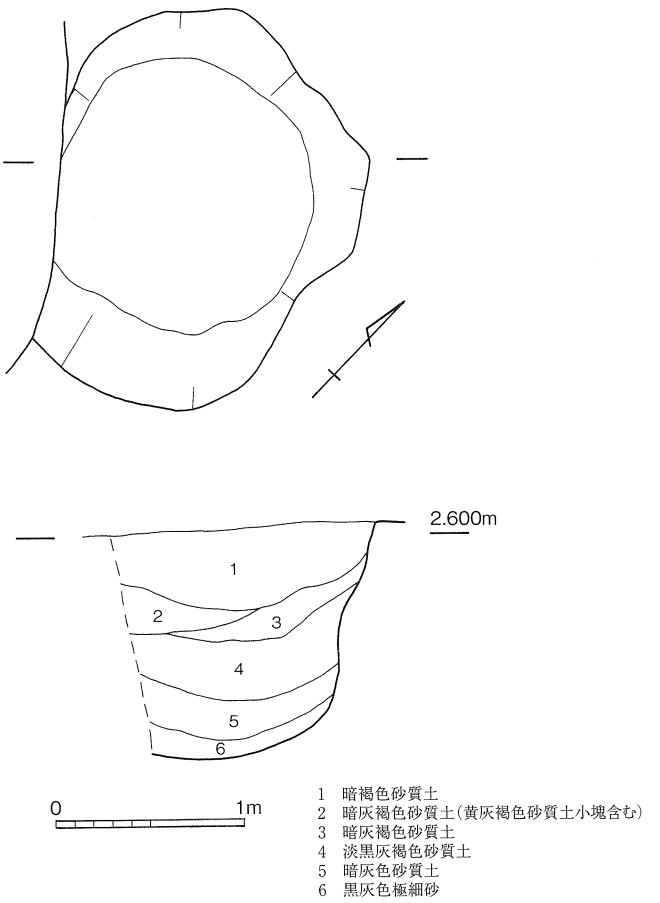


図137　SE318平面・断面図

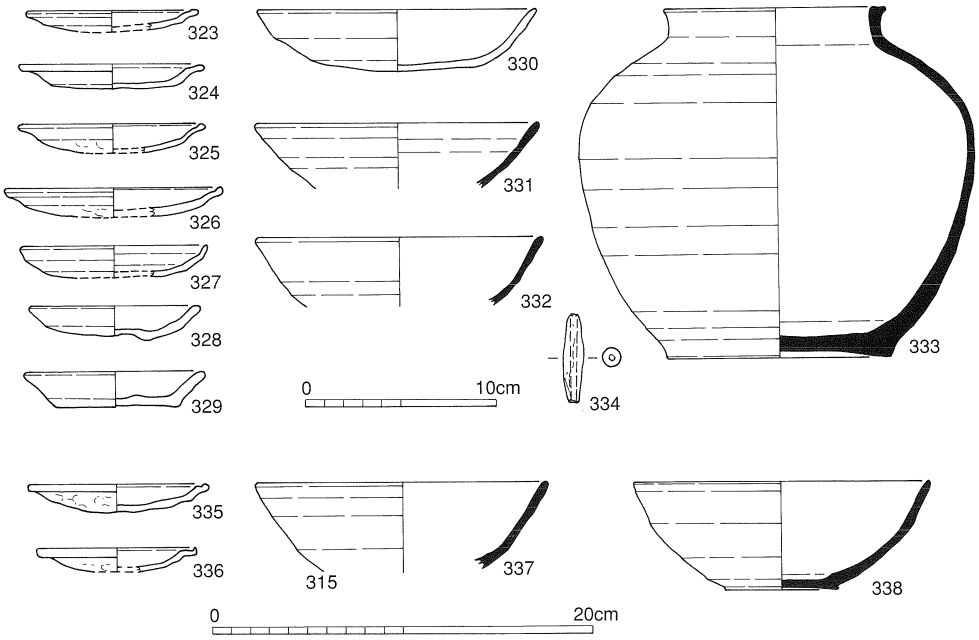


図138　SE318出土遺物実測図

SE319

SB329の南側にある直径約1.0mの円形の素掘りの井戸で、深さは0.7mを測る。検出面が、撹乱で0.5m程度削平されているので、本来は1.2m程度の深さであったと考えられる。垂直に掘り込まれており、埋土の状況から長期間中に水が溜まっていたものと思われるが、底面が湧水地点よりも浅く、水は湧き出ていなかった可能性が高い。遺物は出土していない。

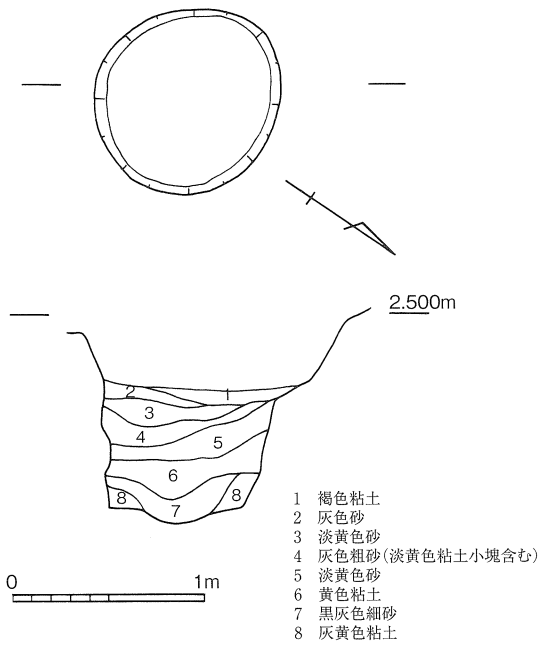


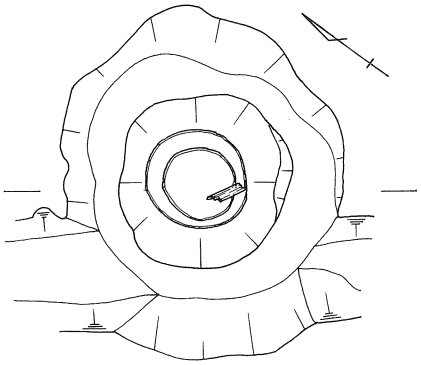
図139　SE319平面・断面図

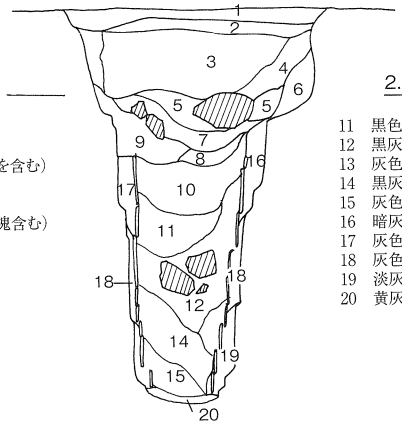
SE320

SE319の東に隣接した場所で検出した井戸で、長径2.3m、短径1.8mの楕円形の掘形で、深さは約2.6mある。内部は、検出面から約0.8m、1.3m、2.1m下で各々段ができ、井戸の底では直径約0.5mの掘形となっている。底には、曲物が７段積み重ねてあり、井戸の掘形に合わせて、下に行くにつれて小さな曲物が使用されている。井戸枠のような構造物は出土せず、抜き取られたものと考えられる。

図141の339～356はSE320から出土した遺物である。339～342は土師器埦で339は口径12.5cm、器高3.3cm、340は口径13.0cm、341は口径11.2cm、342は底径6.8cmである。343～346は土師器甕で343は口径26.2cm、344は口径33.8cm、345は口径51.2cm、346は口径28.8cmである。347・348は土師器の羽釜で347は口径22.2cm、348は口径28.6cmである。349～351は黒色土器Ａ類の埦である。349は口径16.6cm、350は高台径7.8cmで、外方に大きく開く。351は低い断面三角形の高台を貼り付ける。高台径7.6cmである。352・353と355・356は須恵器で352は口径14.8cmの埦、353は埦底部で底径6.8cm、355は鉢で口径19.2cm、胴部最大径も19.2cmである。356は京都篠窯産[1]と考えられる鉢で、口径24.0cmを測る。354は緑釉陶器埦で蛇の目高台である。高台径6.4cmである。357は飯蛸壷で現高8.5cm、口径4.5cmである。358～360は土錘でいずれも完形ではない。358は現長5.8cm、最大径1.3cm、359は現長4.8cm、最大径1.5cm、360は現長3.9cm、最大径1.1cmである。３者共棒状土錘である。SE320出土遺物は10世紀中頃から後半のものが中心と考えられる。

図142の361は曲物や桶など、円形容器の底板もしくは蓋と考えられるヒノキ科材の円形板残欠である。柾目板であり、横引鋸の普及を推察できる資料といえる。厚さは約８mmである。





1　暗褐色粘土
2　暗褐色砂
3　暗褐色砂(1mm大の礫を含む)
4　暗褐色粘質粗砂
5　暗灰褐色粘質砂
6　暗褐色砂(黄色粘土小塊含む)
7　暗黄色砂
8　黄色粗砂
9　黒灰色粘土
10　灰色粘土
11　黒色粗砂混じり粘土
12　黒灰色粗砂混じり粘土
13　灰色砂
14　黒灰色砂に黄色粗砂を帯状に混じる
15　灰色粗砂
16　暗灰色粘土
17　灰色粘土
18　灰色粗砂礫
19　淡灰色砂礫
20　黄灰色砂礫

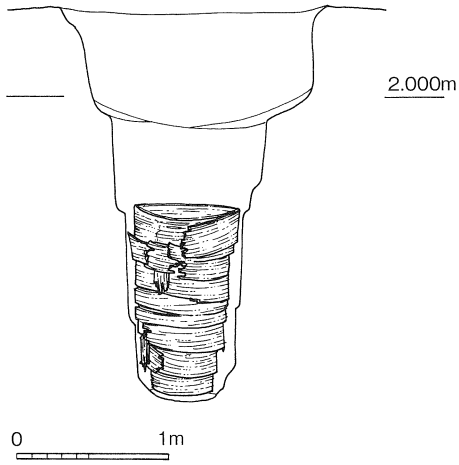


図140　SE320平面・断面図

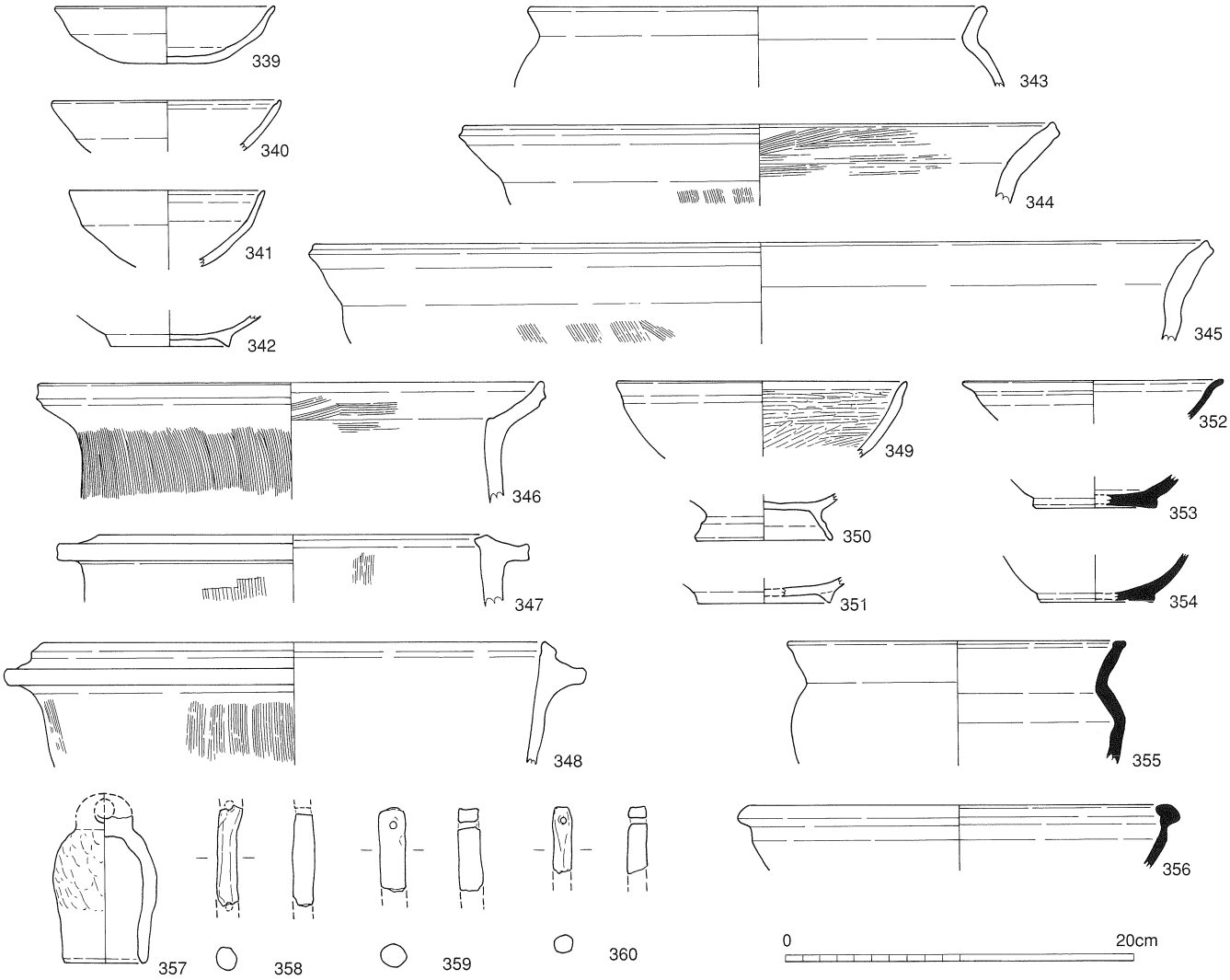


図141　SE320出土遺物実測図（1）

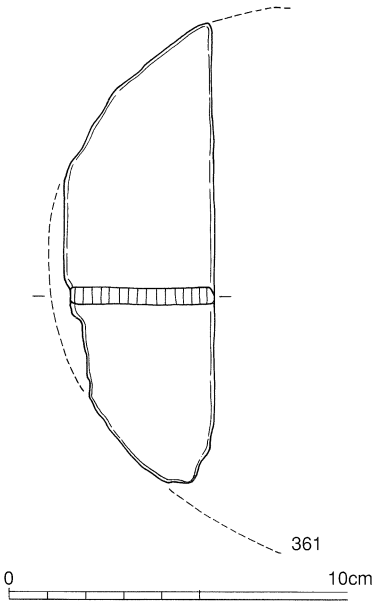


図142　SE320出土遺物実測図（2）

(3) 土坑

SK203

東西約1.9m、南北約1.8m、深さ約0.77mを測る不整円形の土坑である。上層は暗褐色砂質土が堆積し、中層～下層は、一部でラミナが認められる淡黒灰色砂質土と黒灰色シルト混じり砂質土が堆積している。用途は不明である。

図示できないが、奈良時代の須恵器蓋と土師器甕の小破片が出土しており、SK203は奈良時代の遺構と考えられる。

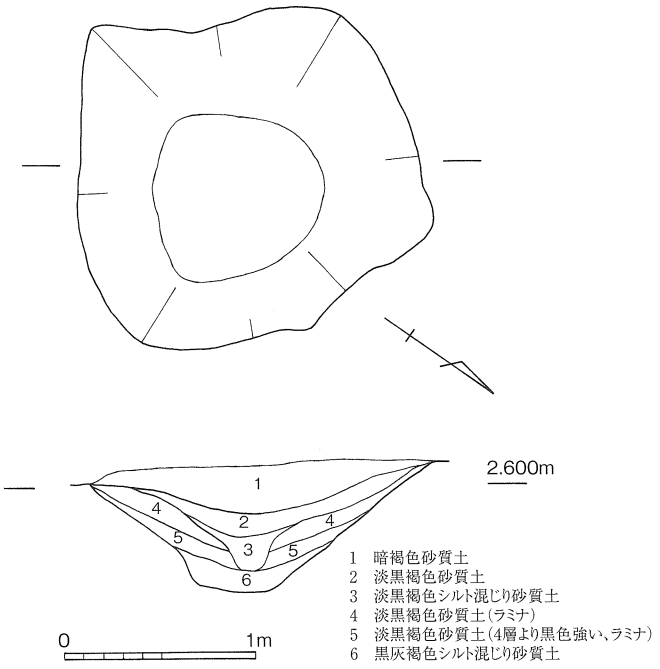


図143　SK203平面・断面図

SK303

SE318の南で検出した、長径2.8m以上、短径1.2m、深さ0.45mの楕円形の土坑である。上層は暗褐色砂質土が堆積し、下層は淡黒灰色砂質土が堆積している。用途は不明である。

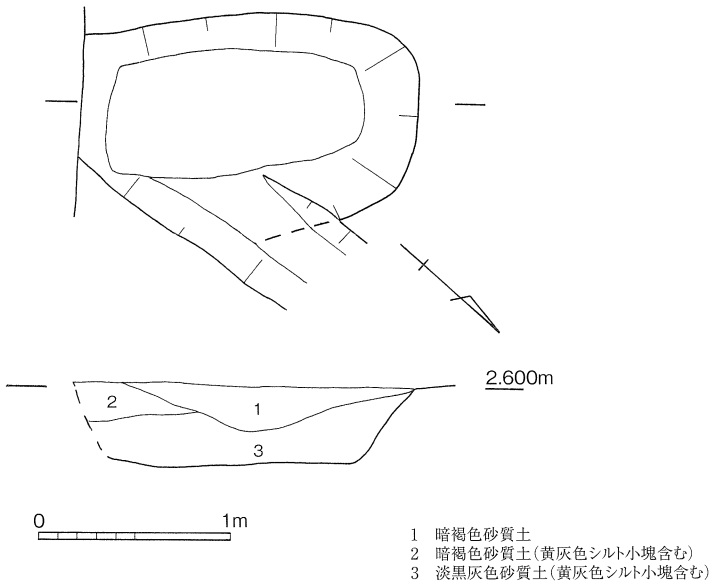


図144　SK303平面・断面図

図145はSK303から出土した遺物である。362・363は土師器小皿で、前者は口径9.0cm、器高1.9cm以上、後者は口径14.6cm、器高2.2cmである。364～366は東播系須恵器埦である。364は底径5.6cm、365は口径15.4cm、器高5.3cm、366は口径16.4cm、器高5.4cmである。366にやや新しい形態が見られるが、12世紀前半～中頃と思われる。

SK304

SB322の北で検出した、東西約1.3m、南北1.0m、深さ0.93mの楕円形の土坑である。用途は不明である。遺物は出土していない。

SK305　長径2.1m、短径1.5m、深さ0.35mの楕円形の土坑である。用途は不明である。図示できるような遺物は出土していない。

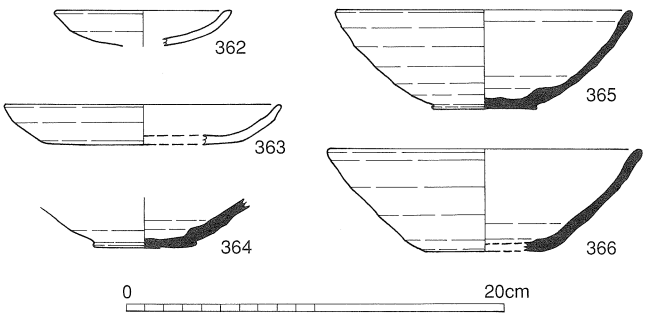


図145　SK303出土遺物実測図

SK306　SE320の南で検出した、長辺3.4m、短辺1.8mの方形の土坑で、深さは最深部で0.4mである。遺構面が0.4～0.5m削平を受けているため、本来は1m近い深さがあったはずであるが、用途は不明である。須恵器、土師器の細片が出土しているが図示できなかった。

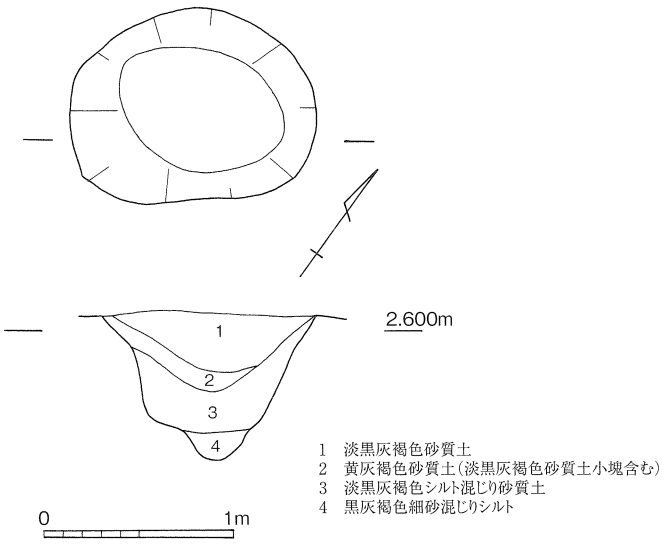


図146　SK304平面・断面図

SK307　SK306の西で検出した、直径1.2m、深さ0.2mの円形の土坑である。用途は不明である。土師器の小破片が出土したが時期は不明である。

SK308　長径1.7m、短径1.3m、深さ0.2mの楕円形の土坑である。遺構面が0.4～0.5m削平されているため、本来はもっと深く、水溜のようなものかと思われる。

図151の367はSK308から出土した瓦器椀である。高台は低く退化し、径4.2cmを測る。13世紀代と思われる。

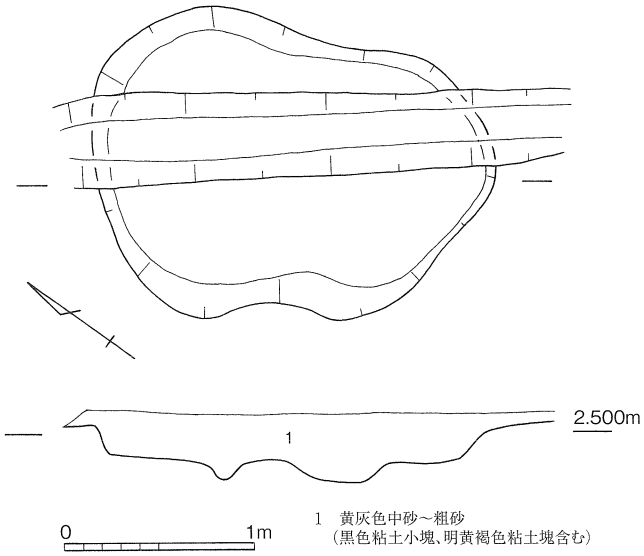


図147　SK305平面・断面図

SK309　直径1.1m、深さ0.25mの円形の土坑である。遺構面が0.4～0.5m削平されているため、本来はもっと深く、水溜のようなものかと思われる。図示できるような遺物は出土していない。

SK310　長径1.5m、短径1.2m、深さ0.5mの楕円形の土坑である。撹乱により遺存状況は良くない。須恵器と土師器の細片が出土しているが、明確な時期は不明である。

SK311　長径1.0m、短径0.7m、深さ0.35mの楕円形の土坑である。鋤溝に切られている。須恵器と土師器の細片が出土しているが、明確な時期は不明である。

SK312　長径1.1m、短径0.8m、深さ0.55mの楕円形の土坑である。遺物は出土していない。

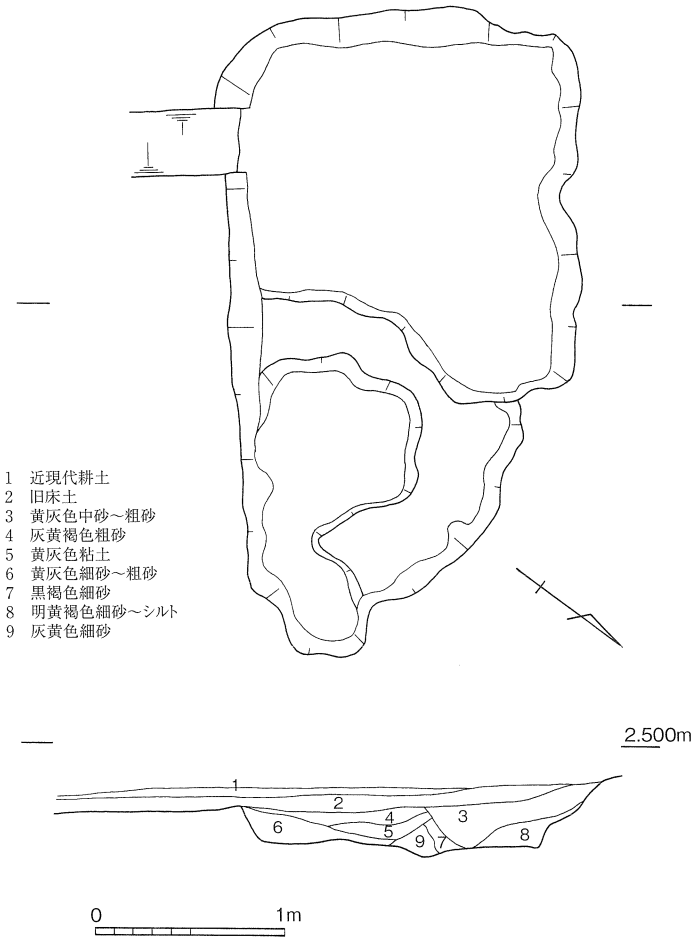


図148　SK306平面・断面図

SK313　長径1.4m、短径0.5m、深さ0.3mの楕円形の土坑である。須恵器と土師器の細片が出土しているが、明確な時期は不明である。

SK314　長径1.0m、短径0.6m、深さ0.35mの楕円形の土坑である。須恵器と土師器の細片が出土しているが、明確な時期は不明である。

SK315　東西約1.5m以上、南北2.0m、深さ約0.2mの不整形の土坑である。

図158はSK315から出土した遺物である。368は土師器小皿で口径8.2cm、器高1.7cmである。369も土師器の大型の皿で口径16.5cmを測る。370は瓦器埦である。371は棒状有孔土錘で現長4.2cm、最大径1.5cm、372は完形の管状土錘で全長5.0cm、最大径1.6cmである。出土遺物は13世紀代と思われる。

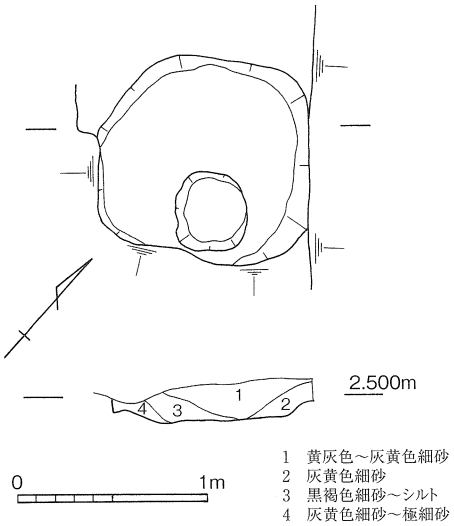
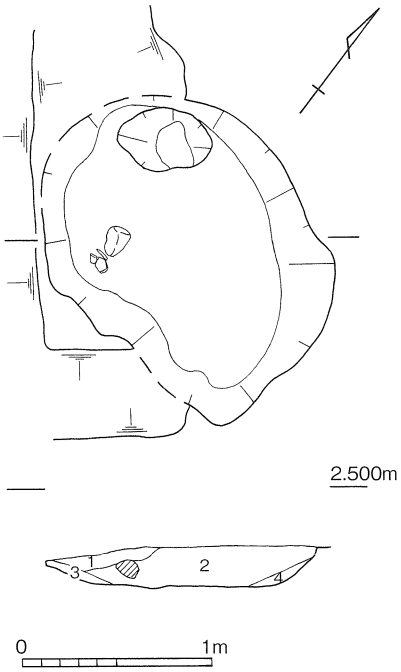


図149　SK307平面・断面図



1　黄灰色細砂～中砂
2　褐灰色細礫混じり細砂(暗灰色粘土を含む)
3　黄灰色シルト～粘土
4　褐灰色シルト

図 150　SK308 平面・断面図

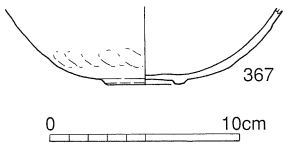
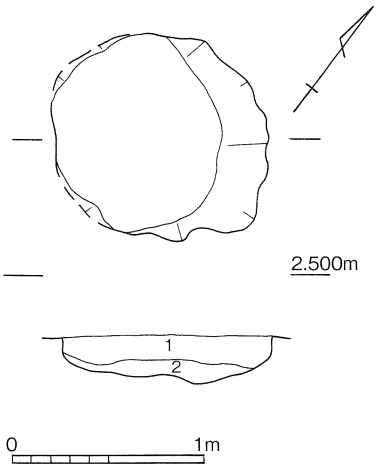
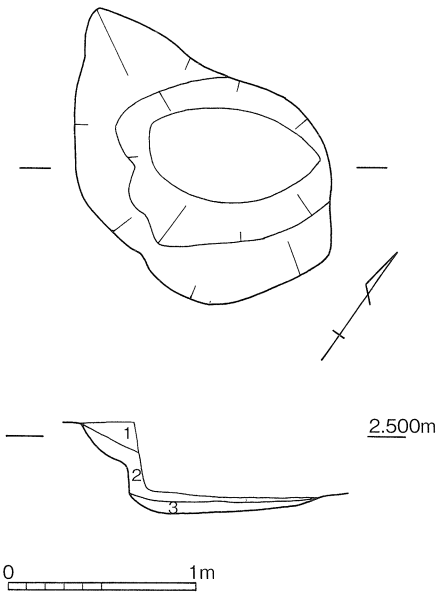


図 151　SK308 出土遺物実測図



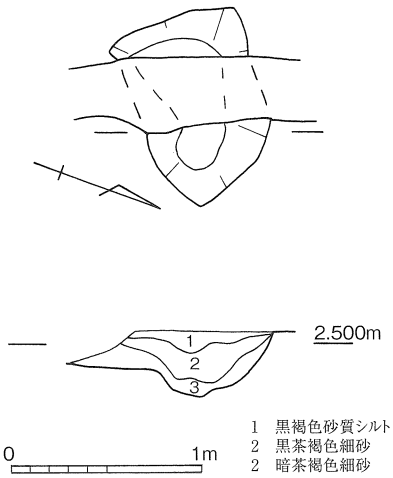
1　褐灰色～灰黄褐色中砂(黄褐色粘土小塊含む)
2　浅黄橙色～にぶい黄橙色粘土

図 152　SK309 平面・断面図



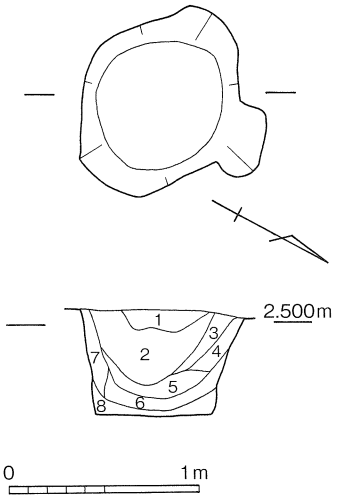
1　黒褐色細砂
2　暗茶褐色細砂(黄褐色シルト小塊含む)
2　暗茶褐色細砂(黄褐色シルト小塊を多量に含む)

図 153　SK310 平面・断面図



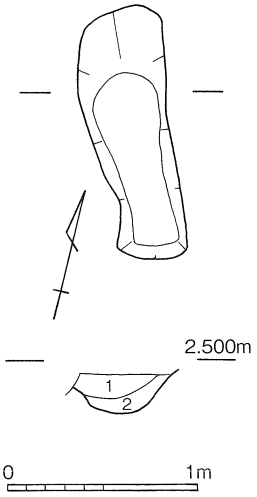
1　黒褐色砂質シルト
2　黒茶褐色細砂
2　暗茶褐色細砂

図 154　SK311 平面・断面図



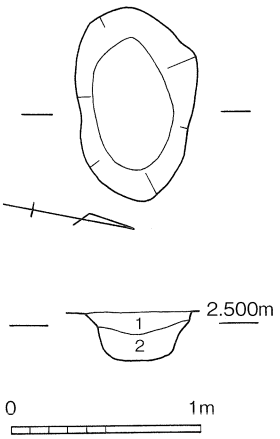
1　暗茶褐色細砂
2　黒褐色細砂混じりシルト
3　黒灰色細砂（黒褐色シルト小塊含む）
4　黒灰色細砂
5　黒茶褐色細砂混じりシルト
6　暗灰褐色細砂、黒茶褐色シルトラミナ
7　暗灰褐色細砂
8　灰褐色細砂、黒茶褐色シルトラミナ（黄灰色シルト小塊含む）

図 155　SK312 平面・断面図



1　暗茶褐色細砂
2　濁黄灰色細砂混じりシルト

図 156　SK313 平面・断面図



1　暗茶褐色細砂（黄灰色シルト小塊含む）
2　暗茶褐色細砂

図 157　SK314 平面・断面図

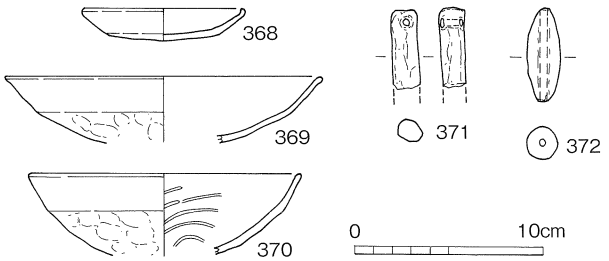


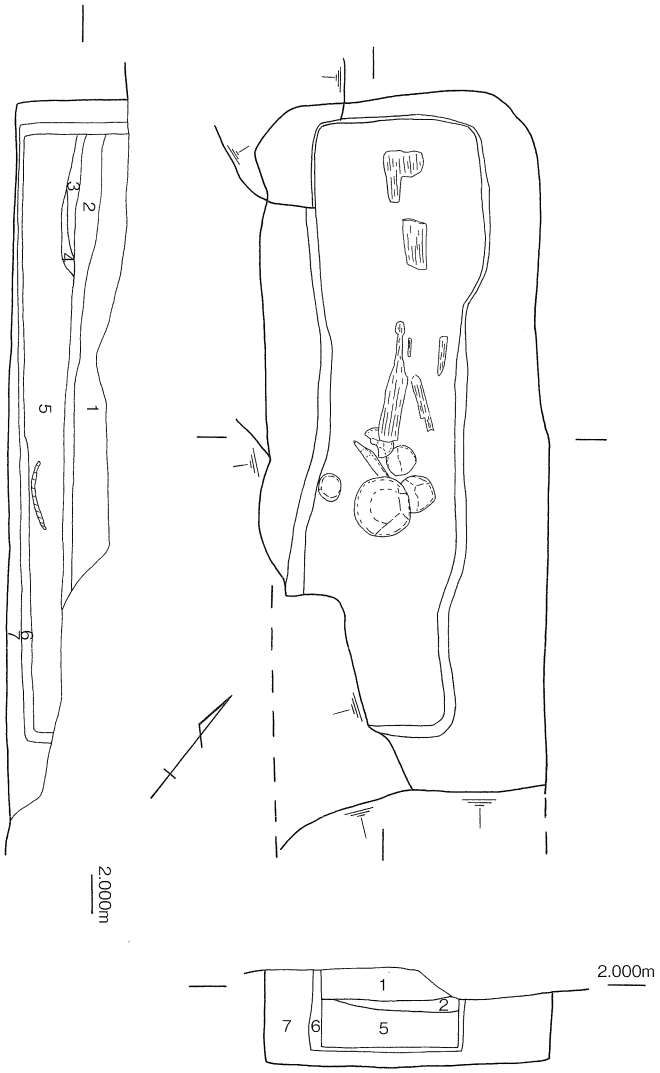
図 158　SK315 出土遺物実測図

(4) 木棺墓

ST304

SB325の約20m南で検出した木棺墓で、南北方向に主軸を置く。南端部分が後世の撹乱で破壊されており、東西幅0.7m、南北長1.8m以上の長方形土坑内に幅0.45m、長さ1.6mの木棺を安置している。棺材の厚さが約３cmであることが土色変化部から判る。なお、棺の蓋材と底材が若干残存している。棺内中央部から土師器小皿４枚と土師器皿１枚、長さ約16cmの鉄刀１点が先を西に刃部を北に向けた状態で検出した。

図160はST304出土の遺物である。373 ～ 377は土師器皿である。373は「ての字」口縁で口径9.0cm、器高1.4cm、374は口径9.6cm、器高2.1cmである。375は口径9.0cm、器高1.4cm、376は口径9.4cm、器高1.9cmである。377は中型の皿で口径15.0cm、器高3.0cmである。374･376及び377の体部には指オサエ痕が見られる。378は鉄小刀で切先が欠損している。現長16.2cm、茎長8.5cm、刃最大幅1.5cmである。茎部の一部に木質部が残る。379・380は鉄釘である。いずれも先端部が欠損する。379の断面は一辺５mmの方形で現長2.8cm、



1. 暗茶褐色砂質土（黄褐色シルトをブロック状に含む）
2. 黒灰色砂質土（炭化物を含む）
3. 暗褐色砂質土（黄褐色シルトをブロック状に含む）
4. 黒灰色砂質土（炭化物を含む）
5. 暗褐色砂質土（黄褐色シルトをブロック状に含む）
6. 黒灰色シルト
7. 暗褐色砂質土（黄褐色シルトをブロック状に含む）

図 159　ST304 平面・断面図

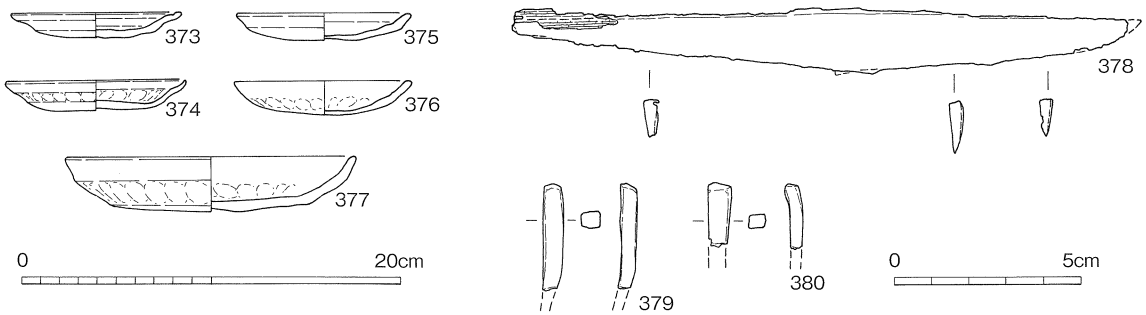


図 160　ST304 出土遺物実測図

380は断面４×５㎜の長方形を呈し、現長1.7㎝である。遺物の時期は11世紀末～12世紀頃と考えられる。

(5) ピット

SP303　直径約0.3m、深さ約0.25mのピットである。

図161の381はSP303出土の有溝土錘である。完形で全長4.2㎝、最大径2.0㎝である。時期は確定できない。

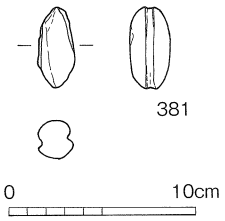


図 161　SP303 出土遺物実測図

SP304　直径約0.3m、深さ約0.4mのピットで、根石を据えている。掘立柱建物の柱穴と思われるが、建物としてはまとまらなかった。

図162の382はSP304出土の中国製白磁碗である。山本分類Ⅳ１ａで12世紀代のものと考えられる。口径16.2㎝である。

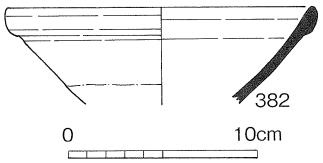


図 162　SP304 出土遺物実測図

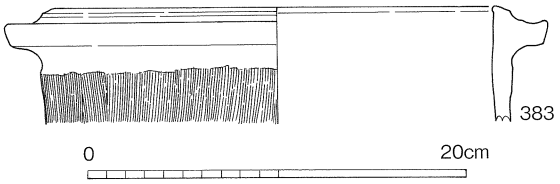


図 163　SP305 出土遺物実測図

SP305　直径約0.5m、深さ約0.15mのピットである。

図163の383はSP305から出土した土師器羽釜である。口径23.0㎝である。10世紀後半から11世紀にかけてのものと思われる。

SP306　直径約0.5m、深さ約0.25mのピットである。

図164の384はSP306出土の管状土錘である。両端を欠損する。現長4.0㎝、最大径1.0㎝である。時期は確定できない。

SP307　撹乱により南半部が破壊されているが、直径約0.5mのピットに復元できる。深さは約0.25mである。

図165の385はSP307出土の東播系須恵器埦で、口径15.4㎝である。小片のため時期は確定できない。

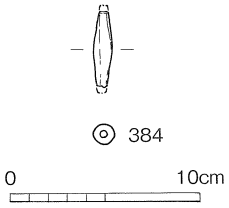


図 164　SP306 出土遺物実測図

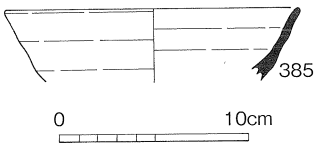


図 165　SP307 出土遺物実測図

(6) 包含層出土遺物

図166は二葉町６丁目地区の包含層出土遺物である。386・387は土師器小皿、388・389は黒色土器Ａ類の椀、390～393は東播系須恵器椀、394～396は土錘である。

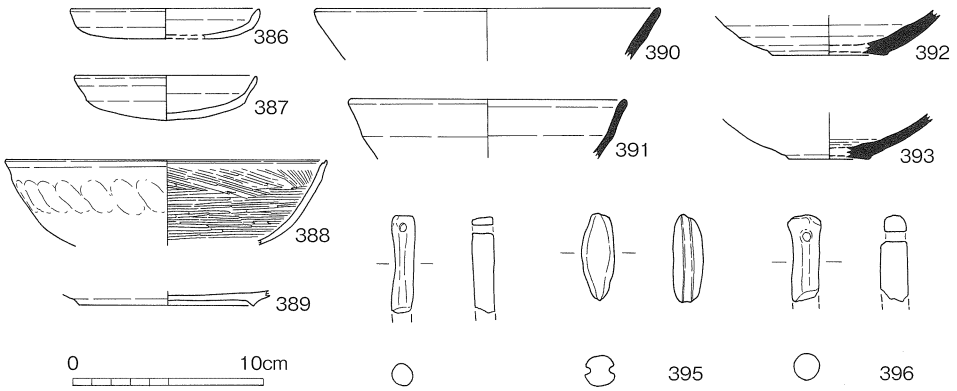


図 166　二葉町６丁目地区包含層出土遺物実測図

(7) その他

二葉町６丁目の南西端に位置する、以前はかなり店が存在した場所の撹乱中から磁器製定量錘が約500個体まとまって出土している。出土した磁器錘は３種類あり、大型のもので高さ13㎝、重量約1,460ｇ、中型のものは高さ９㎝、重量約420ｇ、小型のもので高さ８㎝、重量約300ｇである。いずれも背後に重量調整用の穴があり、穴の蓋が残っているものも若干ある。それぞれには銘文があり、大型のものは「岐阜　中　定錘　秤量貳拾五瓩」と記され、中型のものは「岐阜　中　定錘　秤量七瓩」、「岐阜　Ｋ　定錘　秤量七瓩」の２種類、小型のものは「岐阜　中　定錘　秤量五瓩」、「岐阜　Ｋ　定錘　秤量五瓩」の２種類の銘文が記されている。

これらは、棒はかり用の磁器錘であり、太平洋戦争の激化により、鉄鋼資源が枯渇したため、鉄製定量錘の代用品として、昭和17年から戦後しばらくの間、製造されたものである。長岡昭雄氏の資料紹介[(2)]によると、製造したのは岐阜県恵那郡陶町の金中製陶所で、昭和16年から開発に取り組み、昭和17年末に完成したものとされる。材質が磁器であり、個々の製品について、焼成後の重量に誤差が生じるため、背後の穴の内部に鉛などを充填して重量を調整していたものである。なお、今回出土したものには、穴の蓋がついているものも見受けられるが、すべて内部には何も充填されていなかった。工場出荷時には何も充填せず、小売店での販売時に、重量を調整したものと考えられる。

銘文の製造名に、「中」と「Ｋ」の２種類あるのは、当時金中製陶所に錘の製造免許がなく、岐阜市のメーカーの名前で製造したためである。その後昭和19年に製造免許を受け、自社の名前を入れるようになった。そのため製造名により、昭和17年から昭和19年７月までの記号「Ｋ」と、それ以後の自社ブランドの記号「中」に区別することができる。

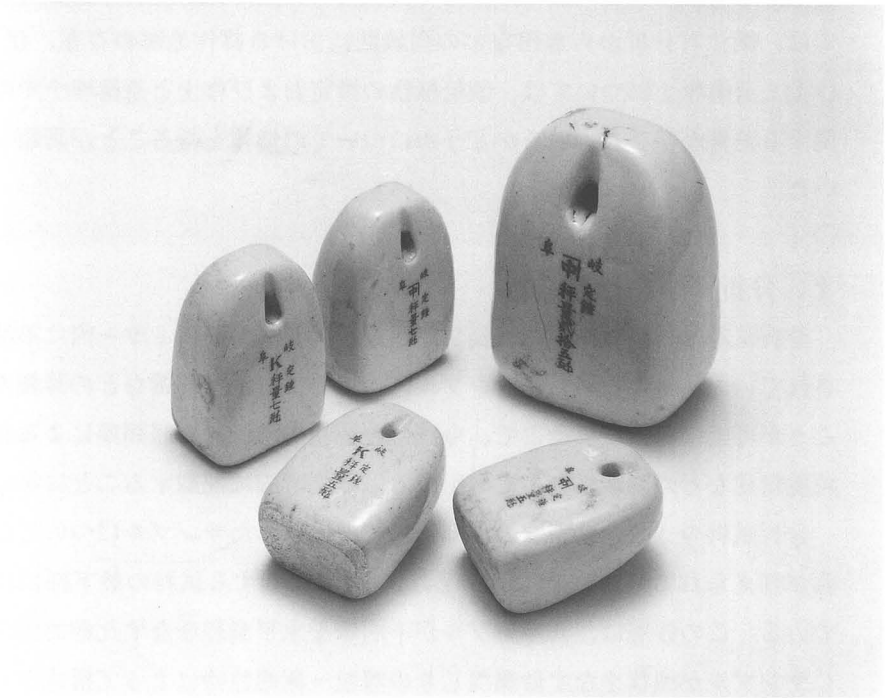
今回の出土資料は、戦後金属製の錘が出回り、不要になったので廃棄されたものと考

えられる。近現代の製品であるが、戦争遺物として位置づけられるものであり、ここに紹介する。なお、過去に大坂城下町跡で、今回紹介した中型のものが出土している[3]。

（注１）石井清司「篠窯跡群出土の須恵器について」『京都府埋蔵文化財情報』第７号　（財）京都府埋蔵文化財調査研究センター　1983年３月31日
石井清司「篠窯須恵器」『概説中世の土器・陶磁器』　中世土器研究会　前掲書

（注２）長岡昭雄　「岐阜県の「ます」及び陶磁器製定量錘の製造に関して」『計量史研究』　Vol.29 №２（№33）　日本計量史学会　2007

（注３）八木久栄・黒田慶一「進藤一代氏による建設工事に伴う大坂城下町跡発掘調査（OJ92－36）略報」　財団法人大阪市文化財協会　1993



挿図写真１　二葉町６丁目地区出土磁器製定量錘

第６章　二葉町遺跡古環境の調査

パリノ・サーヴェイ株式会社
辻　康男・金井慎司・辻本裕也

はじめに

本報告は、出土遺物の相対年代から、縄文時代晩期～弥生時代前期と推定される黒色有機質堆積層と、11～12世紀代に比定される耕作土および遺構埋土の花粉・植物珪酸体分析に関する結果および考察を記載するものである。

各分析層準に共通する目的は、調査地点およびその周辺の堆積環境や古植生を推定することにある。

上記した共通目的の他に、縄文時代晩期～弥生時代前期頃の黒色有機質堆積層については、微化石分析から水田などの当該期における耕作地跡の存在、11～12世紀代の耕作土・遺構埋土については、栽培植物の推定および作土と遺構埋土での微化石の産状に関する差異が存在しているかどうかについての情報を得ることが課題として認識されていた。

１．分析層準の記載

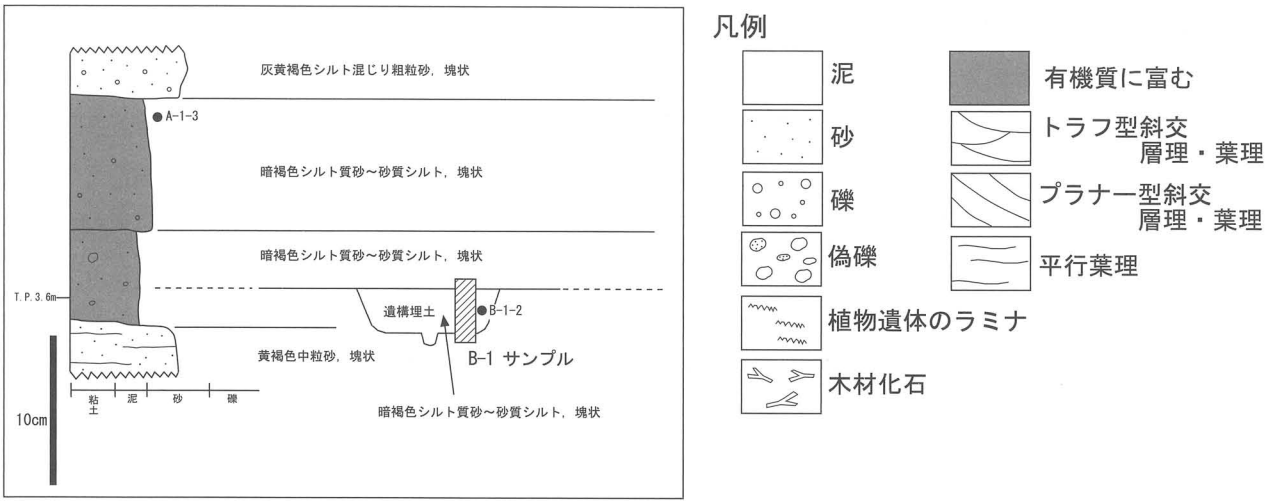
分析試料は、幅12cm前後、長さ27cm前後のタッパーウェヤー内に不撹乱の状態で収納されていた。そのため、各サンプルについては、堆積構造などの詳細な層相観察を行うことが可能であった。そこで、今回の分析報告では、肉眼観察による試料の堆積構造や粒度組成などの記載についても出来る限り、詳細に記載することに努めた（図167）。

分析試料のうち、堆積層の下部付近で採取されたサンプルについては、A-2とC-2の名称が与えられている。T.P.2.5～2.7m付近に位置する試料の最下部には、砂層が存在している。この砂層は、Ａサンプルが不明瞭な水平葉理をなす比較的淘汰の良い中粒砂、Ｃサンプルが塊状をなす砂礫混じりの粗粒～極粗粒砂によって構成されている。層相から、最下部の砂層は、扇状地面上に広がった氾濫堆積物であることが推定される。

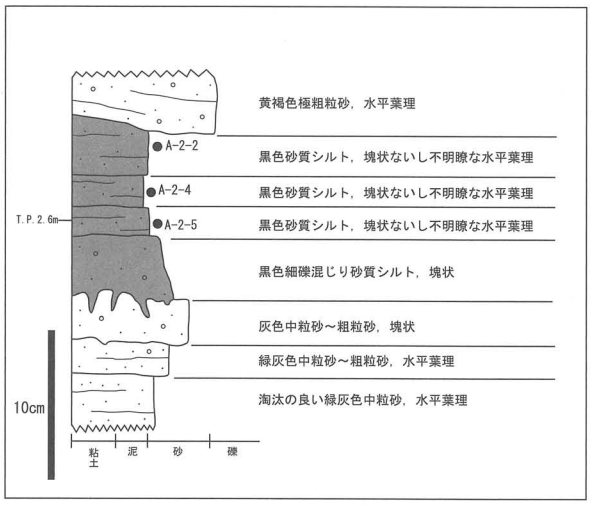
これらの砂層上部、T.P.2.6～2.9m付近には、有機物を多量に含み黒色を呈す塊状の細礫混じり砂質シルト層が累重している。黒色細礫混じり砂質シルト層の層厚は、８cm前後を測る。A、Ｃサンプルとも、堆積層内には、植物遺体の残存がほとんど認められず、分解がほぼ完全に進行した状態となっている。また、本層準では、下方に向かって漸移的な変化を示し、砂層との境界付近には多くの根痕が観察される。本層準で黒色を呈す土色の起源は、堆積物中に含まれる多量の腐植に由来していることが推定される。このような現象は、一般的に堆積速度が小さくなることによって安定化した地表面上に、植生が継続的に被覆することによって生じるものと考えられている。

これらのことから、黒色を呈す細礫混じり砂質シルト層は、安定した堆積環境下において時折流入する氾濫堆積物を母材として形成された古土壌であることが想定され、当該期に本調査地周辺の扇状地面が離水していたことが示唆される。

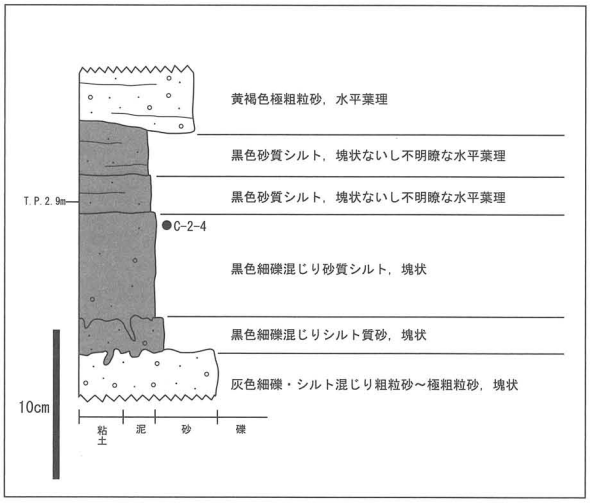
その直上には、有機物を多量に含み黒色～暗褐色を呈す塊状の砂質シルト層が、５～



A-1 サンプル柱状図と B-1 サンプル
模式断面と分析実施地点



A-2 サンプル柱状図と分析実施地点



C-2 サンプル柱状図と分析実施地点

図167　分析サンプルの堆積層柱状図と分析実施層準位置図

８cm前後の層厚で形成されている。この砂質シルト層の上半部には、上からの酸化鉄の顕著な沈着が観察される。本層準は、下位に比べ細粒な堆積物によって構成されている。層相から、黒色砂質シルト層は、下位の堆積層と同じく、安定した堆積環境下で形成されたことが推定される。下部の層準からの層相変化から判断すると、黒色砂質シルト層は、離水していた扇状地面周囲の埋積による局地的な基準面の上昇に伴って、しだいに湿潤化するような土壌環境下で形成された堆積物であることが想定される。黒色砂質シルト層の直上には、弥生時代前期の土器を包含する水平葉理をなす極粗粒砂層が載る。層相から、この砂層は氾濫堆積物と判断される。

堆積層の上部付近で採取されたサンプルには、A-1とB-1の名称が与えられている。これらのサンプルの最下部、T.P.3.4 ～ 3.5m付近には、中粒砂層が存在している。本層は、土壌化が進行しており、塊状の堆積構造をなすともに上位の堆積層によって充填される根痕や管状酸化鉄の斑紋が顕著に観察される。

A-1では、砂層の上部に耕作土である暗褐色を呈し塊状をなす砂質シルト～シルト質砂層が形成されている。出土遺物の相対年代から、暗褐色砂質シルト層は、11～12世紀頃に形成されたことが推定されている。本層準の下部では、幅２～３mm前後のシルトや砂からなるブロック土が顕著に観察される。これらのブロック土は、耕作土内に発達した粒団であると推定される。層準の上部では、下部に比べ砂質な粒度組成なし、ブロック土の発達度も弱くなる傾向が存在している。

B-1では、砂層の上部に暗褐色を呈す遺構埋土が累重している。この遺構埋土内には、幅１cm前後を測る耕作土内に比べ粗粒なブロック土が多く含まれている。遺構埋土上部には、A-1で観察された耕作土の上部と類似した層相をなす暗褐色をなす耕作土が形成されている。A-1サンプルの最上部には、塊状をなす褐色のシルト混じりの砂層からなる現代の盛土が認められる。

２．試料

分析試料については、タッパーウェヤー内に存在している不撹乱堆積物サンプルから、層相を考慮しながら採取を行った。採取した試料は、縄文時代晩期～弥生時代前期の黒色有機質堆積層から４点、11～12世紀代の耕作土および遺構埋土の暗褐色砂質シルト～シルト質砂層からの２点である。

黒色有機質堆積層については、A-2サンプルから３点（A-2-2・4・5）、C-2サンプルから１点（C-2-4）の分析試料を採取した。暗褐色砂質シルト～シルト質砂層では、耕作土であるA-1サンプルから１点（A-1-3）、遺構埋土であるB-1サンプルから１点（B-1-2）の分析試料を採取した。

３．分析方法

(1) 花粉分析

試料を湿重で約10ｇ秤量し、水酸化カリウム処理、篩別、重液分離（臭化亜鉛，比重2.3）、フッ化水素酸処理、アセトリシス処理（無水酢酸：濃硫酸＝９：１）の順に物理・化学的な処理を施して花粉・胞子化石を分離・濃集する。処理後の残渣をグリセリンで封入してプレパラートを作製した後、光学顕微鏡下でプレパラート全面を走査し、出現する全ての種類について同定・計数を行う。

結果は同定・計数結果の一覧表として表示する。なお、表中で複数の種類をハイフォン（マイナス）で結んだものは種類間の区別が困難なものを示す。

(2) 植物珪酸体分析

湿重５ｇ前後の試料について過酸化水素水・塩酸処理、沈定法、重液分離法（ポリタングステン酸ナトリウム，比重2.5）の順に物理・化学処理を行い、植物珪酸体を分離・濃集する。検鏡しやすい濃度に希釈し、カバーガラス上に滴下・乾燥させる。乾燥後、プリュウラックスで封入してプレパラートを作製する。

400倍の光学顕微鏡下で全面を走査し、その間に出現するイネ科葉部（葉身と葉鞘）

の葉部短細胞に由来した植物珪酸体（以下、短細胞珪酸体と呼ぶ）および葉身機動細胞に由来した植物珪酸体（以下、機動細胞珪酸体と呼ぶ）を、近藤・佐瀬（1986）の分類に基づいて同定・計数する。

結果は、検出された種類とその個数の一覧表で示す。また、検出された植物珪酸体の出現傾向から古植生について検討するために、植物珪酸体群集図を作成した。各種類の出現率は、短細胞珪酸体と機動細胞珪酸体の珪酸体毎に、それぞれの総数を基数とする百分率で求める。

4．結果

(1) 花粉分析

結果を表２に示す。検出される花粉・シダ類胞子化石の種類数は、木本花粉10種類（マキ属・モミ属・ツガ属・トウヒ属・マツ属・スギ属・ハンノキ属・コナラ属アカガシ亜属・ニレ属－ケヤキ属・カキ属）、草本花粉９種類（オモダカ属・イネ科・カヤツリグサ科・ソバ属・バラ科・シソ科・ゴキヅル属・ヨモギ属・キク亜科）、シダ類胞子１種類である。試料中からは、花粉化石がほとんど検出されず、シダ類胞子が多い傾向にある。また、僅かに検出される花粉化石の保存状態は極めて悪く、外膜が溶けて薄くなっていたり、壊れている。

表２　花粉分析結果

種　類	A-1	A-2			B-1	C-2
試料番号	3	2	4	5	2	4
木本花粉						
マキ属	－	－	2	2	－	－
モミ属	－	－	1	5	1	－
ツガ属	1	－	4	9	－	2
トウヒ属	－	－	－	1	－	－
マツ属	4	－	2	2	1	－
スギ属	－	－	－	1	－	－
ハンノキ属	－	1	－	1	－	－
コナラ属アカガシ亜属	－	－	－	－	1	1
ニレ属－ケヤキ属	－	－	－	1	－	－
カキ属	－	－	1	－	－	－
草本花粉						
オモダカ属	－	－	－	－	－	1
イネ科	1	－	8	2	－	2
カヤツリグサ科	1	－	2	3	－	1
ソバ属	－	－	－	－	1	－
バラ科	－	－	1	－	－	－
シソ科	－	－	－	1	－	－
ゴキヅル属	－	－	－	1	－	－
ヨモギ属	－	－	23	29	－	19
キク亜科	1	1	14	14	－	4
不明花粉	1	1	1	5	1	1
シダ類胞子						
シダ類胞子	25	58	196	338	4	16
合　計						
木本花粉	5	1	10	22	3	3
草本花粉	3	1	48	50	1	27
不明花粉	1	1	1	5	1	1
シダ類胞子	25	58	196	338	4	16
総計（不明を除く）	33	60	254	410	8	46

(2) 植物珪酸体分析

結果を表３、図168・169に示す。各試料から検出される植物珪酸体は、保存状態が悪く、表面に多数の小孔（溶食痕）が認められる。以下に、地点毎の産状を述べる。

・Aサンプル

A-1-3では、栽培植物であるイネ属の短細胞珪酸体と機動細胞珪酸体が検出される。イネ属の出現率は、短細胞珪酸体が約２％、機動細胞珪酸体が約３％である。

この他、ネザサ節を含むタケ亜科、ヨシ属、ススキ属を含むウシクサ族、イチゴツナギ亜科などが検出される。この中では、タケ亜科やウシクサ族の産出が目立つ。

A-2では、A-2-2・4・5とも植物珪酸体群集に大きな変化がなく、ヨシ属が多産し、次いでススキ属を含むウシクサ族が多く検出される。この他、ネザサ節を含むタケ亜科、イチゴツナギ亜科などが検出される。

表３　植物珪酸体分析結果

種　　類	A-1	A-2			B-1	C-2
試料番号	3	2	4	5	2	4
イネ科葉部短細胞珪酸体						
イネ族イネ属	4	−	−	−	1	−
タケ亜科ネザサ節	1	1	1	1	1	1
タケ亜科	20	13	6	23	17	8
ヨシ属	3	102	101	112	18	98
ウシクサ族コブナグサ属	4	−	−	−	−	−
ウシクサ族ススキ属	11	17	28	43	9	17
イチゴツナギ亜科	7	10	18	18	3	14
不明キビ型	53	51	65	87	39	49
不明ヒゲシバ型	34	23	28	27	6	7
不明ダンチク型	41	22	23	22	18	5
イネ科葉身機動細胞珪酸体						
イネ族イネ属	8	−	−	−	10	−
タケ亜科ネザサ節	1	2	1	−	3	1
タケ亜科	40	17	7	15	25	11
ヨシ属	12	60	52	42	12	59
ウシクサ族	88	28	31	29	53	21
シバ属	3	−	−	−	1	−
不明	82	37	27	21	49	25
合　　計						
イネ科葉部短細胞珪酸体	178	239	270	333	112	199
イネ科葉身機動細胞珪酸体	234	144	118	107	153	117
総　計	412	383	388	440	265	316

・Ｂサンプル

B-1-2では、A-1-3と同様にイネ属が検出される。イネ属の出現率は、短細胞珪酸体が約1％、機動細胞珪酸体が約７％の出現率である。また、ネザサ節を含むタケ亜科、ヨシ属、ススキ属を含むウシクサ族、イチゴツナギ亜科などが検出される。この中では、タケ亜科やウシクサ族の産出が目立つ。

・Ｃサンプル

C-2-4は、A-2-2・4・5と同様にヨシ属の産出が目立ち、タケ亜科、ヨシ属、ススキ属を含むウシクサ族、イチゴツナギ亜科なども検出される。

５．考察

(1) 縄文時代晩期～弥生時代前期

A-2サンプルでは、縄文時代晩期～弥生時代前期の黒色有機質堆積層についての層位的な分析を行っている。機動細胞珪酸体で不明瞭なものの、短細胞珪酸体では、上位に向かって湿潤な土壌環境を好むヨシ属が増加し、ヨシ属に比べ乾燥した環境に生育するススキ属の減少が確認される。黒色有機質堆積層の下部～中部では、ヨモギ属やキク亜科の花粉化石が比較的多く検出されているが、保存状態が不良で古環境を詳細に検討することは困難な状況である。これら黒色有機質堆積層から検出された植物珪酸体群集組成および花粉化石の産状は、分析試料の層相観察から推定される堆積環境の変化と調和的な傾向を示している。

以上のような黒色有機質堆積層における微化石の産出状況と層相観察結果から、縄文時代晩期～弥生時代前期に本地点では、扇状地面が離水し土壌発達した後、周辺における局地的な基準面の上昇によって次第に湿潤な土壌環境へと変化し、最終的には、再び氾濫堆積物に覆われるような堆積環境となったことが推定される。特に、遺跡を構成する堆積層において暗色帯と認識される縄文時代晩期～弥生時代前期の黒色有機質堆積層の単層内では、下部の礫質な層準が周囲に比べより乾燥した扇状地面上の氾濫原、上部

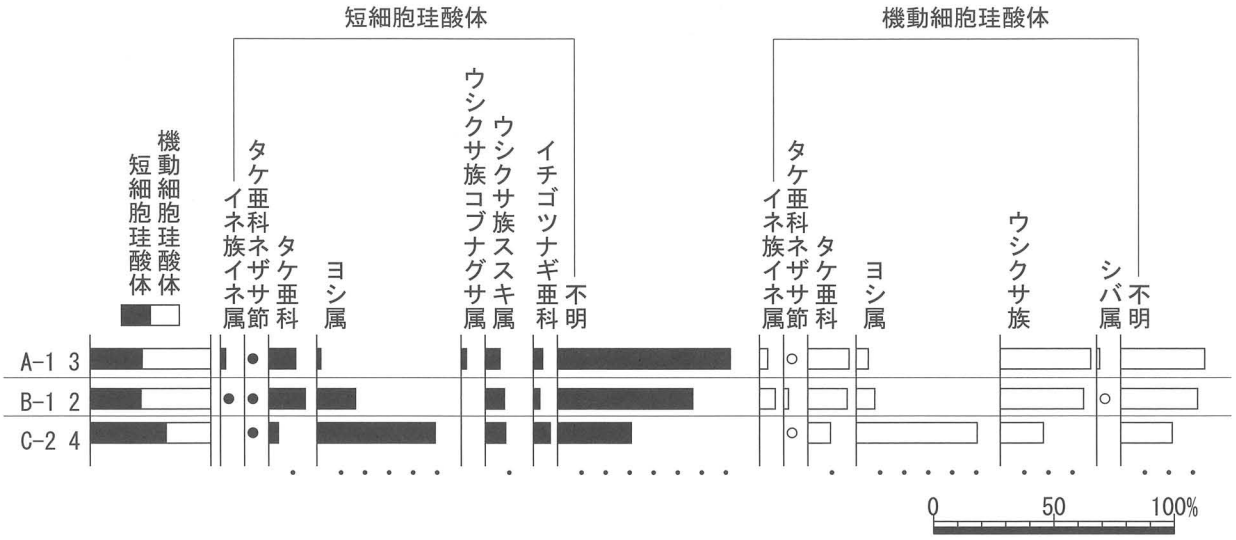


図168　A-1，B-1，C-2植物珪酸体群集組成
出現率は、イネ科葉部短細胞珪酸体、イネ科葉身機動細胞珪酸体の総数を基数として百分率で算出した。なお、●○は１％未満の種類を示す。

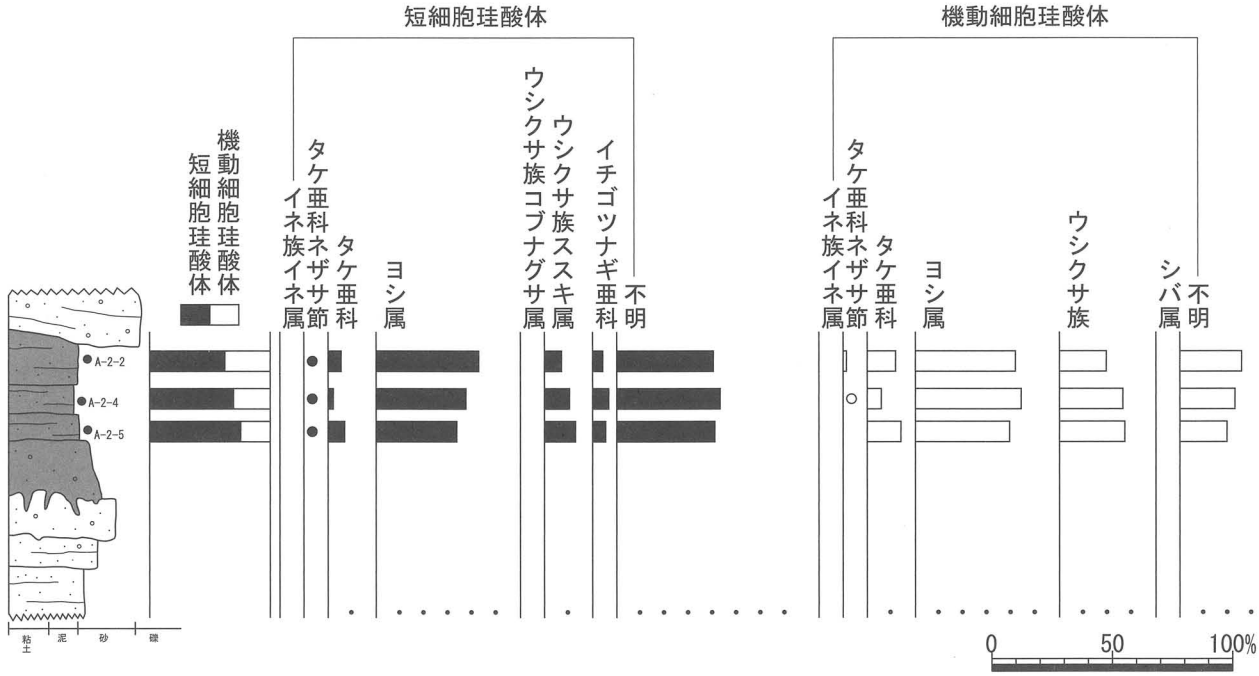


図169　A-2植物珪酸体群集の層位分布
出現率は、イネ科葉部短細胞珪酸体、イネ科葉身機動細胞珪酸体の総数を基数として百分率で算出した。なお、●○は１％未満の種類を示す。

の泥質な層準が扇状地面上を覆う氾濫堆積物などからなる砂礫堆間の低地となる相対的により湿潤な氾濫原ないし湿地を構成する堆積物であることが想定される。これらの黒色有機質堆積層からは、栽培種であるイネ属の珪酸体が検出されなかった。このことから、本地点では、イネ属の珪酸体を供給するような水田などの耕作地の存在や稲が持ち込まれた可能性が低いことがうかがえる。

六甲山地南麓地域の扇状地面上に位置する考古遺跡では、黒色を呈す有機質土層が砂～砂礫層からなる流路や氾濫堆積物に挟在している様子がよく観察される。層相などから、これらは、その大半が古土壌として形成されたことが推定される。当社が近年、本地域で行った縄文時代～古墳時代頃までの各期における黒色有機質土層の植物珪酸体分析では、ネザサ節を含むタケ亜科が優占する群集や、タケ亜科が優占してヨシ属を伴う群集、今回の分析結果のようにヨシ属が多産しススキ属を伴う群集など、いくつかの群集タイプが存在していることが明らかになってきた。特に、ネザサ節を含むタケ亜科が優占する植物珪酸体群集については、山麓部周辺の扇状地構成層内に挟在する黒色有機質土層によく認められる傾向があるようである。今回の植物珪酸体群集は、山麓部の扇状地堆積物に存在する黒色有機質土層の植物珪酸体群集と大きく異なり、ヨシ属が多産する群集組成を示した。このような結果は、本地点が山麓部に比べ相対的に湿潤な土壌環境であったことを示唆しているものと解釈される。二葉町遺跡は、沖積扇状地の末端部分に位置していることから、地形的には今回の分析結果を調和的とみなすことができる。

上記してきた扇状地堆積物内に挟在する黒色有機質土層における植物珪酸体の産状は、扇状地における地形発達や微地形に関連した土壌発達様式の差異と関連していることが予想される。今後は、扇状地から海岸低地に至る地形勾配において、同時期に発達したとみなされる黒色有機質土層の層準の分析を実施し、空間的な考察を行っていくことが必要である。また、同時にこれらの黒色有機質土層については、遺跡内やその周辺での詳細な古地形や層序や土壌微細形態学的な検討を進めていくことも重要であると認識される。

今回の分析では、花粉化石の保存状態が極めて悪く、どの試料でもダイアグラムを作成するための統計学的に信頼できる個数を検出することが出来なかった。一般的に花粉化石は、好気的な環境条件下にあると土壌微生物の影響や化学的な酸化により分解・消失することが知られている（中村，1967)。分析を実施した縄文時代晩期～弥生時代前期の黒色有機質堆積層は、主に古土壌であると推定されていることから、継続的に好気的な環境が形成されていたことが推定される。このことを考慮すると、黒色有機質堆積層では、堆積後の経年変化によって花粉化石が分解・消失したことが推定される。このような状況から、残念ながら、本地点の分析結果からは、黒色有機質堆積層の時期である縄文時代晩期～弥生時代前期における周辺の古植生を推定することが困難であることが認識される。

これまでに六甲山地南麓地域で実施された花粉分析結果をふまえると、二葉町遺跡の周辺では、縄文時代晩期～弥生時代前期にアカガシ亜属を主体とした暖温帯性広葉樹林（いわゆる照葉樹林）が広がっていたことが推定される（パリノ・サーヴェイ，1991；古環境研究所, 1995)。大開遺跡において大型植物遺体分析を行った南木（1993）では、縄文時代晩期に遺跡周辺でイチイガシを含む種類数豊富な常緑広葉樹に多様な温帯性針葉樹と落葉広葉樹が混交した森林が形成されていたことを明らかにすると共に、同時期の大阪平野南部地域における分析結果に比べ六甲山地南麓部では多様な針葉樹が含まれ

ている点が特徴であることを指摘した。また、六甲山地南麓地域における花粉や種実分析の既往分析結果の整理を行った辻本ほか（2002）では、縄文時代晩期に六甲山地南麓地域の考古遺跡でアカガシ亜属の花粉が増加する傾向が存在することを見いだすとともに、弥生時代に入るとスギ属やイチイ科－イヌガヤ科－ヒノキ科、モミ属、コウヤマキ属といった温帯性針葉樹の花粉が増加することを指摘している。

六甲山地南麓地域で実施された微化石分析結果や近年、当社が調査・分析を行った事例から、本地域に分布する扇状地構成層内では、花粉などの微化石や大型植物遺体の保存状態が極めて悪いことが確認される。その逆に、扇状地構成層を侵食して形成された開析流路の充填堆積物のうち、河岸付近に堆積した有機質を多く含む砂泥層や泥質砂層では、微化石や大型植物化石が良好に保存されている場合が多いことが指摘できる。六甲山地南麓に分布する扇状地面上に立地する考古遺跡では、しばしば埋没河川が検出される。この地域を流下する河川は、集水面積が小さく、山地斜面から河口までの距離が極めて短い特徴を有している。これらのことから、発掘調査によって検出される埋没河川堆積物は、流域ごとの山地斜面から平野に至る古植生情報をよく反映している可能性が高いことが指摘される。

以上のような特徴を考慮すると、六甲山地南麓地域で今後、植生史的な検討を行う際には、扇状地構成層を侵食して形成された開析流路内の堆積物も視野に入れてサンプリングを行っていくことが必要であろう。既往の植生史に関する分析結果の蓄積によって、本地域では、縄文時代以降の大まかな古植生変遷について概観することがしだいに可能となってきた。六甲山地南麓の扇状地および海岸低地部では、地形的な特性から、流域ごとの高い解像度を有する古植生データを得ることが可能なことが認識された。このような古植生データと地質層序、地形発達史や発掘調査の成果を組み合わせることによって、六甲山地南麓地域では、他地域ではなし得ない各流域単位といった空間スケールでの詳細な景観復元や社会－自然複合動態を検討していけるものと思われる。

(2) 中世

11～12世紀代に比定される暗褐色砂質シルト～シルト質砂層の植物珪酸体の産状は、縄文時代晩期～弥生時代前期の層準と比較すると、ヨシ属が極端に減少し、タケ亜科やススキ属が多く検出される傾向にあり、また僅かであるがシバ属も検出されている。耕作土など人為層の層準では、しばしばヨシ属が急減する現象が確認される。このような変化は、耕作地造成や維持・管理などによる地表面の環境変化に起因していることが推定される。本層準では、わずかに栽培種のイネ属の植物珪酸体が検出されている。耕作土に含まれるイネ属珪酸体は、その場での栽培のみを示すものでなく、畑地の畝などの被覆資材や水田や畑などに肥糧用として鋤込まれる異地性の稲わらや籾殻などのイネ植物体についても想定する必要もあろう。そのため、本調査地で確認された11～12世紀代の耕作土については、軟X線写真撮影や土壌薄片などの土壌微細形態学的な手法を用いた堆積物の観察所見などをふまえ、さらに検討していくことが必要である。今回の分析結果では、耕作土と遺構埋土の微化石の産状にほとんど差異が存在していないこ

とが指摘される。なお、遺構埋土では、畑作植物とされるソバ属の花粉が１点検出されている。

本試料でも、花粉化石の保存状態が極めて悪く、古植生に関する十分な議論を行うことができない状況であった。中世頃の六甲山地南麓地域の花粉組成は、イネ科を中心とする草本類の増大とマツ属の花粉の多産によって特徴づけられる（辻本ほか，2002）。このマツ属の多産は、山地斜面などの林分に対する人為的な植生干渉が拡大した結果生じたものと推定される。二葉町遺跡の北東約２kmに位置する上沢遺跡では、飛鳥時代の層準で、人間による植生干渉による二次林化の影響を色濃く受けたと推定される、草本類の割合が高くマツ属が優占する花粉分析結果が得られている（パリノ・サーヴェイ，2002）。人為的営力の影響を強く反映していると推定される弥生時代以降の古植生については、遺跡ごとに多様な傾向を示すことが予測される。六甲山地南麓地域では、これらについての時空間的な把握するだけのデータが蓄積されておらず、今後、さらに調査・分析事例を増やしていくことが課題として認識される。

引用文献

株式会社古環境研究所（1995）自然科学分析.「神戸市東灘区本山中野遺跡—道路状遺構の調査—」，六甲山麓遺跡調査会，p.66-78.

近藤連三・佐瀬　隆（1986）植物珪酸体分析，その特性と応用．第四紀研究，25，P.31-64.

南木睦彦（1993）大開遺跡の大型植物化石と古植生.「大開遺跡発掘調査報告書」，神戸市教育委員会・(財)神戸市スポーツ教育公社，p.250-260.

中村　純（1967）「花粉分析」，古今書院，232p.

パリノ・サーヴェイ株式会社（1991）土壌中の微化石分析.「本庄町遺跡－郵政省宿舎建替えに伴う埋蔵文化財発掘調査報告書－」，兵庫県教育委員会，p.49-61.

パリノ・サーヴェイ株式会社（2002）４．植生史関連.「平成11年度　神戸市埋蔵文化財年報」，神戸市教育委員会，p.119-127.

辻本裕也・田中義文・辻　康男（2002）六条遺跡の自然科学分析.「六条遺跡発掘調査報告書－芦屋市西部第一地区震災復興土地区画整理事業・清水公園建設事業に伴う六条遺跡（第17・18地点）の事前調査記録－，p.85-94，芦屋市教育委員会.

第７章　二葉町遺跡出土木製品の樹種同定調査

第１節　第15次調査

植田弥生（パレオ・ラボ）

１．はじめに

ここでは、長田区久保町５丁目の発掘調査区から検出された、井戸SE301と不明遺構（近世遺構）に関する木製品の、樹種調査結果を報告する。

当遺跡は、北の六甲山系と南の瀬戸内海に挟まれた沖積地に立地する集落遺跡で、周辺の遺跡を含め平安時代中頃から各時期の多くの井戸が検出されているのが特徴である。今回調査された井戸SE301は、集落が最も発展した頃の中世の井戸である。周辺遺跡も含め多くの井戸について、今までに構築材の樹種調査が実施されている（御蔵遺跡、2001、松野遺跡、2001a、二葉町遺跡、2001bなど）。

今回調査した井戸SE301は保存状況が良好であり、ひとつの井戸に使用された各部位ごとの使用樹種や配置などが検討された。

２．樹種同定の方法

調査試料から、片刃の剃刀を用いて材の横断面（木口）・接線断面（板目）・放射断面（柾目）の３方向を薄く剥ぎ取りスライドグラスの上に並べ、ガムクロラールで封入し、材組織標本の永久プレパラートを作成した。そして光学顕微鏡を用いて、これらの材組織を観察し同定を行った。なお材組織の保存状況が悪いものや、切片を取ると形状が損なわれる恐れのあるものについては、一断面を作成できなかった試料が一部ある。永久プレパラートは、神戸市埋蔵文化財センターに保管されている。

３．結果

SE301出土樹種

井戸枠材そして井戸側内から検出された板材・割材・杭・曲物など合計175点からは、モミ属（40点）・ツガ属（14点）・アカマツ（９点）・コウヤマキ（７点）・スギ（22点）・ネズコ（１点）・アスナロ（１点）・ヒノキ（73点）の針葉樹８分類群、アカガシ亜属（４点）・ツブラジイ（２点）・サカキ（１点）の常緑広葉樹３分類群、クヌギ節（１点）の落葉広葉樹１分類群が検出された（表４～７）。

ほとんどの構成部材は、複数の針葉樹材から構成されていた。広葉樹材は少なく（８点）て、隅柱と井戸側内最下層から出土した角材・角柱・割杭・丸杭のみに使用されていた（表８）。

側板と板材からは複数の針葉樹材が検出され、特にヒノキとモミ属が圧倒的に多く、次にスギが多く、ツガ属・コウヤマキも使われ、側板ではアカマツも使われていた。割材もヒノキとモミ属が多く検出された。横桟は、ヒノキとスギが多く、コウヤマキが１点検出された。隅柱は、ヒノキ・アカマツ・ツブラジイであった。このように、側板・板材、割材、横桟、隅柱といった構成部分により、樹種構成がやや異なっていた。

各方位から出土した側板の樹種を見ると、東西からはヒノキ・モミ属・スギ・ツガ属が、南北からはヒノキ・モミ属・アカマツが共通して検出される傾向が見られ、コウヤマキは西と北からであった。横桟では、東西にヒノキが多く、南北ではスギが多く、コウヤマキは西から検出された。

調査した曲物は、側板・副板・帯板・木釘などすべてがヒノキから構成されていた（表9）。最下層から出土した、柄はヒノキ、円升の底板はスギでその木釘はネズコであった。

不明遺構（近世遺構）出土樹種

不明遺構から出土した、井戸の桶側板４点はアスナロとサワラであり、漆器椀はカツラであった。

材組織記載

モミ属　*Abies*　マツ科　挿図写真２　1a-1c（W1-7879）

仮道管・放射柔細胞からなり樹脂細胞はない針葉樹材。W1-7879には接線状に連続して配列する傷害樹脂道がある。早材から晩材への移行はゆるやか、放射柔細胞の壁は厚く放射断面において接線壁に数珠状肥厚が見られ、上下端の細胞はときに山形になる。分野壁孔は小型のスギ型やヒノキ型で１分野に1～4個が雑然と配置している。放射組織の細胞高は比較的高い。

モミ属は常緑高木で、暖帯から温帯下部の山地に普通に見られるモミ、温帯上部の高山に生育するウラジロモミ・シラベ・アオモリトドマツなどがあるが、いずれも材組織は類似していて区別はできない。材質はやや軽軟で加工は容易であるが保存性は低い。

ツガ属　*Tsuga sieboldii Carr.*　マツ科　挿図写真２　2a-2c（W1-7780）

仮道管・放射柔細胞・樹脂細胞・放射仮道管からなる針葉樹材。W1-7780・7850・7859・7870には傷害樹脂道が見られた。早材から晩材への移行は急で、晩材部仮道管の壁は厚い。放射柔細胞の壁は厚く放射断面において接線壁に数珠状肥厚があり、放射柔組織の上下端や希に中間に有縁壁孔を持つ放射仮道管がある。分野壁孔は小型で２～４個ある。

ツガ属には本州の福島県以南の暖帯から温帯下部の山地に普通のツガと、本州・四国・九州の温帯上部の深山に生育するコメツガがあるが、材組織からは２種を区別することはできない。材は重硬で割裂性も大きく耐久性もよい。

アカマツ　*Pinus densiflora* Sieb.　et Zucc.　マツ科　挿図写真２　3a-3c（W1-7823）

垂直と水平の樹脂道があり、早材から晩材への移行はゆるやかな針葉樹材。分野壁孔は窓状、放射組織の上下端には有縁壁孔を持つ放射仮道管がありその内壁には先の鋭く尖った鋸葉状の肥厚が顕著である。

アカマツは暖帯から温帯下部の陽光地に生育し、特に二次林の主要樹となる。材は硬く耐水性がある。

コウヤマキ　*Sciadopitys verticillata* Sieb.　et Zucc.　コウヤマキ科　挿図写真３　4a-4c（W1-7779）

仮道管・放射柔細胞からなる針葉樹材。早材から晩材への移行は緩やかである。分野壁孔は窓状、放射柔細胞の壁は薄い。放射組織は５細胞以下の背の低いものが多い。

コウヤマキは日本特産の１属１種の常緑高木で、本州の福島県以南・四国・九州の宮崎県の暖帯上部から温帯の山地に分布する。材は耐久性・耐水性・耐蟻性に優れる。

スギ　*Cryptomeria japonica* D.Don　スギ科　挿図写真３　5a-5c（W1-7785）

仮道管・放射柔細胞・樹脂細胞からなる針葉樹材。早材から晩材への移行は急で、晩材部の量は多く晩材部仮道管の壁は極めて厚い。分野壁孔は孔口が壁孔縁の幅より大きく水平に大きく開いたスギ型、１分野に主に２個が水平に配置している。

スギは本州以南の暖帯から温帯下部の湿気のある谷間に生育する常緑高木である。材はやや軽軟で加工は容易である。

ネズコ（クロベ）　*Thuja standishii* Carr.　ヒノキ科　挿図写真３　6a-6c（W1-788-2）

仮道管･放射柔細胞･樹脂細胞からなる針葉樹材。早材から晩材への移行はやや急で、晩材部仮道管の壁は厚い。分野壁孔はやや小型のスギ型とヒノキ型があり、１分野に２～４個ある。

ネズコ（クロベ）は本州・四国の温帯上部の山中に生育する常緑高木である。材は耐朽性・切削性・割裂性にすぐれる。

アスナロ　*Thujopsis dolabrata* sieb. et Zucc.　ヒノキ科　挿図写真４ 7a-7c（W1-7798）

仮道管・放射柔細胞・樹脂細胞からなる針葉樹材。晩材の量はやや少い。分野壁孔は小型でヒノキ型やスギ型が一分野に２～５個あり、２～３個が上下に配置しているものが多い。

アスナロは日本特産の１属１種で、本州・四国・九州の温帯の山中に生育する常緑高木である。材質は良いがヒノキよりやや劣る。

ヒノキ　*Chamaecyparis obtusa* Endl.　挿図写真４　8a-8c（W1-7750）

仮道管・放射柔細胞・樹脂細胞からなる針葉樹材。早材から晩材への移行はゆるやかで晩材の量は少なく、早材と晩材の仮道管壁の肥厚の差は少ない。分野壁孔は孔口がやや斜めに細く開き壁孔縁の幅が広い典型的なヒノキ型で、１分野におもに２個が水平に配列する。

ヒノキは本州の福島県以南・四国・九州のやや乾燥した尾根や岩上に生育し、材は耐久性・切削性・割裂性にすぐれる。

サワラ　*Chamaecyparis pisifera*（Sieb. et Zucc.）Endl.　ヒノキ科　挿図写真４　9a-9c（W1-7799）

仮道管・放射柔細胞・樹脂細胞からなる針葉樹材。早材から晩材の移行はやや急で晩材部の量はやや少ない。分野壁孔は孔口より壁孔縁が厚いヒノキ型であるがヒノキより孔口は広く開き、１分野におもに２個ある。

サワラはヒノキより分布域は狭く、岩手県以西・四国・九州の沢沿いの岩上に生育する。材はヒノキよりやや軽軟で劣るいわれる。

コナラ属アカガシ亜属　*Quercus subgen. Cyclobalanopsis*　ブナ科　挿図写真５ 10a-10c（W1-7796）

細胞幅の広い複合放射組織を挟み小型～中型の単独管孔が放射状に配列する放射孔材。道管の壁孔は交互状、穿孔は単一である。放射組織は同性、単列と複合状があり、

道管との壁孔は孔口が大きく開く柵状・交互状である。

アカガシ亜属はカシ類の仲間であり、おもに暖温帯に分布する常緑広葉樹である。山野に普通なアラカシ・アカガシ・シラカシ、関東以南に多いイチイガシ・ツクバネガシ、海岸や乾燥地に多いウバメガシ、寒さに強くブナ帯の下部まで分布するウラジロガシなどがあるが、材組織は類似している。材は丈夫で弾性や耐湿性がある。

ツブラジイ　*Castanopsis cuspidata* Schottky　ブナ科　挿図写真５　11a-11c（W1-7817）

孔口は楕円形で中型の管孔が単独で間隔をあけて配列し、さらに数個が放射方向に分布後、急に小型となり火炎状に配列する環孔材。年輪幅が広い試料では、管孔の配列は放射状となりる。幅の狭い集合放射組織があり、その部分で年輪界が大きくずれる。道管の壁孔は交互状、穿孔は単一である。放射組織は単一同性、まれに幅の狭い緩く集合した集合放射組織がある。

ツブラジイは暖帯に生育する常緑広葉樹、関東以西・四国・九州に分布する。材は硬く丈夫である。

コナラ属コナラ亜属クヌギ節　*Quercus subgen. Q. sect. Cerris*　ブナ科　挿図写真５　12a-12c（W1-7897）

年輪の始めに大型の管孔が１～３層配列し、その後は小型で厚壁の孔口が円形の管孔が単独で放射状に分布する環孔材。道管の壁孔は交互状、穿孔は単一である。放射組織は同性、単列と細胞幅の広い複合状があり、道管との壁孔は柵状・交互状である。

クヌギ節は落葉性のナラ類でクヌギとアベマキが属する。暖帯の山林に普通の高木で二次林にも多い。材は重厚で割裂性が良い。

カツラ　*Cercidiphyllum japonicum* Sieb.et Zucc.　カツラ科　挿図写真６　13a-13c（W1-7749）

小型で多角形の管孔が年輪内に密在し年輪界ではやや径を減じ、管孔の占有面積が多い散孔材。道管の壁孔はまばらな交互状や孔口の長さが不揃いの階段状、穿孔は横棒数が非常に多い階段穿孔である。放射組織は異性、１～２細胞幅、多列部の上下端には方形や直立細胞が単層で１～３細胞層ある。

カツラは北海道から九州の暖帯から温帯の渓谷に生育する落葉高木である。材は均質でやや軽軟、割裂性・切削性は良く、狂いは少ないが保存性はあまり良くない。

サカキ　*Cleyera japonica* Thunb.　ツバキ科　挿図写真６　14a-14c（W1-7797）

非常に小型で角形や多角形の管孔が密に分布する散孔材。道管の壁孔は階段状、穿孔は横棒数が30本前後の階段穿孔である。放射組織は細胞壁が厚く、単列異性、道管との壁孔は交互状・階段状である。

サカキは本州の茨城県および石川県以西より南の暖帯から亜熱帯に生育する常緑小高木である。材は強靭・堅硬で割裂困難であり丈夫である。

４．まとめ

今までにおける周辺遺跡の平安時代末から中世の井戸には、主にヒノキ・スギ・モミ属・ツガ属・コウヤマキ・アカマツなど複数の針葉樹材が使用されていた事が知られて

いる（パリノ・サーヴェイ株式会社、2001、松葉、2001a、2001bなど）。そして、井戸ごとにヒノキやスギまたはアカマツやツガ属など優占使用されていた樹種も異なるようである。また、御蔵遺跡（2001）のSE201や二葉町遺跡（2001b）のSE306やSE309では、井戸枠にクスノキやアカガシ亜属などの広葉樹材も含まれて使われている井戸もある。今回調査した井戸SE301は、周辺遺跡の井戸の多くと同様に、井戸枠には前述の複数の針葉樹材が使用されていて、杭や角柱・角材には広葉樹材（アカガシ亜属・ツブラジイ・サカキ・クヌギ節）が使用されていた。周辺遺跡の井戸内の杭材にはアカガシ亜属・ツブラジイ・ヒサカキ・クスノキ科・カエデ属・マンサク属・ヤナギ属・トネリコ属など様々な広葉樹材が報告されているが、アカガシ亜属やツブラジイなどの常緑広葉樹材が目立つ点も共通している。

今回の調査では、井戸の構成部位で使用されていた樹種構成にやや違いが見られ、また方向（配置位置）によっても樹種構成に違いが見られた。側板や板材は、ヒノキ・モミ属が多くそのほかにスギ・ツガ属・アカマツ・コウヤマキといった様々な針葉樹材が使用されていた。しかし、横桟はヒノキ・スギ・コウヤマキで、隅柱の針葉樹材はヒノキとアカマツであり、樹種数は２～３種類で、モミ属とツガ属は検出されなかった。側板の樹種の配置は、東西ではヒノキ・モミ属・スギ・ツガ属が多く、南北ではヒノキ・モミ属・アカマツが多く使われ、コウヤマキは西と北から検出された。コウヤマキは横桟でも使用されていたが、ここでも西から検出された点が注目される。横桟では、東西にヒノキが多く、南北ではスギが多かった。しかしこのような調査事例はあまりないようなので、井戸の構成部位や方向（配置位置）による樹種構成の傾向は、偶然なのか、それとも井戸を構築する際の作業工程を反映しているのかどうかは不明であるが、今後もこのような調査事例を増やすことにより新たに見えてくるものがあるのではないだろうか。

調査したすべての曲物は各部材ともに、適材として周知のヒノキがすべてに使われていた。

一方、不明遺構から検出された井戸側板の桶板は、アスナロとサワラであった。曲物はヒノキが圧倒的に多いが、桶板はスギ・コウヤマキそしてヒノキ科の様々な樹種（ヒノキ・サワラ・アスナロ・クロベ）が使用されるので、当遺跡の樹種利用も桶材の樹種選択性を反映しているといえる。漆器の木地は、大木が豊富な山中で木地師が製作することが知られており、その樹種はブナ属・トチノキ・クリ・ケヤキなどが多いが、カツラもしばしば検出される樹種のひとつである。

引用文献

パリノ・サーヴェイー株式会社、2001、御蔵遺跡から出土した木製品等の樹種、114-128、「御蔵遺跡 第４・６・14・32次発掘調査報告書」、神戸市教育委員会

松葉礼子、2001a、松野遺跡出土木製品（古墳時代後期初頭～鎌倉時代）の樹種同定、175-186、「松野遺跡発掘調査報告書 第３～７次調査」、神戸市教育委員会

松葉礼子、2001b、二葉町遺跡出土木製品の樹種同定、141-166、「二葉町遺跡発掘調査報告書 第３・５・７・８・９・10次調査」、神戸市教育委員会

表４　二葉町遺跡出土木製品樹種同定結果一覧（1）

地区名	W1番号	図番号	地区	遺物名	遺構名	樹種	備考
久保５	7749		１区	漆器椀	不明遺構	カツラ	
久保５	7750		１区	井戸側板	SE301	ヒノキ	E-1
久保５	7751		１区	井戸側板	SE301	ヒノキ	E-1
久保５	7752		１区	横桟(南１段目)	SE301	スギ	S-1
久保５	7753		１区	横桟(北１段目)	SE301	スギ	N-1
久保５	7754		１区	角材	SE301	ヒノキ	E-2
久保５	7755		１区	井戸側板	SE301	ヒノキ	E-3
久保５	7756		１区	井戸側板	SE301	ヒノキ	E-4
久保５	7757		１区	井戸側板	SE301	ツガ属	E-4
久保５	7758		１区	板材	SE301	ツガ属	
久保５	7759		１区	板材	SE301	スギ	
久保５	7760		１区	板材	SE301	モミ属	
久保５	7761		１区	井戸側板	SE301	スギ	E-5
久保５	7762		１区	井戸側板	SE301	ヒノキ	E-6
久保５	7763		１区	井戸側板	SE301	スギ	E-7
久保５	7764	25	１区	井戸側板	SE301	ヒノキ	E-8
久保５	7765		１区	井戸側板	SE301	モミ属	E-9
久保５	7766		１区	井戸側板	SE301	ヒノキ	E-10
久保５	7767		１区	井戸側板	SE301	ヒノキ	N-2
久保５	7768		１区	割材	SE301	モミ属	北東隅柱東側
久保５	7769		１区	板材	SE301	モミ属	南東隅柱西側
久保５	7770		１区	板材	SE301 井戸側内上層	ヒノキ	
久保５	7771		１区	割材	SE301 井戸側内上層	アスナロ	
久保５	7772		１区	割材	SE301 井戸側内中層	ヒノキ	
久保５	7773		１区	割材	SE301 井戸側内中層	ヒノキ	
久保５	7774		１区	割材	SE301 井戸側内中層	ヒノキ	
久保５	7775		１区	割材	SE301 井戸側内中層	ツガ属	
久保５	7776		１区	割材	SE301 井戸側内中層	ヒノキ	
久保５	7777		１区	板材	SE301 井戸側内下層	ヒノキ	
久保５	7778		１区	板材	SE301 井戸側内下層	モミ属	
久保５	7779		１区	板材	SE301 井戸側内下層	コウヤマキ	
久保５	7780		１区	板材	SE301 井戸側内下層	ツガ属	
久保５	7781		１区	曲物底板	SE301 井戸側内下層	ヒノキ	
久保５	7782	24	１区	板材	SE301 井戸側内最下層	スギ	
久保５	7783		１区	板材	SE301 井戸側内最下層	ツガ属	
久保５	7784		１区	板材	SE301 井戸側内最下層	ツガ属	
久保５	7785		１区	板材	SE301 井戸側内最下層	スギ	
久保５	7786		１区	板材	SE301 井戸側内最下層	コウヤマキ	
久保５	7787		１区	割材	SE301 井戸側内最下層	ヒノキ	
久保５	7788		１区	割材	SE301 井戸側内最下層	ヒノキ	
久保５	7789		１区	割材	SE301 井戸側内最下層	モミ属	
久保５	7790		１区	割材	SE301 井戸側内最下層	ヒノキ	
久保５	7791		１区	板材	SE301 井戸側内最下層	モミ属	
久保５	7792		１区	割り板材	SE301 井戸側内最下層	スギ	
久保５	7793		１区	割材	SE301 井戸側内最下層	ヒノキ	

表５　二葉町遺跡出土木製品樹種同定結果一覧（2）

地区名	W1番号	図番号	地区	遺物名	遺構名	樹種	備考
久保５	7794		１区	割材	SE301井戸側内最下層	モミ属	
久保５	7795		１区	角柱	SE301井戸側内最下層	アカガシ亜属	
久保５	7796		１区	割杭	SE301井戸側内最下層	アカガシ亜属	
久保５	7797		１区	丸杭	SE301井戸側内最下層	サカキ	N-3
久保５	7798		１区	井戸側板(桶板)	SX01	アスナロ	
久保５	7799		１区	井戸側板(桶板)	SX01	サワラ	
久保５	7800		１区	井戸側板(桶板)	SX01	アスナロ	
久保５	7801		１区	井戸側板(桶板)	SX01	アスナロ	墨書有り
久保５	7802	18	１区	隅柱（北東）	SE301	ツブラジイ	
久保５	7803		１区	割材	SE301	モミ属	
久保５	7804		１区	割材	SE301	ヒノキ	
久保５	7805		１区	割材	SE301	ヒノキ	
久保５	7806		１区	割材	SE301	ヒノキ	
久保５	7807		１区	割材	SE301	コウヤマキ	
久保５	7808		１区	井戸側板	SE301	モミ属	N-4
久保５	7809		１区	井戸側板	SE301	モミ属	
久保５	7810		１区	井戸側板	SE301	ヒノキ	
久保５	7811		１区	横桟（北側）	SE301	ヒノキ	
久保５	7812		１区	割材	SE301	モミ属	
久保５	7813		１区	横桟（南側）	SE301	スギ	
久保５	7814		１区	井戸側板(南側)	SE301	モミ属	
久保５	7815		１区	横桟（南側）	SE301	スギ	
久保５	7816		１区	井戸側板	SE301	アカマツ	R-233と接続
久保５	7817		１区	割材	SE301	ツブラジイ	
久保５	7818		１区	板材	SE301	モミ属	
久保５	7819		１区	割材	SE301	スギ	
久保５	7820	17	１区	隅柱（南東）	SE301	ヒノキ	
久保５	7821		１区	井戸側板	SE301	モミ属	
久保５	7822		１区	井戸側板	SE301	モミ属	
久保５	7823		１区	井戸側板	SE301	アカマツ	N-5
久保５	7824		１区	板材	SE301	アカマツ	
久保５	7825		１区	井戸側板	SE301	モミ属	
久保５	7826		１区	横桟(南3段目)	SE301	スギ	
久保５	7827		１区	横桟(東3段目)	SE301	ヒノキ	
久保５	7828		１区	井戸側板	SE301	ヒノキ	井戸側材北材
久保５	7829		１区	井戸側板	SE301	モミ属	R-231と接続
					SE301		N-6井戸内側材北側
久保５	7830		１区	横桟(北3段目)	SE301	スギ	
久保５	7831		１区	井戸側板	SE301	モミ属	
久保５	7832		１区	井戸側板	SE301	モミ属	井戸側材北側
久保５	7833		１区	横桟(北4段目)	SE301	スギ	印有り
久保５	7834		１区	井戸側板	SE301	ヒノキ	井戸側材北側
久保５	7835		１区	井戸側板	SE301	モミ属	井戸側材北側
久保５	7836		１区	井戸側板	SE301	ヒノキ	井戸側材北側
久保５	7837		１区	井戸側板	SE301	アカマツ	井戸側材南側
久保５	7838		１区	井戸側板	SE301	モミ属	井戸側材南側

表６　二葉町遺跡出土木製品樹種同定結果一覧（3）

地区名	W1番号	図番号	地区	遺物名	遺構名	樹種	備考
久保５	7839	23	１区	井戸側板	SE301	ヒノキ	井戸側材南側S-2
久保５	7840		１区	井戸側板	SE301	モミ属	井戸側材南側S-2
久保５	7841	22	１区	井戸側板	SE301	ヒノキ	井戸側材南側S-3
久保５	7842	20	１区	横桟（南4段目）	SE301	スギ	
久保５	7843		１区	井戸側板	SE301	モミ属	井戸側材北側R-192,232,
					SE301		235,236,245～248と接続
久保５	7844		１区	井戸側板	SE301	ヒノキ	井戸側材北側
久保５	7845		１区	井戸側板	SE301	ヒノキ	井戸側材北側
久保５	7846		１区	井戸側板	SE301	モミ属	井戸側材北側
久保５	7847		１区	横桟（東4段目）	SE301	ヒノキ	
久保５	7848	15	１区	隅柱（南西）	SE301	ヒノキ	
久保５	7849		１区	横桟（西1段目）	SE301	ヒノキ	W-1
久保５	7850		１区	井戸側板	SE301	ツガ属	井戸側材西側W-2
久保５	7851	19	１区	横桟（西2段目）	SE301	ヒノキ	W-3
久保５	7852	21	１区	横桟（西3段目）	SE301	コウヤマキ	W-4
久保５	7853		１区	横桟（西4段目）	SE301	スギ	印有り W-5
久保５	7854		１区	井戸側板	SE301	ヒノキ	井戸側材西側W-6
久保５	7855		１区	井戸側板	SE301	モミ属	井戸側材西側W-7
久保５	7856	16	１区	隅柱（北西）	SE301	アカマツ	R-228と接合
久保５	7857		１区	井戸側板	SE301	ヒノキ	井戸側材西側W-8
久保５	7858		１区	井戸側板	SE301	ヒノキ	井戸側材西側W-9
久保５	7859		１区	井戸側板	SE301	ツガ属	井戸側材西側
久保５	7860		１区	井戸側板	SE301	スギ	井戸側材西側W-10
久保５	7861		１区	井戸側板	SE301	ツガ属	井戸側材西側W-11
久保５	7862		１区	井戸側板	SE301	アカマツ	井戸側材西側W-12
久保５	7863		１区	井戸側板	SE301	アカマツ	井戸側材西側W-13
久保５	7864		１区	井戸側板	SE301	コウヤマキ	井戸側材西側W-14
久保５	7865		１区	井戸側板	SE301	モミ属	井戸側材西側
久保５	7866		１区	井戸側板	SE301	スギ	井戸側材西側W-15
久保５	7867		１区	井戸側板	SE301	ツガ属	井戸側材西側
久保５	7868		１区	井戸側板	SE301	ツガ属	井戸側材西側
久保５	7869		１区	井戸側板	SE301	モミ属	井戸側材西側
久保５	7870		１区	井戸側板	SE301	ツガ属	井戸側材西側
久保５	7871		１区	井戸側板	SE301	コウヤマキ	井戸側材西側
久保５	7872		１区	井戸側板	SE301	コウヤマキ	井戸側材北側
久保５	7873		１区	井戸側板	SE301	ヒノキ	井戸側材北側
久保５	7874		１区	井戸側板	SE301	ヒノキ	井戸側材北側
久保５	7875		１区	板材	SE301井戸側内最下層	モミ属	
久保５	7876		１区	丸杭	SE301井戸側内最下層	アカガシ亜属	R-229と接合
久保５	7877-1	30	１区	円升底板	SE301井戸側内最下層	スギ	
久保５	7877-2	30	１区	円升底板の木釘	SE301井戸側内最下層	ネズコ	
久保５	7878		１区	板材	SE301井戸側内最下層	スギ	
久保５	7879		１区	板材	SE301井戸側内最下層	モミ属	
久保５	7880		１区	板材	SE301井戸側内最下層	モミ属	
久保５	7881		１区	井戸側板	SE301	モミ属	

表７　二葉町遺跡出土木製品樹種同定結果一覧（4）

地区名	W1番号	図番号	地区	遺物名	遺構名	樹種	備考
久保５	7882		１区	井戸側板	SE301	スギ	
久保５	7883		１区	井戸側板	SE301	ツガ属	
久保５	7884		１区	井戸側板	SE301	モミ属	
久保５	7885		１区	井戸側板	SE301	モミ属	
久保５	7886		１区	井戸側板	SE301	モミ属	
久保５	7887		１区	板材	SE301井戸側内最下層	ツガ属	曲物枠内
久保５	7888		１区	丸杭	SE301井戸側内最下層	アカガシ亜属	曲物枠内
久保５	7889		１区	柄	SE301井戸側内最下層	ヒノキ	曲物枠内
久保５	7890-1	29	１区	曲物桶の側板	SE301井戸側内最下層	ヒノキ	曲物枠内
久保５	7890-2	29	１区	曲物桶の底板	SE301井戸側内最下層	ヒノキ	
久保５	7890-3	29	１区	曲物桶の木釘	SE301井戸側内最下層	ヒノキ	木釘1
久保５	7890-4	29	１区	曲物桶の木釘	SE301井戸側内最下層	ヒノキ	木釘2
久保５	7890-5	29	１区	曲物桶の木釘	SE301井戸側内最下層	ヒノキ	木釘3
久保５	7890-6	29	１区	曲物桶の木釘	SE301井戸側内最下層	ヒノキ	木釘4
久保５	7891		１区	井戸側板	SE301	モミ属	
久保５	7892		１区	井戸側板	SE301	モミ属	
久保５	7893		１区	井戸側板	SE301	アカマツ	
久保５	7894		１区	井戸側板	SE301	モミ属	
久保５	7895		１区	井戸側板	SE301	スギ	
久保５	7896		１区	板材	SE301井戸側内最下層	モミ属	曲物枠内
久保５	7897		１区	角材	SE301井戸側内最下層	クヌギ節	曲物枠内
久保５	7898	26	１区	曲物	SE301井戸側内最下層	ヒノキ	1段目
久保５	7899-1	27	１区	曲物側板	SE301井戸側内最下層	ヒノキ	2段目
久保５	7899-2	27	１区	曲物帯板	SE301井戸側内最下層	ヒノキ	帯板上
久保５	7899-3	27	１区	曲物帯板	SE301井戸側内最下層	ヒノキ	帯板下
久保５	7899-4	27	１区	曲物副板	SE301井戸側内最下層	ヒノキ	副板1
久保５	7899-5	27	１区	曲物副板	SE301井戸側内最下層	ヒノキ	副板2
久保５	7899-6	27	１区	曲物副板	SE301井戸側内最下層	ヒノキ	副板3
久保５	7899-7	27	１区	曲物副板	SE301井戸側内最下層	ヒノキ	副板4
久保５	7899-8	27	１区	曲物木釘	SE301井戸側内最下層	ヒノキ	木釘1
久保５	7899-9	27	１区	曲物木釘	SE301井戸側内最下層	ヒノキ	木釘2
久保５	7899-10	27	１区	曲物木釘	SE301井戸側内最下層	ヒノキ	木釘3
久保５	7899-11	27	１区	曲物木釘	SE301井戸側内最下層	ヒノキ	木釘4
久保５	7899-12	27	１区	曲物木釘	SE301井戸側内最下層	ヒノキ	木釘5
久保５	7899-13	27	１区	曲物木釘	SE301井戸側内最下層	ヒノキ	木釘6
久保５	7899-14	27	１区	曲物木釘	SE301井戸側内最下層	ヒノキ	木釘7
久保５	7899-15	27	１区	曲物木釘	SE301井戸側内最下層	ヒノキ	木釘8
久保５	7899-16	27	１区	曲物木釘	SE301井戸側内最下層	ヒノキ	木釘9
久保５	7900-1	28	１区	曲物側板	SE301井戸側内最下層	ヒノキ	3段目
久保５	7900-2	28	１区	曲物帯板	SE301井戸側内最下層	ヒノキ	帯板上
久保５	7900-3	28	１区	曲物帯板	SE301井戸側内最下層	ヒノキ	帯板下
久保５	7900-4	28	１区	曲物副板	SE301井戸側内最下層	ヒノキ	副板1
久保５	7900-5	28	１区	曲物副板	SE301井戸側内最下層	ヒノキ	副板2
久保５	7900-6	28	１区	曲物副板	SE301井戸側内最下層	ヒノキ	副板3
久保５	7901		１区	井戸側板	SE301	モミ属	井戸側材南側S-3

表８　二葉町遺跡 SE301 井戸枠など構築材の樹種構成

SE301	井戸枠材															
	側板					板材	横桟				隅柱				割材	角材
樹種	東	西	南	北	ほか		東	西	北	南	南東	南西	北東	北西		東
ヒノキ	7	3	2	8	1		2	2	1		1	1			3	1
モミ属	1	3	4	6	12	3									3	
スギ	2	2			2	1		1	3	5					1	
ツガ属	1	6			1	1										
アカマツ		2	1	1	2	1								2		
コウヤマキ		2		1				1							1	
アスナロ																
アカガシ亜属																
ツブラジイ													1		1	
クヌギ節																
サカキ																
合　計	11	18	7	16	18	6	2	4	4	5	1	1	1	2	9	1

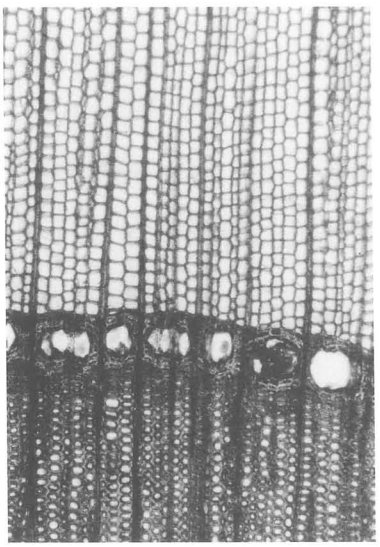
SE301	井戸側内										合計
	板材			割材			角材	角柱	割杭	丸杭	
樹種	上層	下層	最下層	上層	中層	最下層	最下層	最下層	最下層	最下層	
ヒノキ	1	1			4	4					42
モミ属		1	5			2					40
スギ			4								21
ツガ属		1	3		1						14
アカマツ											9
コウヤマキ		1	1								7
アスナロ				1							1
アカガシ亜属								1	1	2	4
ツブラジイ											2
クヌギ節							1				1
サカキ										1	1
合　計	1	4	13	1	5	6	1	1	1	3	142

表９　二葉町遺跡 SE301 井戸側内下層・最下層出土曲物などの樹種構成

SE301	下層	最下層														合計
	曲物	曲物桶 W1-7890			曲物(1段目) W1-7898	曲物(2段目) W1-7899				曲物(3段目) W1-7900			柄	円升		
樹種	底板	側板	底板	木釘	側板	側板	副板	帯板	木釘	側板	副板	帯板		底板	木釘	
ヒノキ	1	1	1	4	1	1	4	2	9	1	3	2	1			31
スギ														1		1
ネズコ															1	1
合計	1	1	1	4	1	1	4	2	9	1	3	2	1	1	1	33

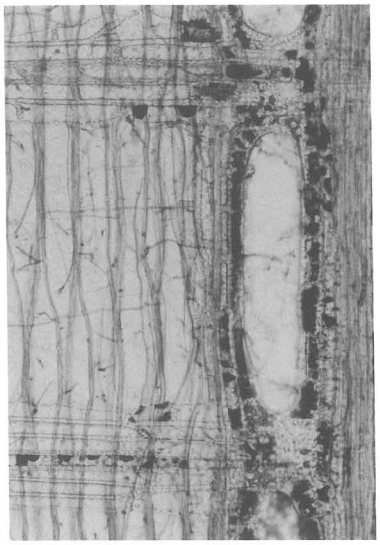
挿図写真２　二葉町遺跡 15 次出土木製品樹種（1）

bar :

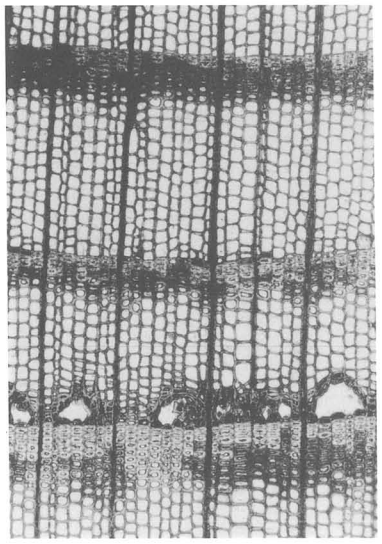


1a　モミ属（横断面）
W1－7879　bar:0.5mm

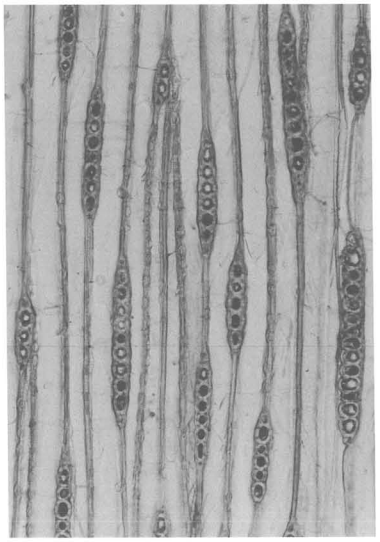
1b　モミ属（接線断面）
W1－7879　bar:0.2mm



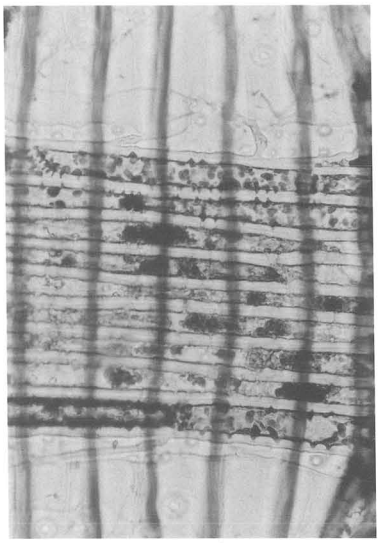
1c　モミ属（放射断面）
W1－7879　bar:0.2mm



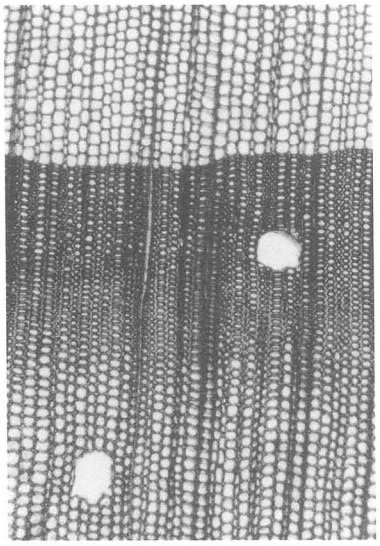
2a　ツガ属（横断面）
W1－7780　bar:0.5mm



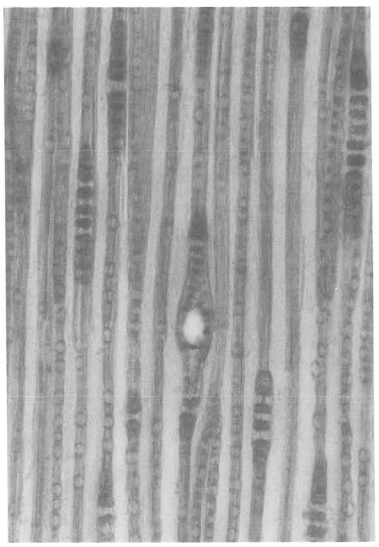
2b　ツガ属（接線断面）
W1－7780　bar:0.2mm



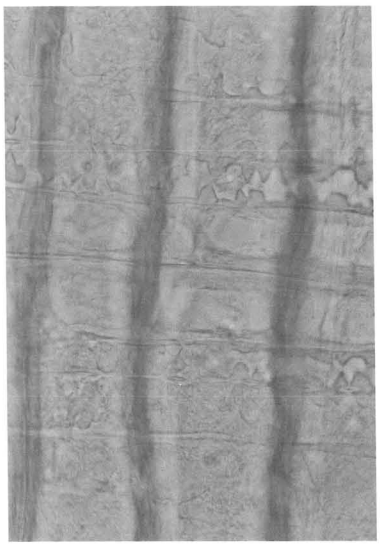
2c　ツガ属（放射断面）
W1－7780　bar:0.1mm



3a　アカマツ（横断面）
W1－7823　bar:0.5mm



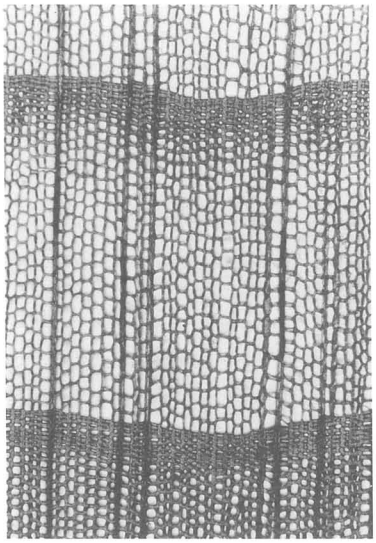
3b　アカマツ（接線断面）
W1－7823　bar:0.2mm



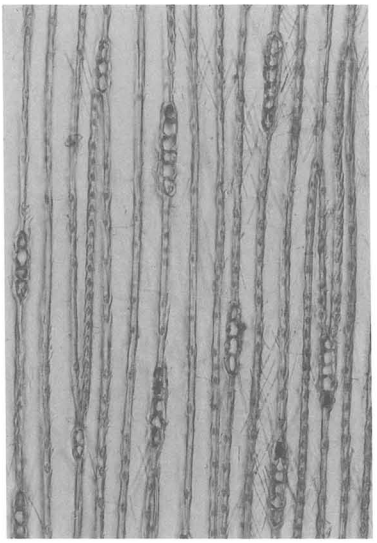
3c　アカマツ（放射断面）
W1－7823　bar:0.05mm

挿図写真３　二葉町遺跡 15 次出土木製品樹種(2)

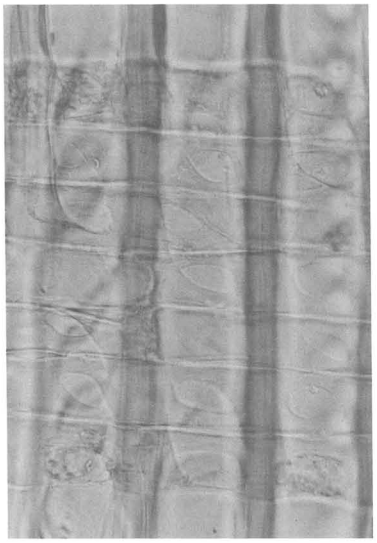
bar : ▬▬▬



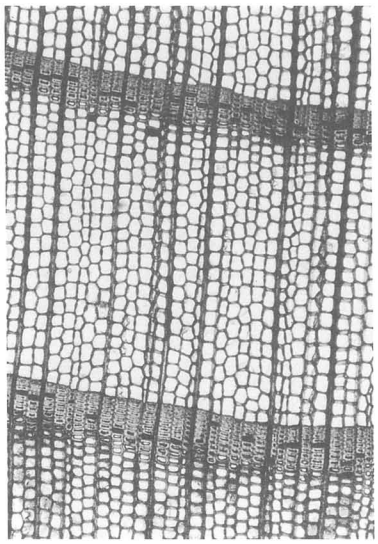
4a　コウヤマキ（横断面）
W1－7779　bar:0.5mm



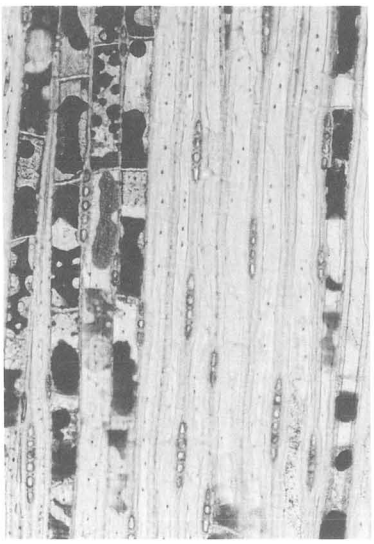
4b　コウヤマキ（接線断面）
W1－7779　bar:0.2mm



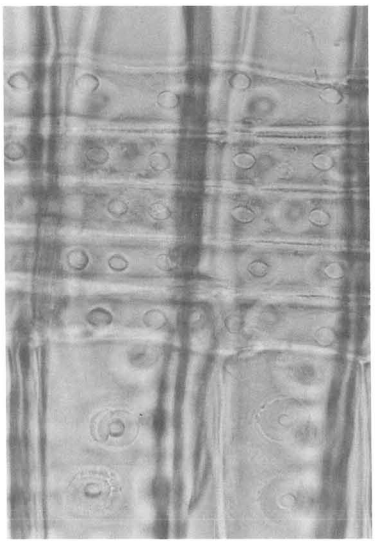
4c　コウヤマキ（放射断面）
W1－7779　bar:0.05mm



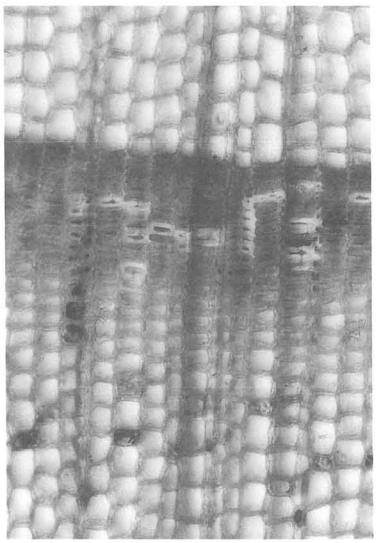
5a　スギ（横断面）
W1－7785　bar:0.5mm



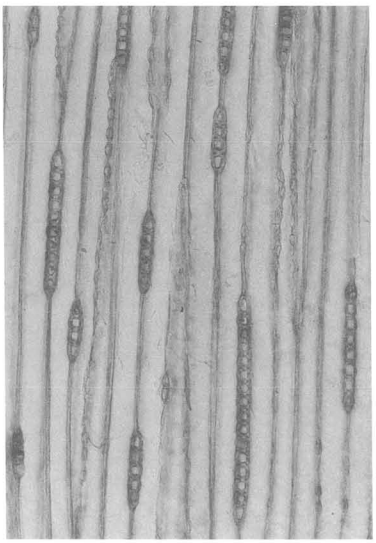
5b　スギ（接線断面）
W1－7785　bar:0.2mm



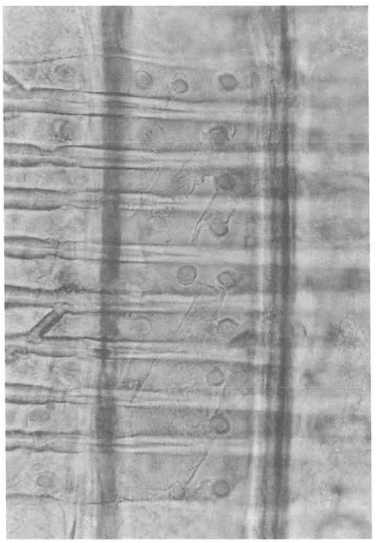
5c　スギ（放射断面）
W1－7785　bar:0.05mm



6a　ネズコ（横断面）
W1－7877－2　bar:0.2mm



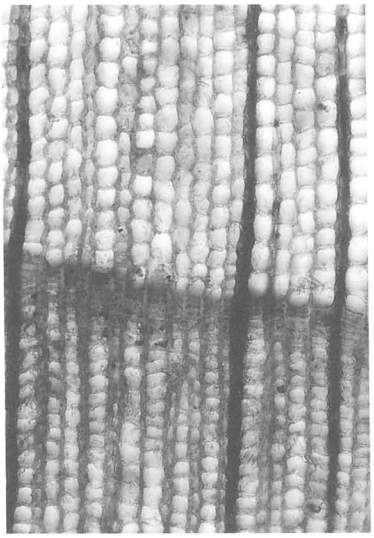
6b　ネズコ（接線断面）
W1－7877－2　bar:0.2mm



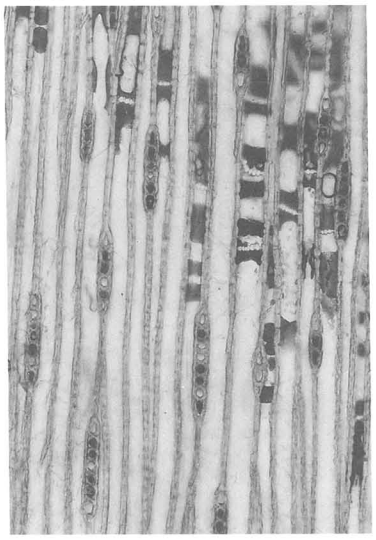
6c　ネズコ（放射断面）
W1－7877－2　bar:0.05mm

挿図写真４　二葉町遺跡 15 次出土木製品樹種(3)

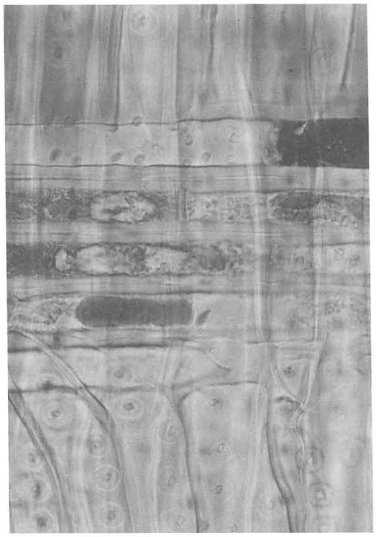
bar : ▬▬▬



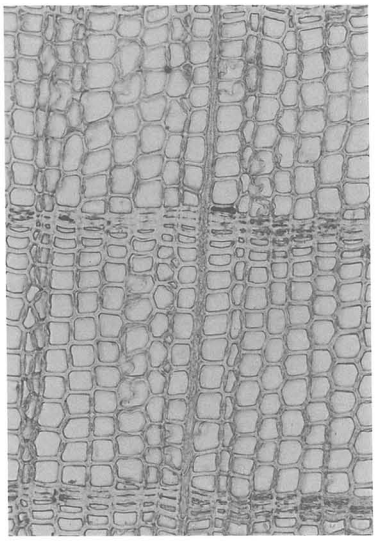
7a　アスナロ（横断面）
W1－7798　bar:0.2mm



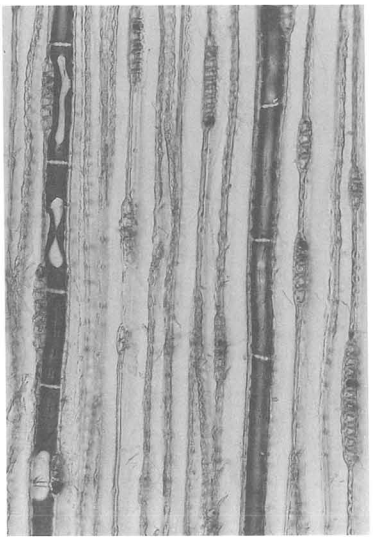
7b　アスナロ（接線断面）
W1－7798　bar:0.2mm



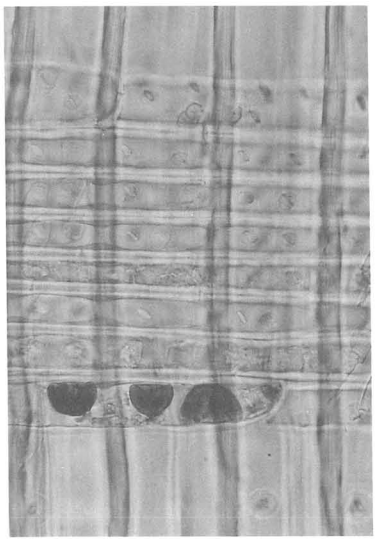
7c　アスナロ（放射断面）
W1－7798　bar:0.05mm



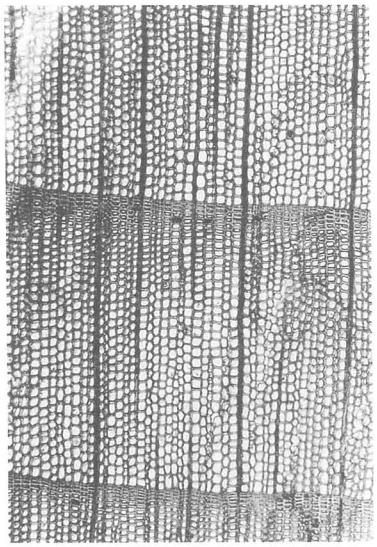
8a　ヒノキ（横断面）
W1－7750　bar:0.2mm



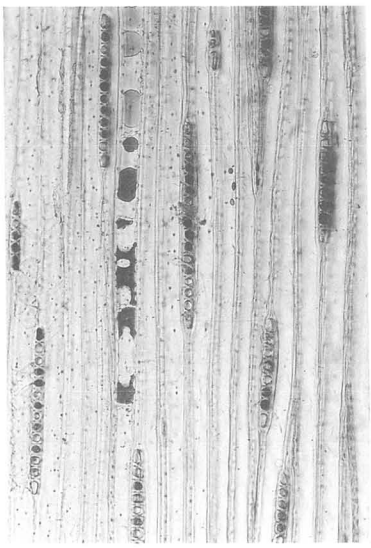
8b　ヒノキ（接線断面）
W1－7750　bar:0.2mm



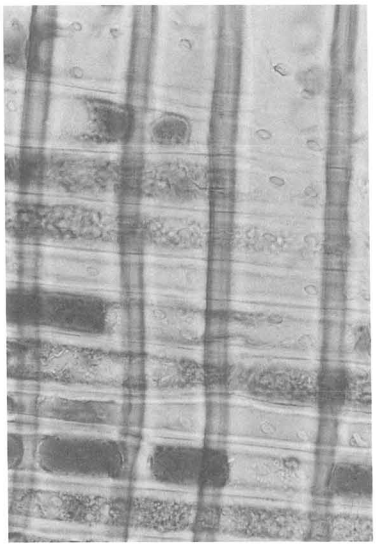
8c　ヒノキ（放射断面）
W1－7750　bar:0.05mm



9a　サワラ（横断面）
W1－7799　bar:0.5mm



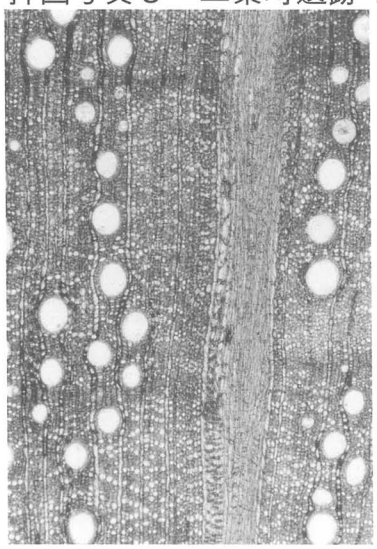
9b　サワラ（接線断面）
W1－7799　bar:0.2mm



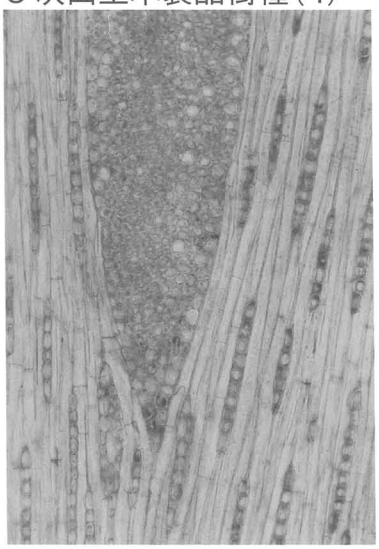
9c　サワラ（放射断面）
W1－7799　bar:0.05mm

挿図写真５　二葉町遺跡 15 次出土木製品樹種(4)

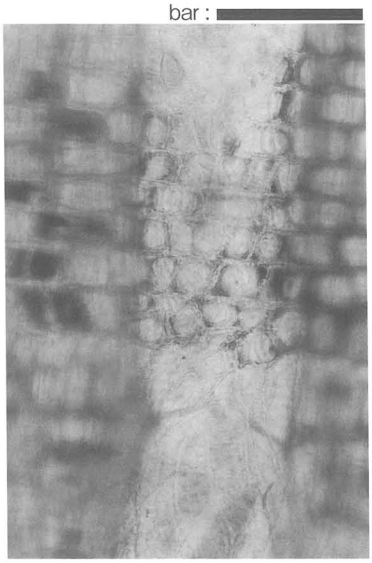
bar :



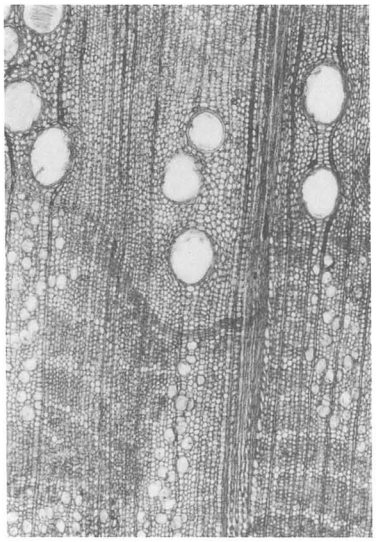
10a　アカガシ亜属（横断面）
W1－7796　bar:0.5mm



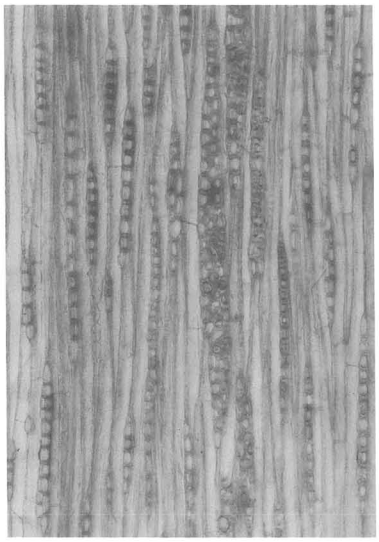
10b　アカガシ亜属（接線断面）
W1－7796　bar:0.2mm



10c　アカガシ亜属（放射断面）
W1－7796　bar:0.1mm

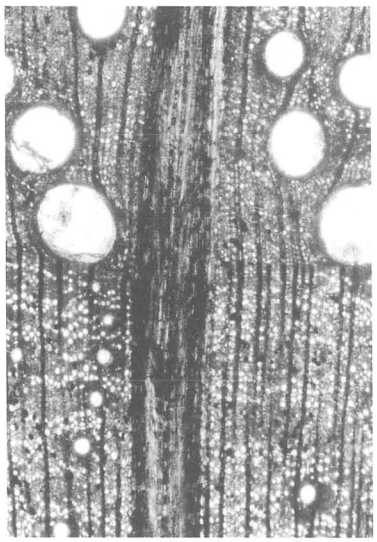


11a　ツジラジイ（横断面）
W1－7817　bar:0.5mm

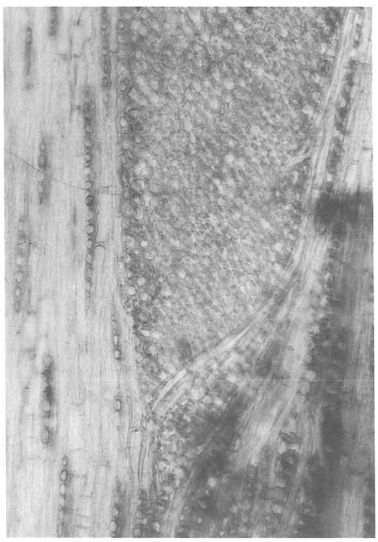


11b　ツジラジイ（接線断面）
W1－7817　bar:0.2mm

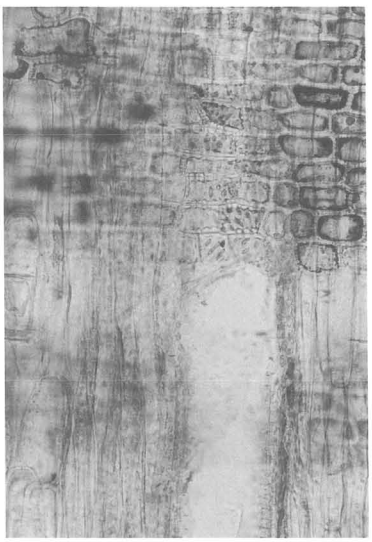
11c　ツジラジイ（放射断面）
W1－7817　bar:0.1mm



12a　クヌギ節（横断面）
W1－7897　bar:0.5mm



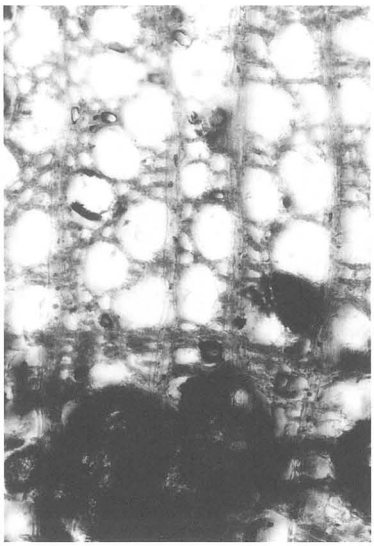
12b　クヌギ節（接線断面）
W1－7897　bar:0.2mm



12c　クヌギ節（放射断面）
W1－7897　bar:0.1mm

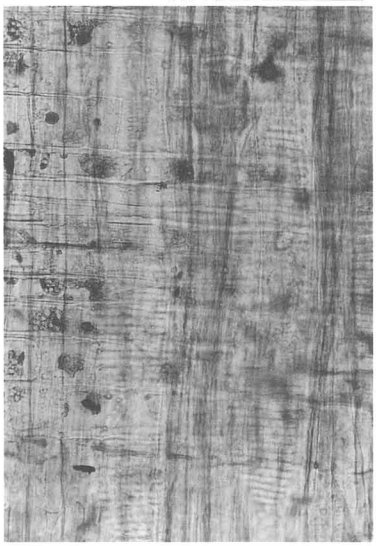
挿図写真６　二葉町遺跡 15 次出土木製品樹種(5)

bar : ■■■■■■■■

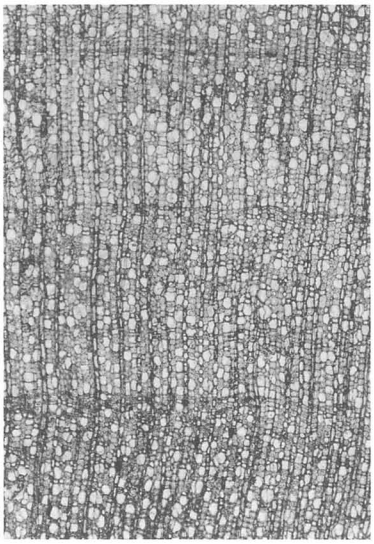


13a　カツラ（横断面）
W1－7749　bar:0.2mm

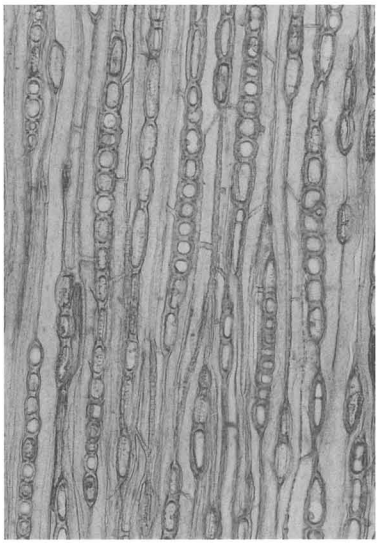
13b　カツラ（接線断面）
W1－7749　bar:0.2mm



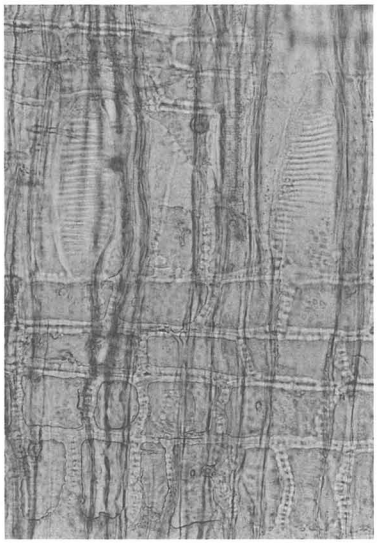
13c　カツラ（放射断面）
W1－7749　bar:0.1mm



14a　サカキ（横断面）
W1－7797　bar:0.5mm



14b　サカキ（接線断面）
W1－7797　bar:0.2mm



14c　サカキ（放射断面）
W1－7797　bar:0.1mm

第２節　第16次～第20次調査

パリノ・サーヴェイ株式会社

はじめに

今回の分析調査では、第16次－３調査区、第17次－３調査区、第19次－１調査区、第20次－１調査区から出土した建築部材や木製品等について樹種同定を実施し、当時の木材利用状況を把握する資料とする。

１．試料

試料は、第16次－３調査区の木製品７点、第17次－３調査区の木製品５点、第19次－１調査区の木製品１点、第20次－１調査区の木製品162点の合計175点である。資料詳細は結果と併せて表10～表12に示す。

２．分析方法

剃刀の刃を用いて木口（横断面）・柾目（放射断面）・板目（接線断面）の３断面の徒手切片を作製し、ガム･クロラール（抱水クロラール，アラビアゴム粉末，グリセリン，蒸留水の混合液）で封入し、プレパラートを作製する。作製したプレパラートは、生物顕微鏡で木材組織を観察し、観察された特徴を現生標本と比較して種類を同定する。なお、試料が広葉樹の場合には、独立行政法人森林総合研究所の日本産木材識別データベースを活用して同定を実施する。

同定の根拠となる顕微鏡下での木材組織の特徴等については、島地・伊東（1982）、Wheeler他(1998)、Richter他(2006)を参考にする。また、各樹種の木材組織については、林（1991）、伊東（1995，1996，1997a，1998，1999）や独立行政法人森林総合研究所の日本産木材識別データベースを参考にする。

３．結果

樹種同定結果を表10～表12に示す。木製品は、針葉樹８種類（マツ属複維管束亜属・マツ属・モミ属・ツガ属・スギ・コウヤマキ・ヒノキ・ヒノキ科）、広葉樹９種類（コナラ属アカガシ亜属・クリ・ツブラジイ・スダジイ・ケヤキ・クスノキ・クスノキ科・イスノキ・エゴノキ属）に同定された。なお、第20次－１のNo. 51は、針葉樹の樹皮であるが、木部が存在しないために樹種の同定には至らなかった。各種類の解剖学的特徴等を記す。

・マツ属複維管束亜属（*Pinus subgen. Diploxylon*）　マツ科

軸方向組織は仮道管と垂直樹脂道で構成される。仮道管の早材部から晩材部への移行は急～やや緩やかで、晩材部の幅は広い。垂直樹脂道は晩材部に認められる。放射組織は仮道管、柔細胞、水平樹脂道、エピセリウム細胞で構成される。分野壁孔は窓状となる。放射仮道管内壁には鋸歯状の突起が認められる。放射組織は単列、１～10細胞高。

・マツ属（*Pinus*）　マツ科

軸方向組織は仮道管と垂直樹脂道で構成される。仮道管の早材部から晩材部への移行

は急～やや緩やかで、晩材部の幅は広い。垂直樹脂道は晩材部に認められるが、年輪界に近い位置には少ない。放射組織は仮道管、柔細胞、水平樹脂道、エピセリウム細胞で構成される。分野壁孔は窓状となる。放射仮道管内壁は破損しており、鋸歯状突起の有無が判別できない。放射組織は単列、１～10細胞高。

マツ属は、放射化道管内壁の鋸歯状突起の有無で複維管束亜属と単維管束亜属に分けられるが、本試料では仮道管内壁が破損しており、鋸歯状突起の有無が判別できなかったため、マツ属とした。

・モミ属（*Abies*）　マツ科

軸方向組織は仮道管のみで構成される。仮道管の早材部から晩材部への移行は比較的緩やかで、晩材部の幅は狭い。放射組織は柔細胞のみで構成される。柔細胞壁は粗く、垂直壁にはじゅず状の肥厚が認められる。分野壁孔はスギ型で１分野に１～４個。放射組織は単列、１～20細胞高。

・ツガ属（*Tsuga*）　マツ科

軸方向組織は仮道管と樹脂細胞で構成される。仮道管の早材部から晩材部への移行は急で、晩材部の幅は広い。樹脂細胞は年輪界付近に認められが、顕著ではない。放射組織は仮道管と柔細胞で構成される。柔細胞の垂直壁にはじゅず状の肥厚が認められる。分野壁孔はヒノキ型で、１分野に１～４個。放射組織は単列、１～15細胞高。

・スギ（*Cryptomeria japonica*（L. f.）D. Don）　スギ科スギ属

軸方向組織は仮道管と樹脂細胞で構成される。仮道管の早材部から晩材部への移行はやや急で、晩材部の幅は比較的広い。樹脂細胞はほぼ晩材部に認められる。放射組織は柔細胞のみで構成される。分野壁孔はスギ型で、１分野に２～４個。放射組織は単列、１～15細胞高。

・コウヤマキ（*Sciadopitys verticillata*（Thunb.）Sieb. et Zucc.）　コウヤマキ科コウヤマキ属

軸方向組織は仮道管のみで構成される。仮道管の早材部から晩材部への移行は緩やかで、晩材部の幅は狭い。放射組織は柔細胞のみで構成される。分野壁孔は窓状となる。放射組織は単列、１～５細胞高。

・ヒノキ（*Chamaecyparis obtusa*（Sieb. et Zucc.）Endlcher）　ヒノキ科ヒノキ属

軸方向組織は仮道管と樹脂細胞で構成される。仮道管の早材部から晩材部への移行は緩やか～やや急で、晩材部の幅は狭い。樹脂細胞は晩材部付近に認められる。放射組織は柔細胞のみで構成される。分野壁孔はヒノキ型～トウヒ型で、１分野に１～３個。放射組織は単列、１～10細胞高。

・ヒノキ科（*Cupressaceae*）

軸方向組織は仮道管と樹脂細胞で構成される。仮道管の早材部から晩材部への移行は緩やか～やや急で、晩材部の幅は狭い。樹脂細胞は晩材部付近に認められる。放射組織は柔細胞のみで構成される。分野壁孔は保存が悪く観察できない。放射組織は単列、１～10細胞高。

表10　樹種同定結果（1）

W１-No.	図番号	遺物名	出土地区	出土層位		樹種
9572		舟形木製品	北地区	SX310①上層		スギ
9573		柄	北地区	SX310①上層		ヒノキ
9574		角棒	北地区	SX310下層		コウヤマキ
9575		角棒	北地区	SX310下層		マツ属複維管束亜属
9576		割材	北地区	SX310下層		マツ属複維管束亜属
9577		割材	北地区	SX310下層		マツ属複維管束亜属
9578	137	柄	北地区	SX312最下層		エゴノキ属
9579		丸棒	Ｉ区	SE320一段目		スダジイ
9580		丸棒	Ｉ区	SE320二段目		ツブラジイ
9581		角棒	Ｉ区	SE320二段目		コウヤマキ
9582	361	曲物底板	Ｉ区	SE320上層		ヒノキ科
9583		丸棒	Ｉ区	SE320下層		ツブラジイ
9584	60	横槌	中央部	SE306　No.1		イスノキ
9586		板材	西半	SE315底部		モミ属
9587	224	桶側材	西半	SE315底部		ヒノキ
9588		板材	西半	SE317内		モミ属
9589		井戸側材	西半	SE315底部		モミ属
9590	222	船材	中半	SE317		クスノキ
9591	217	井戸側材	西半	SE315底部		モミ属
9592		井戸側材	西半	SE315底部		モミ属
9593		井戸側材	中半	SE317	No.1	モミ属
9594	218	井戸側材	中半	SE317	No.2	ツガ属
9595	219	井戸側材	中半	SE317	No.3	モミ属
9596		井戸側材	中半	SE317	No.3	ツガ属
9597		井戸側材	中半	SE317	No.3	モミ属
		井戸側材	中半	SE317		モミ属
9598	215	井戸側材	中半	SE317	No.5	モミ属
9599	214	井戸側材	中半	SE317	No.6	モミ属
9600	221	井戸側材	中半	SE317	No.7	モミ属
9601	220	井戸側材	中半	SE317	No.8-1	モミ属
9602	216	井戸側材	中半	SE317	No.8-2	モミ属
9603		板材	西半	SE316	No.1	モミ属
9604		板材	西半	SE316	No.2	モミ属
9605		板材	西半	SE316	No.3	モミ属
9607		板材	西半	SE316	No.4	モミ属
9608		角棒	西半	SE316		ヒノキ科
9609		板材	西半	SE316	No.5	モミ属
9610		板材	西半	SE316内上層		モミ属
9611		板材	中半	SE317	No.8	モミ属
9612	225	曲物側板	西半	SE315上層		ヒノキ科
9613		板材	西半	SE316	No.6	ヒノキ科
9614		棒	西半	SE316	No.7	スダジイ
9615		板材	西半	SE316下層		クスノキ科
9616		板材	西半	SE316	No.8	スギ
9617		板材	西半	SE316	No.9	モミ属
9622	299	井戸側材	中半	SE317	No.10	モミ属
9623		井戸側材	中半	SE317	No.11	モミ属
9625	300	井戸側材	中半	SE317	No.13	モミ属
9627	295	井戸側材	中半	SE317	No.14	スギ
9629		井戸側材	中半	SE317		モミ属
		井戸側材	中半	SE317		ツガ属
9631		井戸側材	中半	SE317	No.16	モミ属
9632		井戸側材	中半	SE317	No.17	ツガ属
9633		井戸側材	中半	SE317	No.17の下	スギ
		井戸側材	中半	SE317		ツガ属
9634		井戸側材	中半	SE317	No.20	モミ属
		井戸側材	中半	SE317		スギ
9635	301	井戸側材	中半	SE317	No.21	モミ属
9636		板材	中半	SE317	No.15	モミ属
9637		角材	中半	SE317		モミ属
9638		板材	中半	SE317最下層		ツガ属
9639		板材	中半	SE317最下層		ツガ属
9640		板材	中半	SE317		スギ
		板材	中半	SE317		針葉樹の樹皮
9641		板材	中半	SE317最下層		スギ
9642	298	板材	中半	SE317最下層		ツガ属
9643	296	板材	中半	SE317最下層		スギ
9644	302	板材	中半	SE317最下層		モミ属
9645		板材	中半	SE317最下層		スギ
		板材	中半	SE317		ツガ属
9646		板材	中半	SE317最下層		モミ属
9647		板材	西半	SE316掘形		クスノキ科

表11　樹種同定結果（2）

W１-No.	図番号	遺物名	出土地区	出土層位		樹種
9648		板材	西半	SE316掘形		スギ
9649		板材	西半	SE316	No.1	マツ属複維管束亜属
9650		板材	西半	SE316掘形		スギ
9651		板材	西半	SE316	No.2	スギ
9652		板材	西半	SE316底部枠内		スダジイ
9654		板材	西半	SE316		スギ
9655		板材	西半	SE316	東枠材	スギ
9656		井戸側材	西半	SE316		ヒノキ科
		井戸側材	西半	SE316		マツ属
		井戸側材	西半	SE316		マツ属
		井戸側材	西半	SE316		マツ属複維管束亜属
		井戸側材	西半	SE316		マツ属複維管束亜属
9657	255	井戸側材	西半	SE316		モミ属
9658		横桟	西半	SE316		スギ
9659		横桟	西半	SE316		ヒノキ
9660	245	横桟	西半	SE316	No.8	ヒノキ
9661	256	井戸側材	西半	SE316下層枠内		モミ属
		井戸側材	西半	SE316下層枠内		スギ
9663	303	横桟	中半	SE317	No.22	モミ属
9664		板材	中半	SE317	No.23	ツガ属
9665		板材	中半	SE317	No.24	ツガ属
9666		板材	中半	SE317	No.25	モミ属
9667		板材	中半	SE317	No.26	モミ属
9668		板材	中半	SE317下層枠内		ツガ属
9669		板材	中半	SE317	No.27	モミ属
9670		板材	中半	SE317	No.28	モミ属
9671		板材	中半	SE317下層枠内		ツガ属
9672		横桟		SE03	No.29	モミ属
9673		板材	中半	SE03下層枠内		モミ属
9674	322	木槌(柄)	中半	SE317	No.30	クリ
9674	322	木槌（頭）	中半	SE317	No.30	コナラ属アカガシ亜属
9675		板材	西半	SE316	No.9	マツ属複維管束亜属
		板材	西半	SE316	No.9	スダジイ
		板材	西半	SE316	No.9	スギ
		板材	西半	SE316	No.9	マツ属複維管束亜属
9677	244	横桟	西半	SE316	No.10	ヒノキ科
9678	247	横桟	西半	SE316	No.11	ヒノキ科
9679	252	隅柱	西半	SE316	No.12	ヒノキ
9680	260	漆皿	西半	SE316木枠内		ケヤキ
9682		板材	中半	SE317	No.31	スギ
9685		板材	西半	SE316		スダジイ
		板材	西半	SE316		スダジイ
9686		板材	西半	SE316	No.9のうら	スギ
9687		角材	西半	SE316		ツブラジイ
9688		板材	西半	SE316		モミ属
		板材	西半	SE316		モミ属
9689		横桟	中半	SE317		モミ属
	図なし	曲物側板	西半	SE315		ヒノキ
	図なし	曲物側板	西半	SE315		ヒノキ
9693	250	井戸側材	西半	SE316		クスノキ
9695		板材	西半	SE316		マツ属複維管束亜属
9696	257	井戸側材	西半	SE316		モミ属
9697	249	井戸側材	西半	SE316		クスノキ
9698	248	井戸側材	西半	SE316		クスノキ
9699	251	井戸側材	西半	SE316		クスノキ
9700		井戸側材	西半	SE316		モミ属
9701		井戸側材	西半	SE316		スギ
9702		井戸側材	西半	SE316		モミ属
9703	253	井戸側材	西半	SE316		モミ属
9704	254	井戸側材	西半	SE316		モミ属
9705		井戸側材	西半	SE316		クスノキ
9706		板材	西半	SE316		モミ属
9707		板材	西半	SE316		モミ属
9708		板材	西半	SE316		クスノキ科
9709		板材	西半	SE316		スギ
9759	259	曲物側板	西半	SE316		ヒノキ科
9710	306	横桟	中半	SE317		モミ属
9714		横桟	中半	SE317		モミ属
9715		横桟	中半	SE317		モミ属
9716	307	横桟	中半	SE317		モミ属
9717	308	横桟	中半	SE317		モミ属
9718	309	横桟	中半	SE317		モミ属

表12　樹種同定結果（3）

W１-No.	図番号	遺物名	出土地区	出土層位		樹種
9755①	258	曲物側板	西半	SE316		ヒノキ
9755②	258	曲物箍	西半	SE316		ヒノキ科
9719	305	横桟	中半	SE317		モミ属
9720		横桟	中半	SE317		モミ属
9721		横桟	中半	SE317		モミ属
9722	304	横桟	中半	SE317		モミ属
9723		井戸側材	中半	SE317		モミ属
9724		割杭	中半	SE317		クスノキ
9725	311	曲物側板	中半	SE317		ヒノキ
9726	315	箸	中半	SE317		スギ
9727	310	横桟	中半	SE317		モミ属
9728	316	箸	中半	SE317		ヒノキ科
9729	317	箸	中半	SE317		スギ
9730	318	箸	中半	SE317		ヒノキ
9731	319	箸	中半	SE317		スギ
9732	320	箸	中半	SE317		ツガ属
9733	321	箸	中半	SE317		スギ
9734	321	箸	中半	SE317		スギ
		板材	中半	SE317		ヒノキ
		板材	中半	SE317		スギ
		板材	中半	SE317		モミ属
9760①	313	曲物側板	中半	SE317		ヒノキ科
9760②	313	曲物箍	中半	SE317		ヒノキ
9762①	314	曲物側板	中半	SE317		ヒノキ
9762②	314	曲物内箍（上）	中半	SE317		ヒノキ
9763③	314	曲物内箍（中）	中半	SE317		ヒノキ
9762④	314	曲物内箍（下）	中半	SE317		ヒノキ
9762⑤	314	曲物外箍（上）	中半	SE317		ヒノキ
9762⑥	314	曲物外箍（下）	中半	SE317		ヒノキ
9762⑦	314	曲物添板	中半	SE317		ヒノキ科
9763	223	曲物側板	西半	SE315底部		ヒノキ

上記ヒノキを含むヒノキ科のいずれかであるが、同定する上で重要な組織である分野壁孔が観察できない試料をヒノキ科とした。

・コナラ属アカガシ亜属（*Quercus subgen. Cyclobalanopsis*）　ブナ科

放射孔材で、管壁厚は中庸～厚く、横断面では楕円形、単独で放射方向に配列する。道管は単穿孔を有し、壁孔は交互状に配列する。放射組織は同性、単列、１～15細胞高のものと複合放射組織とがある。

・クリ（*Castanea crenata* Sieb. et Zucc.）　ブナ科クリ属

環孔材で、孔圏部は３～４列、孔圏外で急激に管径を減じたのち、漸減しながら火炎状に配列する。道管は単穿孔を有し、壁孔は交互状に配列する。放射組織は同性、単列、１～15細胞高。

・ツブラジイ（*Castanopsis cuspidata*（Thunberg）Schottky）　ブナ科シイノキ属

環孔性放射孔材で、道管は接線方向に１～２個幅で放射方向に配列する。孔圏部は３～４列、孔圏外で急激に管径を減じたのち、漸減しながら火炎状に配列する。道管は単穿孔を有し、壁孔は交互状に配列する。放射組織は同性、単列、１～20細胞高のものと集合～複合放射組織とがある。

・スダジイ（*Castanopsis cuspidata* var. *sieboldii*（Makino）Nakai）　ブナ科シイノキ属

環孔性放射孔材で、道管は接線方向に１～２個幅で放射方向に配列する。孔圏部は３－４列、孔圏外で急激に管径を減じたのち、漸減しながら火炎状に配列する。道管は単穿孔を有し、壁孔は交互状に配列する。放射組織は同性、単列、１～20細胞高。

ツブラジイとスダジイは、集合～複合放射組織の有無で区別しているが、ツブラジイ

の集合～複合放射組織の出現頻度は個体によって異なり、中にはほとんど認められない場合もある。そのため、スダジイとした資料の中には集合～複合放射組織の出現頻度の低いツブラジイが含まれている可能性があるが、本報告では集合～複合放射組織の認められたものをツブラジイ、認められなかったものをスダジイとした。

・ケヤキ（*Zelkova serrata*（Thunb.）Makino）　ニレ科ケヤキ属

環孔材で、孔圏部は１～２列、孔圏外で急激に管径を減じたのち、塊状に複合して接線・斜方向に紋様状あるいは帯状に配列し、年輪界に向かって径を漸減させる。道管は単穿孔を有し、壁孔は交互状に配列、小道管内壁にはらせん肥厚が認められる。放射組織は異性、１～６細胞幅、１～50細胞高。放射組織の上下縁辺部を中心に結晶細胞が認められる。

・クスノキ（*Cinnamomum camphora*（L.）Presl）　クスノキ科クスノキ属

散孔材で、道管径は比較的大径、管壁は薄く、横断面では楕円形、単独または2～３個が放射方向に複合して散在する。道管は単穿孔を有し、壁孔は交互状に配列する。放射組織は異性、１～３細胞幅、１～15細胞高でやや階層状に配列する。柔組織は周囲状～翼状。柔細胞には油細胞が認められる。

・クスノキ科（*Lauraceae*）

散孔材で、管壁は薄く、横断面では角張った楕円形、単独または２～３個が放射方向に複合して散在する。道管は単穿孔を有し、壁孔は交互状に配列する。放射組織は異性、１～２細胞幅、１～20細胞高。柔組織は周囲状および散在状。柔細胞には油細胞が認められる。

・イスノキ（*Distylium racemosum* Sieb. et Zucc.）　マンサク科イスノキ属

散孔材で、道管はほぼ単独で散在する。道管の分布密度は比較的高い。道管は階段穿孔を有する。放射組織は異性、１～２細胞幅、１～20細胞高。

・エゴノキ属（*Styrax*）　エゴノキ科

散孔材で、横断面では楕円形、単独または２－４個が複合して散在し、年輪界に向かって径を漸減させる。道管は階段穿孔を有し、壁孔は交互状に配列する。放射組織は異性、１～３細胞幅、１～20細胞高。

４．考察

４－１　第16次－３調査区（久保町６丁目）

室町時代の遺物が出土する不明大型土坑であるSX310から出土した木製品は、SX310上層の舟形木製品がスギ、柄がヒノキ、SX310下層の角棒２点がマツ属複維管束亜属とモミ属、割材が２点ともマツ属複維管束亜属に同定された。いずれも針葉樹材を利用している。一方、SX310の東に舌状の飛び出し部分のSX312最下層から出土した柄は落葉広葉樹のエゴノキ属に同定された。

舟形の樹種は、六甲山南麓に位置する考古遺跡では玉津田中遺跡における古墳時代と鎌倉時代の舟形の調査例があり、いずれもヒノキに同定されている（島地，1996）。それ以外の調査例はなく、スギの利用例は今回がはじめてである。スギを利用した舟形は、

他の木製品でもスギが多用されている主に日本海側の但馬地域で多く出土している（伊東，1997b；パリノ・サーヴェイ株式会社，2002；伊東・藤田，2003）。

柄は、SX310上層とSX312最下層で樹種が異なり、ヒノキとエゴノキ属が利用されていたが、周辺地域で柄にヒノキとエゴノキ属が確認された例は知られていない。各樹種の材質をみると、ヒノキは木理が通直で割裂性が高く、加工が容易で耐水性・防虫性に優れている材質を有し、エゴノキ属は重硬で強度が高く、緻密な材質を有し、多少異なっていることから、用途の異なる柄であった可能性もある。

４－２　17次－３調査区（二葉町６丁目）

井戸SE320から出土した丸棒はスダジイとツブラジイ、角棒はコウヤマキに同定された。コウヤマキの木材は、木理が通直で割裂性が高く、加工が容易で耐水性・防虫性に優れている材質を有する。これに対して、スダジイ・ツブラジイは比較的強度が高いが保存性は高くなく、加工性も低い材質を有する。これらの材質からみて、各樹種の加工方法は材質に応じた加工法を採用している可能性がある。

曲物底板はヒノキ科であった。本遺跡周辺で行われた古代～中世の曲物底板を対象とした樹種同定結果をみると、ヒノキが多く、他にスギ、モミ属、マツ属複維管束亜属の利用例が確認されている（島地・光谷，1989；島地・林，1991a；島地，1996）。これら既往の結果を踏まえると、今回のヒノキ科はヒノキの可能性がある。ヒノキの木材は、木理が通直で割裂性が高く、加工が容易で耐水性・防虫性に優れている。また、軸方向組織のほとんどが仮道管で占められ、早材部・晩材部の材質差が少ないため、薄い板を割り取るのが容易で曲げ強度も高い材質を有しており、曲物には適材といえる。

４－３　第19次－１調査区（久保町６丁目）

12世紀頃のSE306から出土した砧がイスノキに同定された。イスノキは重硬で強度の高い材質を有している。本遺跡周辺では、砧の樹種を明らかにした例が知られていないため、木材利用状況を把握することはできないが、農耕具である砧の用途を考えるとイスノキの材質は適材といえる。

４－４第20次－１調査区（二葉町６丁目）

SE315・SE316・SE317の３基から井戸から出土した井戸の構築部材や木製品162点は、針葉樹７種類と広葉樹７種類に同定された（表13）。SE315は、井戸機能時の遺物が確認されていないが、廃棄後の埋没土層から12世紀初頭～12世紀前半の須恵器椀等が出土している。SE316は、下層から出土した須恵器や土師器から、11世紀後半か遅くとも12世紀前半には機能していたと考えられている。SE317は井戸掘形から12世紀中頃の須恵器椀が出土しており、井戸の構築時期もこの頃と考えられており、３基の井戸で最も新しいと考えられている。各遺構別に木材利用状況について検討する。

表13　第20次－１次調査の遺構・器種別種類構成

遺構・層位・器種			分類群																合計
			マツ属複維管束亜属	マツ属	モミ属	ツガ属	スギ	ヒノキ	ヒノキ科	針葉樹の樹皮	アカガシ亜属	クリ	ツブラジイ	スダジイ	ケヤキ	クスノキ	クスノキ科		
SE315		曲物側板						2											2
	上層	曲物側板							1										1
	底部	井戸側材			3														3
		曲物側板						1											1
		桶側材						1											1
		板材			1														1
SE316		井戸側材	2	2	6		1		1							5			17
		横桟					1	2	2										5
		隅柱						1											1
		曲物側板						1	1										2
		曲物箍							1										1
		漆皿													1				1
		板材	4		10		7		1					3			1		26
		角材											1						1
		角棒							1										1
		棒												1					1
	上層	板材			1														1
	下層	井戸側材			1		1												2
		板材															1		1
	底部	板材												1					1
	掘形	板材					2										1		3
SE317		井戸側材			17	5	3												25
		横桟			14														14
		曲物内箍						3											3
		曲物外箍						2											2
		曲物箍						1											1
		曲物添板							1										1
		曲物側板						2	1										3
		船材														1			1
		木槌(頭)									1								1
		木槌(柄)										1							1
		箸				1	5	1	1										8
		角材			1														1
		板材			7	3	2	1		1									14
		板材					1												1
		板材			1														1
		割杭														1			1
	下層	板材			1	2													3
	最下層	板材			2	3	3												8
合　計			6	2	65	14	26	18	11	1	1	1	1	5	1	7	3		162

(1) SE315

SE315では、井戸側板、曲物側板、桶側板、板材について同定を実施した。全て針葉樹材であり、井戸側板と板材にモミ属、曲物側板にヒノキとヒノキ科が認められた。基本的な木材の利用状況はSE316や既往の調査成果と同様の傾向を示しているといえる。なお、桶については同時期の資料がほとんど無いため、木材利用については不明であったが、今回の結果から曲物と同じくヒノキが利用されていたことが推定される。

(2) SE316

SE316では、井戸構築材（側材・横桟・隅柱）、曲物（側板・箍）、板材、角材、角棒、棒、漆皿について樹種同定を実施した。モミ属、スギ、ヒノキ科・マツ属複維管束亜属などの針葉樹材が多用されている傾向が窺える。

井戸構築材は、７種類から構成されていた。部位別に見ると、井戸側板でモミ属とクスノキが多く、他にマツ属（複維管束亜属を含む）・ヒノキ科・スギ・クスノキが、隅柱や横桟にはヒノキ、ヒノキ科、スギが利用されている。このようにSE316井戸は、部位によって利用されている木材の樹種が異なり、複数の種類が利用されていることが特徴といえる。今回調査を行った井戸では、SE317でも複数の種類が利用されているが、広葉樹材の利用は確認されていない。また、二葉町遺跡久保６調査区・二葉６調査区における11世紀末～ 13世紀中頃の井戸構築材の樹種同定結果（松葉，2001）をみると、11世紀末～ 12世紀前半の井戸ではシイノキ属やスノキ属？など広葉樹材の利用も認められるが、ヒノキを中心とする針葉樹材が多用されている。また、12世紀中頃以降の井戸構築材も針葉樹材が多用されているが、アカガシ亜属などの広葉樹材が散見されるようになり、種類構成が増加する傾向が確認される。このような久保６調査区・二葉６調査区における時代別変化が普遍性の高い変化であるか否かは、今後の資料蓄積や発掘調査成果を踏まえた複合的評価が必要であるが、本遺跡における11世紀末～ 13世紀の井戸構築材に広葉樹を含む複数の樹種が利用されている傾向は普遍的な傾向と認識される。なお、井戸部材にクスノキを利用する例は、本遺跡の他には御蔵遺跡の10世紀とされる井戸部材に３例確認されている（パリノ・サーヴェイ，2001）。

一方、板材には針葉樹のマツ属複維管束亜属・モミ属・スギ・ヒノキ、広葉樹のスダジイ、クスノキ科が利用されていた。上記した井戸部材で利用されている樹種と共通する種類が多いことが窺える。その他の木製品では、曲物にヒノキ・ヒノキ科、漆皿にはケヤキ、角材・角棒・棒にヒノキ科・ツブラジイ・スダジイが利用されていた。このうち曲物については先述したようにヒノキの材質を考慮した木材利用が行われていた可能性が高く、本遺跡久保６調査区・二葉６調査区でも11世紀末～ 12世紀前半頃とされる曲物側板にヒノキが確認されており（松葉，2001）、同調的な結果といえる。

また、漆皿に利用されていたケヤキは耐朽性が高く、挽物木地としては一般的な樹種であるが、本遺跡周辺で出土した皿にケヤキの利用例はほとんど無い。兵庫県内でのケヤキの利用例としては、山垣遺跡、深田遺跡、砂入遺跡、袴狭遺跡、市辺遺跡、横田遺跡など、但馬地域や丹波地域の古代の資料における利用例がある（島地・林，1990，1991b；伊東，1997b；伊東・藤田，2003；伊東，2006；古環境研究所，2006）。今回の漆皿が挽物か刳物か現時点で不明であるが、本地域において漆皿にケヤキが利用されていたことを示す結果として注目される。

(3) SE317

SE317では、井戸構築材（側板・横桟・曲物）、船材、木槌、箸、角材、板材、割杭について同定を実施した。井戸構築材では、側板や横桟にはモミ属を主としてツガ属、

スギが利用されている。モミ属が多い点はSE315やSE316と同様であるが、ツガ属の利用などで多少の違いが認められる。一方、井戸の集水施設に利用された曲物はヒノキ・ヒノキ科であり、井戸側材・桟材とは利用樹種が異なる。井戸の側板にモミ属とツガ属が多く利用される例は、玉津田中遺跡で確認された例がある（島地，1996）。また、上沢遺跡ではツガ属を主とする結果が得られている（パリノ・サーヴェイ株式会社，2002）。板材はモミ属、ツガ属、スギが多く、井戸側材・桟材と同様の種類構成となる。

船材に認められたクスノキは、スギと共に船の部材として適材とされる樹種である（島地・伊東，1988）。本遺跡では、これまでにも井戸に転用された船材にクスノキが認められた例があり（松葉，2001）、過去の調査例とも調和的である。木槌は、頭がアカガシ亜属、柄がクリであり、重硬で強度の高い木材を選択していたことが推定される。周辺では同時期の木槌について樹種を明らかにした例が無いが、本遺跡ではこれまでにも12世紀中頃～12世紀末の横槌にアカガシ亜属が確認されており（松葉，2001）、同様の木材利用が推定される。

引用文献

林　昭三，1991，日本産木材　顕微鏡写真集．京都大学木質科学研究所．

伊東　隆夫，1995，日本産広葉樹材の解剖学的記載Ⅰ．木材研究・資料，31，京都大学木質科学研究所，81-181.

伊東　隆夫，1996，日本産広葉樹材の解剖学的記載Ⅱ．木材研究・資料，32，京都大学木質科学研究所．66-176.

伊東　隆夫，1997a，日本産広葉樹材の解剖学的記載Ⅲ．木材研究・資料，33，京都大学木質科学研究所，83-201.

伊東　隆夫，1997b，砂入遺跡出土木製品の樹種.「兵庫県文化財調査報告第161冊　砂入遺跡　本文編　小野川放水路事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告（I）」，兵庫県教育委員会，141-152.

伊東　隆夫，1998，日本産広葉樹材の解剖学的記載Ⅳ．木材研究・資料，34，京都大学木質科学研究所，30-166.

伊東　隆夫，1999，日本産広葉樹材の解剖学的記載Ⅴ．木材研究・資料，35，京都大学木質科学研究所，47-216.

伊東　隆夫，2006，横田遺跡出土木材の樹種同定.「兵庫県文化財調査報告第303冊　横田遺跡・横田北古墳群発掘調査報告書」，兵庫県教育委員会，96-102.

伊東隆夫・藤田　淳，2003，袴狭遺跡出土木製品の樹種．兵庫県文化財調査報告第259冊「カヤガ谷墳墓群・大谷墳墓群・坪井遺跡　－小野川放水路事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告（IV）－」，兵庫県教育委員会，91-117.

株式会社　古環境研究所，2006，兵庫県市辺遺跡出土木材の樹種同定.「兵庫県文化財調査報告第304冊　市辺遺跡」，兵庫県教育委員会，59-70.

松葉　礼子，2001，二葉町遺跡出土木製品の樹種同定.「二葉町遺跡発掘調査報告書　第３・５・７・８・９・12次調査」，神戸市教育委員会，141-166.

パリノ・サーヴェイ株式会社，2001，御蔵遺跡から出土した木製品等の樹種.「御蔵遺跡　第4・6・14・32次発掘調査報告書」，神戸市教育委員会，114-122.

パリノ・サーヴェイ株式会社，2002，上沢遺跡　第33次調査.「平成11年度神戸市埋蔵文化財年報」，神戸市教育委員会，291－299.

パリノ・サーヴェイ株式会社，2002，五反田遺跡出土木材の樹種.「兵庫県文化財調査報告第227冊　県立コウノトリの郷公園整備事業に伴う埋蔵文化財調査報告書　上脇遺跡II」，兵庫県教育委員会，36-43.

Richter　H.G.,Grosser D.,Heinz I. and Gasson P.E.（編），2006，針葉樹材の識別　IAWAによる光学顕微鏡的特徴リスト．伊東　隆夫・藤井　智之・佐野　雄三・安部　久・内海　泰弘（日本語版監修），海青社，70p.［Richter H.G.,Grosser D.,Heinz I. and Gasson P.E.（2004）*IAWA List of Microscopic Features for Softwood Identification*］.

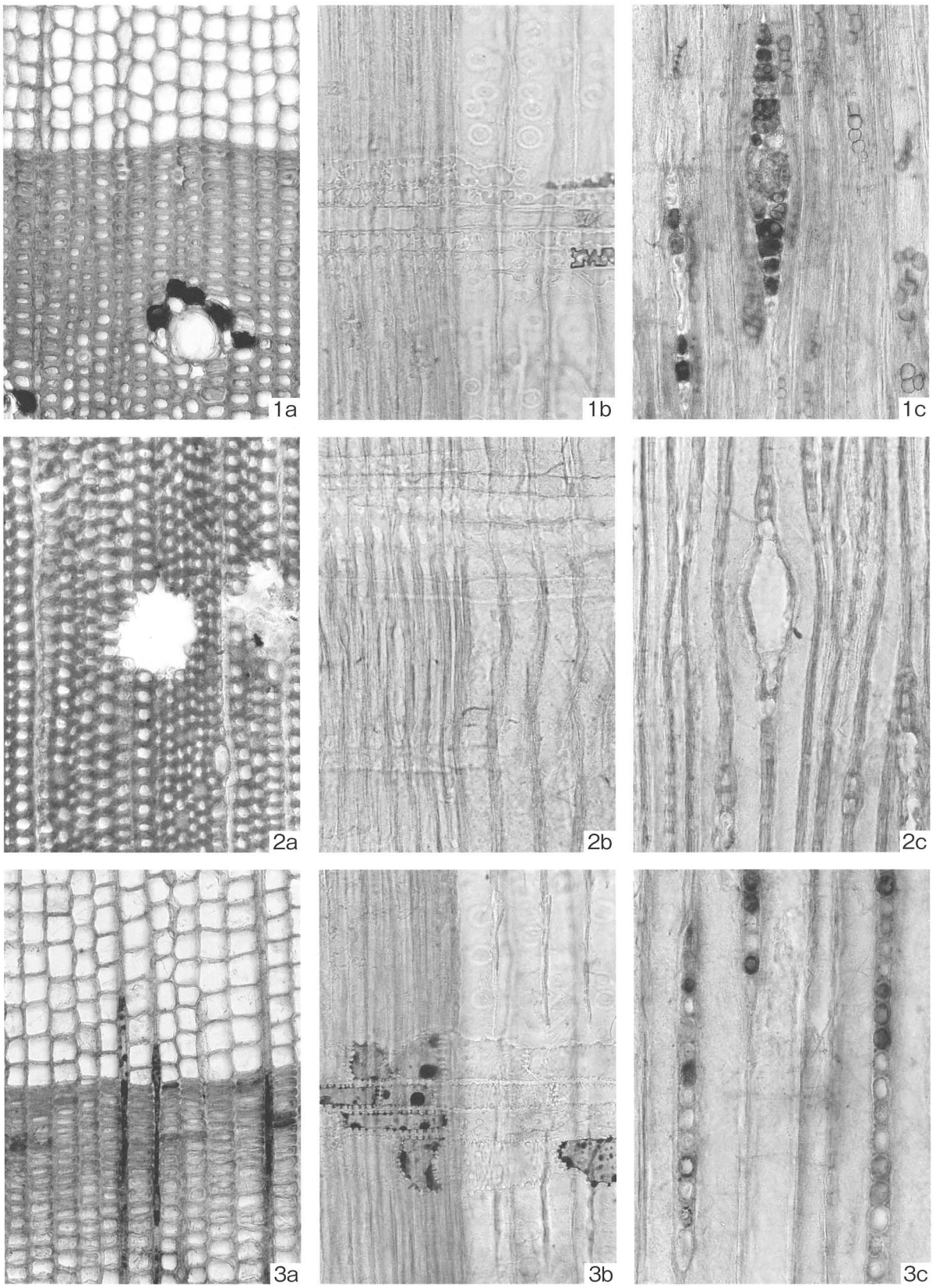
島地　謙，1996，玉津田中遺跡出土木製品の樹種.「兵庫県文化財調査報告第135-6冊　神戸市西区　玉津田中遺跡　－第６分冊－（総括編）　田中特定土地区画整理事業に伴う埋蔵文化財調査報告書」，兵庫県教育委員会，15-49.

島地　謙・林　昭三，1990，山垣遺跡出土木製品の樹種.「兵庫県文化財調査報告第75冊　山垣遺跡」，兵庫県教育委員会，57-64.

島地　謙・林　昭三，1991a，福田片岡出土木製品の樹種.「兵庫県文化財調査報告第94冊　福田片岡遺跡　－太子・竜野バ

イパス建設に伴う発掘調査報告書－」，兵庫県教育委員会，1-20.
島地　謙・林　昭三，1991b，深田遺跡出土木製品の樹種.「兵庫県文化財調査報告第99冊　深田遺跡・カナゲダ遺跡　日高バイパス建設工事に伴う但馬国府推定地内発掘調査報告書」，兵庫県教育委員会，85-90.
島地　謙・伊東　隆夫，1982，図説木材組織．地球社，176p.
島地　謙・伊東　隆夫（編），1988，日本の遺跡出土木製品総覧．雄山閣，296p.
島地　謙・光谷　拓実，1989，小犬丸遺跡出土木器の樹種.「兵庫県文化財調査報告第66冊　龍野市小犬丸遺跡II　県道竜野相生線道路改良工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書」，兵庫県教育委員会，79-87.
Wheeler E.A.,Bass P. and Gasson P.E.（編），1998，広葉樹材の識別　IAWAによる光学顕微鏡的特徴リスト．伊東　隆夫・藤井　智之・佐伯　浩（日本語版監修），海青社，122p.［Wheeler E.A.,Bass P. and Gasson P.E.（1989）*IAWA List of Microscopic Features for Hardwood Identification*］.

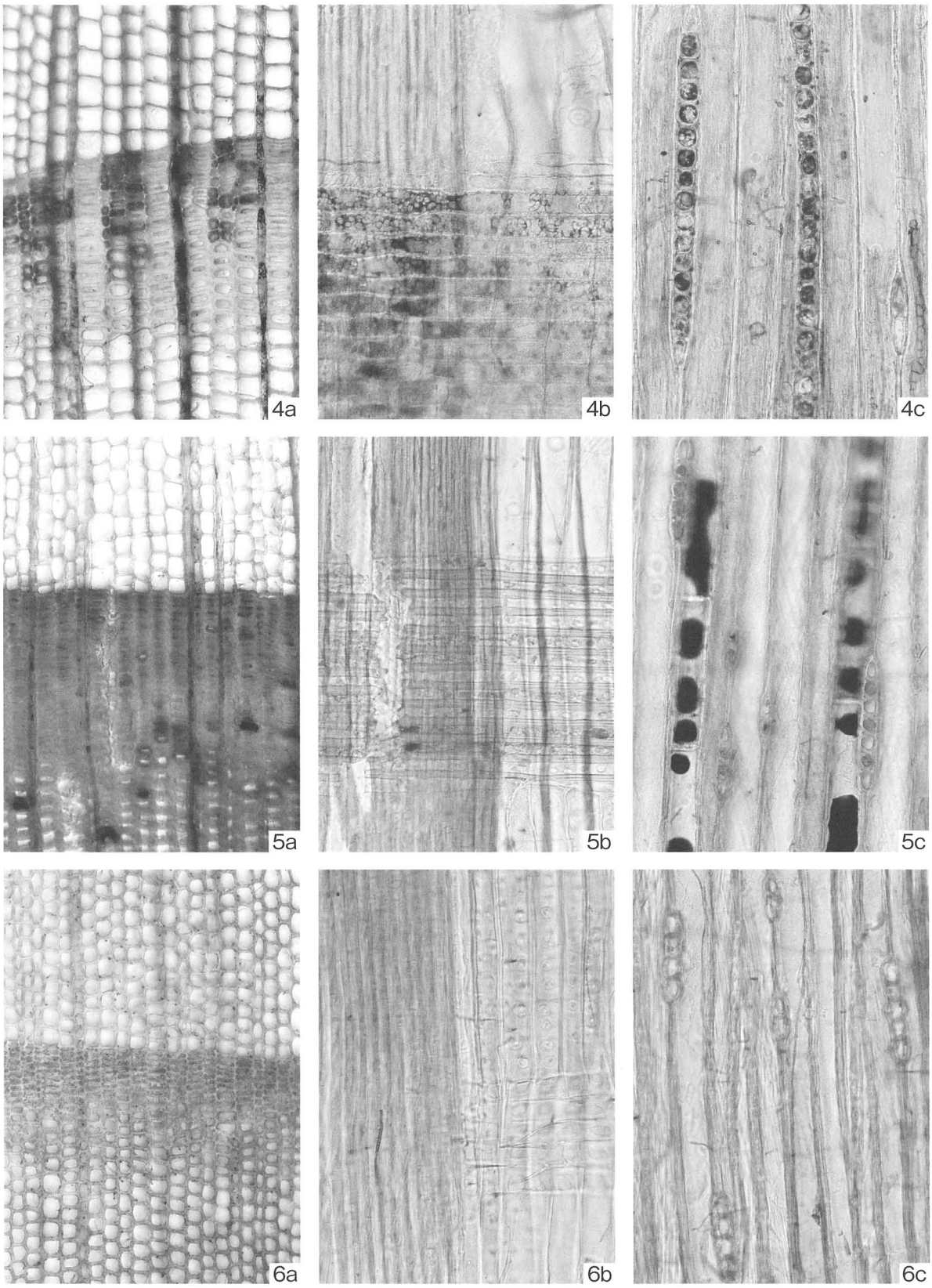
挿図写真7　木材(1)



1. マツ属複維管束亜属（第20次-1;No.61
2. マツ属（第20次-1;No.69）
3. モミ属（第20次-1;No.10）
　a：木口，b：柾目，c：板目

200μm:a
100μm:b,c

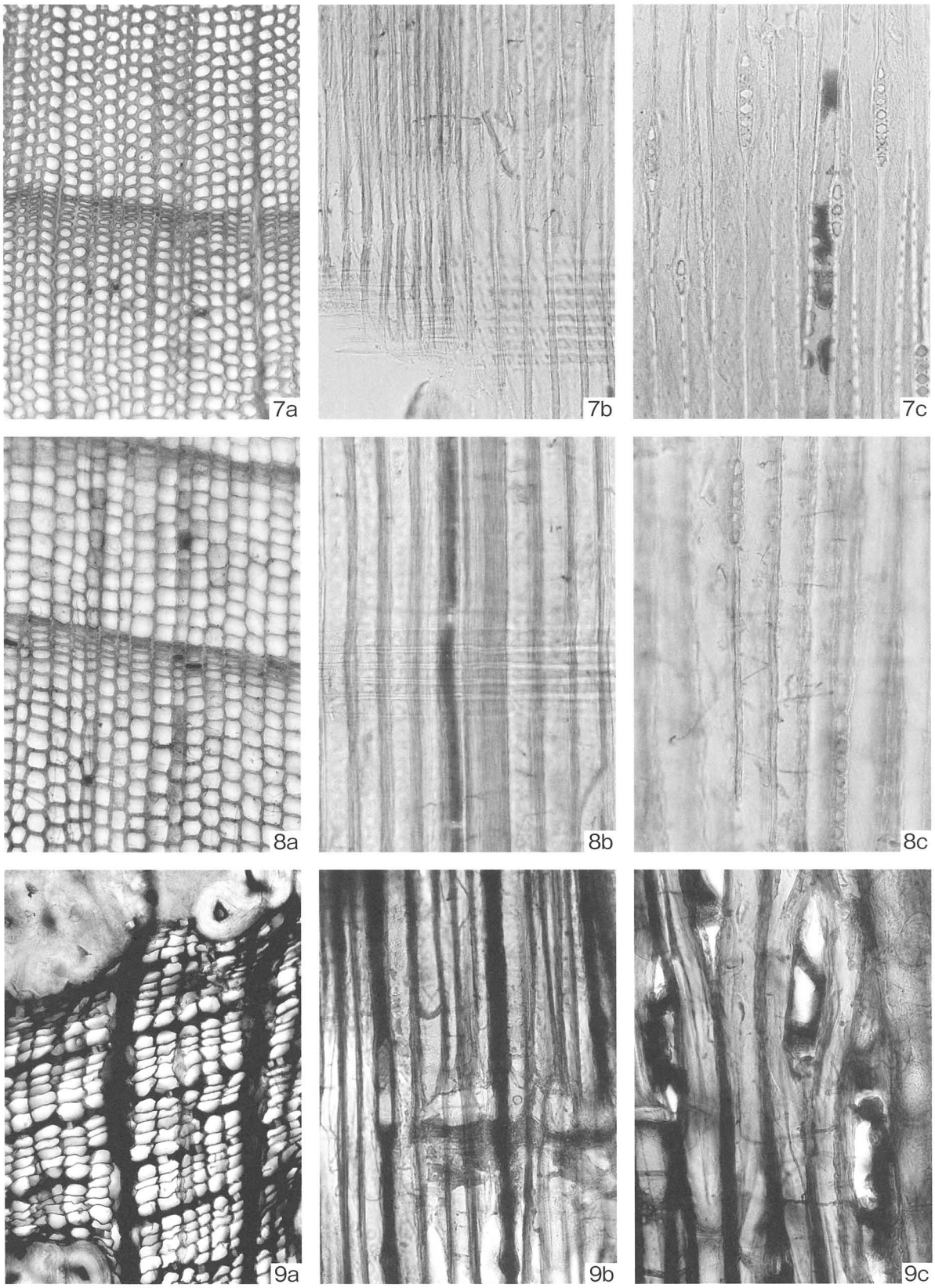
挿図写真8　木材(2)



200μm:a
100μm:b,c

4. ツガ属（第20次-1;No.38）
5. スギ（第20次-1;No.102）
6. コウヤマキ（第17次-3;No.3）
　a：木口，b：柾目，c：板目

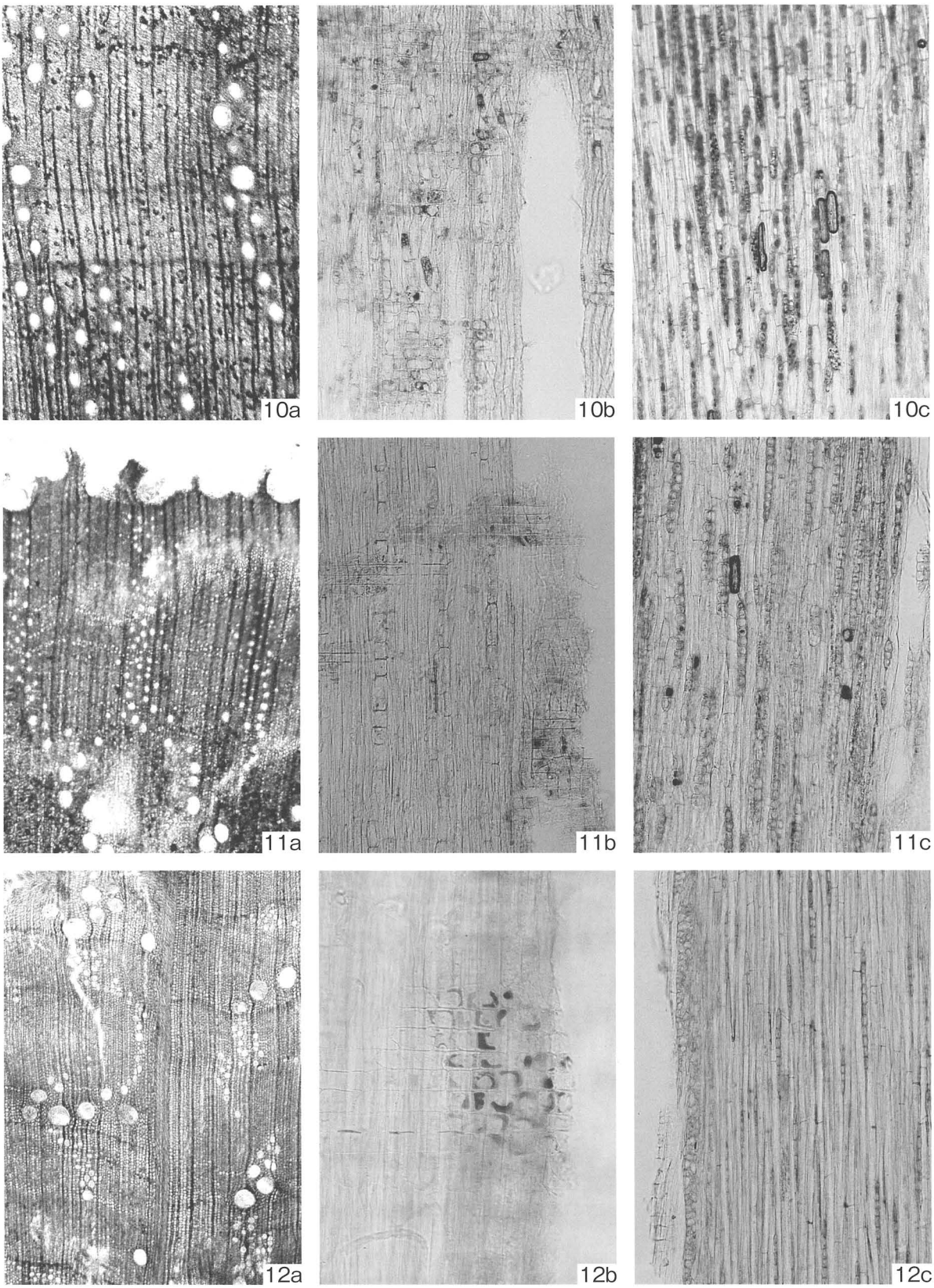
挿図写真9　木材(3)



200μm:a
100μm:b,c

7. ヒノキ（第16次-3;No.2）
8. ヒノキ科（第17次-3;No.3）
9. 針葉樹の樹皮（第20次-1;No.51）
　a：木口，b：柾目，c：板目

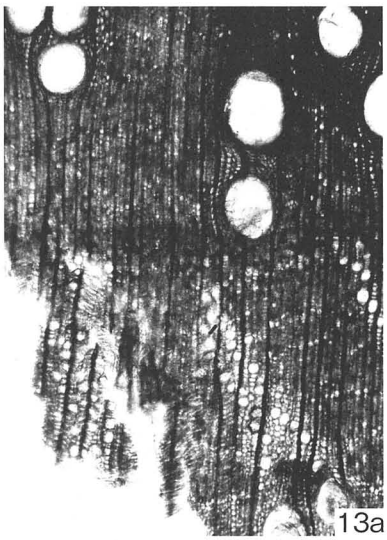
挿図写真10　木材(4)

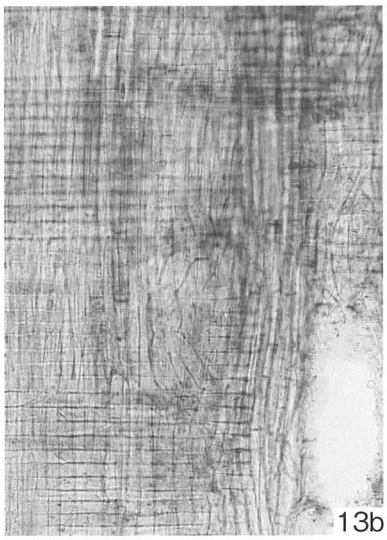


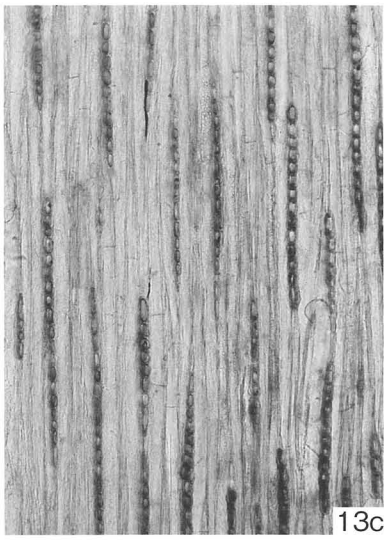
200μm:a
100μm:b,c

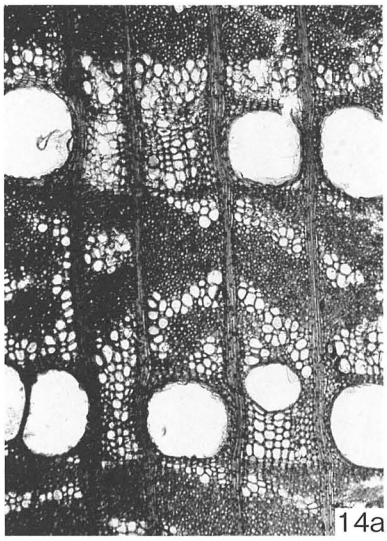
10.コナラ属アカガシ亜属（第20次-1;No.90）
11.クリ（第20次-1;No.89）
12.ツブラジイ（第17次-3;No.5）
　a：木口，b：柾目，c：板目

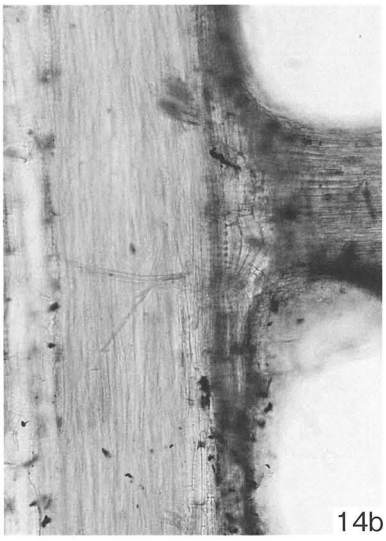
挿図写真11　木材(5)

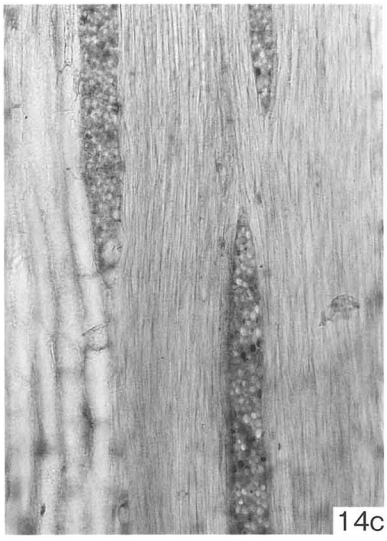


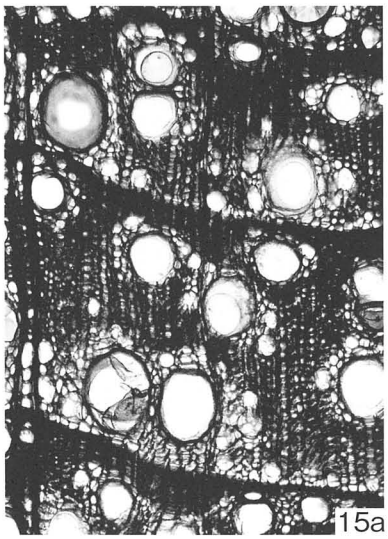


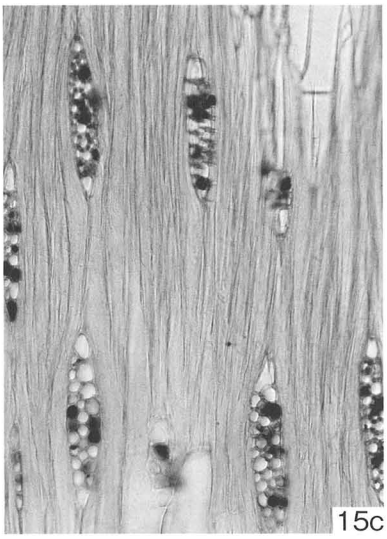








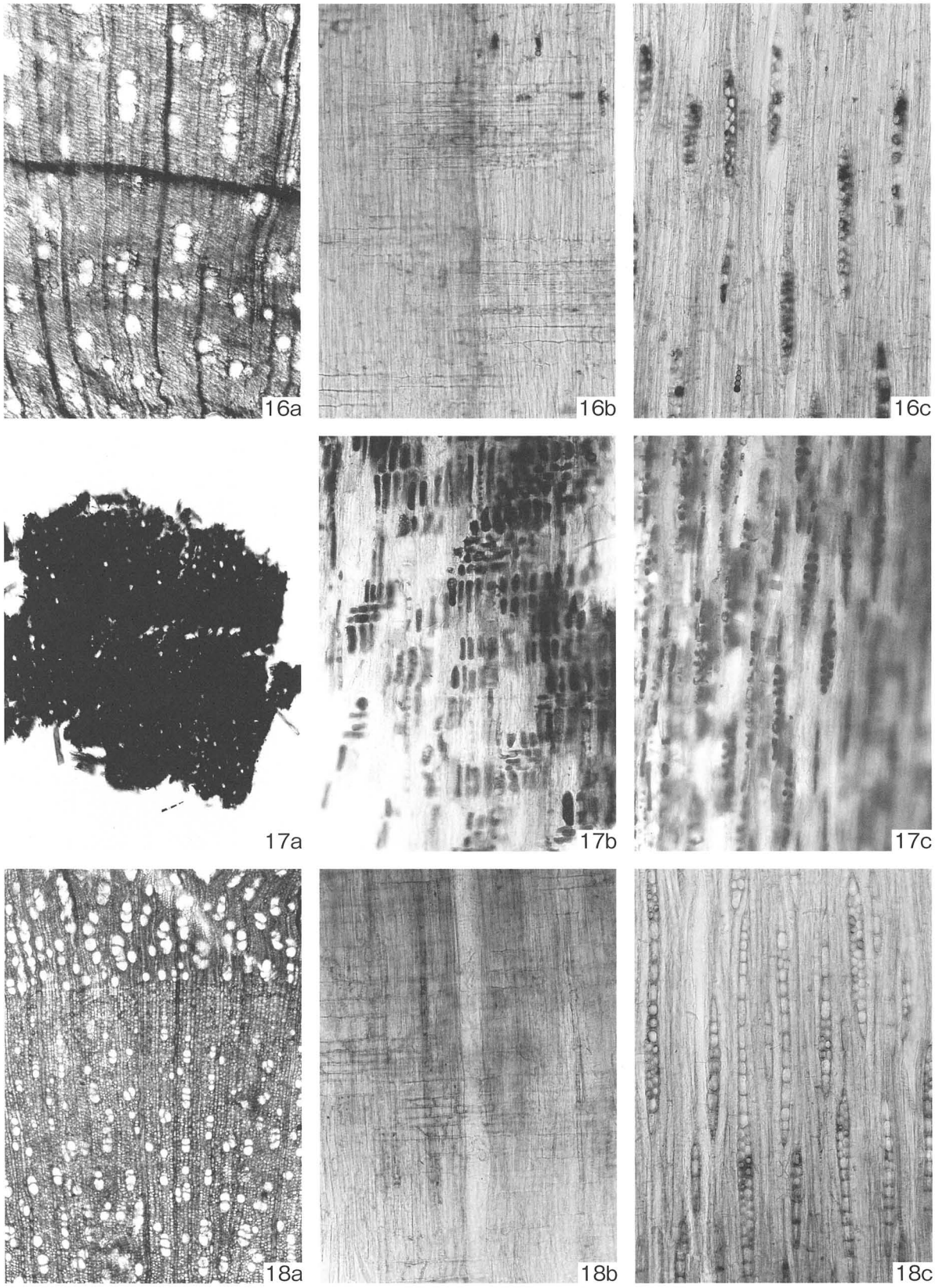




200μm:a
100μm:b,c

13.スダジイ（第20次-1;No.92）
14.ケヤキ（第20次-1;No.98）
15.クスノキ（第20次-1;No.5）
　a：木口，b：柾目，c：板目

挿図写真12　木材(6)



16. クスノキ科（第20次-1;No.123）
17. イスノキ（第19次-1;No.1）
18. エゴノキ属（第16次-3;No.7）
　a：木口，b：柾目，c：板目

200μm:a
100μm:b,c

第8章　まとめ

今回の調査で明らかになったことについて、平安時代～鎌倉時代を中心にこれまでの調査成果と合わせて簡単にまとめたい。

まず、二葉町６丁目地区で10世紀代の掘立柱建物（SB328・SB329）、井戸（SE320）が一つのまとまりとして検出されたことがあげられる。この２棟の建物は、その規模と位置関係から見て主屋と附属屋であろうと考えられる。この建物が建っている敷地の範囲を確定することは困難であるが、北と東には耕作に伴うスキ溝が多数検出されており、敷地の周辺には耕作地が広がっていたものと思われる。この建物が、当遺跡での平安時代集落として最初のものである。

集落の最盛期は、11世紀中頃から13世紀前半にかけての時期である。この時期に掘立柱建物が、ほぼ同じ場所もしくは隣接した場所に、繰り返し何度も建て替えられている。屋敷地内での建て替えが行われ、集落の中で屋敷地が固定されていたものと考えられる。また、井戸も少しずつ場所を移しながら地下の水脈に沿って何度も掘り直されている。

調査区全体に掘立柱建物の柱穴となりうるピットと、耕作痕であるスキ溝が万遍なく広がっており、撹乱や遺構面の削平により今回掘立柱建物として報告したもの以外にも、建物が存在した可能性があるため、屋敷地の中で建物の集中している範囲を限定することはできない。また、柵列があれば屋敷地の範囲がわかるが、それも検出できなかったため、屋敷地の範囲も不明である。おそらく生垣であったのかも知れない。集落の中において掘立柱建物と井戸からなる屋敷地とその周辺の耕作地という土地利用が想定できるが、具体的に遺跡の中のどの部分が屋敷地で、どの部分が耕作地であるかということは明確にすることはできなかった。なお、包含層から東播系の軒平瓦や二葉町６丁目地区SE317から平瓦の破片が出土しているが、出土点数が少数のため付近に瓦葺の建物が存在するかどうかは明確でない。

今回３基の木棺墓を検出したが、いずれも掘立柱建物が存在する位置から若干離れた場所に位置しており、敷地内の「屋敷墓」と考えられる。久保町６丁目ではSB313とST302、二葉町６丁目ではSB324とST304がほぼ同時期であり、建物とそれに付随する屋敷墓の関係にあると想定される。久保町５丁目のSB301とSE301については、各々の時期が明確ではないが、まわりに建物がなく位置関係からST301はSB301の屋敷墓であると想定できる。

当遺跡では合わせて７基の木棺墓が確認されたことになる。久保町６丁目地区のST301からは漆塗りの烏帽子が出土しており、身分の高い男性が葬られていたと考えられている[(1)]。今回検出した木棺墓の内、久保町６丁目のST302には土師器小皿、赤漆塗りの皿、黒漆塗りの皿と２個体の白磁碗の破片３片、鉄刀１振を埋納している。白磁はわざと破片の状態で埋納しており、どのような意味があるのか不明である。

おそらく屋敷墓を持つ建物と持たない建物は、集落の中での階層差を表しており、富裕な階層のものと一般庶民が集落の中に混在していたものと想定される。

出土遺物としては、日常雑器以外に輸入磁器、蛸壺、土錘、船材などが出土し、海と

の密接な関係がある集落と考えることができる。二葉町６丁目のSE306からは11世紀末から12世紀前半に廃棄され、井戸枠に転用された「複材構造船」が出土し、当時の船舶の実態を知る上で貴重な資料となっている[(2)]。

以上、甚だ推測の多いものとなったが、今回の調査において気付いた点について若干触れた。

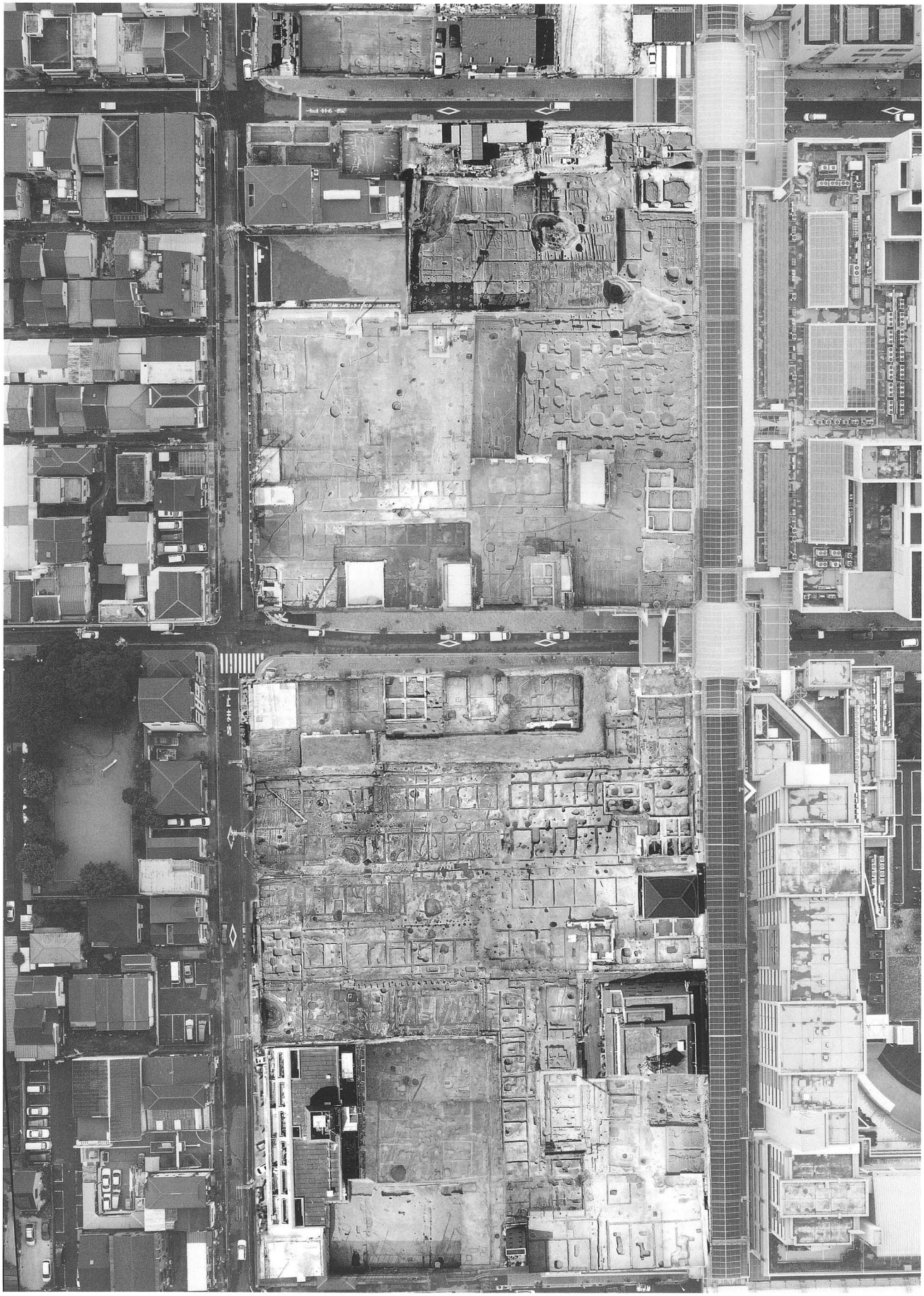
二葉町遺跡が位置する駒ヶ林は海に近く、平安時代末の公卿の日記『山塊記』に、「小馬林」に寄港する記述があり、これは現在の長田区駒ヶ林の長田港に比定されている。当時、公卿が乗船する船が寄港できる港が存在したことがうかがえる。また、この地は、源平一ノ谷の合戦の舞台であり、平忠度が駒ヶ林の港へ向かって敗走の際、この付近で討たれ、その場所は現在平忠度腕塚・胴塚として地域の人々によって大切に管理されている。時代は下って、湊川の合戦の際においても、駒ヶ林の港は、足利尊氏の軍勢の上陸場所として、重要な役割を果たしている。

二葉町遺跡の集落の最盛期は11世紀中頃から13世紀前半にかけてであることは先ほども延べたが、この時期は平家の台頭や日宋貿易の拠点としての大輪田泊の修築、平清盛による福原遷都、源平の争乱、鎌倉幕府の成立と時を同じくする。

二葉町遺跡で検出した集落は、村の中に広がる屋敷地と耕作地という農村的な景観と、駒ヶ林の港に隣接し、蛸壺・土錘等の漁撈具、船材の出土という漁村の要素を同時に持つ、半農半漁の村として位置づけることができる。

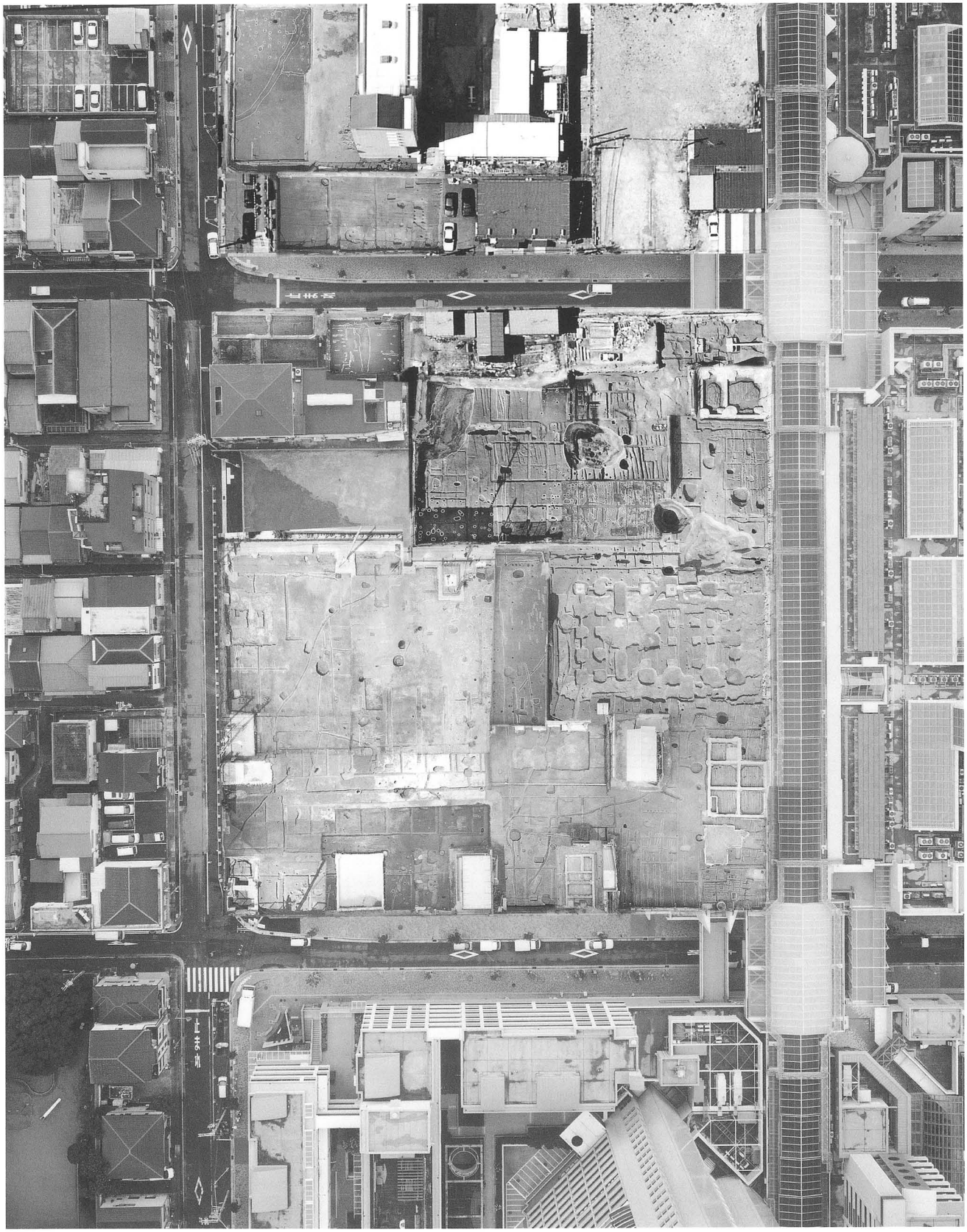
（注１）川上厚志編　『二葉町遺跡発掘調査報告書　第３・５・７・８・９・12次調査』神戸市教育委員会　2001
（注２）同　上

写　真　図　版

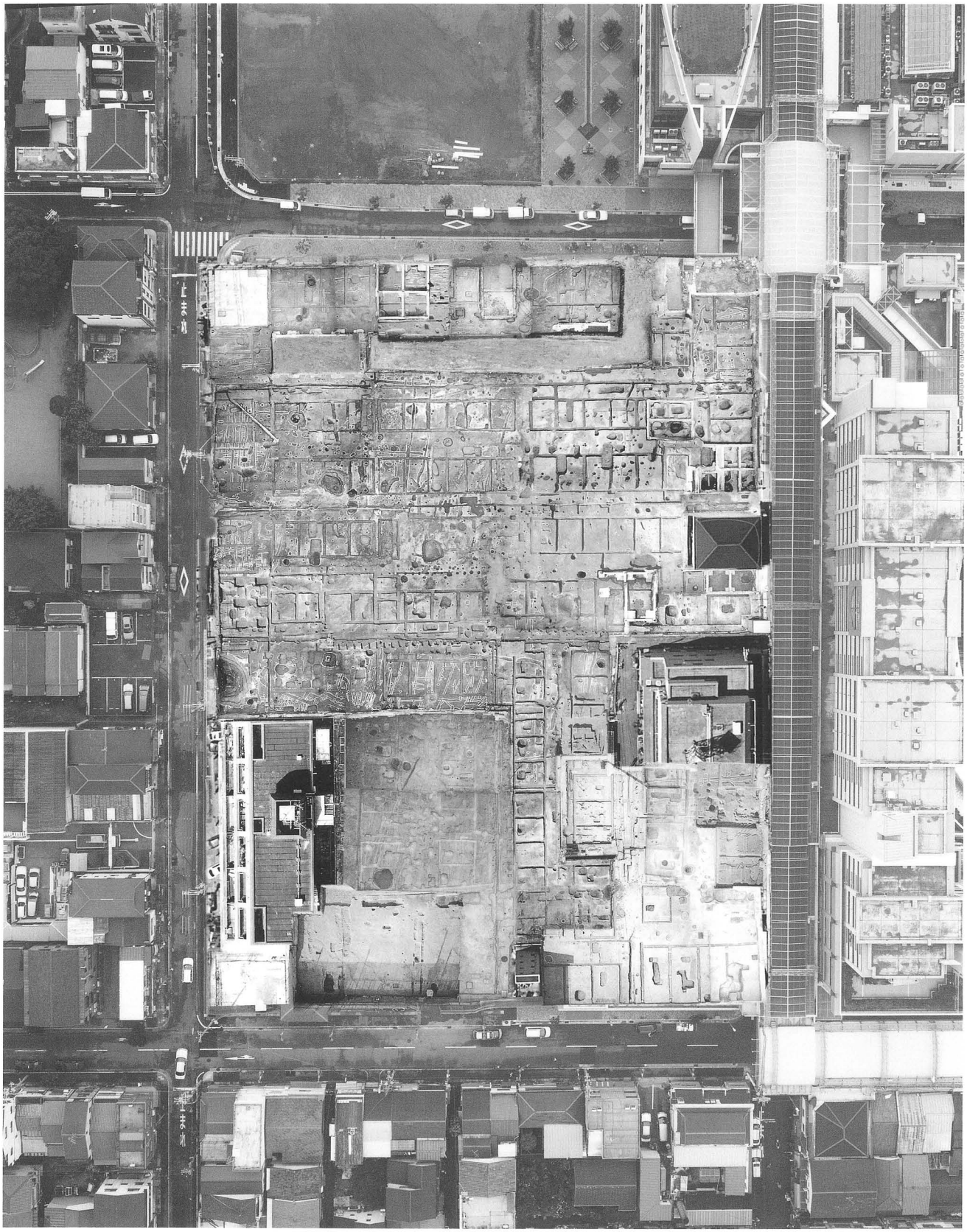


調査地航空写真（俯瞰モザイク）

図版２

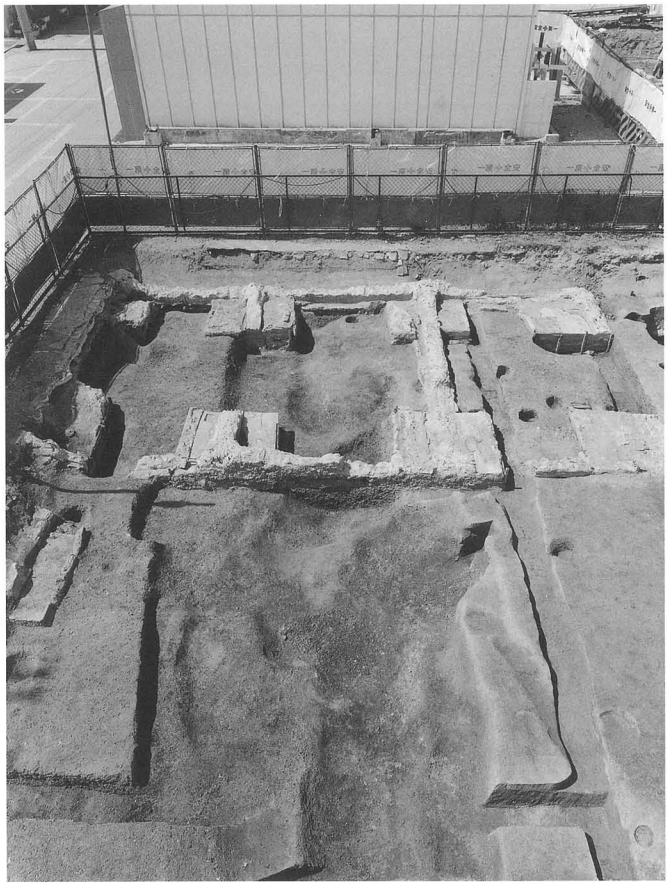


久保町６丁目地区　調査区航空写真（俯瞰モザイク）



二葉町６丁目地区　調査区航空写真（俯瞰モザイク）

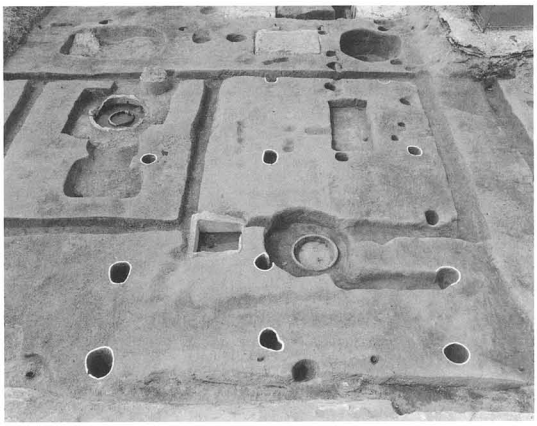
図版４



久保町５丁目　NR101（南から）

久保町５丁目　NR101　断面（南から）

久保町５丁目　調査区中央部全景（東から）



久保町５丁目　SB301（東から）

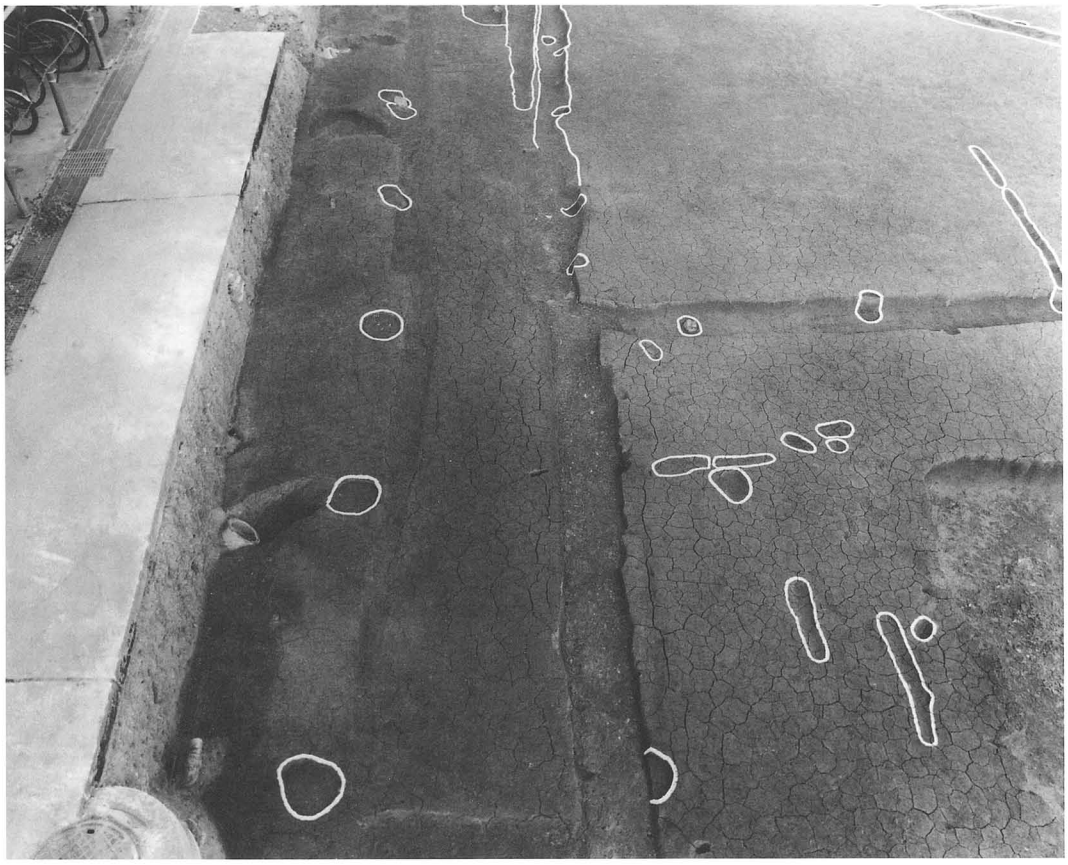
久保町５丁目　SE302（南から）

久保町５丁目　SE303（南から）

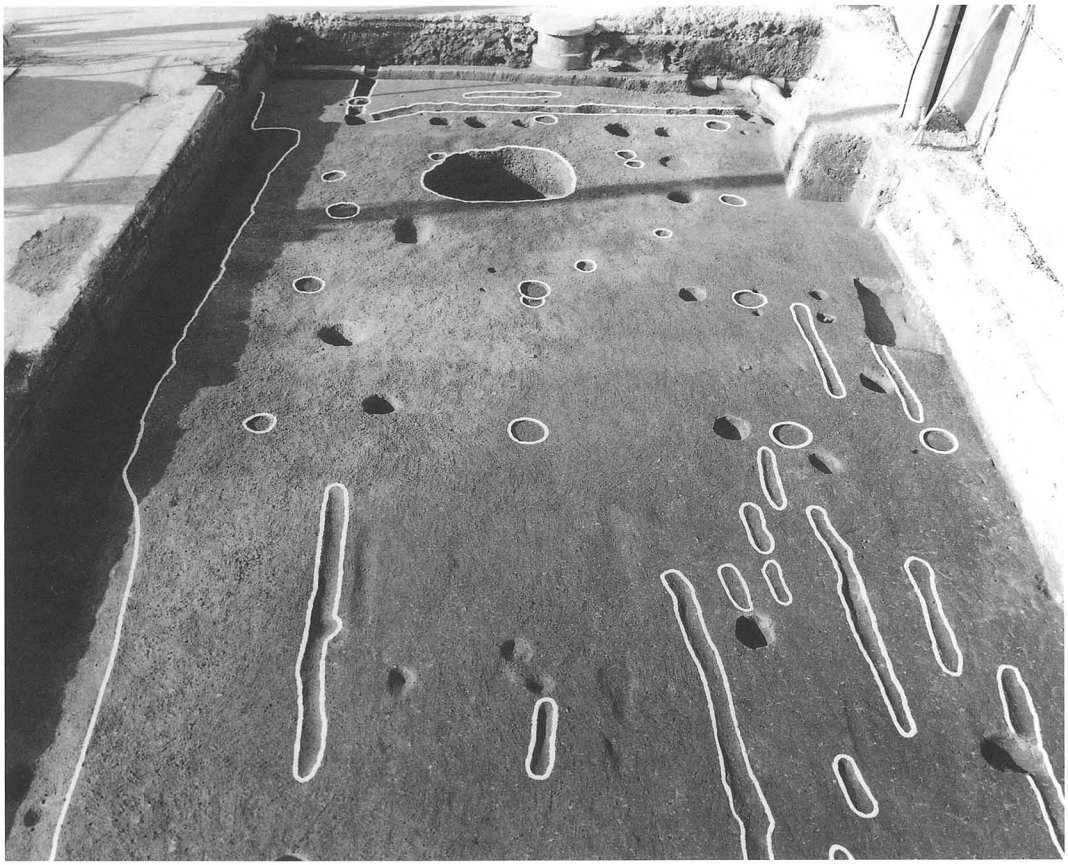
久保町５丁目
調査区南西部全景（北から）

久保町５丁目
ST301（西から）

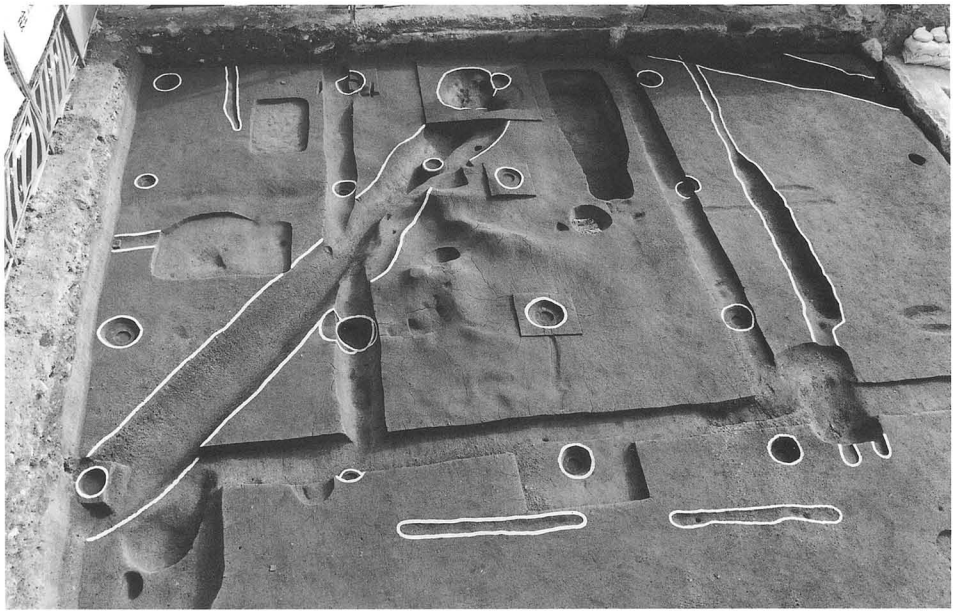
図版６



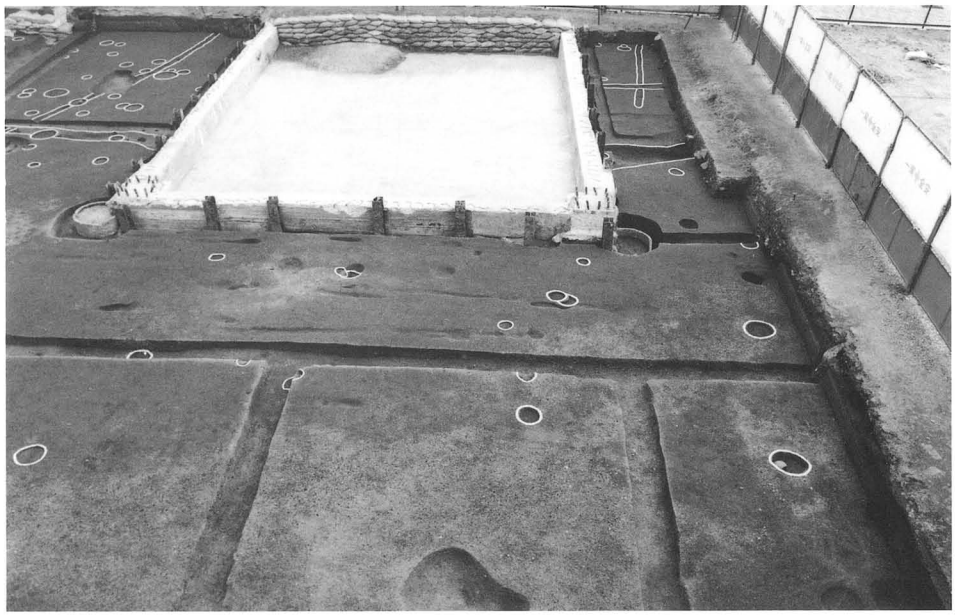
久保町６丁目
SB311（西から）



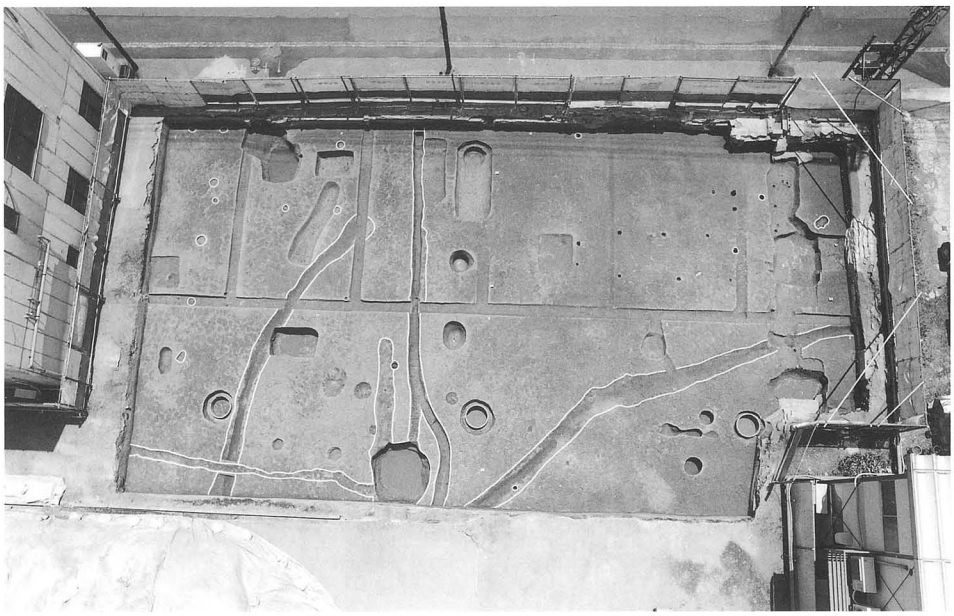
久保町６丁目
SB313（南から）



久保町６丁目
SB317（北から）

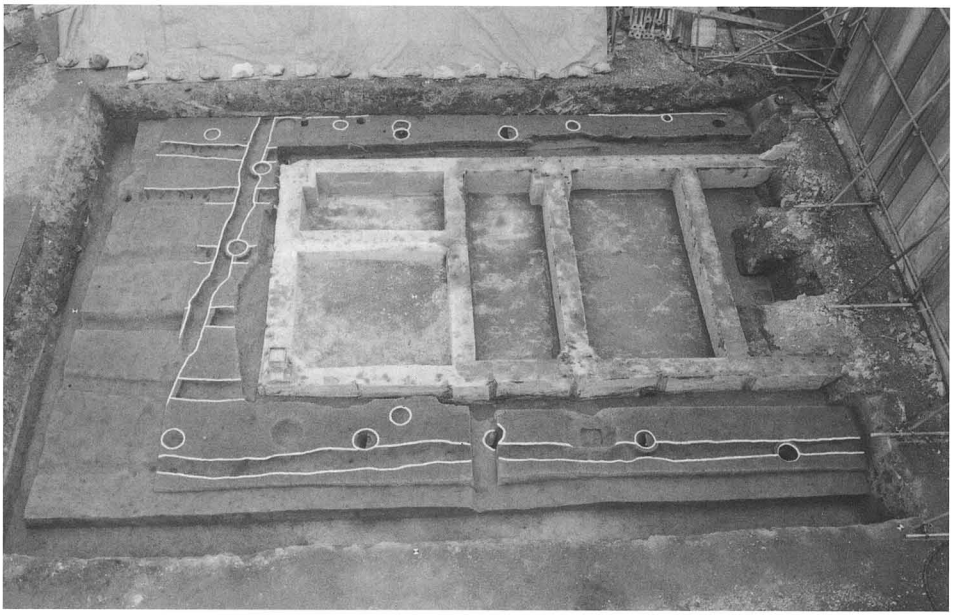


久保町６丁目
SB318（北から）

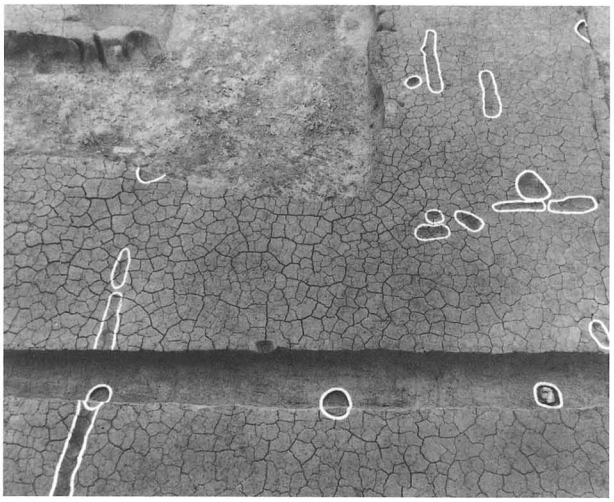


久保町６丁目
調査区中央南全景（北から）

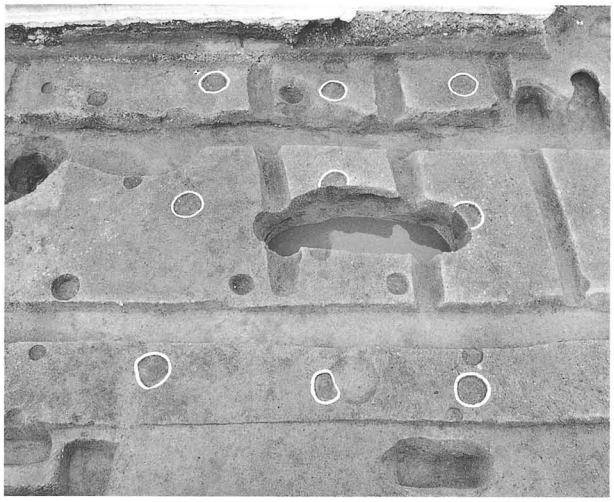
図版８



久保町６丁目
SB321（西から）



久保町６丁目　SB312（東から）



久保町６丁目　SB314（南から）

久保町６丁目　SB315・SE307（西から）

久保町６丁目　SB320・SB321（北から）

久保町６丁目　SE305・SE306（南から）

久保町６丁目　SE306（南から）

久保町６丁目　SE308（南から）

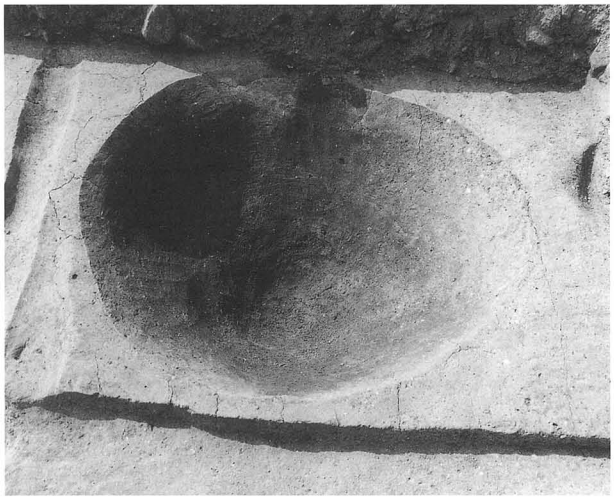
久保町６丁目　SE310（東から）

久保町６丁目　SE311（東から）

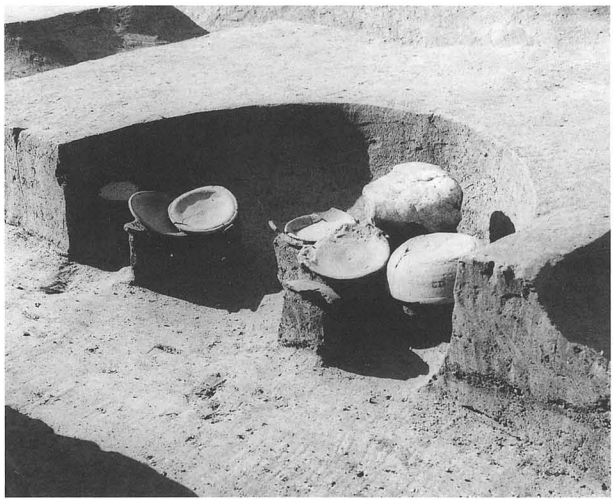
久保町６丁目　SE312（西から）

図版10

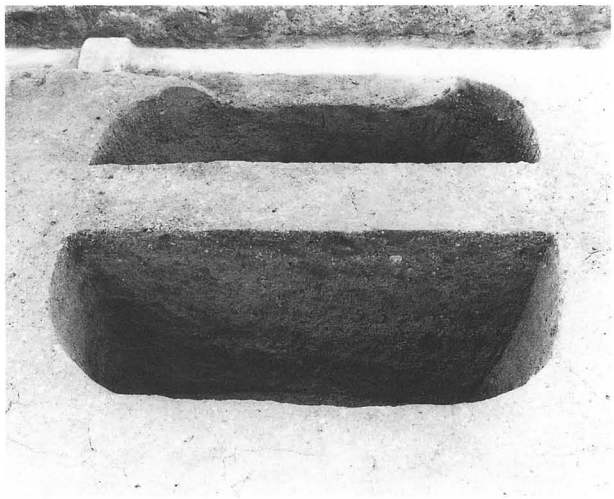
久保町６丁目　SE313（南から）



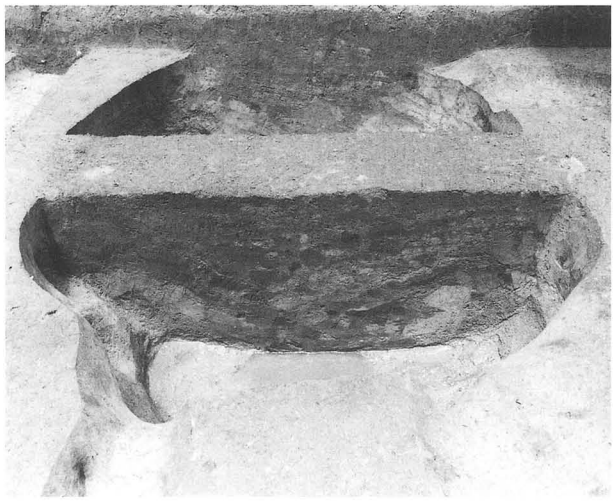
久保町６丁目　SK306（南から）



久保町６丁目　SK307（東から）

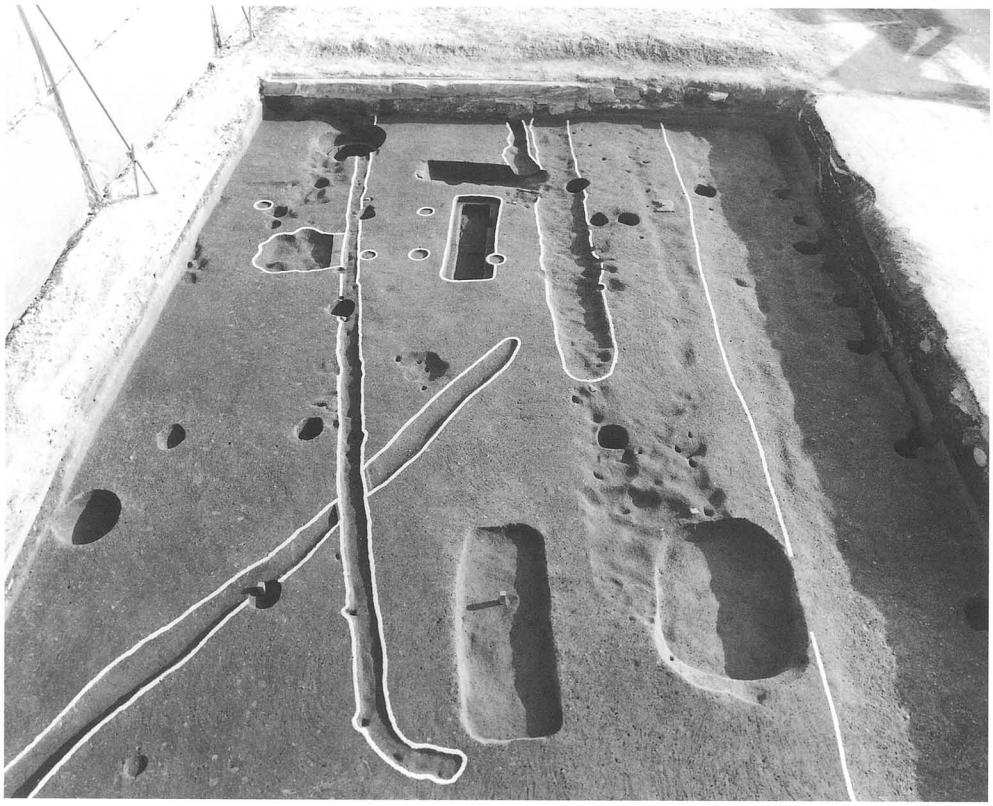


久保町６丁目　SK309（南から）

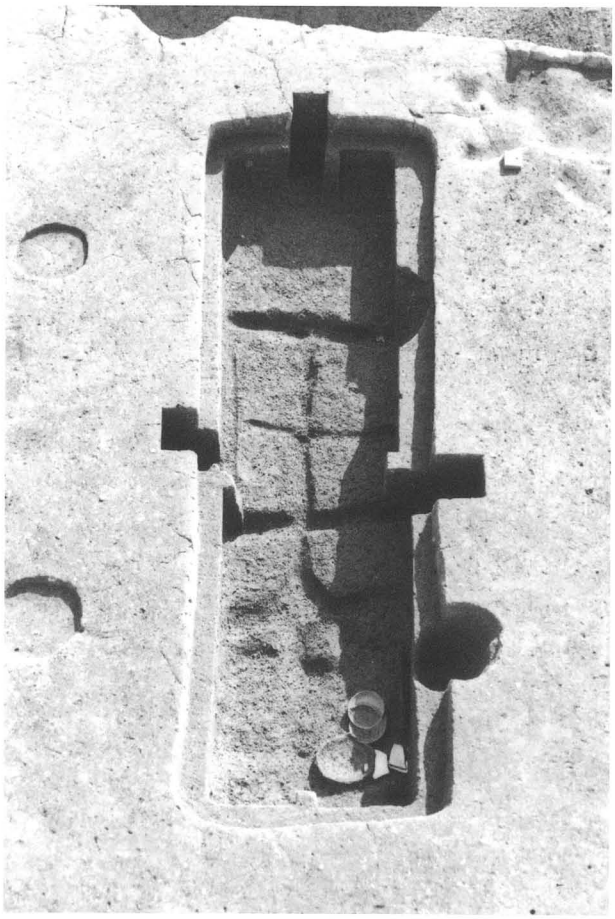


久保町６丁目　SK310（南から）

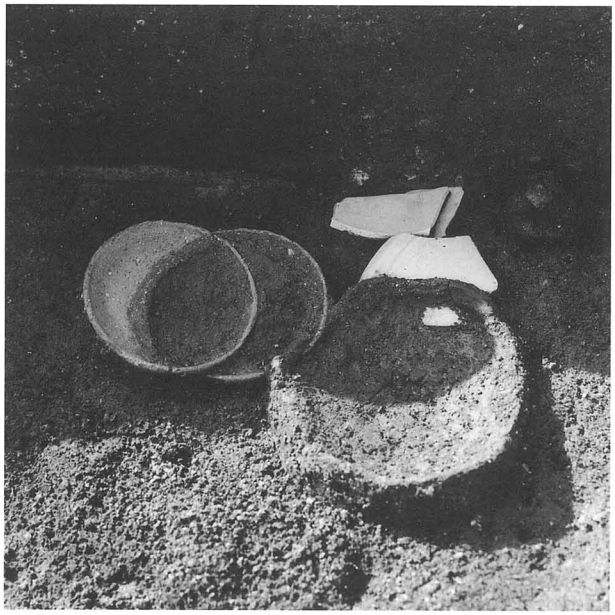
久保町６丁目　SK311（北から）



久保町６丁目
ST302付近全景（北から）

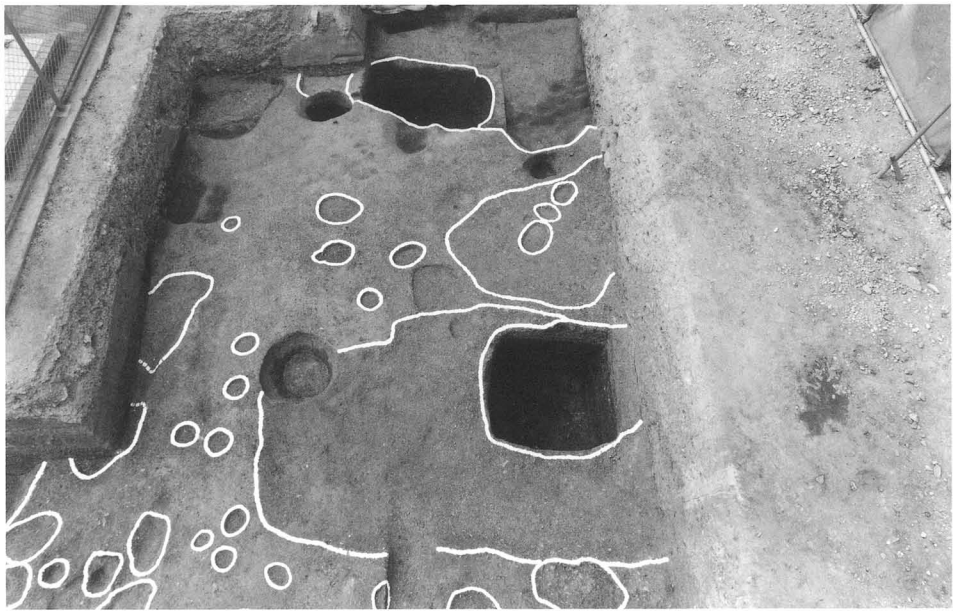


久保町６丁目　ST302（北から）



久保町６丁目　ST302　遺物出土状況（東から）

図版12

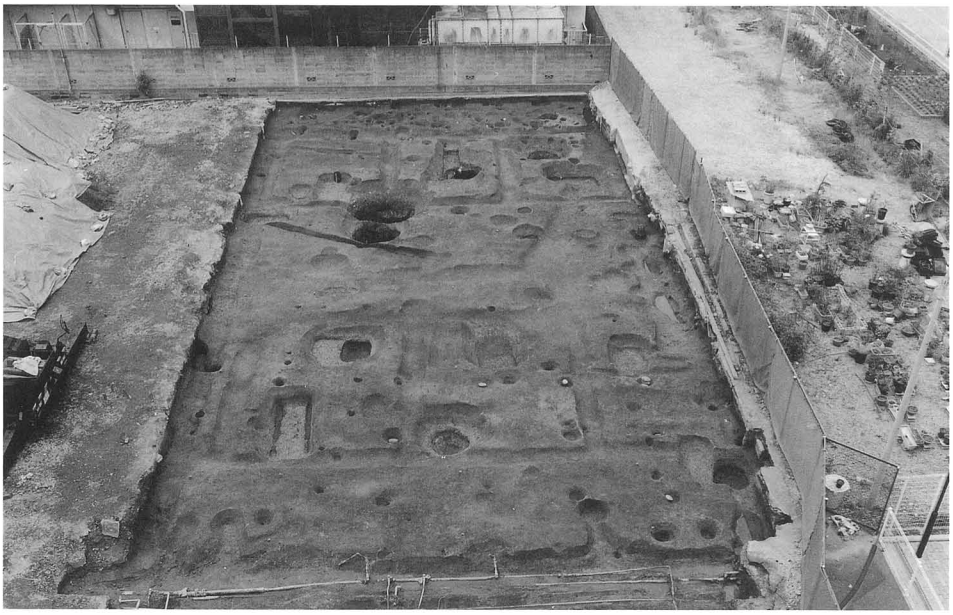


久保町６丁目
SX305 ～ SX307（南から）

久保町６丁目　SX309（東から）

久保町６丁目　SX310 ～ SX312（東から）

久保町６丁目
SX313（西から）

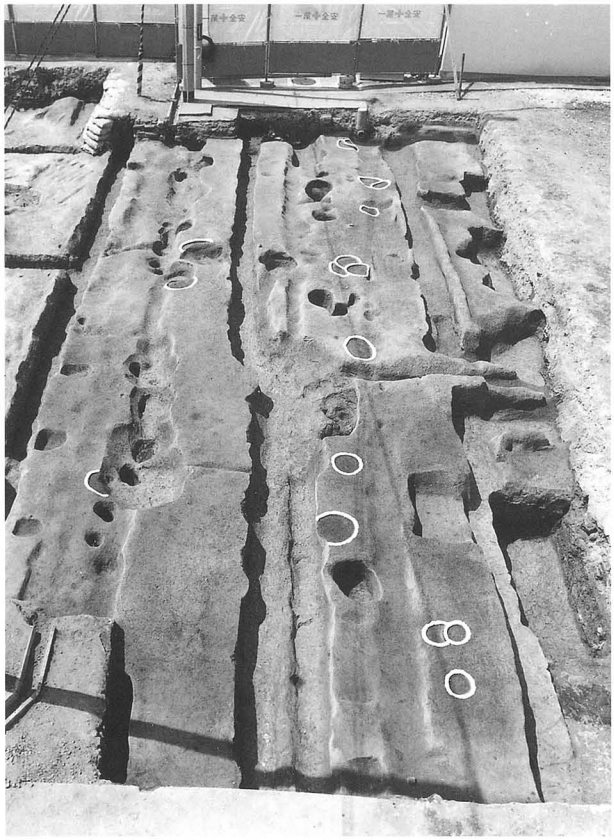


二葉町６丁目
調査区北西全景（東から）

二葉町６丁目
SB323とSE315～SE318
（南から）

二葉町６丁目
SB328東半（南から）

図版14



二葉町６丁目　SB328　西端柱穴（南から）

二葉町６丁目　SB322（南から）

二葉町６丁目　SB329（南から）

二葉町６丁目　SE315（東から）

二葉町６丁目　SE316（東から）

二葉町６丁目　SE317（東から）

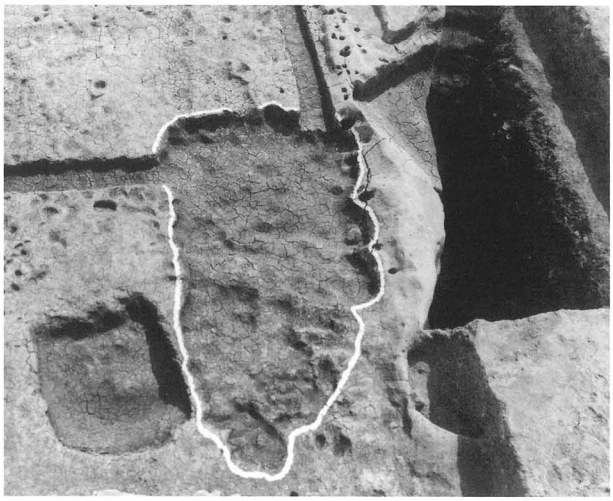
二葉町６丁目　SE320（西から）

二葉町６丁目　SE318（北から）

二葉町６丁目　SE319（南から）

二葉町６丁目　SK203（東から）

図版16



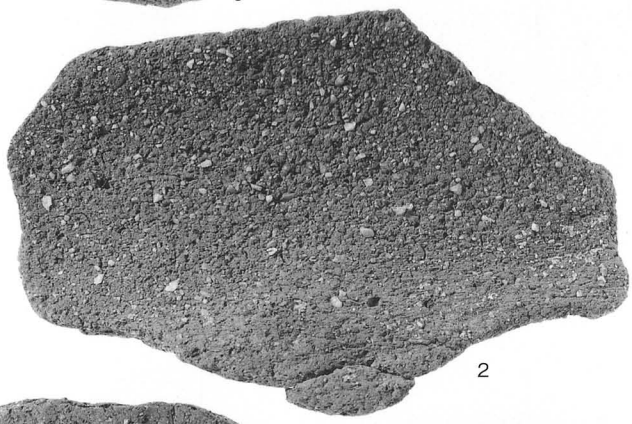
二葉町６丁目　SK306（東から）

二葉町６丁目　SK308（西から）

二葉町６丁目　ST302（北から-）

5

6


2

4

7

10

10

図版18

11

12

13

31

32

35

38

41

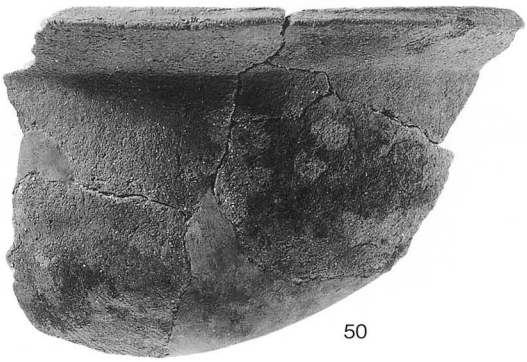
42

43

46

47

49


50

図版20

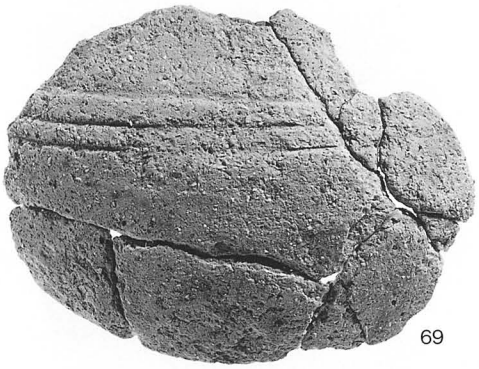
51

57

61

64

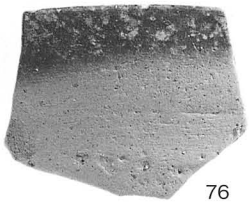
62

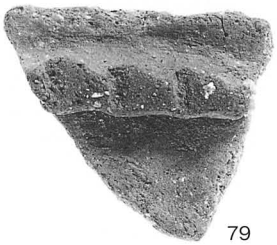

69

73

70

75


76


79

77

78

80

83

84

SK307

図版22

85

86

87

88

89

90

91

92

95

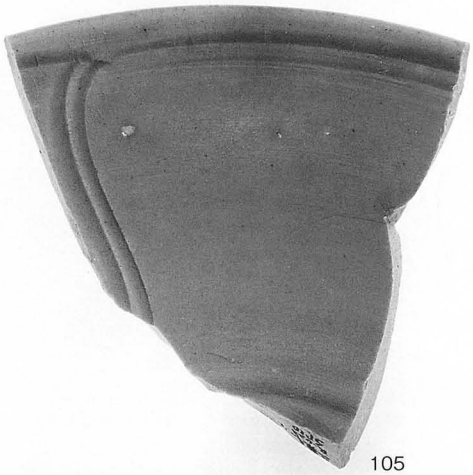
96

ST302

101

102

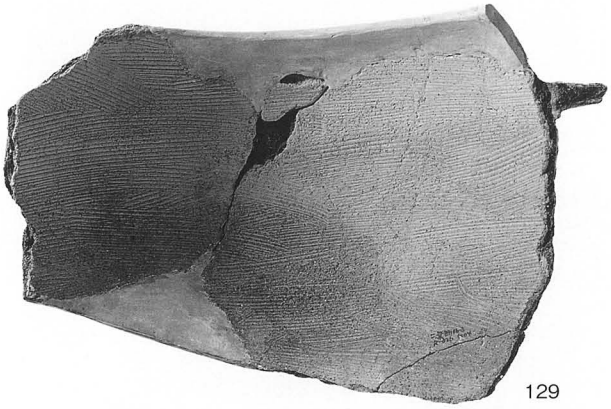
103

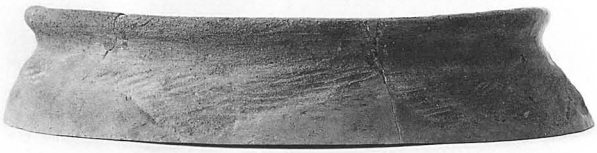


105

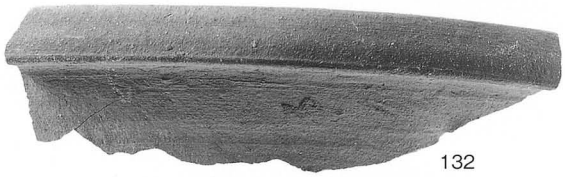
図版24

129


129


130

131


132

134

136

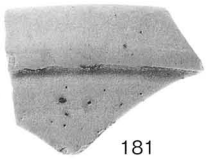
136

143

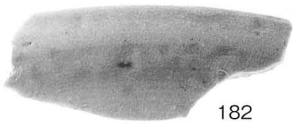
151

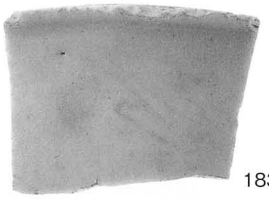
152

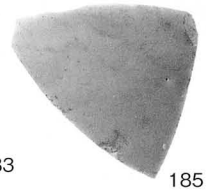
193


181

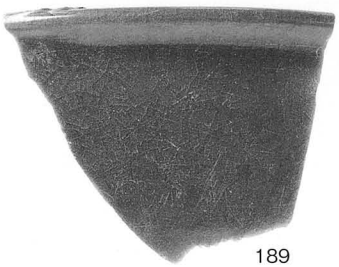
180


182

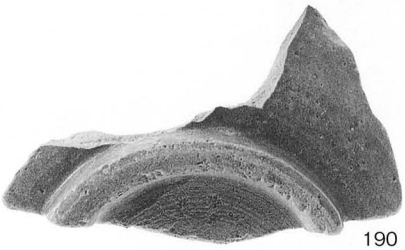

183


185

187


189

191


190

図版26

202

202

211

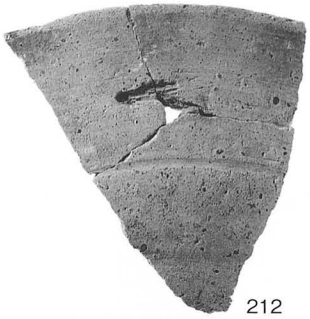
SE315

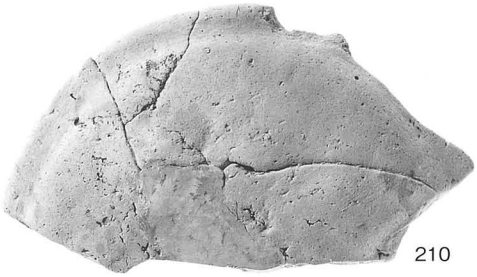
213

206

207

208


212


210

209

SE316

226

228

239

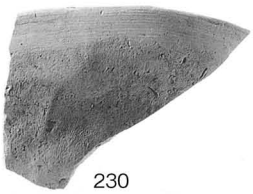
図版28

232

241

229

227


230

234

240

235

231

233

242

SE317

267

268

272

276

276

図版30

277

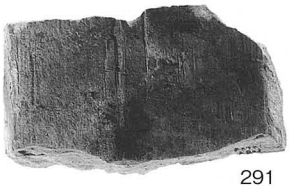
280

282

286

287

288


291

292

291

292

294

293

294

293

SE318

324

328

329

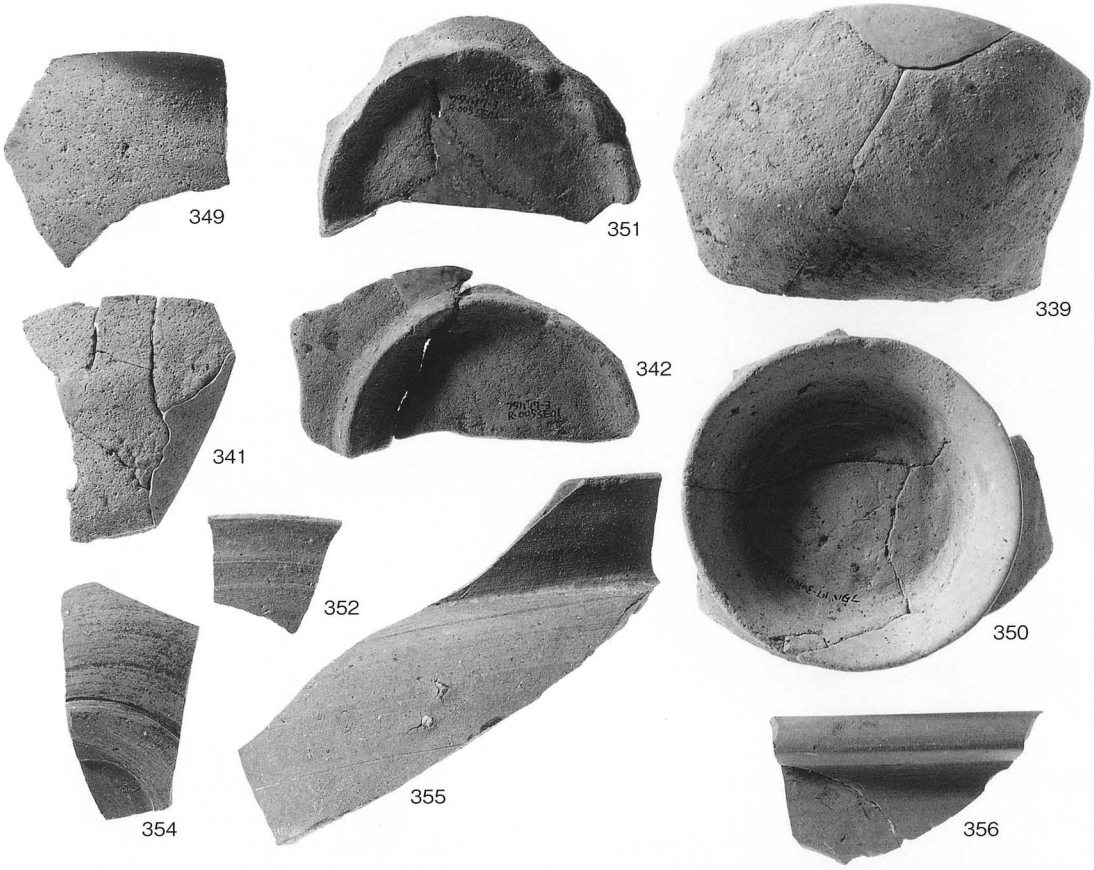
333

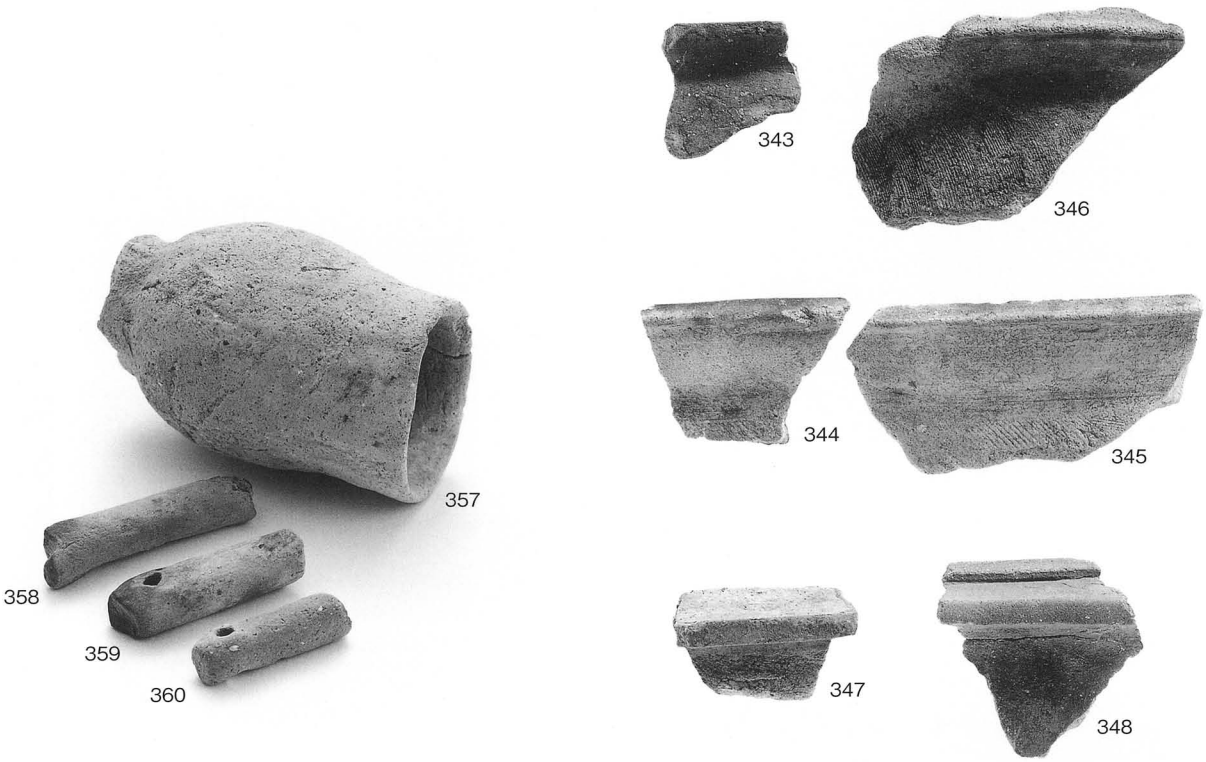
330

338

335

図版32


349
351
339
341
342
352
350
354
355
356


343
346
357
344
345
358
359
360
347
348

365

366

ST304

373

374

375

377

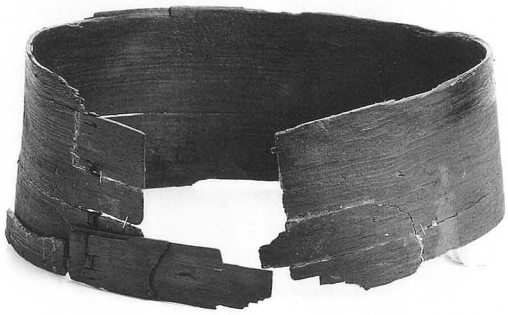
376

図版34

SE301出土木質遺物

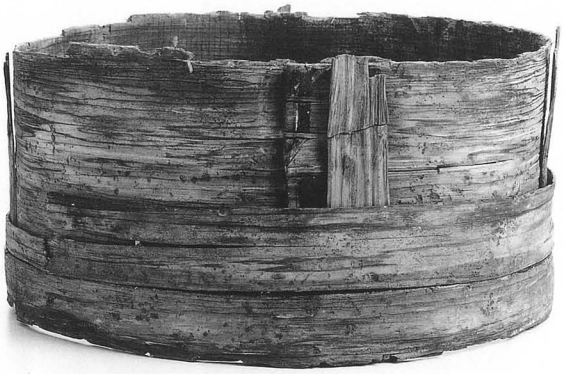
（17）上端部分

同左　中央付近



SE301出土曲物（26）

同左（27）



同左（28）

同左（29）

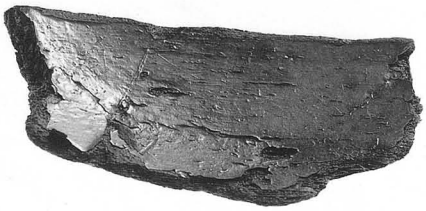
図版36

SE306出土横槌（60）

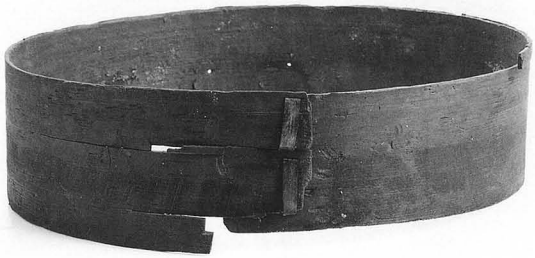
SX312出土木質遺物（右下：137）

SE315・SE317出土木質遺物（左半：SE317、右：SE315）

SE316出土木質遺物

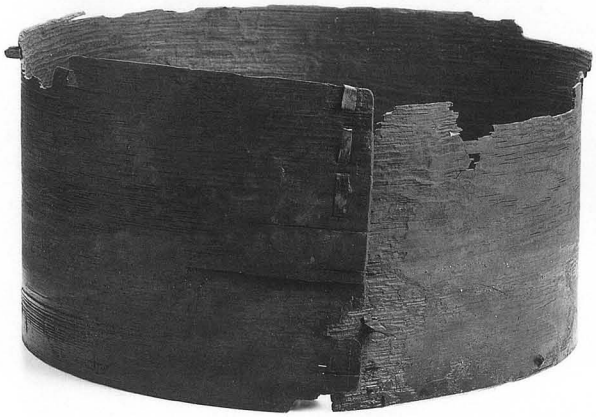


同上　出土木皿（260）



SE317出土曲物（312）

図版38



SE317出土曲物（313）

同左（314）

同上　横槌（322）

同左　箸（左より：315～317、319、318、320、321）

報告書抄録

ふりがな	ふたばちょういせき
書名	二葉町遺跡発掘調査報告書　第14～21次調査
副書名	新長田駅南第２地区震災復興第二種市街地再開発事業に伴う
編著者名	東喜代秀（編）・黒田恭正・中村大介
編集機関	神戸市教育委員会
所在地	〒650-8570　兵庫県神戸市中央区加納町６丁目５番１号　TEL078－322－6480
発行年月日	2008年３月31日

所収遺跡名	所在地	コード 市町村	コード 遺跡番号	北緯	東経	調査期間	調査面積（㎡）	調査原因
二葉町遺跡（ふたばちょういせき）	兵庫県神戸市長田区久保町（くぼちょう）５丁目・６丁目・二葉町（ふたばちょう）６丁目	28106	6－24	34°38′58″	135°8′59″	14次　20010213～20010321	2,160	市街地再開発事業
						15次　20010429～20010903	1,030	
						16次　20020426～20030221	2,700	
						17次　20030520～20040316	1,060	
						18次　20040409～20050210	1,236	
						19次　20050509～20050916	1,330	
						20次　20060515～20061120	1,320	
						21次　20070531～20071225	1,170	

種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
集落跡	平安時代～鎌倉時代	掘立柱建物、井戸、土坑、木棺墓など	須恵器・土師器・青磁・白磁・瓦・瓦器・土錘・縄文土器・弥生土器	

要約	10世紀～13世紀にかけての掘立柱建物24棟、井戸21基、木棺墓３基を検出した。掘立柱建物・井戸・耕作地がまとまりで検出でき、漁撈具の出土と合わせ、海のそばで半農半漁の生活をしていた人々の集落跡であると言える。

二葉町遺跡発掘調査報告書　第14～21次調査
－新長田駅南第２地区震災復興第二種市街地再開発事業に伴う－

2008年３月31日

発行　神戸市教育委員会文化財課
神戸市中央区加納町６丁目５番１号
TEL ０７８－３２２－６４８０
印刷　デジタルグラフィック㈱
神戸市中央区弁天町１－１
TEL ０７８－３７１－７０００

神戸市広報印刷物登録・平成19年度　第327号（広報印刷物規格Ａ－６類）